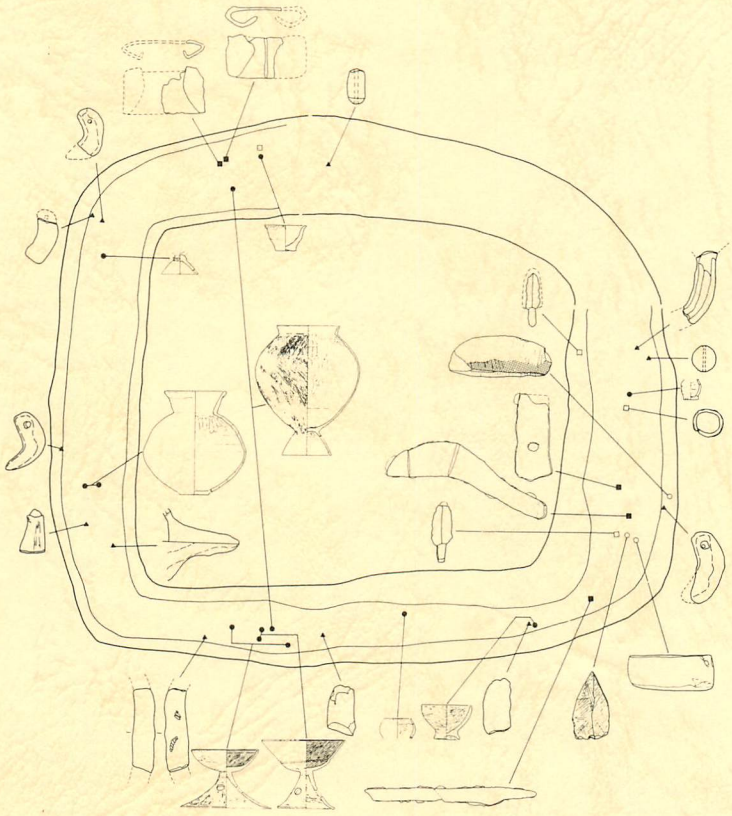
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第79集

甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園

東　山　北　遺　跡

HIGASHI YAMA KITA SITE

―第１次～第３次調査―



１９９３．３

山梨県教育委員会

東　山　北　遺　跡

1993. 3

第２号方形周溝墓出土遺物

東山北遺跡から大丸山古墳を望む

序　　文

甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園は1968年に構想が打ち出され、1973年にこの地域に建設が決定されて以来、文化庁と建設省の補助を受けて、1976年度より買収を開始し、1983年度より整備事業を開始いたしました。この間、100基を越える多数の方形周溝墓群が発見されて有名となった上の平遺跡や、銀象嵌の大刀が出土した稲荷塚古墳の調査など、区域内でも最も標高の高い、東山の平坦面の調査が進められ、この結果、甲斐国だけでなく東日本の古代史研究にも影響を与えるような遺跡が発見されております。まさに甲斐風土記の丘にふさわしい地域であることが、事実をもって証明されたとも言えます。

今回の東山北遺跡は、公園内の歴史植物園予定地の整備に伴って発掘調査を実施した遺跡で、1990年度～1992年度の３ヵ年にわたって行いました。調査区から弥生時代の住居址27軒、土器焼成遺構１基、竪穴遺構２基、方形周溝墓２基、そのほか性格不明の溝と土坑が発見されました。

特に上の平遺跡とほぼ同時期の集落址を同一丘陵上で発掘したことは大きな収穫でした。この集落は、出土した土器から３世紀後半～４世紀初頭に営まれたものであることが判りましたが、火災を受けた住居が多い割に、住居内から出土する土器が少なく、生産にかかわる石器類も少ない特徴をもっています。また、２号方形周溝墓は東西36m、南北31mの溝を一周させる、県内最大規模をもつ古墳時代前期の方形周溝墓であります。埋葬主体部は発見されなかったものの、周溝内部からは磨製石鏃、土製丸玉・勾玉や銅鏃・銅環・鉄鋤・鎌などの金属器、馬歯、高坏・Ｓ字状口縁台付甕・有段壺などの土師器が出土しております。これらの出土遺物から２号方形周溝墓の築造年代を推定すると、上の平遺跡の方形周溝墓群に続く４世紀後半代であり、同時期の小平沢古墳や大丸山古墳、銚子塚古墳との政治的な関係を知るうえでも極めて貴重な発見であります。

今回の調査によって、このような重要な遺跡が発見され、しかも公園の中に保存される意義は大きいと存じます。本書を学習や研究の資料としてご利用下さいますよう念じてやみません。なお、末筆ながら本調査にご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1993年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　　磯　貝　正　義

「東山北遺跡」正誤表

ページ	行	誤	正
46	15	伺わせるものである。	窺わせるものである。
77	キャプション	第67　第１・２土坑他	第67　第１・２号土坑他
95	キャプション	第84　ナイフ型	第84　ナイフ形
97	31	(第86・87図12~60)	(第86・87図12~58)
98	3	(19~27、28・38)	(19~28、36)
	5	28・38は浅鉢の胴部破片であるが、38	28・36は浅鉢の胴部破片であるが、36
	7	(29~33、36・37、39~44)	(29~33、37~42)
	9	29は浅鉢の	37は浅鉢の
	9	42は（新）	40は（新）
	11	(45~60)	(43~58)
	12	(46~56)	(44~54)
	14	(45、58~60)	(43、56~58)
	15	45は	43は
	16	58~60	56~58
	18	(57)	(55)
	21	(第87図 61~117)	(第87図 59~117)
	22	(61~82)鍋屋町式系〔山口　明1984〕を一括	(59~83)鍋屋町式系〔山　口　明1984〕等を一括
	23	(61~63)	(59~64)
	26	(64~66)	(65・66)
	28	(67~70)	(67・68)
	30	(71~79)	(69~77)
	32	(80~82)	(78~80)
	33	(83~85)	(81~83)
101	3	(86~109)	(84~109)
	4	(84~103)	(84~103)
	6	(34・35、	(84・85、
114	最下行	石台	台石
146	キャプション	図2a　東山北遺跡C-1	図2a　東山北遺跡C-2
	キャプション	図2b　東山北遺跡C-1	図2b　東山北遺跡C-2
147	キャプション	図3a　東山北遺跡C-1	図3a　東山北遺跡C-3
	キャプション	図3b　東山北遺跡C-1	図3b　東山北遺跡C-3
	キャプション	図4a　東山北遺跡C-1	図4a　東山北遺跡C-4
	キャプション	図4b　東山北遺跡C-1	図4b　東山北遺跡C-4
報告書概要	17	特殊遺構	特殊遺物

目　　次

序文
例言
目次
第Ⅰ章　環　　境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　発掘調査経過 …… 3
　第１節　調査日程 …… 3
　第２節　調査組織 …… 3
　第３節　調査方法 …… 4
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 7
　第１節　住居址 …… 7
　第２節　方形周溝墓 …… 43
　第３節　土　　坑 …… 77
　第４節　ピット群 …… 82
　第５節　溝 …… 83
　第６節　竪穴遺構 …… 91
　第７節　土器焼成遺構 …… 94
　第８節　包含層出土遺物 …… 95
第Ⅳ章　考　　察 …… 117
　第１節　住居と集落 …… 117
　第２節　第２号方形周溝墓について …… 120
　第３節　土器焼成遺構 …… 123
　第４節　曽根丘陵周辺の旧石器文化様相 …… 124
　第５節　曽根丘陵周辺における縄文時代前期末～中期初頭の様相について …… 129
　第６節　弥生土器・古式土師器について …… 132
　第７節　炭化物と籾圧痕土器 …… 139
　第８節　馬骨・歯について …… 141
第Ⅴ章　自然科学編 …… 143
　第１節　山梨県東山北遺跡から出土した銅製品の自然科学的調査 …… 143
　第２節　東山北遺跡より出土した炭化米 …… 149
　第３節　東山北遺跡灰試料の植物珪酸体分析 …… 151
　第４節　東山北遺跡周辺の地質 …… 154
ま　と　め …… 157

例　　言

1．本報告書は、甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園整備に先立って、1990・1991・1992年度に行った東山北遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書は末木　健・野代幸和が編集した。執筆分担は次により、原則としてそれぞれの文末に明記したが、分析依頼・委託した部分については、文頭に記した。また、考察は調査関係者の協議を経て、執筆されたものである。

　末木　健・野代幸和・小林健二（調査研究課）
　大村昭三（山梨県埋蔵文化財センター調査員）
　宮里　学（帝京大学）・石神孝子（立正大学）
　平尾良光・榎本淳子・瀬川富美子（東京国立文化財研究所）
　吉川純子・鈴木　茂（パレオ・ラボ）

3．遺跡の写真撮影は、それぞれの年度の発掘担当者が撮影し、遺物写真は末木　健・野代幸和が行った。

4．第２号方形周溝墓の実測図は、㈱シン技術コンサルに委託して粗図を作成し、埋文センターにおいてトレースしたものである。

5．銅製品の分析は東京国立文化財研究所に依頼し、炭化物・灰同定はパレオ・ラボに委託した。

6．調査の図面・写真・遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　　例

1．掲載した図面の縮尺は、原則として、住居址・土坑は60分の１、土器実測図・拓本は３分の１、石鏃類は３分の２、その他の石器は２分の１であるが、特殊な遺構及び遺物はこの限りではない。

2．拓本で両面を載せてあるものは、断面右側が表面、左側が内面である。

3．土器にドットスクリーントーンが掛けてあるものは、赤彩部分を表示している。

4．石器の内、磨石の磨面には ▒ のスクリーントーンがかけてある。

☆　遺構平面図のスクリーントーンは次の通りである。

　炉・焼土 ▒　灰 ▤　遺構の中の石 ▥
　炭化米 ▒

☆　遺構平面図のインレタは次の通りである。

　●土　器　○石　器　▲土製品
　■鉄製品　□銅製品

第Ⅰ章　環　　境

第１節　地理的環境

大丸山古墳を西に仰ぐ東山北遺跡は、東八代郡中道町下向山字東山地内に所在する。この一帯は、甲斐風土記・曽根丘陵公園地内に位置し、現在その整備事業が進められている。

本遺跡の立地する甲府盆地東南部に位置する曽根丘陵は、坊ヶ峰・東山・米倉山などの台地によって構成され、東南12.5㎞、南北３㎞、標高270～400ｍを測る。遺跡の所在する地点は、そのほぼ中央付近に位置する東山の部分である。東山は、滝戸川と間門川によって挟まれた舌状台地となっている。遺跡はこの台地の北側斜面、標高300ｍ程のところに位置している。遺跡の周辺は畑地となっている。

遺跡の立地する北側斜面部は、台地上からも低地部からも見渡せる位置に在り、集落を構成する上では軍事的な防衛、防災に適した土地であるが、生産的にはむかない。しかし墓域が構成され、方形周溝墓が造られた当初は、盛土も存在し、周囲を見守り、威厳を放つように際立った存在を示していたものと想定される。（野代）

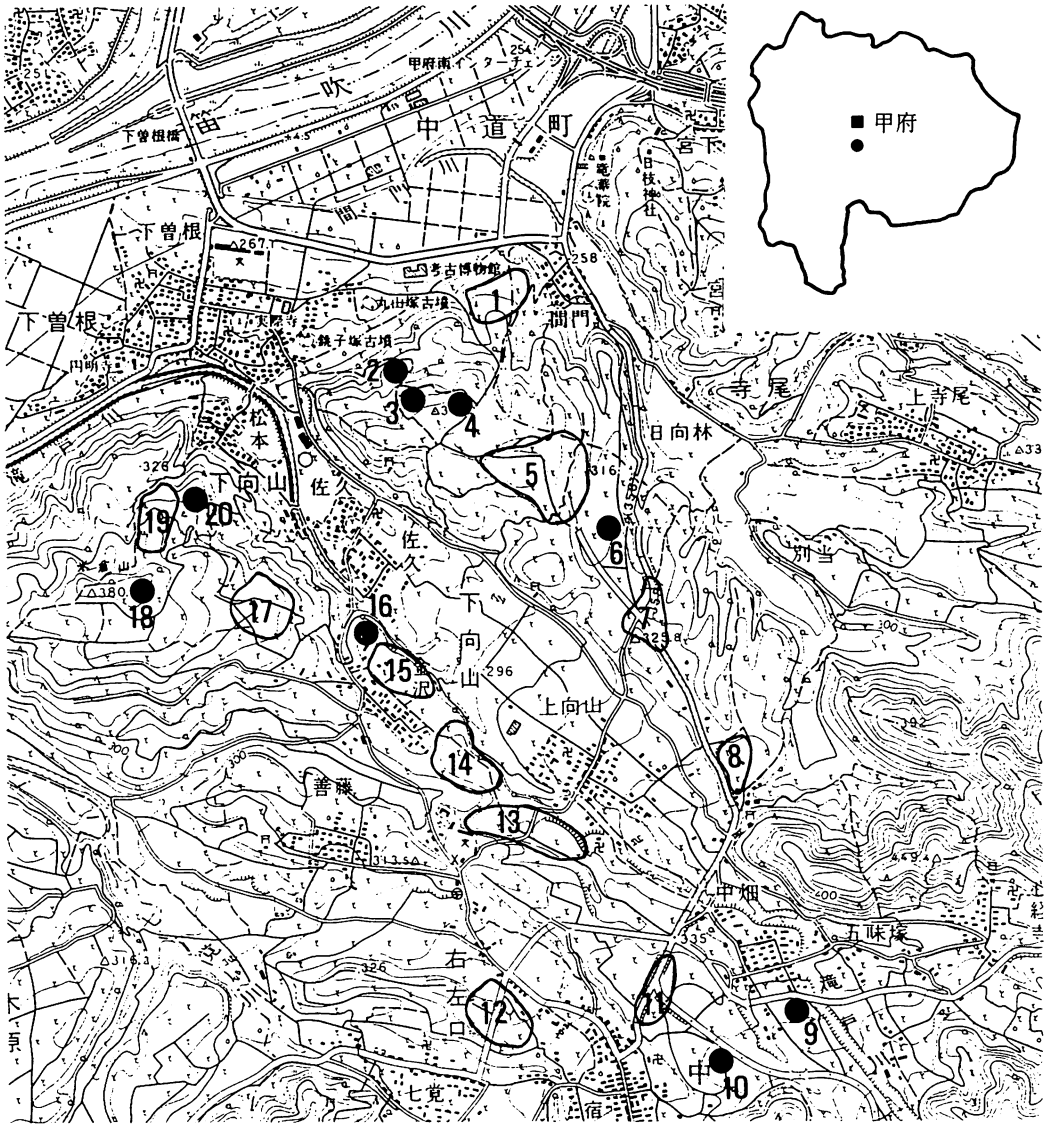
第２節　歴史的環境

本遺跡周辺は、甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園として整備されるように、原始時代から人類の痕跡をたどることができる遺跡の宝庫である。旧石器時代では米倉山遺跡や立石遺跡がある。これに続き縄文時代には、著名な下向山遺跡（中期初頭）や上の平遺跡（前期末葉～中期中葉）、立石遺跡（中期初頭）などが在り、前期末葉から中期初頭段階の集落跡が集中する特異な地域である。弥生時代では、米倉山遺跡や女沢遺跡、120基以上の方形周溝墓を伴う集落跡が発見された上の平遺跡などの存在が知られる。これらの遺跡は、時期的には後期に位置づけられ、この時期を転機として、本地域が傑出した様相を呈するようになっていった。古墳時代に入ると４世紀中葉の本県最古とされる小平沢古墳をはじめ、４世紀の後半代には銚子塚古墳・丸山塚古墳・大丸山古墳など大規模な古墳が築造されている。これらの古墳は本県の最も古い段階の時期に属するものであり、その被葬者は畿内政権と強い結びつきを持った最有力豪族と考えられ、近辺に居住し、政治的・経済的な中枢地帯を形成していたことが示唆されるものである。５世紀後半代には小規模なかんかん塚（茶塚）古墳が、６世紀代になると博物館公園内古墳や稲荷塚古墳などが存在している。４世紀代の勢力は盆地北部地域に移り、曾てほどの華やかさにかけるものの、ある程度の権力が継続して存在していたことを示している。

奈良・平安時代においては大きな遺跡が発見されておらず、不明な点が多いが、『和名抄』によれば、八代郡白井郷あるいは沼尾郷の一部に属していたことが推定される。なお、上の平遺跡からは平安時代の住居址が発見されている。

本遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期～後期にかけての遺物が包含層から出土しており、周辺の遺跡との関係が認められる。この後の時代では、弥生時代後期に属する住居址と古墳時代前期後葉に属する方形周溝墓などが主として確認されている。住居址からは、多量の炭化米が発見され、低地部分の湿地帯において水稲耕作を行っていたことを想定させるもの

である。また方形周溝墓からは大丸山古墳で出土している鋤もしくは鍬先の鉄製品とほぼ同様の形態を呈するものが出土しており、立地的にも隣接関係にあり、時期的にも近いことから、被葬者は極めて近い間柄にあるようである。畿内政権とのつながりについて前述したが、このほか東海地方や北陸地方との関係を示す土器の出土が認められ、多方面と広く活発な交流があったものと考えられる。これとは別に時期は新しくなるが、包含層から須恵器片が多く出土していることや、石室の側壁に用いられたものと考えられる石材が散在して認められることなどから、かつて付近に古墳が存在していた可能性が考えられる。奈良・平安時代では、火打ち金などが出土しており、周辺に同時期の集落が存在していた可能性を窺わせるものである。　　（野代）



1 東山北遺跡　2 鍋弦塚　3 稲荷塚　4 東山南遺跡　5 上の平遺跡　6 熊久保遺跡　7 立石遺跡　8 諏訪南遺跡
9 村上遺跡　10城越遺跡　11上野原遺跡　12後呂遺跡　13向山遺跡　14下向山遺跡　15金沢天神遺跡
16天神山古墳　17米倉山Ｂ遺跡　18米倉山Ａ遺跡・菖蒲池遺跡　19女沢遺跡　20小平沢古墳

第１図　遺跡位置図

第II章　発掘調査経過

第1節　調査日程

公園計画のうち、歴史植物園予定地となっている東山北遺跡について遺構確認調査を行い、工事によって影響を受けそうな部分の、記録保存を目的とした調査を3年間にわたり実施した。また、遺跡西側の斜面は、新設の公園管理用道路が建設されるため、遺構確認調査を行っている。

第1年次　1990年5月7日～8月24日

当該年度は、まず、道路建設予定地の試掘調査2,300㎡を行った。この後、遺跡の平坦面西側約1000㎡を調査し、5軒の弥生時代後期の住居址と、土器焼成遺構、溝、土坑などを検出し調査した。

第2年次　1991年5月7日～8月19日

台地北西側の約3,000㎡を調査し、住居址13軒、方形周溝墓の一部、溝などが検出された。

第3年次　1992年5月11日～10月2日

台地中央部を調査し、第2号方形周溝墓の調査及びその台上部の試掘、南側の遺構確認調査を行う。　（末木）

第2節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会教育長　飯室淳雄

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター　所　　長　　磯貝　正義
次　　長　　長谷川裕彦
調査研究課長　森　　和敏

1次・調査担当者　末木　健・保坂康夫（5月より石和町出向）・早川典孝・（吉岡弘樹・平山　優）

作業員・整理員　小林敬子・小林よ志子・石原はつ子・中込よしミ・宇野和子・出月多津子・出月満寿江・矢崎米子・田中弘子・宮坂晴幸・平美与枝・塩島富美子・土屋聖子・杉本津由子・西名博恵

2次・調査担当者　末木　健・高野玄明・（五味信吾）

調査員　広瀬和広・小林健二

作業員・整理員　宮坂晴幸・千野雅志・矢崎ます子・長田可祝・出月満寿江・長田和子・矢崎米子・小林よ志子・中込よしミ・塩島富美子・平美与枝・宇野和子・田中弘子・平　重蔵・込山優子・雨宮加代子

3次・調査担当者　末木　健・野代幸和

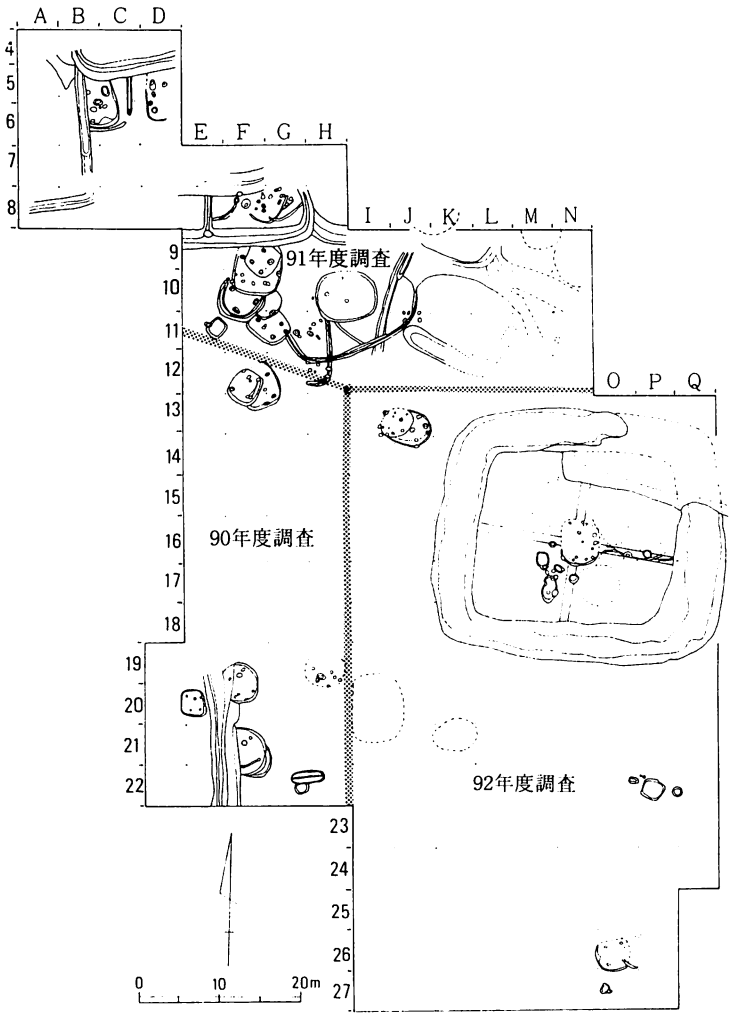
調査員　大村昭三

作業員・整理員　宮坂晴幸・中込よしミ・塩島富美子・小林よ志子・長田可祝・出月満

寿江・出月遊亀子・矢崎米子・平美与枝・越石　力・内藤安雄・角田恵美子・秋山圭子・平井孝昌・堀内美和・大久保泉・平　重蔵・長田てる美・石原はつ子・伊藤正彦・望月和佳子・金井京子・西名博恵・土屋ふじ子・米山八重子・長田久江・名取貴司・高須秀樹・有賀ひろ子　　（末木）

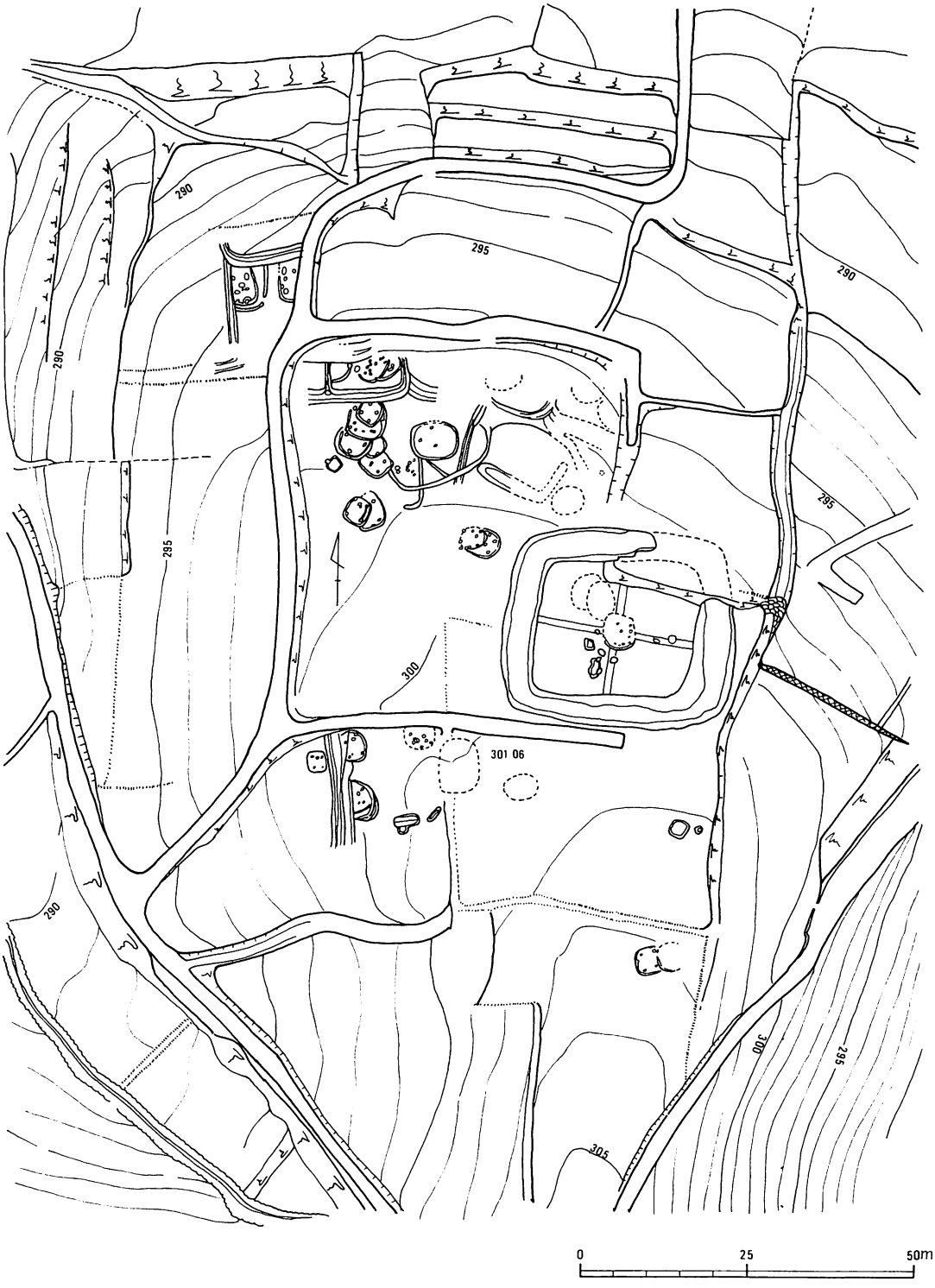
第３節　調査方法

遺跡範囲は約１万㎡あるが、これをほぼ東西南北方向に５ｍのグリッドを組んだ。基準点は公園用地買収区域に設定されていたコンクリート杭を使用したために、正確な方位は示していない。各グリッドは北西部を起点にして、東西方向にＡ・Ｂ・Ｃ～のアルファベットをふり、南北方向に１・２・３～の算用数字をふった。したがって、調査区の北西端のグリッドはＡ－１グリッドという名称となる。調査区は分けられていないが、調査年度にしたがって表土剝ぎ作業・グリッド設定作業が３地区に別れて行われている。年次別の調査範囲は第２図の通りである。

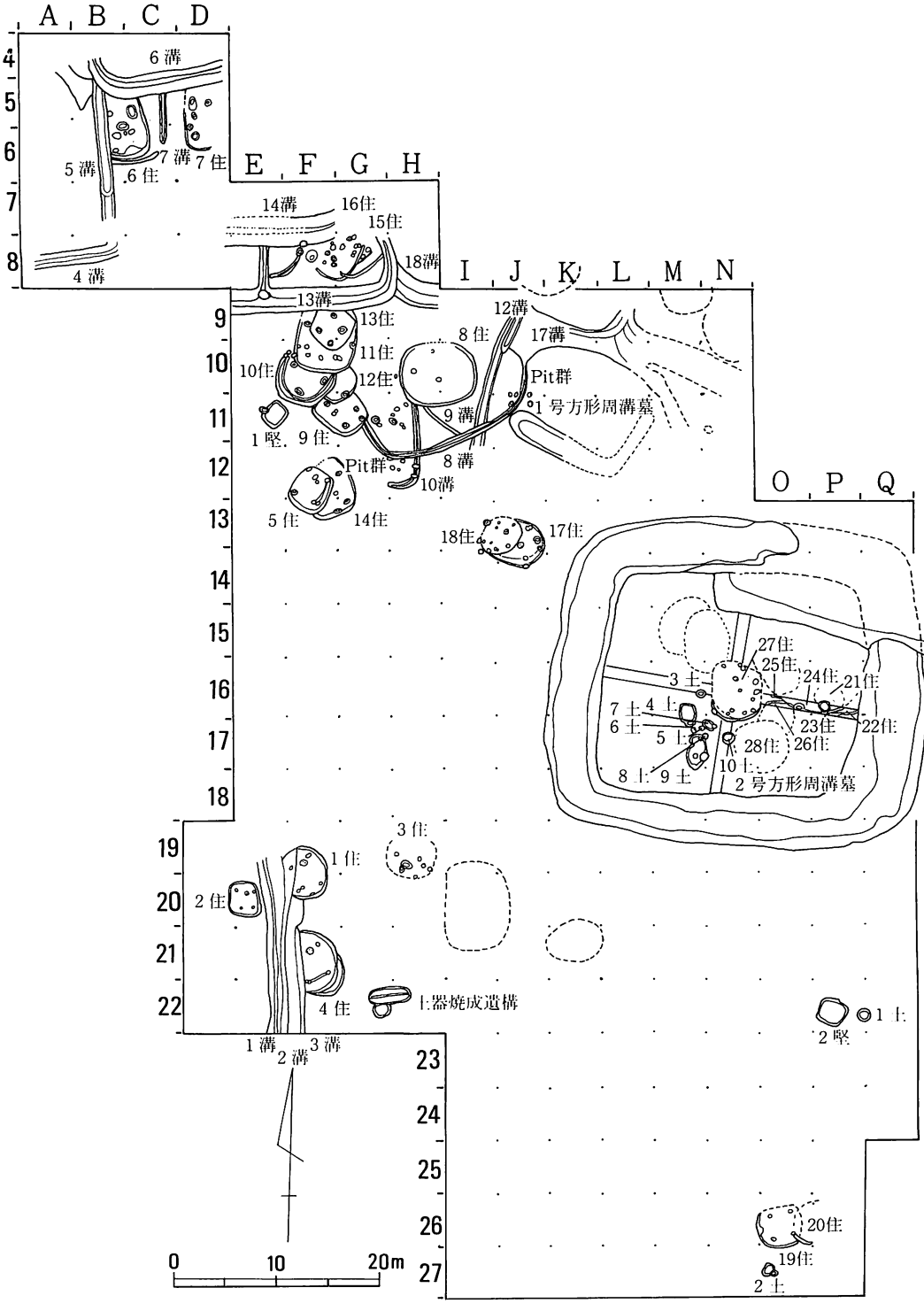


第２図　年次別調査地区図

調査は、まず始めに重機によって、桑・桃・すもも・梅などの樹木を伐採し、更に表土を切除した後に、作業員がジョレンで丁寧に確認面の精査を行い、遺構検出を行った。遺構出土の遺物は原位置の記録作成後に取り上げ、土層図・遺構図・遺物出土状況写真・遺構写真などの作業を経て、各遺構ごとに調査を終了している。　　（末木）



第3図　東山北遺跡全体図



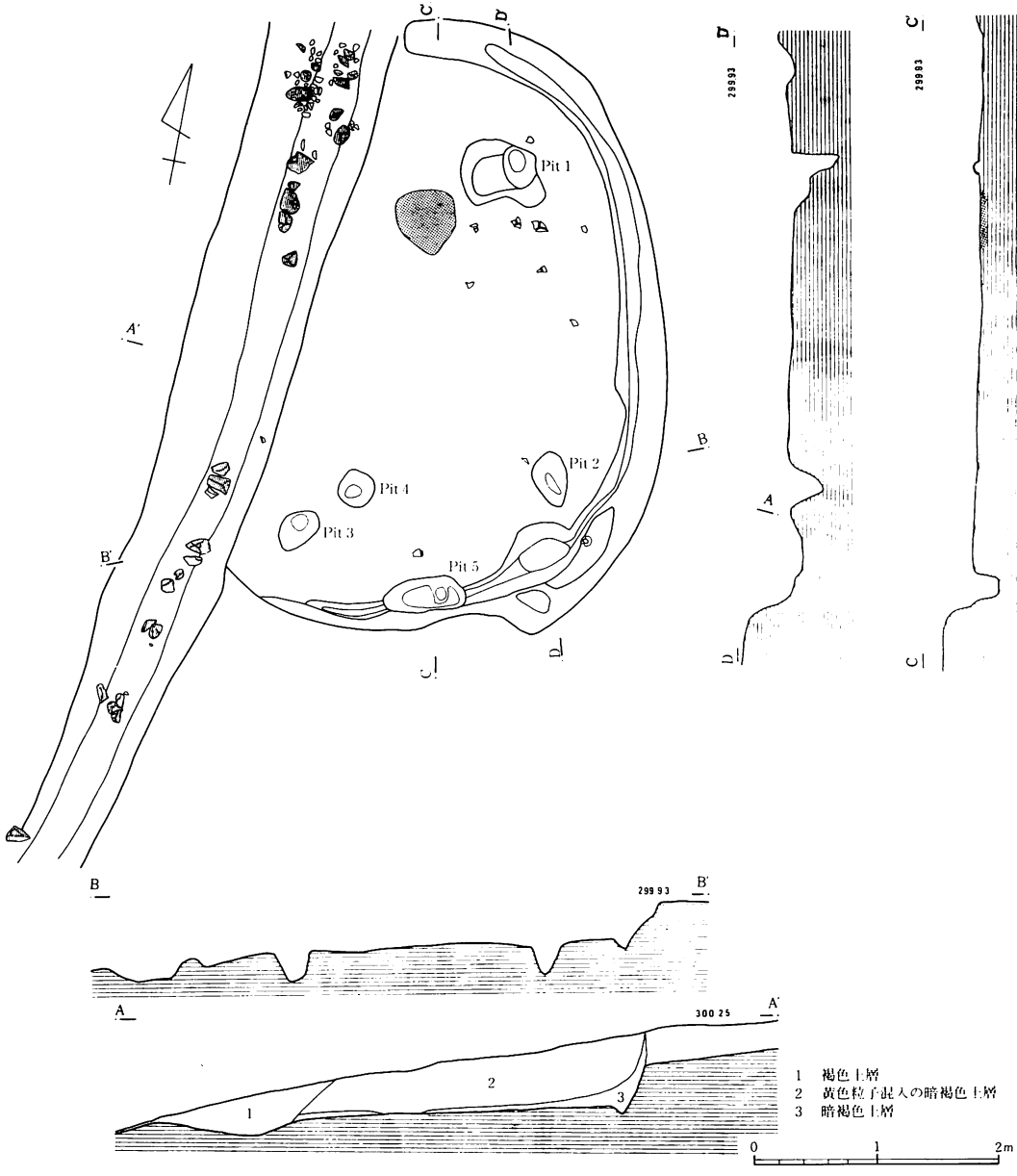
第 4 図　東山北遺跡遺構位置図

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　住居址

第１号住居址（Ｅ・Ｆ－19・20グリッド）（第５・６図）

位置　遺跡の南側に分布する住居址群のひとつで、台地平坦部から西斜面に移る変換点に位置す



第５図　第１号住居址

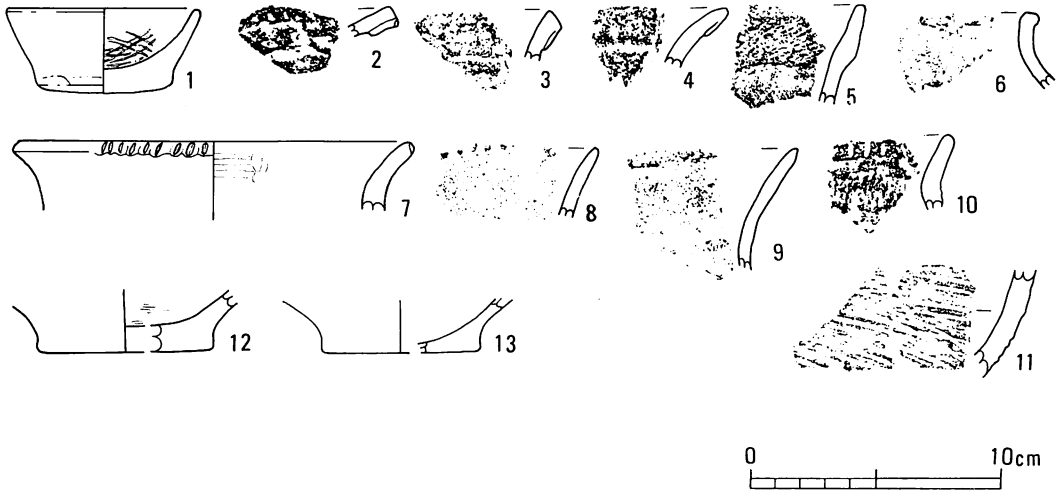
る。竪穴住居の掘り込みは、斜面に位置していることから、東側が深く西側が浅い。住居の西側部分約4分の1は第2号溝に切られているため、その正確な規模が把握できない。

形態・規模　竪穴住居は長円形を呈しており、主軸はN－14°－Eで、ほぼ南北方向を向いている。主軸方向の長径は5.00m、溝に切られている短径は推定4mの規模である。遺構確認面から床又は周溝底までの壁の高さは、北壁5㎝、東壁50㎝、南壁25㎝である。周溝は東側から南側にかけて存在し、幅はおよそ20㎝である。炉は地床炉で、住居中央北側に偏して造られ、南北55㎝、東西50㎝の範囲に焼土が残る。柱穴は5本確認されているが、Pit 1～3は主柱穴であるが、Pit 4は建て替えの柱か、補助柱穴であろう。Pit 5は南側入り口部中央に位置しており、梯受け穴の可能性がある。北西側の主柱穴は第2号溝に切られて確認されていない。Pit 1は径65×42㎝、深さ40㎝、Pit 2は径45×30㎝、深さ35㎝、Pit 3は径40×36㎝、Pit 4は径32×30㎝、深さ17㎝、Pit 5は径69×28㎝、深さ20㎝である。床面は炉の周辺や柱穴内側で良好であるが、周辺部ではやや軟弱である。なお、床面上には若干の焼土が分布していた。覆土はレンズ状堆積をしており、土器などの遺物は極めて少ない。

遺物　1は小型の坏で、法量は口径8㎝・底径5.4㎝・高さ3.4㎝である。底部はやや丸底を呈し、端部は外側に張り出している。体部外面は横撫でされ、内面は良く磨かれているが、底部に刷毛目状痕が残る。2～4は壺形土器の折り返し口縁部であり、5は口縁部に縄文を施文する壺形土器破片で、頸部には刷毛目が残る。6は短頸壺の口縁部であろう。12・13は壺形土器底部である。7～10は甕形土器の口縁部で、口唇に刻みが施されたものと無文のものがある。11は条痕文が施文された胴部土器片である。11を除けば、いずれも弥生時代後期に属するものであろう。

第2号住居址（E－20グリッド）（第7図）

位置　集落の南西部端に位置し、遺跡中最も小さい住居である。この住居址は台地より一段下がっ



第6図　第1号住居址出土遺物

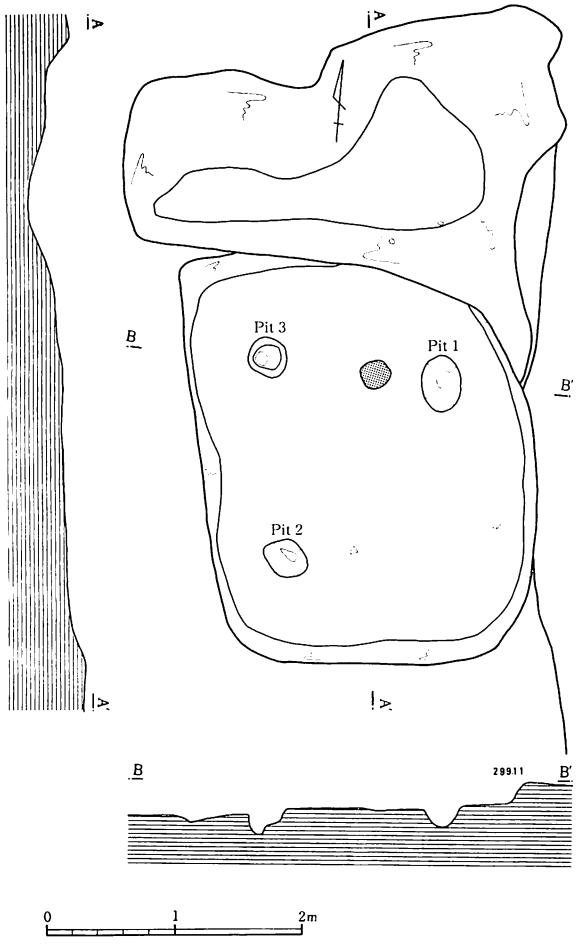
た西側斜面に、コブのように張り出したミニテラス上に立地している。

形態・構造　竪穴住居は北西コーナーが圧し潰されたような方形を呈しているが、それは北側にある大きな土坑に切られている為であろう。主軸はPit 2 とPit 3 を結ぶ線が、N－10°－Wを示すが、Pit 1 とPit 3 を結んだ線と直交するラインを採れば、ほぼ北を示す。壁の高さは北壁17㎝、南壁は斜めになっており12㎝程度、東壁は15㎝、西壁は 5 ㎝程である。炉は地床炉で、北側の柱穴間に造られ、直径25㎝程度の円形に焼土が分布している。柱穴は 3 本が検出されているが、南東位置の柱穴は存在しない。Pit 1 は径45×32㎝、深さ20㎝、Pit 2 は径35×30㎝、深さ11㎝、Pit 3 は径33×30㎝、深さ22㎝である。床面はローム層で造られているが、やや軟弱である。

遺物　遺物は弥生時代後期の土器小破片のみで、掲載できるものはない。

第 3 号住居址（H－19グリッド）（第 8 ・ 9 図）

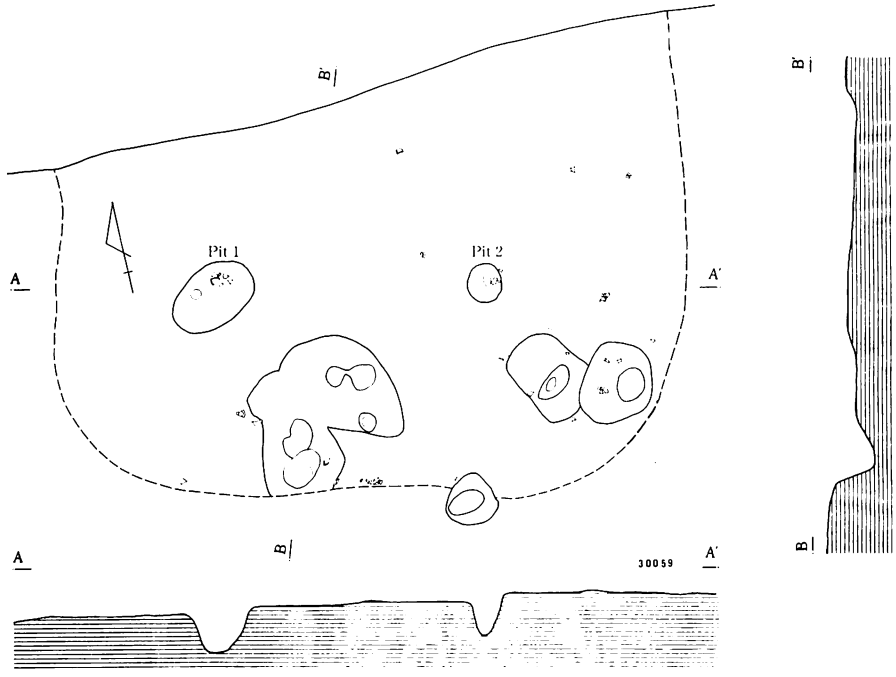
位置　遺跡の南西に分布する住居址群の 1 軒で、中央部に寄っている。住居址南側は検出されたが、北側が農道下に入り、未調査である。

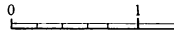


第 7 図　第 2 号住居址

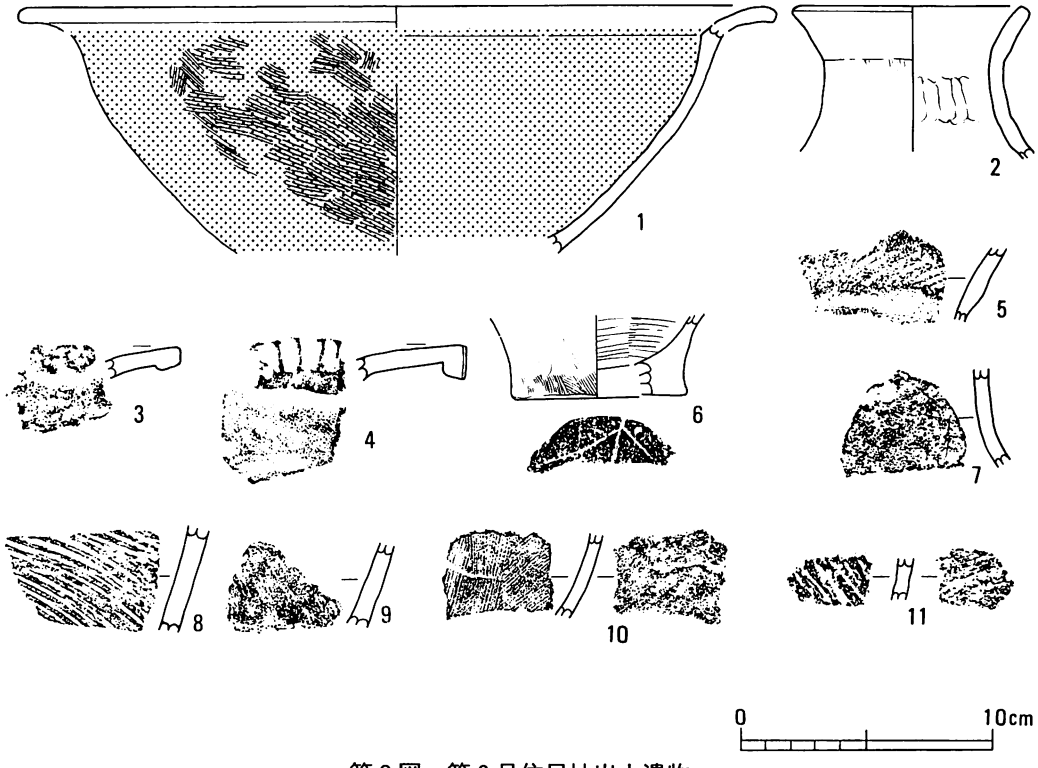
形態・規模　台地中央部に近いため、竪穴住居の掘り込みがほぼ完全に削平され、東側に 7 ㎝の立ち上がりが残るものの、他は不明である。従ってプランも明らかではないが、柱穴やピットの位置によって、住居と見なしておきたい。柱穴は 2 本あり、Pit 1 は径70×45㎝、深さ35㎝、Pit 2 は径32×27㎝、深さ30㎝である。南東コーナーに貯蔵穴と思われる皿状のPitが 2 基あり、南端には梯受け穴とおぼしきPitも存在する。床面は良好ではなく、若干の焼土が分布する。

遺物　1 は内外面を赤色塗彩された坏の大破片である。口縁部と底部を欠いているが、高坏であろう。2 は短頸壺の口縁部である。口唇部は折り返され、内面頸部には指頭痕が残る。3 ・ 4 は壺形土器の口唇部である。6 ～11は甕形土器の胴部破片である。弥生時代後期に属する。





第8図　第3号住居址



第9図　第3号住居址出土遺物

第４号住居址（Ｆ－21・22グリッド）（第10・11図）

位置　南西グループの１軒で、第１号住居址のすぐ南にあり、平坦面と斜面の変換点に位置している。従って竪穴住居の東側では残りが良いが、北西側３分の１は、地境の為に掘られた新しい溝（第１～３号溝）に切り取られている。

形態・規模　竪穴住居は長円形を呈し、主軸はＮ－21°－Ｗ、主軸長径は6.40m、短径は4.50m以上である。住居址南側には拡張が見られ、部分的に周溝が２条めぐる。壁は東で35～50㎝、南壁48㎝、北壁23㎝で、西壁は溝に切られて残存しない。壁の下には幅15～20㎝の周溝が巡り、前述したように南側は２重に掘られている。炉は地床炉で、南北50㎝、東西48㎝のほぼ円形を呈する。また、炉は北側柱穴の中間に位置している。柱穴は主柱穴４本であるが、南西部に位置するPit３・Pit５は掘り直しであろうか。Pit６・７は貯蔵穴と見なしてよかろう。主柱穴１～４は方形に配置されている訳ではなく、配置は台形を呈するが、斜面での立地に規制されたものであろうか。Pit１は径30×35㎝、深さ40㎝、Pit２は径50×45㎝、深さ60㎝、Pit３は40×35㎝、深さ40㎝、Pit４は径37×30㎝、深さ40㎝、Pit５は径35×43㎝、深さ35㎝、Pit６は径55×65㎝、深さ25㎝、Pit７は径50×43㎝、深さ13㎝である。南側の柱穴間が連結するように、溝が掘られているが、間仕切り施設に伴う溝ではなかろうか。このような例は、敷島町金の尾遺跡（1987『金の尾遺跡』山梨県教育委員会）でみることができる。壁の高さは、東壁50㎝、北壁10㎝、南壁60㎝程が残っている。

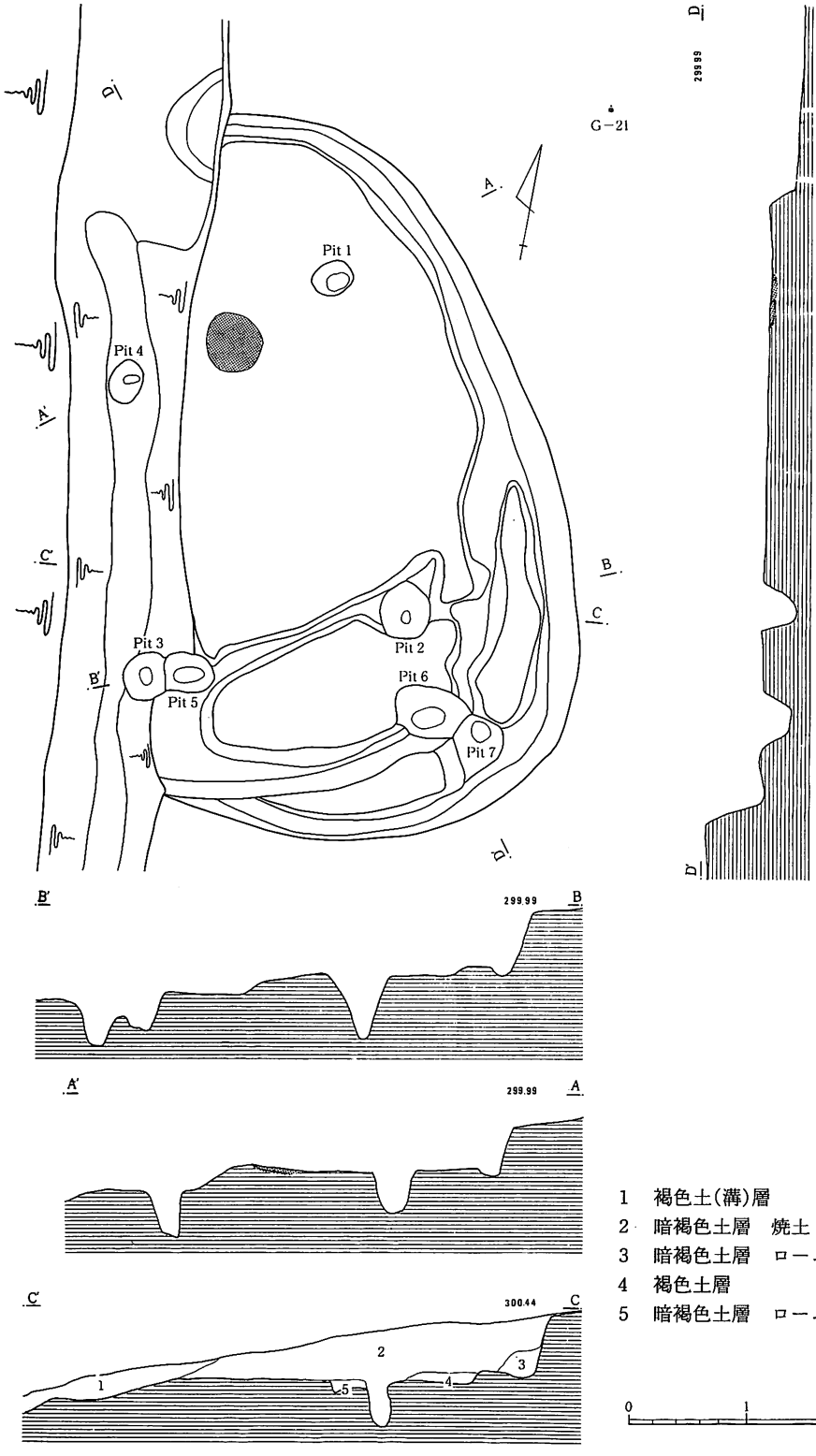
覆土は分層することが困難であるが、遺物は遺構確認面からすぐ下の層に多く、しかも砕片となっていた。また、床面からの出土は少ない。遺物は東側から住居内部に投げ込まれたもので、特に、隣接する土器焼成遺構に近い場所に集中している。このような出土状態から、不良品を廃棄した場と考えることができる。住居の時代は、覆土中の遺物の時代よりも古い時期と考えられる。

遺物　１は小型の埦で、底部を欠損し全体の３分の１程度の破片から復元実測したものである。内面は磨かれ、外面は横撫で整形されている。２～１８は壺形土器の破片である。２～８は折り返し口縁部で、９は複合口縁部に縦の棒状浮線文が張り付けられる。19～38は甕形土器の破片である。19は内外面ともに刷毛目があり、口唇部には刻みがある。20・21は甕形土器の底部であろう。39・40は台付甕の台部であり、39は体部と台部が焼成時に剝離したものである。41は土器に付けられた把手のようであるが、どのような器形に付けられたものか想像できない。これらの多くは覆土中から出土したもので、前述したように土器焼成遺構からの廃棄遺物と見なして良い。

第５号住居址（Ｆ－12・13グリッド）（第12・13図）

位置　北西グループの最南端の住居で、第14号住居址を切って重複する。緩やかに北面傾斜する台地の平坦面に立地し、住居址群の認められない広場に面している。

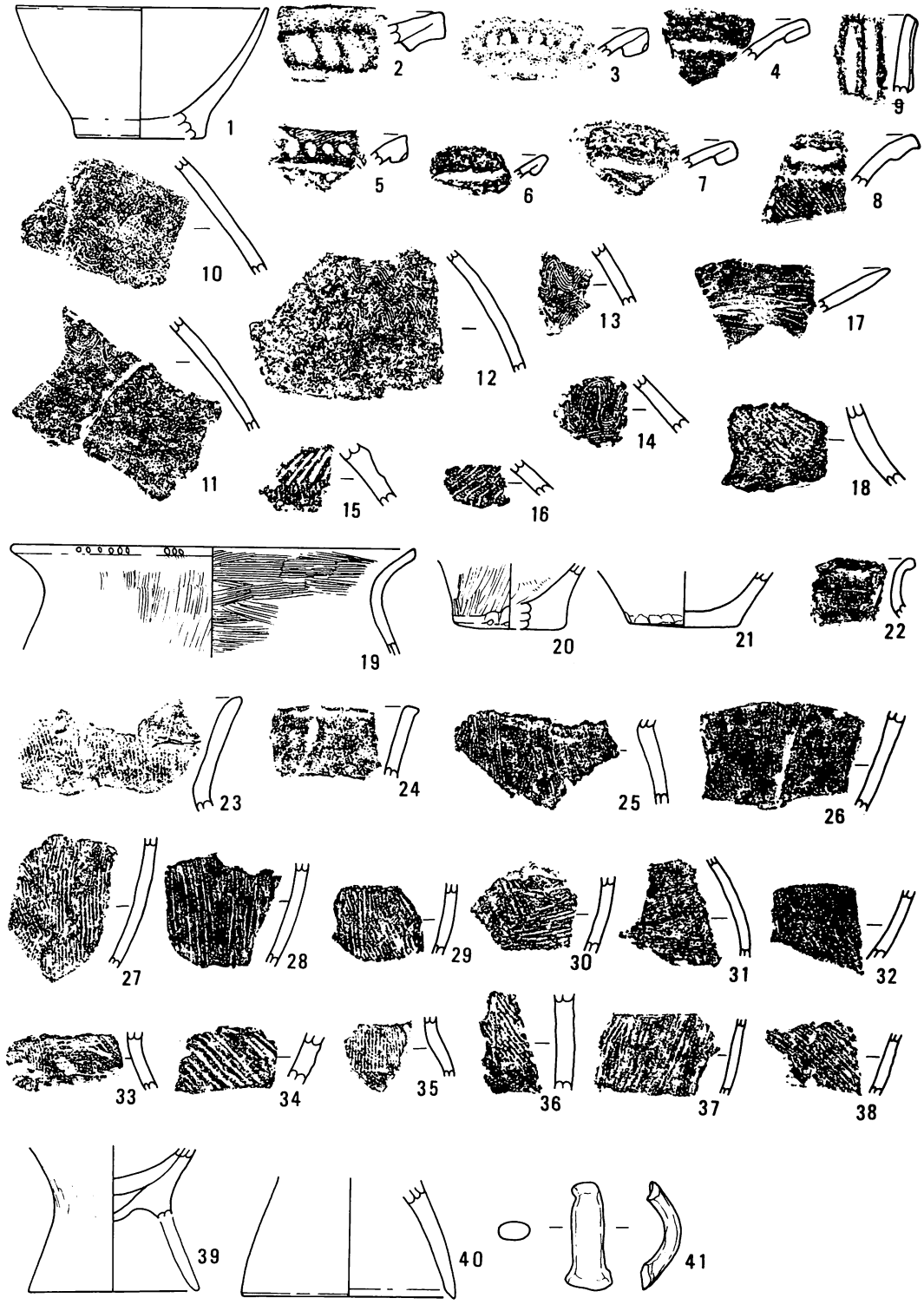
形態・規模　隅丸方形を呈し、主軸はＮ－４°－Ｗ、主軸長径4.50m、短径4.30mで方形に近い。既に壁の大部分が削平され、覆土も殆ど残っていないが、かろうじて南側で５㎝の壁が見られる。



1　褐色土(溝)層
2　暗褐色土層　焼土・炭化物を含む
3　暗褐色土層　ロームブロックを含む
4　褐色土層
5　暗褐色土層　ロームブロックを含む

0　1　2 m

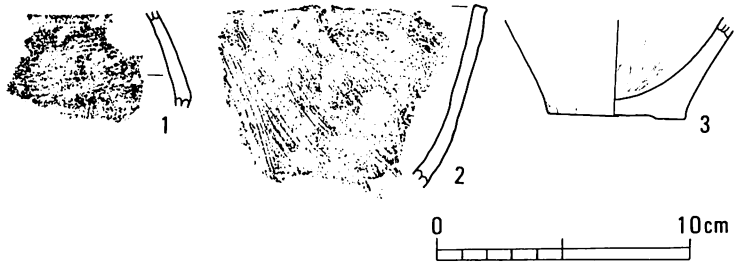
第10図　第４号住居址



第11図　第４号住居址出土遺物　0　10cm

周溝は北東側～南側にかけて残るが、西側は削平されて明らかではない。炉は地床炉で、南北55㎝の楕円形を呈する。また、炉は住居中央より北側に寄っており、主軸上に位置している。柱穴は主柱穴４本である。主柱穴１～４は方形に配置されており、Pit１は径62×53㎝、深さ40㎝、Pit２は径40×43㎝、深さ37㎝、Pit３は33×45㎝、深さ50㎝、Pit４は径43×45㎝、深さ50㎝、Pit４は径43×45㎝、深さ40㎝である。南側の壁に接したPitは貯蔵穴と見なして良かろう。覆土は分層することが困難であるが、遺物は床面上や周溝内から若干出土している。

遺物　甕形土器の破片及び底部が出土している。１は胴部破片で、２は口縁部かあるいは台付甕の台部破片と思われるが天地不明である。３は甕形土器の底部である。



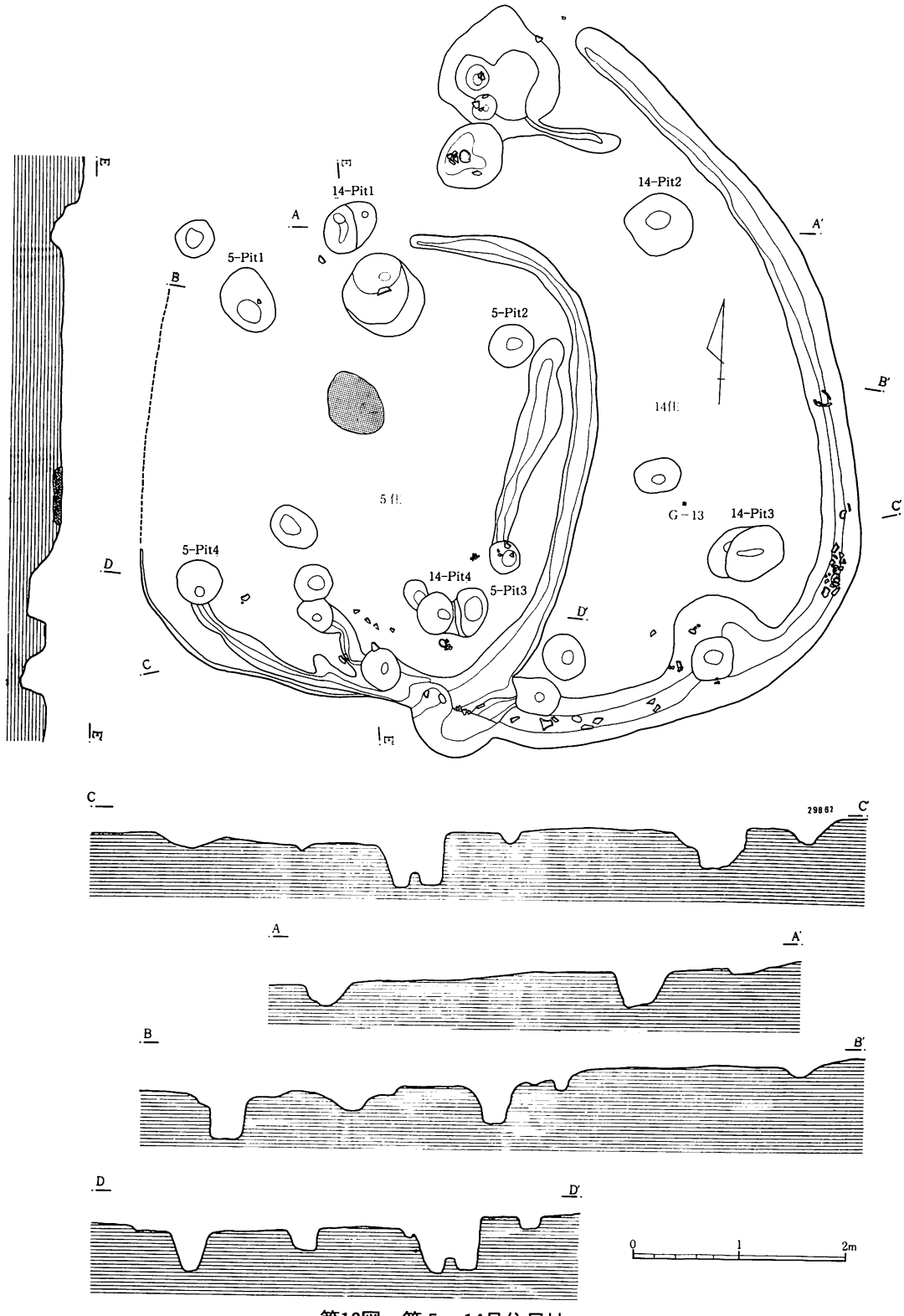
第12図　第５号住居址出土遺物

第６号住居址（Ｂ・Ｃ－５・６グリッド）（第14・15図）

位置　北西グループの北西端の住居址で、第５・６号溝に切られる。緩やかに北面傾斜する台地の平坦面縁に立地し、北側は急な斜面となる。また、ここより西側や北側には遺構は検出されない。

形態・規模　西側・北側を溝で切られている為、プランは明確ではないが、隅丸方形を呈するものと思われる。主軸はＮ－25°－Ｗ、主軸長５ｍ（推定）、幅４ｍ（推定）で楕円形に近い。北・西の壁はないが、東壁は10㎝、南壁は20㎝の高さで残る。周溝は東側～南側にかけて残る。炉は検出されていないが、床面は中央部で良好である。柱穴は明らかではなく、遺構内のPit９か所のうち、１と４が柱穴と見なすことができる。Pit２は直径１ｍの土坑であるが、位置は主柱穴があった場所であり、この土坑によって柱穴が消滅したのかもしれない。住居中央Pit３は深さ30㎝もあるが、中央部に位置することから柱穴にはなじまないかもしれない。Pit５は周溝の外側で、壁の内側に位置するところから梯受け穴と思われる。南側周溝内側の皿状ピットには焼土が入っているが、貯蔵穴であろうか。Pit１は径40×30㎝、深さ45㎝、Pit２は径100×95㎝、深さ30㎝、Pit３は径70×55㎝、深さ30㎝、Pit４は径50×35㎝、深さ15㎝である。梯受け穴は径40×45㎝、深さ21㎝である。覆土中には炭化物・焼土が多く含まれているが、火災住居であろうか。

覆土は分層することが困難であるが、遺物は南東壁近くより台付甕一括が出土しているほか、



第13図　第５・14号住居址

1　暗褐色粘土層
　小石粒を含む
2　暗褐色粘土層
　1層よりしまりが強い
3　茶褐色土層
4　黄褐色土

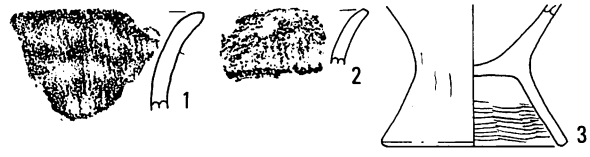
6溝
5溝
6住
Pit 1
Pit 2
Pit 3
Pit 4
Pit 5

294.55
294.65

1　暗褐色粘土層
2　暗褐色粘土層　炭化物を混入、しまりがある
3　茶褐色粘土層　ロームブロックを混入
4　黄褐色土層

0　1　2m

第14図　第6号住居址



0　10cm

第15図　第6号住居址出土遺物

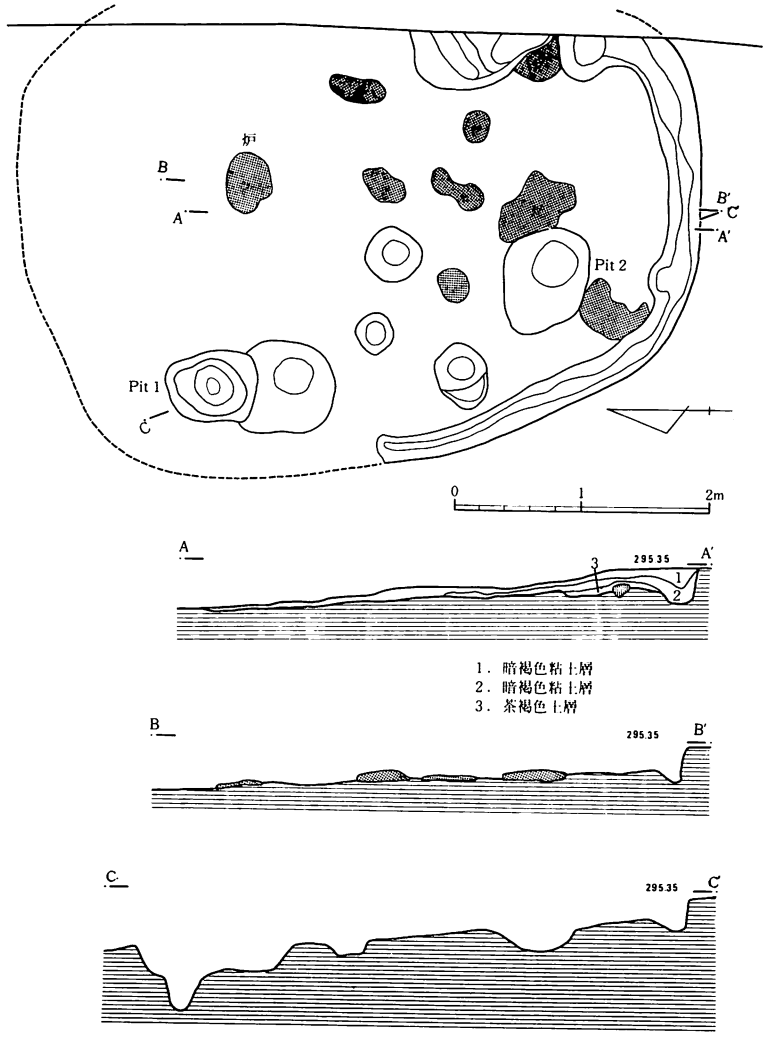
床面上や周溝内から若干出土している。

また、本住居址の東～南を囲むように、第７号溝が存在する。住居に伴うのか否か明らかでないため、ここでは説明を切り放しているが、時期的には同時期としても差し支えないものと思われる。第８号住居址を取り巻く第８号溝と性格的には同質かもしれない。

遺物　甕形土器の破片及び台付甕の台部が出土している。遺物量は少ない。

第７号住居址（Ｄ－５・６グリッド）（第16図）

位置　最北西に位置するグループで、第６号住居址の東側に並ぶ。東側を舗装道路によって切ら



第16図　第７号住居址

れており、北側は第６号溝に接している。

形態・規模　楕円形に近い隅丸方形で、南半分のプランは明瞭であるが、耕作土直下が遺構確認面であることから、北側は削平されてプランが不明である。主軸はＮ－19°－Ｗ、主軸である長軸（推定）5.5m、短軸（推定）５ｍの規模で、南側壁は18㎝の立ち上がりが認められる。炉は地床炉で北側に偏り、南北37㎝、東西48㎝が良好に焼けている。周辺の床は良く踏み固められているが、北側では軟弱である。柱穴は２本確認されており、他の２本は道路下に入っているものと思われる。住居南側から西側にかけて幅10㎝程度の周溝が巡る。また、周溝に接して深さ10㎝程のPitがあるが、梯受け穴であろうか。なお、道路に潜り込むように浅い皿状のPitがあり、貯蔵穴と見ることができよう。床面上や覆土には焼土・炭化材が多く残り、焼失家屋の可能性が高い。本住居址からの出土遺物は少ないが、住居形態から弥生時代後期に属するものと思われる。

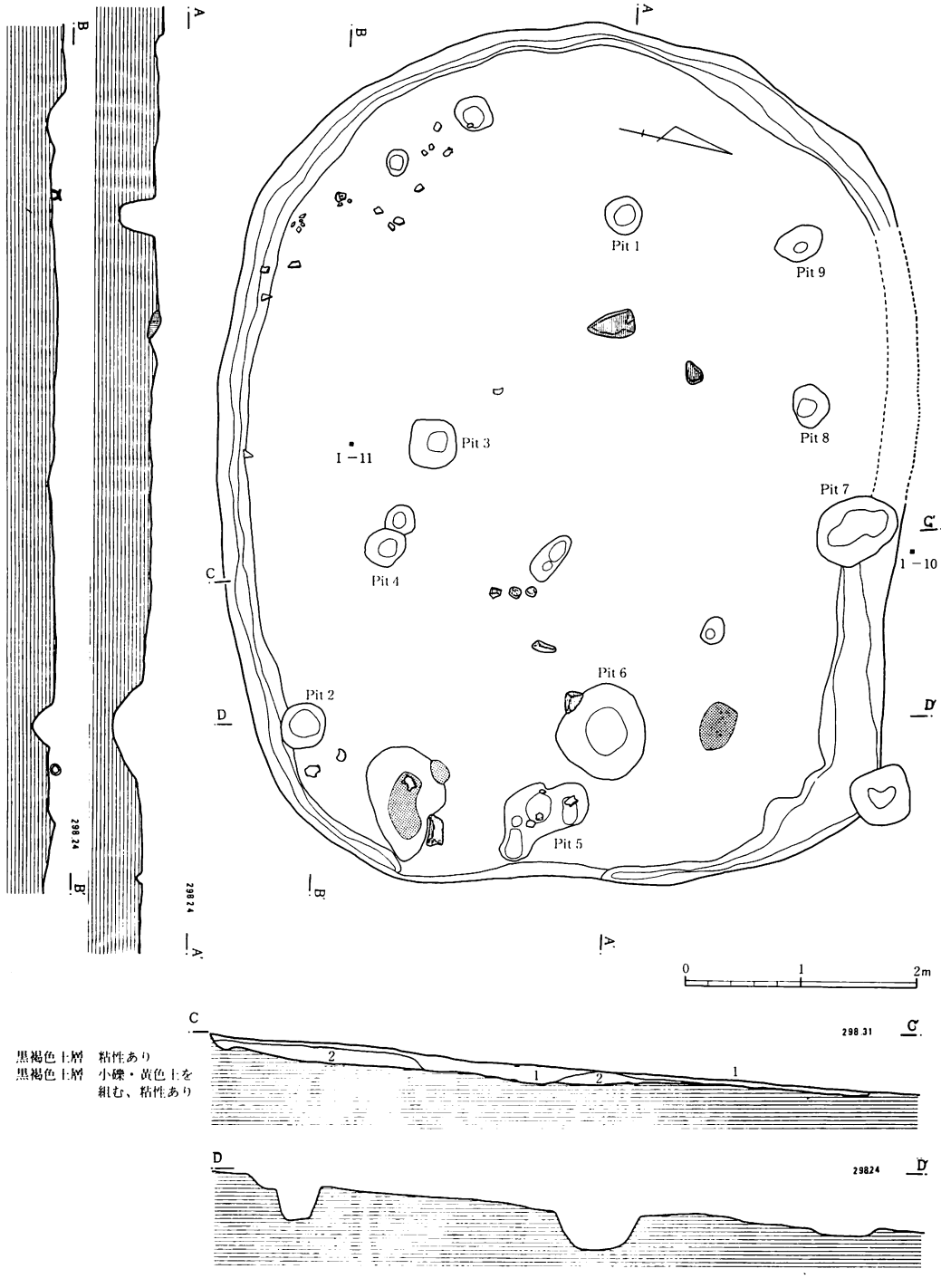
遺物　覆土中から若干の弥生時代後期の破片が出土しているが、図化できるものは無い。

第８号住居址（Ｈ・Ｉ－10・11グリッド）（第17・18図）

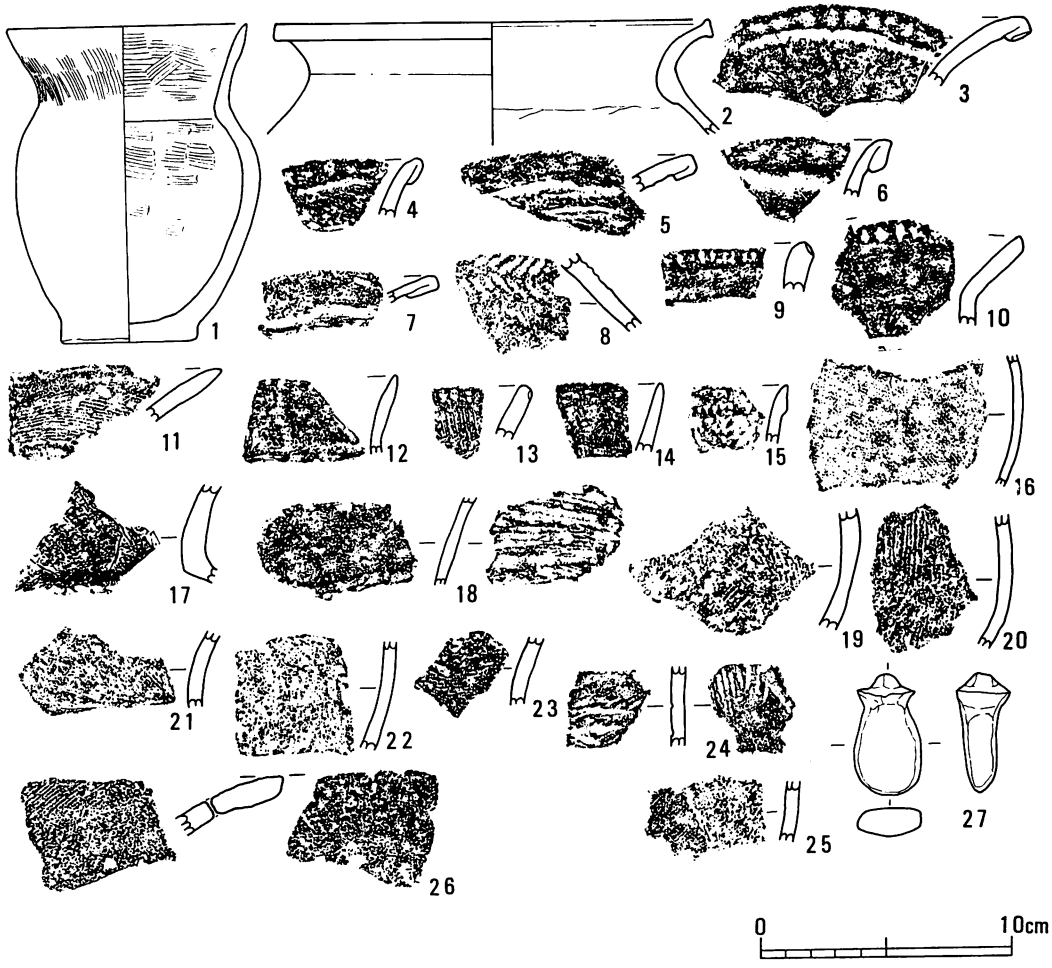
位置　台地平坦面の中心より北側に偏り、未調査区域を含めた北側住居址群の中心的な位置にある。住居の周囲には第８号溝が巡り、本住居址と一帯の遺構と考えられる。

形態・規模　遺跡最大の住居址であるが、柱穴・炉など住居としての基本的な要素に欠ける点が疑問である。東西7.40m、南北6.20mの東西に長い楕円形を呈し、東側がやや直線的である。壁高は東側３㎝、西側15㎝、南側７㎝、北側８㎝で、掘り込みの遺存状態は悪く浅い。壁の下には周溝がほぼ全周する。周溝は南側で幅30㎝、深さ５～10㎝であり、北東側では幅40㎝に広がる。炉は無いが、Pit６の北側に45×30㎝の焼土がある。これを地床炉と見なすのは困難であろう。住居内にはPitが大小16個あるが、規則的な配列を持つ、主柱穴と見なされるPitは皆無と言っても良い。Pit１は径35×30㎝、深さ35㎝、Pit２は径40×40㎝、深さ30㎝、Pit３は径40×42㎝、深さ26㎝、Pit４は径32×35㎝、深さ25㎝、Pit５は径90×45㎝の不定形プランで、底は３ヵ所に別れ30㎝程の深さがそれぞれある。Pit６は径80×85㎝、深さ35㎝、Pit７は径75×53㎝、深さ17㎝、Pit８は径31×40㎝、深さ23㎝、Pit９は径30×42㎝、深さ12㎝である。この他、Pit２とPit５の間に大量の焼土を持つ皿状のPitがあるが、住居南東コーナーに近いという位置であるから、炉とは認められない。床面は中央部と南側が比較的明瞭でしまっていたが、北側は軟弱である。また、床面や覆土に焼土が多く散布しており、火災を受けた可能性もある。遺物は住居南側に集中しており、特に壁に沿った西側と東側に集中していた。

遺物　１は南東コーナより出土したほぼ完形の小型甕形土器で、内外面刷毛目整形であるが、胴部外面は整形痕がない。２は外反した口縁部に、コの字状の断面をもつ口唇部が着くシャープな甕形土器である。３～８は壺形土器の口縁部及び胴部の破片で、９～25は甕形土器破片である。26は壺の単純口縁であるが、小孔が開けられている。27はピット内から出土した土製品であるが、把手ではなかろうか。27を除き、いずれも弥生時代後期に属するであろう。


Pit 1
Pit 2
Pit 3
Pit 4
Pit 5
Pit 6
Pit 7
Pit 8
Pit 9
I −11
I −10
0
1
2m
298.31
298.24
1 黒褐色土層 粘性あり
2 黒褐色土層 小礫・黄色土を組む、粘性あり

第17図 第8号住居址

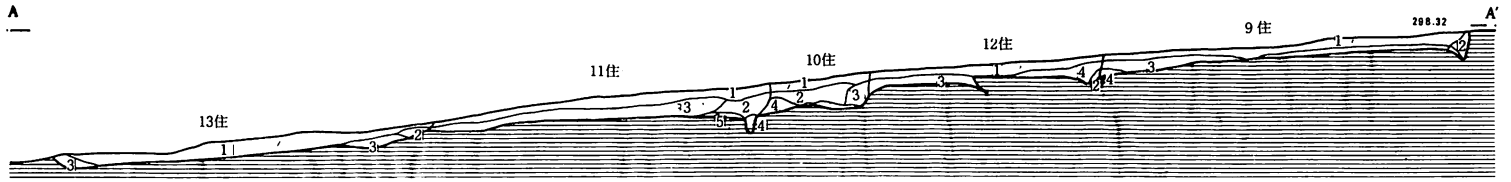


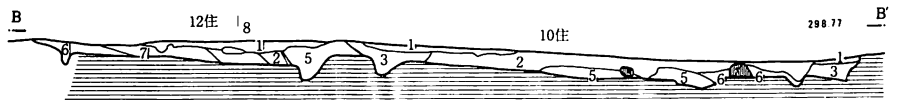
第18図　第８号住居址出土遺物

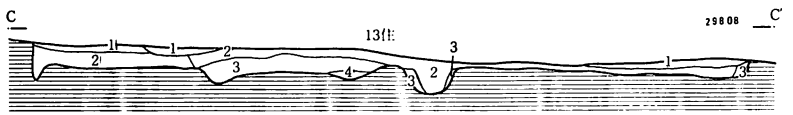
第９号住居址（Ｆ・Ｇ－10・11グリッド）（第18～20図）

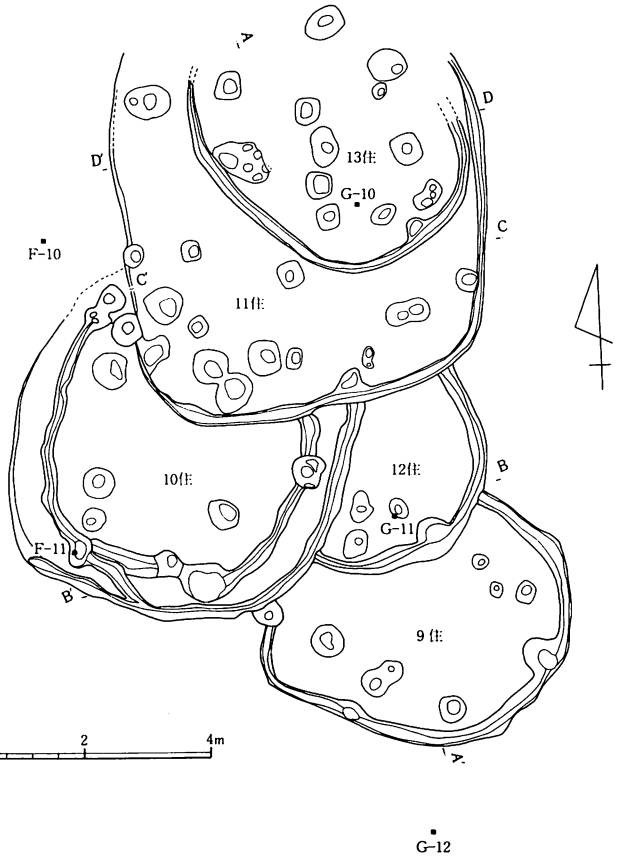
位置　集落北側の平坦地に立地し、最も住居が密集している場所である。第８号住居址の西側に位置し、第８号溝を切るが、第10・12号住居址に切られる。

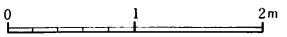
形態・規模　隅丸方形であるが、南辺が半円状に張り出して隅丸五角形とも呼べる。主軸はＮ－54°－Ｗ。長軸（推定）は第10号住居址に切られているので正確ではないが、現状で4.20m、短軸4.20mである。壁高は南壁で15㎝、東壁5.5㎝、西壁９㎝、北壁不明である。周溝は全周し、幅20～25㎝であるが、壁側は内傾し、断面はＶ字形を呈する。周溝の覆土には焼土や炭が混ざり、本住居址が火災住居であることを示している。炉は第12号住居址に切られてしまったのか、検出できなかった。また、住居に伴うPitは８本あるが、このうち主柱穴はPit１～４までの４本であろう。Pit１は径50×53㎝、深さ18㎝、Pit２は径35×28㎝、深さ25㎝、Pit３は径38×35㎝、深さ27㎝、Pit４は径43×42㎝、深さ23㎝である。Pit２は第12号住居址と重複し、その中にある。











9住
1 暗褐色粘質土層
2 〃 炭化物を多く含む
3 黄褐色粘質土層 炭化物・焼土を含む
4 〃 3層よりしまりが強い

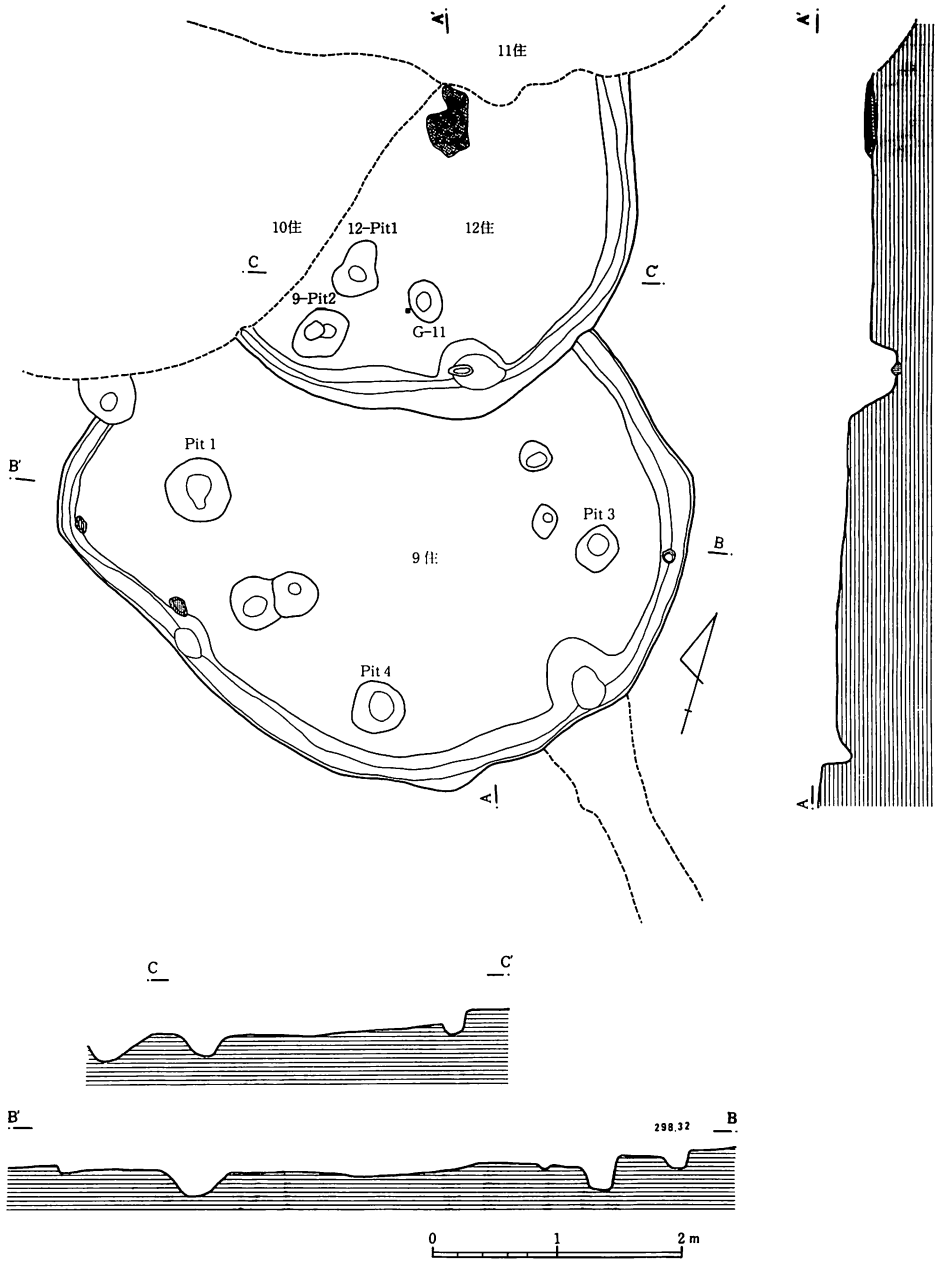
10住
1 暗褐色粘質土層
2 〃 1層よりしまり強い、炭化物・焼土を多量に含む
3 〃 2層よりしまりが強い、焼土を多量に含む
4 暗黄褐色粘質土層 炭化物・焼土を含む
5 暗褐色粘質土層 しまり弱
6 暗黄褐色土層 ローム小ブロックを含む
7 暗褐色土 焼土をわずかに含む

11住
1 暗褐色粘質土層
2 〃 1よりしまり強、土器・焼土を多量に含む
3 暗褐色粘質土層 炭化物・焼土を含む
4 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合土層
5 暗褐色粘質土層 ロームブロックを多量に含む

12住
1 暗褐色粘質土層
2 黄褐色粘質土層 しまりが強い
3 暗褐色粘質土層 炭化物を多量に含む
4 〃 3層より黒っぽい
5 黄褐色土層 しまりが弱い
6 暗黄褐色粘質土 4層よりしまりが弱い
7 〃 6層よりしまり弱
8 黄褐色粘質土層 2層よりしまりが強い、ローム小ブロックを多く含む
9 暗褐色粘質土層 焼土を含む

13住
1 暗褐色粘質土層
2 〃 1層よりしまりが強い、炭化物を多く含む
3 〃 2層よりしまりが強い、炭化物・焼土・ローム小ブロックを多く含む
4 暗黄褐色粘質土層 しまりが強い

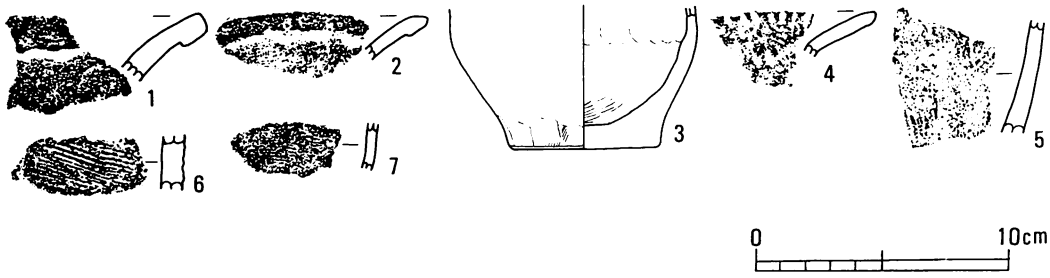
第19図 第9・10・11・12・13号住居址配置及びセクション図



第20図　第９・12号住居址

住居南東端の壁に接してピットがある。径60×60㎝、深さ22㎝で、貯蔵穴であろうか。床面は中央部が良く踏み固められており、周囲は軟弱である。覆土には焼土や炭が多く含まれており、焼失住居の可能性がある。

遺物　覆土が浅く、遺物は少ない。１～４は壺形土器で、５～７は甕型土器破片である。３は周溝内部に落ち込んでいた小型壺形土器の胴部下半部である。

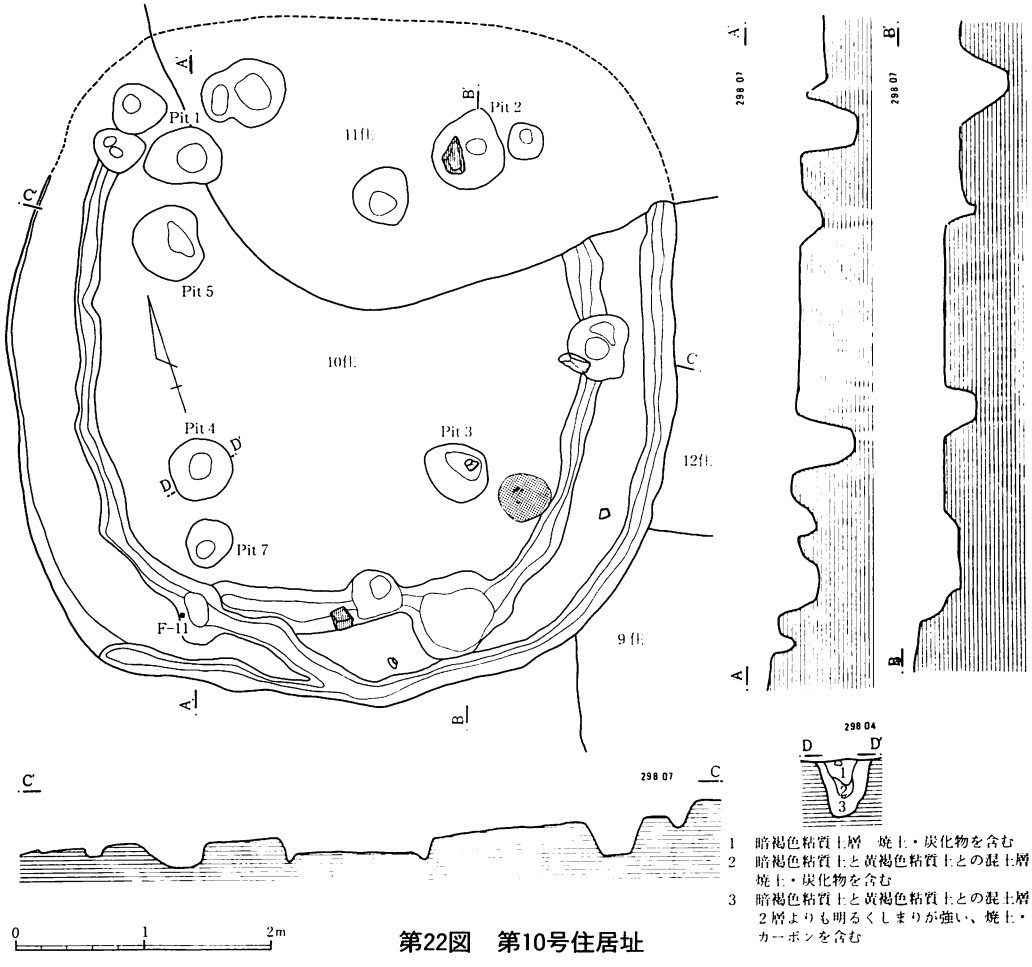


第21図　第９号住居址出土遺物

第10号住居址（Ｆ－11・12グリッド）（第22・23図）

位置　台地西側の平坦地に位置し、住居址群が著しく重複する中にあり、第９・12号住居址を切るが、第11号住居址に北東部を切られる。

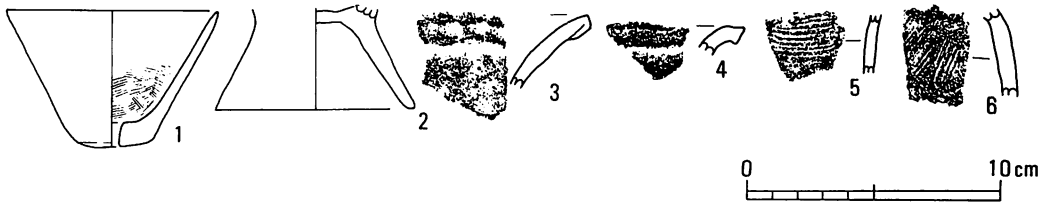
形態・規模　隅丸方形を呈した竪穴住居で、長軸(推定)5.45m、短軸5.30mで、壁よりも内側に約50cmに周溝が巡ることから、同心円状に拡幅されたことが窺える。内側の周溝位置から、当初



第22図　第10号住居址

の住居規模は長軸4.50m、短軸4.10m程度と推定される。柱穴は７本あり、１～４が拡張後の柱穴で、３・５～７が当初の柱穴ではなかろうか。Pit１は径60×45㎝、深さ45㎝、Pit２は径65×60㎝、深さ35㎝で、中に石が入れられている。Pit３は径50×47㎝、深さ25㎝で柱穴内に小型甑が入れられていた。Pit４は径50×48㎝、深さ50㎝、Pit５は径55×60㎝、深さ18㎝、Pit６は径45×46㎝、深さ21㎝、Pit７は径35×40㎝、深さ20㎝である。旧住居と新住居とは主軸に12度のズレがある。新住居の主軸はN－16°－Eである。なお、炉跡はないが、第12号住居址に切られてしまったものと思われる。内側の周溝は幅20㎝前後で深さ５～８㎝で、北側の切られた箇所を除いて全周する。壁の高さは東で13㎝、西５㎝、南20㎝あり、その下を巡る外側の周溝は、幅15～30㎝、深さ10㎝程度で、西側を除いて巡り、南側で内側の周溝と連結する部分がある。住居南側には径60×70㎝、深さ８㎝の皿状Pitがあり、貯蔵穴と思われる。また、内側の周溝南の内部に、径40×40㎝、深さ40㎝のPitがあるが、これは梯受け穴ではなかろうか。床面は中心部は良好であるが、周辺はやや軟弱である。覆土中には焼土、炭を多く含み、Pit３の脇にも焼土塊がある。本住居も焼失したものであろう。

遺物　１はPit３の中から出土した小型甑である。外面は撫で、内面下部は刷毛目整形が見られる。２は住居南側の床面上より出土したもので、台付甕の台部である。３・４は壺形土器口縁部破片、５・６は壺形土器胴部破片である。遺物は少ない。

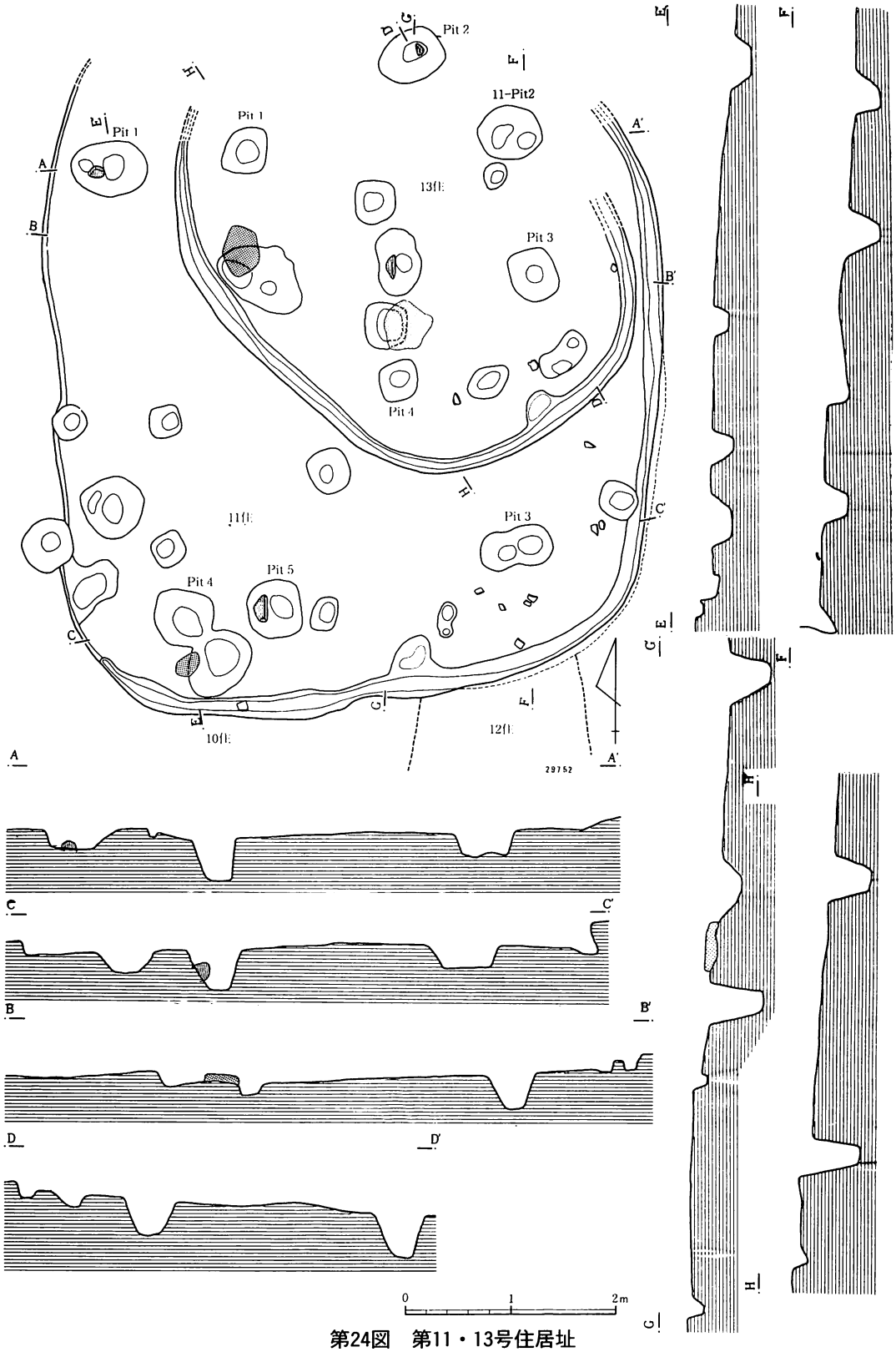


第23図　第10号住居址出土遺物

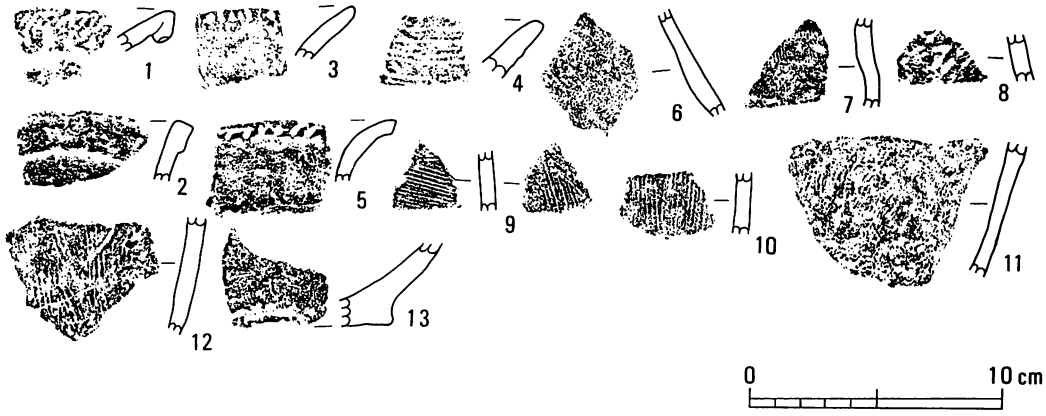
第11号住居址（F・G－９・10グリッド）（第24・25図）

位置　台地西側の平坦面に立地しているが、最も住居址群が重複している中央部に位置する。重複関係は、第10号住居址を切り、第13号住居址に切られる。更に北側は第13号溝があり、これに切られている。

形態・規模　隅丸方形を呈しているが、北側が第13号住居址及び第13号溝に切られ、西側は削平されてプランが明確ではない。周溝が巡る東側から南側のプランにしたがって、調査を進めた結果、このような平面プランが把握できた。住居はN－７°－Wの主軸をもち、主軸推定長は６m強、短軸もほぼ同じ長さである。周溝は東から南に掛けて残り、特に東側は側面が内傾する特徴をもち、掘り込みも鋭角なV字を呈する。小溝の幅は20㎝程で、深さは５～20㎝ある。炉は第13号住居址に切られて消失している。柱穴は４本と推定しているが、住居内に多くのPitがあるので、立て直し跡や、補助柱穴などが含まれていると思われる。また、柱穴を見落としている場合もあるかもしれない。最終的な住居に伴う柱は、Pit１～４と思われ、Pit５は補助柱穴ではなか



第24図　第11・13号住居址



第25図　第11号住居址出土遺物

ろうか。Pit 1 は径53×73㎝、深さ23㎝、第13号住居址の中にあるPit 2 は径53×60㎝、深さ25㎝で、Pit 3 は径40×70㎝、深さ22～34㎝、Pit 4 は径60×60㎝、深さ20㎝、Pit 5 は径50×55㎝、深さ35㎝である。梯受け穴は住居南辺中央で、周溝に接した径40×30㎝、深さ14㎝のPitではなかろうか。覆土中には焼土や炭を多く含み、床面にも分布する。床面は中心部が良好に踏み固められており、周囲はやや軟弱である。特に西側は柔らかい。

遺物　出土量は少なく、覆土中より若干の弥生時代後期の破片が出土している。1は折り返し口縁の端部に細かい縄文が施文された壺形土器破片で、3・4・5は甕形土器口縁部であるが、3・5には口唇部に刻みがある。13は壺形土器の底部であろうか。

第12号住居址（F・G－10・11グリッド）（第20図）

位置　台地西側の平坦面にあり、重複住居址群の1軒である。第9号住居址を切り、第10・11号住居址に切られている。

形態・規模　北側と西側を第10・11号住居址に切られているため、規模・プラン共に明確ではない。残存プランから推定すると、楕円形プランで、長軸が4.00m程度、短軸が3.60m程度である。周溝は25㎝幅で壁残存部分に全周し、深さ10㎝のしっかりした掘り込みをもつ。炉は、住居北側の床面中央に焼土分布が見られ、これが地床炉と思われる。南北38×東西43㎝の規模である。3本のPitのうちPit 1 が本住居址に伴うものであろう。径43×37㎝、深さ18㎝である。床面は中央部が良好であるが、周辺はやや軟弱で、焼土や炭を含む。また、覆土にも焼土や炭を含む。住居南端にあるPitは径50×45㎝、深さ25㎝で、梯受け穴であろう。

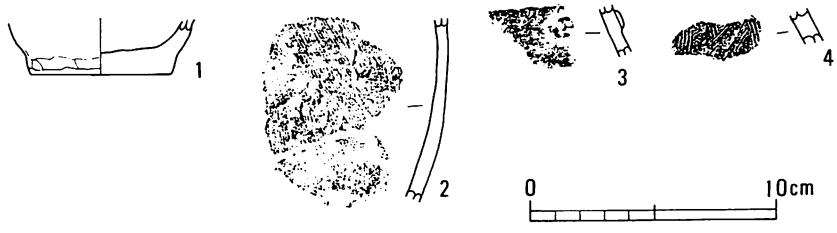
遺物　遺物には、覆土中より弥生時代後期の土器小破片が僅かに出土している。

第13号住居址（F・G－9・10グリッド）（第24・26図）

位置　台地西側の平坦面に立地し、重複住居址群の中にある。第11号住居址の中に入り、この第11号住居址を切っている。また、北側を第13号溝の一部切られる。

形態・規模　楕円形を呈する小型の住居で、主軸はN－32°－Wを示し、主軸方向である長軸は4.70m、短軸は3.70mの規模である。壁高は南で10㎝、東壁で８㎝、西壁で12㎝である。壁の下には幅20㎝、深さ４～10㎝の周溝が巡るが、北側では消失している。柱穴は４本で、Pit１は径40×45㎝、深さ40㎝、Pit２は径60×50㎝、深さ40㎝、Pit３は径50×45㎝、深さ35㎝、Pit４は径37×37㎝、深さ50㎝である。炉は不明であるが、床面は全面に焼けており、覆土中床面には焼土・炭が多く、炭化米も多数出土している。炭化米は床面全体に散乱しているが、特に住居南西部や炉の周辺から出土している。

遺物　土器は少なく、甕形土器や壺形土器の破片が若干出土している。



第26図　第13号住居址出土遺物

第14号住居址（F・G－12・13グリッド）（第13図）

位置　台地中央部の平坦地に位置し、第５号住居址に切られる。

形態・規模　楕円形を呈していたと推定できるが、耕作によって覆土の大部分が削平されていた。住居の南北の主軸N－11°－W方向で6.00m、短軸で5.00m程度の規模であろう。東側から南側にかけて周溝が存在した事によって、住居と判明した。当初は溝だけの遺構と考えていたが、第５号住居址の調査を進めるにしたがって、柱穴も確認され、周溝の重複などから２軒の住居の切り合いが理解された。壁の高さは南側で９㎝、東側で１～２㎝である。周溝は幅20～40㎝あり、断面はV字形をし、深さは10～20㎝である。柱穴は４本で、Pit１は径70×80㎝、深さ46㎝、Pit２は径60×58㎝、深さ35㎝、Pit３は径45×60㎝、深さ35㎝、Pit４は径30×40㎝、深さ52㎝である。また、住居南側の周溝に、径80×80㎝、深さ26㎝のPitがあり、梯受け穴と考えられる。床面はやや軟弱で締まりはなく、既に削平されている部分も多い。炉は第５号住居址に切られて存在しない。

遺物　覆土が無いために、遺物は無い。

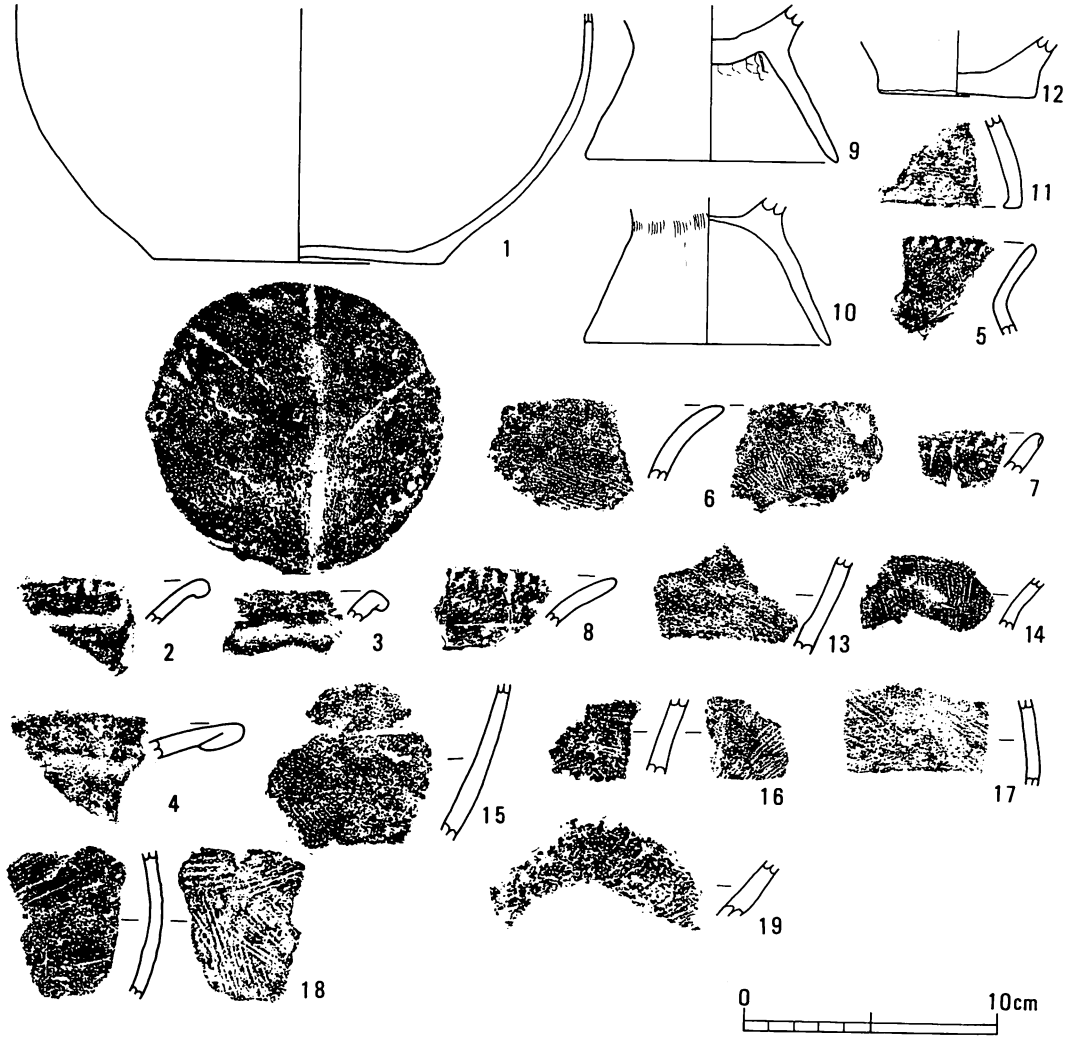
第27図　第15・16号住居址

第15・16号住居址（F・G－7・8グリッド）（第27・28図）

位置　台地北側の緩斜面に立地する。ほぼ環状に展開する住居址群の北側に位置し、2軒の重複であるが、それぞれのプランは明確ではない。

形態・規模　楕円形の竪穴住居が2軒重複しているが、周溝が2重に巡る拡張跡や、Pitが多くプランが特定できない。Pit総数は24カ所あり、このうち30㎝以上の深さをもつPitは8カ所であるが、これらは不規則な配列で、周溝とも一致しない。傾斜の変換点に位置する為、耕作によって撹乱を受けているが、柱穴や、周溝の残存状況から、2軒の重複であることは間違いない。

遺物　弥生時代後期の壺形土器及び甕形土器破片が出土している。1は壺形土器の胴部下半大破片であり、木葉底である。9・10は台付甕台部である。　（末木）



第28図　第15・16号住居址出土遺物

第17号住居址（Ｉ・Ｊ－13・14グリッド）（第29図）

位置　遺跡の北側に分布する住居址群のひとつで、台地平坦部から緩やかな北斜面に移る地点に位置する。竪穴住居の掘り込みは、斜面に位置していることから、南側が深く北側が浅い。住居の西側部分約５分の２は第18号住居址に切られているため、その正確な規模が把握できない。

形態・規模　竪穴住居は長楕円形を呈しており、主軸はＮ－74°－Ｗで、ほぼ東西方向を向いている。主軸方向の長径は5.30ｍ、短径は4.25ｍを測る。遺構確認面から床までの壁の深さは、北壁10㎝、東壁15㎝、南壁13㎝である。周溝状のものは南壁からやや離れた部分に存在し、Pit１に接続し、床面からの深さが最も深い部分で22㎝、幅は10～15㎝を測る。炉は地床炉で、住居中央東側に偏して造られ、南北58㎝、東西50㎝の範囲に焼土が残る。柱穴は多数確認されているが、Pit１・２・６が主柱穴と思われる。規模はPit１は径92×42㎝、深さ18㎝。Pit２は径80×40㎝、深さ35㎝。Pit６は掘り方が82×47㎝、Pitそのものの径は29×32㎝、深さ15㎝である。Pit８としたものは、遺物がほとんど含まれていなかったが、貯蔵穴の可能性が考えられる。覆土に含まれていた遺物は少なく、磨滅したようなものが多かった。

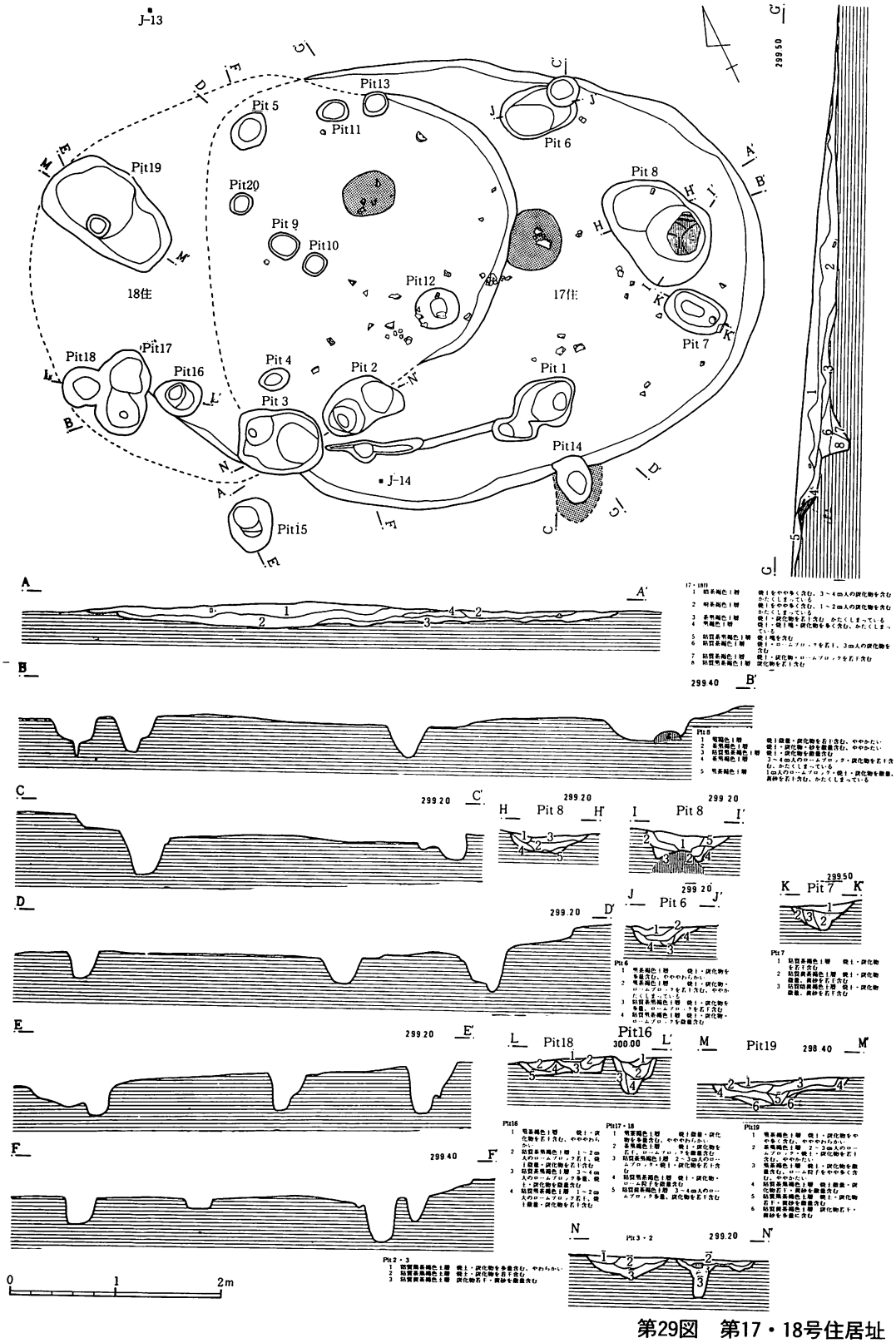
第18号住居址（Ｉ・Ｊ－13・14グリッド）（第29図）

位置　遺跡の北側に分布する住居址群のひとつで、台地平坦部から緩やかな北斜面に移る地点に位置する。竪穴住居の掘り込みは、全体的に浅い。住居の東側に存在する第17号住居址を切って造られている。また、斜面部のためプランが残存しない部分なども認められ、その正確な規模については把握できない。

形態・規模　竪穴住居は不整楕円形を呈しており、主軸はＮ－84°－Ｗで、ほぼ東西方向に向いている。主軸方向の長径は推定4.60ｍ、短径も推定で3.80ｍを測る。遺構確認面から床までの壁の深さは、西壁で10㎝である。周溝はない。炉は地床炉で、住居中央東側に偏して造られ、南北43㎝、東西50㎝の範囲に焼土が残る。柱穴は多数確認されているが、主柱穴と思われるものは、Pit５・12・16・19である。Pit５が径40×31㎝、深さが26㎝。Pit12は径42×38㎝、深さが35㎝。Pit16は45×33㎝、深さが35㎝。Pit19は掘り方の径が128×75㎝、柱穴の径が23×18㎝、深さが32㎝を測る。床面は炉の周辺では白色粘土を敷き詰めた貼床が、良好な状態で確認できたが、その周辺部ではやや軟弱である。なお、床面上には若干の焼土と炭化物が分布していた。覆土はレンズ状堆積をしており、やや良好な状態であったが、土器などの遺物は磨滅したような小型のものが大部分で、とても少なかった。

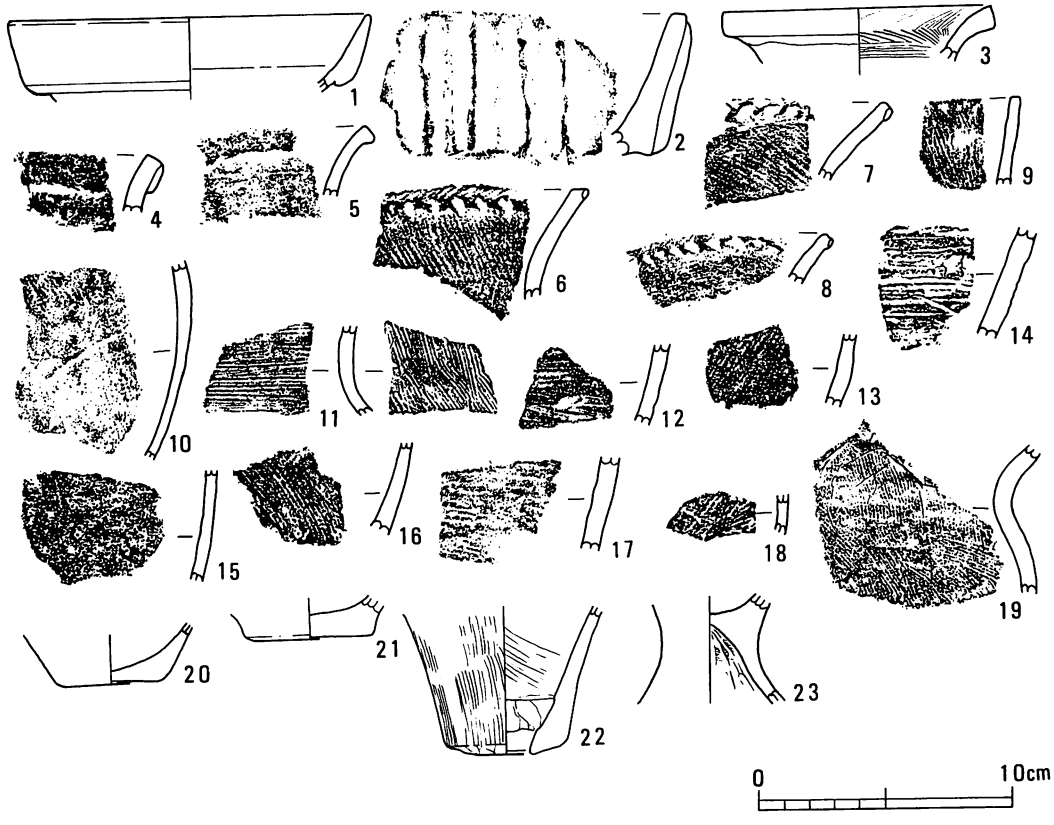
第17・18号住居址出土遺物（第30図）

遺物に関しては当初１軒の住居址として調査していたため、どちらの遺構に伴うものか不明であり、便宜上一括して報告することにする。１～５は壺形土器の口縁部、20は底部である。１は複合口縁部でやや急に立ち上がり外反する。２は大型壺の口縁部と思われ、５本単位の棒状浮文が施されている。３は緩やかに外反し、大きく開く肥厚した口縁を持つ。内面を刷毛調整している。４は粘土紐を貼付した二重口縁である。５は緩やかに外反し、口唇部が肥厚している。６～



第29図　第17・18号住居址

19・21は甕形土器の破片である。6～9は口縁部で、緩やかに外反するものが多く、口唇部には刻み目を持っている。10～19は胴部で、刷毛やささら状工具による器面調整が施されている。21は底部破片である。22は甑の底部破片で、器面は刷毛による調整が施されている。底面付近から貫通孔部分では撫で整形が施されている。甲府市桜井畑遺跡の甑B類（中山誠二　1990『桜井畑遺跡A・C地区』山梨県教育委員会）に近い形態を持つものであろう。23は台付甕の脚部で、外側は箆磨き、内側は指押しと撫でによる調整が施されている。

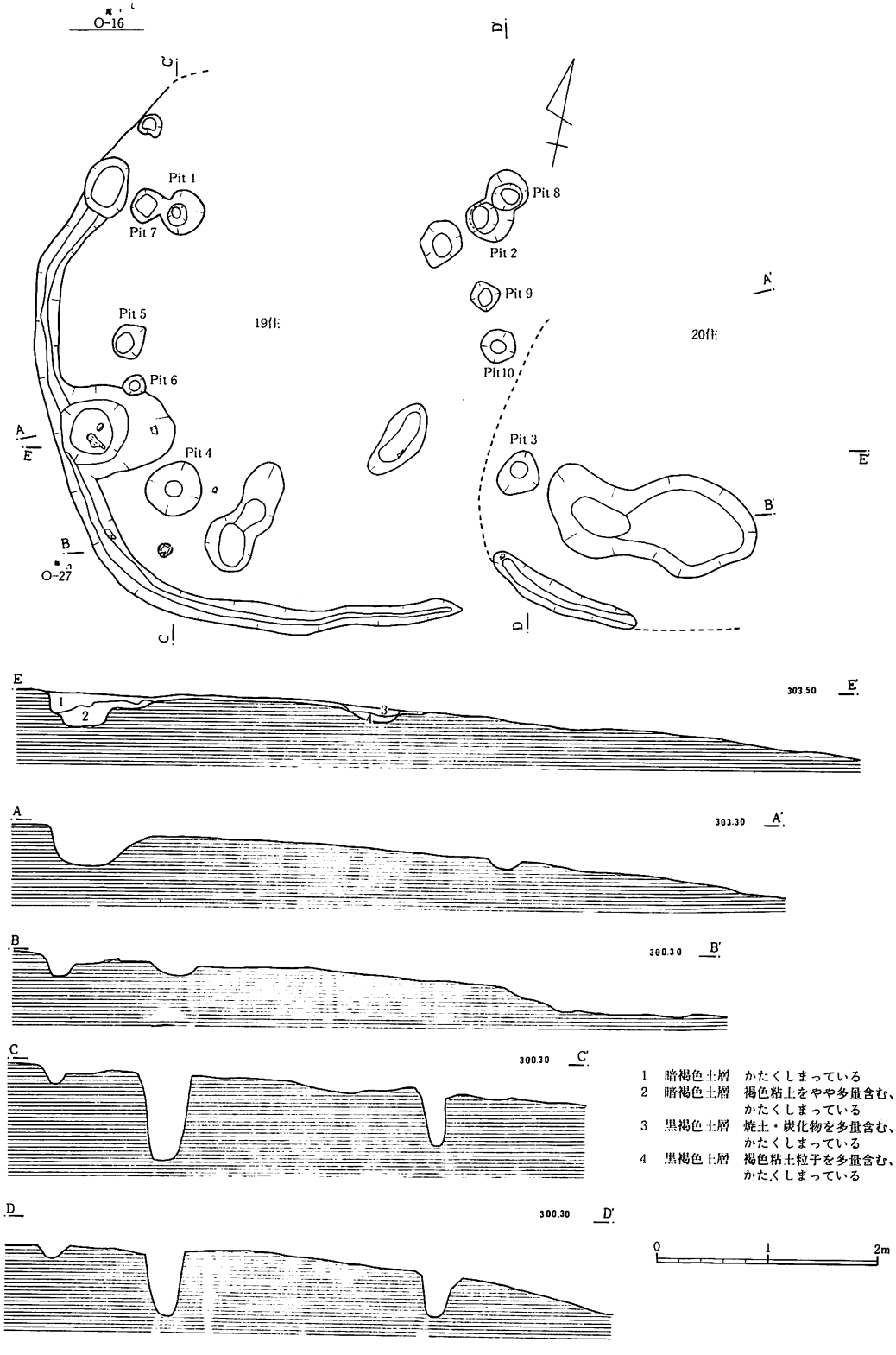


第30図　第17・18号住居址出土遺物

第19号住居址（N－26、O－26・27グリッド）（第31・32図）

位置　遺跡の南東端に分布する住居址群のひとつで、台地のやや平坦部分に位置する。竪穴住居の掘り込みは、住居の東半分以上が削平されているため、全体的に浅い。また、住居の東側部分の約4分の1は、第20号住居址に切られていることもあり、その正確な規模については把握できない。

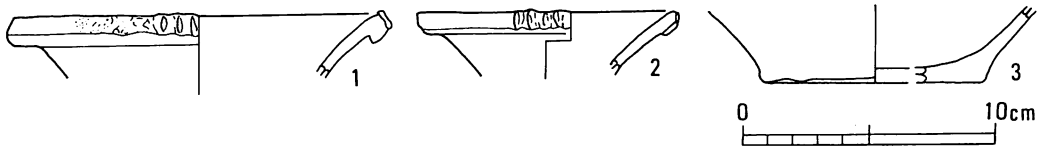
形態・規模　竪穴住居はほぼ円形を呈しているものと考えられ、主軸はN－64°－Eで、やや北寄りの東西方向を向いている。主軸方向の長径は5.60m、短径は5.30mの規模である。遺構確認面から床までの壁の深さは、西壁で10cmを測る。周溝は一部削平されているものの、住居の西側



第31図　第19・20号住居址

壁部から南側壁部にかけて残存している。幅はおよそ20cmで、深さ10cmの規模である。炉は発見できなかった。これはおそらく削平されたものと考えられる。柱穴は10本確認されている。このうちPit 1～4が主柱穴であるが、Pit 1・2に隣接するPit 7・8は補助柱穴と考えられる。Pit 5・6は西側入口部の中央付近に位置しており、梯受け穴の可能性がある。主柱穴の規模はPit 1は径43×40cm、深さ80cm。Pit 2は径39×38cm、深さ55cm。Pit 3は径42×40cm、深さ60cm。Pit 4は径53×50cm、深さ40cmを測る。貯蔵穴は梯受け穴と思われるPit 6の南側に位置し、周溝に切られた長径は110cm、短径87cm、深さ32cmである。床面は西側部分でやや良好な状態で残っていた。覆土はほとんど残っておらず、したがって遺物も極めて少なかった。

遺物　器形のわかるものは3点のみで、遺存状況はよくなかった。1・2は壺形土器の口縁部である。1は大きく緩やかに外反し、折り返し口縁をもつ。口唇部外面にはLRの縄文が施され、3本単位の棒状浮文をもつ。2は大きく緩やかに外反し、二重口縁をもつ。口唇部外面には4本単位の棒状浮文をもつ。3は壺形土器の底部である。内外面共に撫でによる整形が施されている。



第32図　第19号住居址出土遺物

第20号住居址（O・P－26グリッド）（第31図）

位置　遺跡の南東端に分布する住居址群のひとつで、台地のやや平坦部分に位置する。竪穴住居の掘り込みは、住居の大部分が削平されているため、ほとんど確認できなかった。また、住居の西側部分には第19号住居址と切り合っていることなどから、その正確な規模については把握できない。

形態・規模　竪穴住居は楕円形を呈しているものと考えられ、主軸はN－38°－Eであろう。主軸方向の長径は推定で5.10m、短径は推定で4.10mの規模と考えられる。遺構確認面から床までの壁の深さは、西壁で5cmしか残っていない。周溝は南壁部分に沿って僅かに残存する。幅はおよそ30cmで、深さは10cm程度である。炉は発見できなかった。また柱穴も確認できなかったが、土坑状の遺構が南側部分に1基見られる。しかし、この遺構が本住居址に付随するものか否かは不明であり、その性格についても同様であるが、覆土には焼土と炭化物が若干含まれていた。規模は長径200cmで、最深部で20cmを測り、不整がかった瓢箪形を呈している。床面は南側部分で僅かに確認できたのみで、覆土についてはほとんど残っていなかった。ゆえに土器などの遺物はとても少なく、磨滅したような小破片が数点出土したのみである。

第21号住居址（Ｐ－16・17グリッド）（第33図）

位置　遺跡の東部に分布する住居址群のひとつで、第２号方形周溝墓の東端、台地の平坦部から北斜面に移る変換点に位置する。竪穴住居の掘り込みは、確認できなかった。住居址は第２号方形周溝墓の台状部において、精査中に確認されたが、第２号方形周溝墓の保存上の理由により、本遺構は床面ならびに炉を確認した段階で調査を断念した。

形態・規模　竪穴住居はほぼ円形を呈するものと思われるが、大部分が未調査であるため、規模等に関しては把握できない。柱穴等のPitの配置については不明である。炉は地床炉で、南北50㎝、東西60㎝の範囲で焼土が残っていた。床面は炉の周辺を中心にした部分で、良好な状態で確認できた。本遺構は炉が確認されて初めて住居址であることが明らかとなった訳で、精査段階では既に覆土は残っておらず、竪穴の掘り込みも確認できない状態であった。ゆえに土器などの遺物については、ほとんど皆無に等しい状態であった。グリッド出土のものはあるが、極めて流動的なため遺構に伴う遺物としては扱わなかった。

第22号住居址（Ｐ－16グリッド）（第33・34図）

位置　遺跡の東部に分布する住居址群のひとつで、第２号方形周溝墓の台状部東端に位置している。遺構確認面から床までの壁の深さは、20㎝程度である。本遺構は、第２号方形周溝墓の主体部ならびに盛土の状況確認のために東西に設定した試掘坑から発見されたもので、東側が方形周溝墓の周溝に切られ、西側が第23号住居址によって切られている。本住居址の規模は不明である。炉は地床炉で、径が50㎝程度の範囲で焼土が分布する。柱穴は１本確認されたが、小規模なもので、補助柱穴と思われる。床面は良好な状態であった。土器などの遺物は覆土が浅かったためか、とても少なかった。

遺物　器形のわかるものは僅かに１点であった。１は台付甕の底部である。外側は縦方向の刷毛目を施した後、撫で調整をしている。内面は横方向の刷毛目を施している。

第23号住居址（Ｐ－16グリッド）（第33・36図）

位置　遺跡の東部に分布する住居址群のひとつで、第２号方形周溝墓の台状部東端に位置している。竪穴住居の掘り込みは、遺構確認面から床までの壁の深さは、50㎝程度である。本遺構もまた試掘坑内より発見されたもので、西側の大部分が第24号住居址に切られている。本住居址の規模は不明である。炉などの施設についても発見できなかった。柱穴は１本確認されたが、Pit１としたものは径が27㎝、深さ48㎝といったかなりしっかりしたもので、主柱穴の可能性が考えられる。周溝は、貼床を掘り込むようにして造られており、その規模は幅40㎝、深さ10㎝程度である。床面は、灰白色の粘土を貼った貼床が見られ、かなり良好な状態であった。土器などの遺物は、流れ込んだものが大部分で少なかった。

遺物　実測可能なものは５点であった。１・２は甕形土器の口縁部である。１は口唇部に刻み目が施されている。内外面は共に横方向の刷毛目によって整形されている。２は口唇部外面が箆状

工具によって整形され、内外面は共に撫でによる整形が施されている。３・４は台付甕の台部である。３は外面が篦削り、内面は刷毛目による整形が施されている。４は内面が縦方向に、外面が横方向に刷毛目による整形が施されている。５は甕形土器の胴部である。外面は縦方向ないし斜方向の刷毛目による整形が施されている。

第24号住居址（Ｏ・Ｐ－16グリッド）（第33・37図）

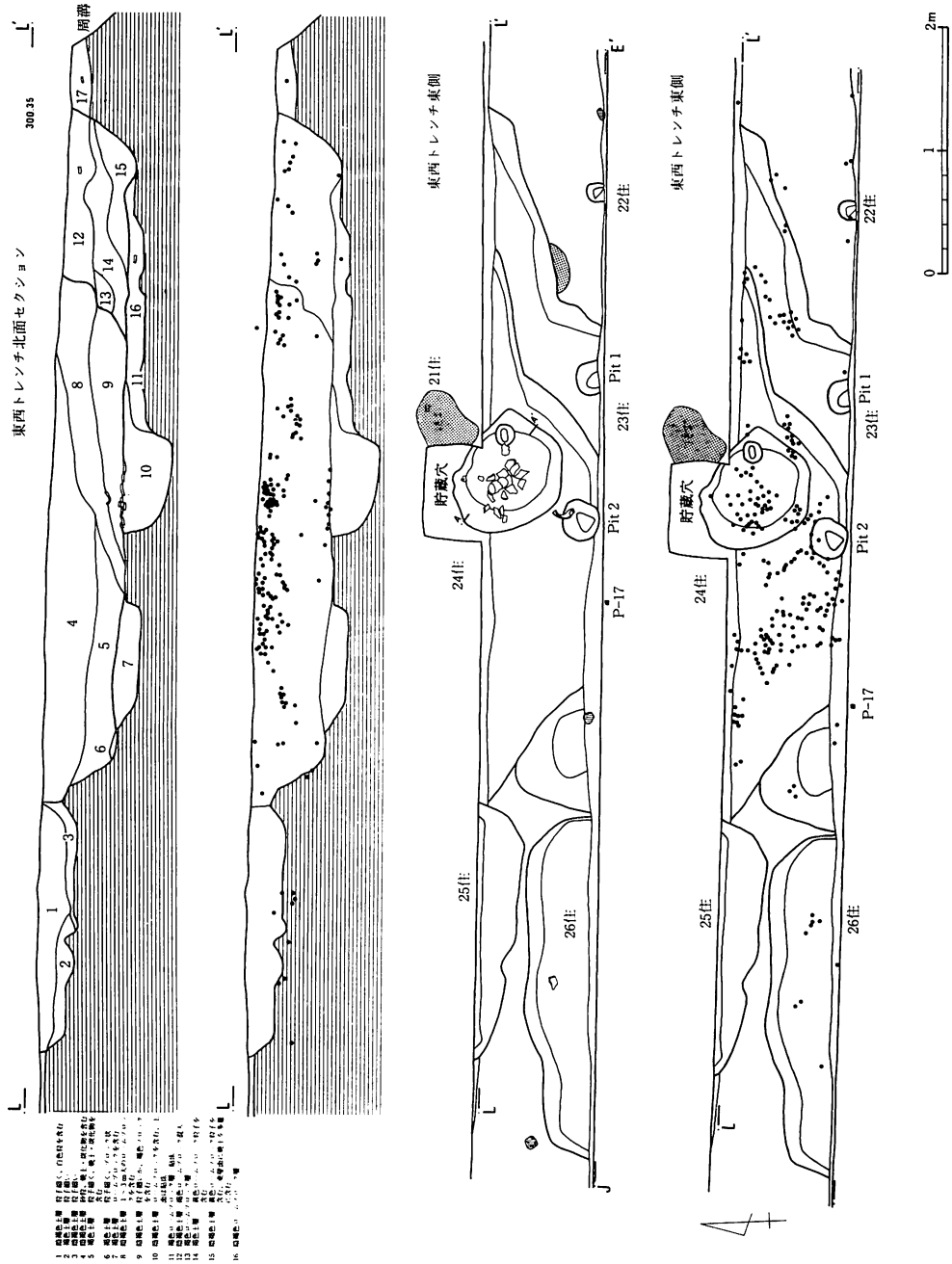
位置　遺跡の東部に分布する住居址群のひとつで、第２号方形周溝墓の台状部東端に位置している。竪穴住居の掘り込みは、遺構確認面から床までの壁の深さが、60㎝程度である。本遺構もまた試掘坑内より発見されたものである。本住居址の規模は不明である。炉は確認できなかったが、貯蔵穴（第67図）が発見できた。規模は長径1.00m、短径0.93m、最深部で0.40mを測る。遺物は覆土の上層部分より、台付甕の一括資料（第37図７）が出土した。柱穴は１本確認できたが、Pit２としたものは径34×30㎝、深さ33㎝を測り、主柱穴の可能性が示唆される。床面は灰白色の粘土を貼った貼床が見られ、良好な状態であった。土器などの遺物はやや多く出土したが、大多数のものは覆土の上層付近に集中しているため、流れ込みまたは、住居の廃絶後に廃棄されたものがほとんどであろう。覆土について観察してみると、上層部分を覆った土がロームブロック混入土によって占められていることがわかる。このことからは、意図的に埋め戻した状況が示唆され、第２号方形周溝墓の造営段階では、本住居址は半埋没状況を呈していた可能性が考えられる。

遺物　１～６、８～13は覆土から出土したものである。7は前述のとおり貯蔵穴と考えられる遺構の覆土上層より潰れた状態で出土したものである。

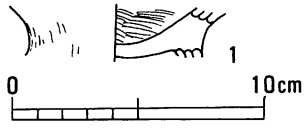
１～４は壺形土器である。１・２は口縁部で、大きく緩やかに外反し、それぞれ折り返し口縁を持つものである。器面は篦削りと刷毛目による整形が施されている。３は底部で、縦方向の刷毛目による整形が施されている。４は畿内型の直立する頸部と二重口縁を持つ壺形土器の口縁部である。５～６、８～12は台付甕ないし甕形土器である。５～８は口唇部に刻み目が施されている。器面は刷毛目による整形が施されている。７は底部が若干外反する傾向が観察できるため、台付甕と考えられる。口径22㎝、残存する器高24.6㎝である。９～12は台部である。器面は刷毛目状工具による整形が施されている。13は壺形土器の口縁部である。器面は内外ともに刷毛目による整形が施されている。

第25号住居址（O－16グリッド）（第33図）

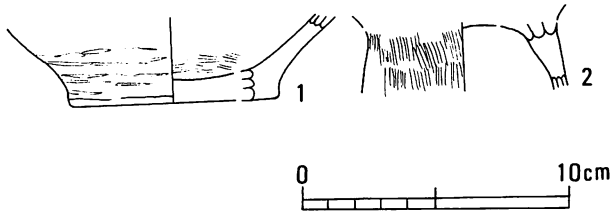
位置　遺跡の東部に分布する住居址群のひとつで、第２号方形周溝墓の台状部東端に位置している。竪穴住居の掘り込みは、遺構確認面から床までの壁の深さが、30㎝程度である。本遺構もまた試掘坑内より発見されたものである。規模は不明である。本住居址に関しては、南壁部分のみを確認したにすぎず、施設などについては全く不明である。床面は貼床が確認されたが、軟弱である。遺構の東側は第24号住居址によって切られている。土器などの遺物の出土はなかった。



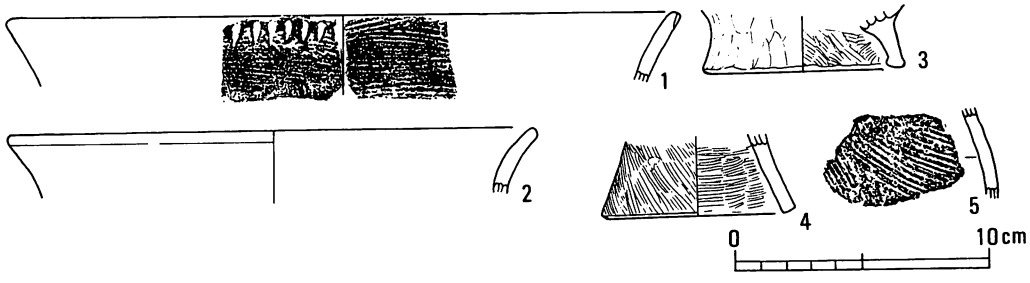
第33図　第２号方形周溝墓東西トレンチ東側遺構図（第21～26号住居址）



第34図　第22号住居址出土遺物



第35図　第26号住居址出土遺物



第36図　第23号住居址出土遺物

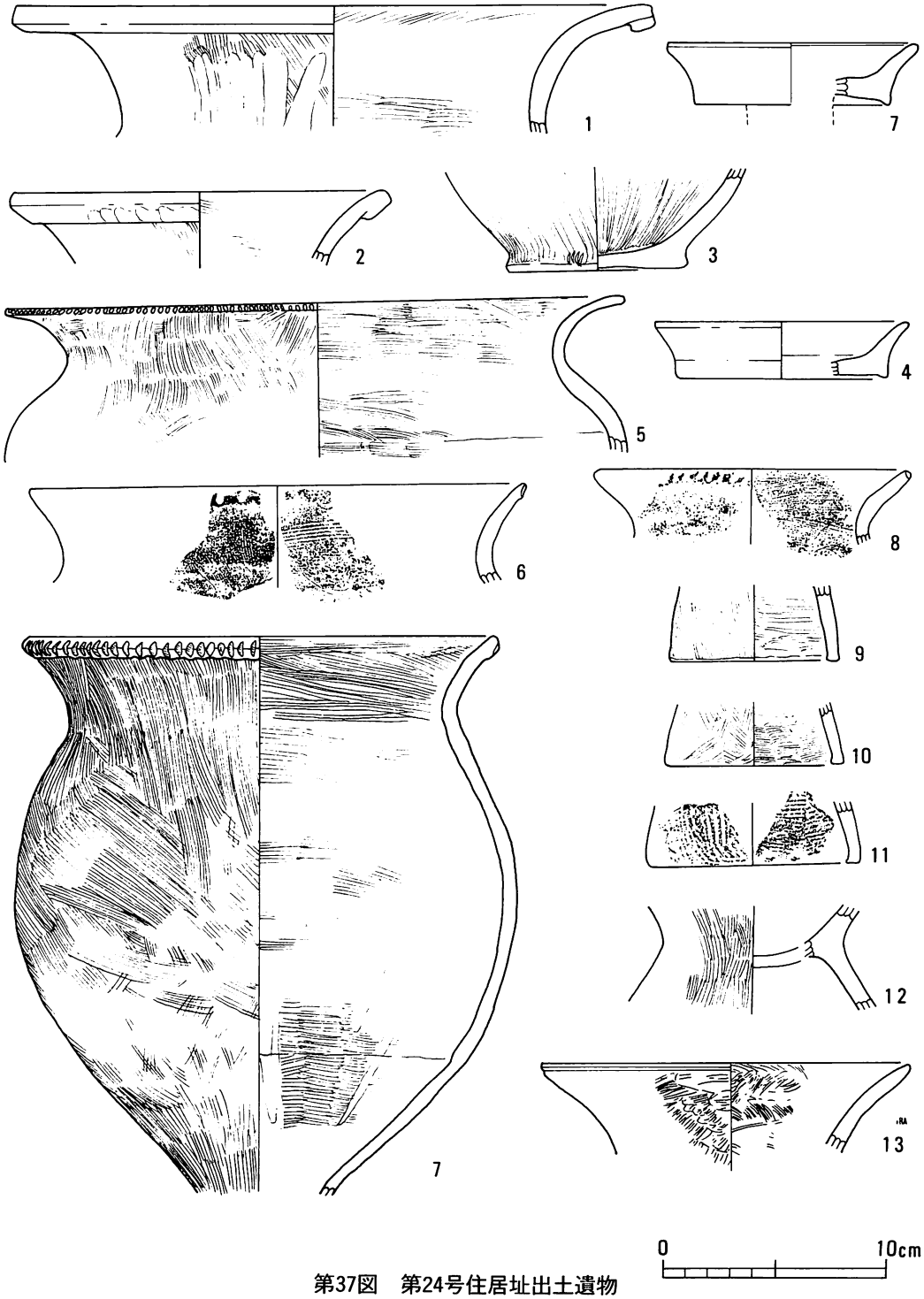
第26号住居址（O－16グリッド）（第33・35図）

位置　遺跡の東部に分布する住居址群のひとつで、第２号方形周溝墓の台状部東端に位置している。竪穴住居の掘り込みは、遺構確認面から床までの壁の深さが、20㎝程度である。本遺構もまた試掘坑内より発見されたものである。規模は不明である。本住居址に関しては、北壁部分のみを確認したにすぎず、施設などについては一切明らかではない。床面は軟弱である。土器などの遺物は少なかった。覆土について観察してみると、第24号住居址と同様に、ロームブロック混入土によって占められているため、意図的に埋め戻した状況が示唆され、第２号方形周溝墓の造営段階では、本住居址は半埋没状況を呈していた可能性が考えられる。

遺物　器形のわかるものは２点のみであった。１は壺形土器の底部である。外面は粗い箆磨き、内部は刷毛目による整形が施されている。２は台付甕の台部である。外面は縦方向の刷毛目による整形が施されている。これらは弥生時代後期に位置づけられるものである。

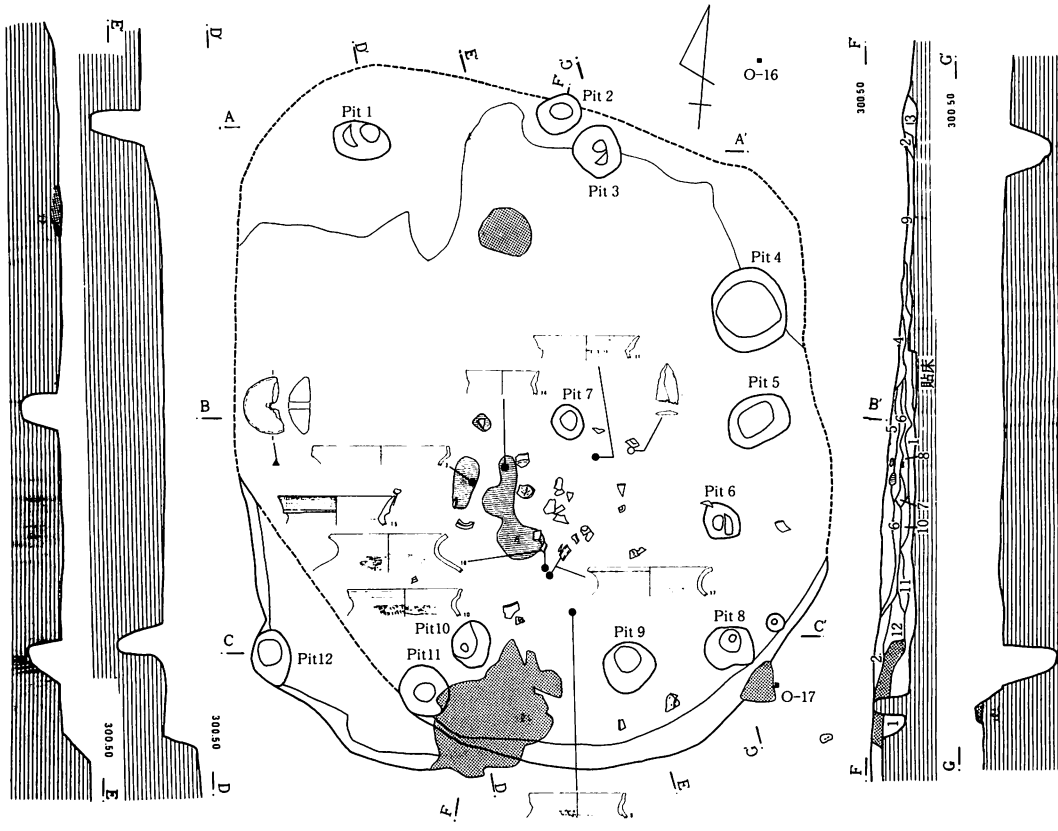
第27号住居址（N・O－16・17グリッド）（第38・39図）

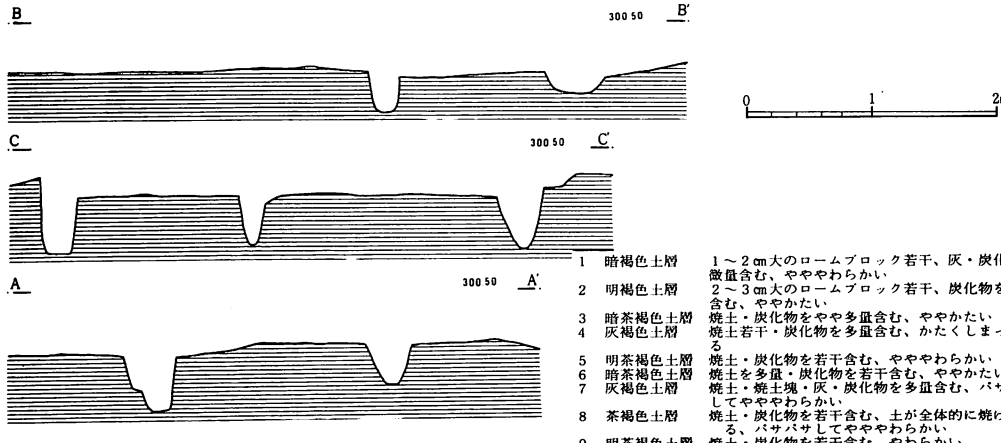
位置　遺跡の東部に分布する住居址群のひとつで、第２号方形周溝墓の台状部のほぼ中心に位置している。竪穴住居の掘り込みは、斜面部に位置していることから、北側部分に壁の立ち上がりは残っておらず、床面が僅かに確認されたにすぎない。南側部分については、やや深めに残っていた。



第37図　第24号住居址出土遺物

形態・規模　この遺構は不整楕円形を呈しており、主軸はN－24°－Wで、ほぼ南北方向に向いている。残っている床面からの推定で、主軸方向の長径は5.50m、短径は4.80m程度の規模を測る。遺構確認面から床までの壁の深さは、東壁13cm、南壁28cmである。炉か否かは不明であるが、

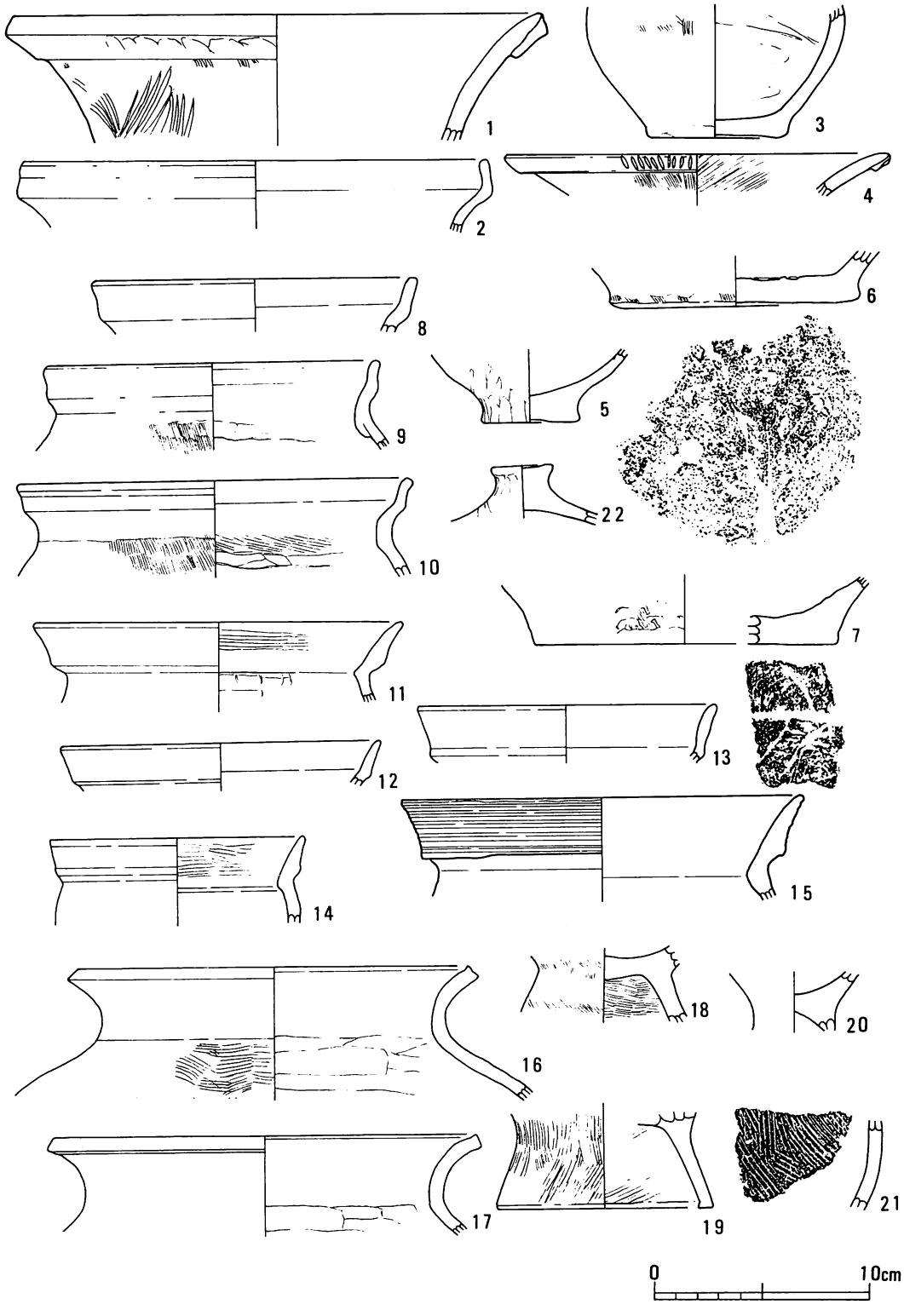




1	暗褐色土層	1～2㎝大のロームブロック若干、灰・炭化物を微量含む、ややわらかい
2	明褐色土層	2～3㎝大のロームブロック若干、炭化物を微量含む、ややかたい
3	暗茶褐色土層	焼土・炭化物をやや多量含む、ややかたい
4	灰褐色土層	焼土若干・炭化物を多量含む、かたくしまっている
5	明茶褐色土層	焼土・炭化物を若干含む、ややわらかい
6	暗茶褐色土層	焼土を多量・炭化物を若干含む、ややかたい
7	灰褐色土層	焼土・焼土塊・灰・炭化物を多量含む、パサパサしてややわらかい
8	茶褐色土層	焼土・炭化物を若干含む、土が全体的に焼けている、パサパサしてややわらかい
9	明茶褐色土層	焼土・炭化物を若干含む、やわらかい
10	茶黒褐色土層	焼土・炭化物を若干含む、やわらかい
11	暗茶褐色土層	焼土・炭化物を若干含む、やわらかい
12	明茶褐色土層	焼土多量、炭化物を若干含む、ややわらかい

第38図　第27号住居址

中央北側に偏した部分で焼土が認められる。範囲は南北38㎝、東西45㎝を測る。柱穴と思われるものは13本確認されているが、この内Pit 1・3・8・10は主柱穴と考えられる。Pit12は本遺構の拡張時の所産と思われる。Pit 1 は径30×37㎝、深さ45㎝。Pit 3 は径43×33㎝、深さ35㎝。Pi



第39図　第27号住居址出土遺物

t８は径35×40㎝、深さ43㎝。Pit10は径40㎝、深さ35㎝。Pit12は径45×32㎝、深さ48㎝を測る。床面は北側部分の削平された部分を除いて、ほぼ良好な状態であった。なお、床面上及び覆土内には、多量の灰と炭化物が中央付近を中心に分布していた。この灰の中には、稲系統のものと思われる「籾」状炭化物がまとまりをもって混入している状況が肉眼で確認できた。この灰を多く含んだ覆土からは、北陸系の土器を模倣した甕形土器の破片が数多く含まれていた。南側壁部分では、多量の焼土と焼土塊が集中して分布していた。

本遺構の場合、位置的な関係や出土遺物、覆土の状態から判断すると、単純に住居址としてかたずけられない点が多く存在する。当初は覆土の状況などから、焼失家屋であろうと考えていたが、どうもこれらの一風変わった諸条件から、祭祀的な色彩が濃いものではないかと思われる。

遺物　本住居址から出土した土器の中には、北陸系の土器を模倣したものが多く見られ、周辺に存在する他の遺構とはかなり異質の様相を呈するものであった。その出土状況については、第38図に示したとおりである。

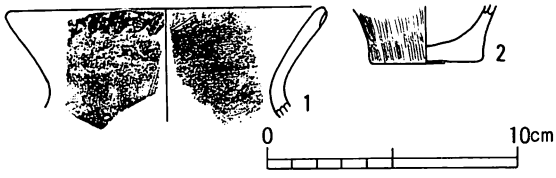
１・２・４は壺形土器の口縁部である。１は粘土を貼り付けた二重口縁となっており、口縁部は縦方向の刷毛目によって一度調整された後、箆磨きによって整形されている。２は《く》の字に内傾ぎみに立ち上がっている。４は口唇部に刻み目が施されている。内外面は共に縦方向の刷毛目によって整形されている。６・７は壺形土器の底部である。底には木葉痕がある。８～17は北陸系土器の模倣品である。８～15はいわゆる５の字状の有段口縁を持つ甕形土器の口縁部である。15については他の土器に見られる赤橙色や褐色の色調とは異なり、灰白色系統の色調をしている。16・17は口縁部が丸く外反し、口端部は外側方向に面を残し、僅かにつまみ上げられている。18～21は台付甕の破片である。18～19は台部で外面は縦方向の刷毛整形、内面は横方向の刷毛整形が施されている。21は胴部で縦方向の刷毛整形が施されている。22は蓋形土器のつまみ部分である。外面は箆削りによって整形が施されている。

この他土器以外のものとしては、第64図（第３表）７の土製紡錘車がある。これは半分近くが欠損した状態で発見された。第61図（第１表）５は磨製鏃である。石材には緑泥片岩を用いており、あまりしっかりしたものではない。柄の装着部分が欠損している。

第28号住居址（Ｎ・Ｏ－17グリッド）（第４・40図）

位置　第２号方形周溝墓の台状部に存在する第27号住居址の南東側に位置している。

形態・規模　床面を確認したのみで、掘り込みや規模については不明である。施設については、焼土が散乱していたため、地床炉が存在することが明らかとなったが、その規模については不明である。他の施設については、保存を前提とした調査であるため、掘り下げることをしなかったので、確認することはできなかった。覆土については、ほとんど残っていなかった。土器などの遺物は極めて少なかった。



第40図　第28号住居址出土遺物

遺物　器形のわかるものは2点のみであった。1は壺形土器の口縁部である。頸部から口縁部にかけ外彎し、口唇部には刷毛状工具のもので押捺したような刻み目を施す。内外面は撫でによって整形されている。2は壺形土器の底部である。外面には縦方向に刷毛目による整形が施されている。これらは弥生時代後期に位置づけられるものである。

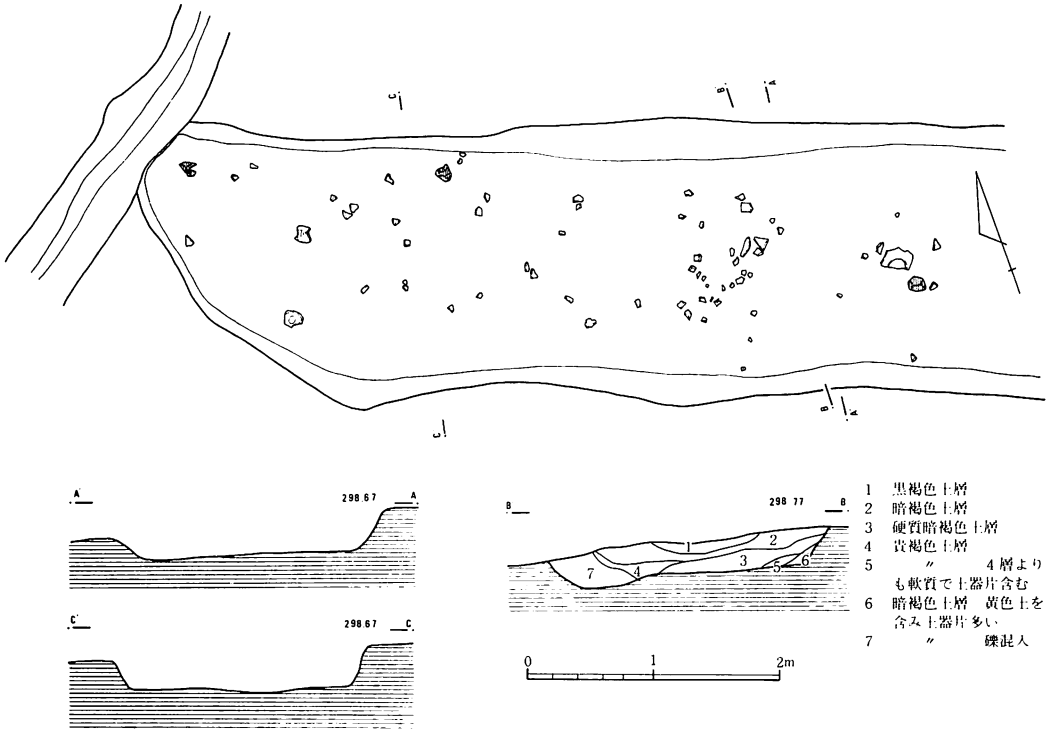
（野代）

第2節　方形周溝墓

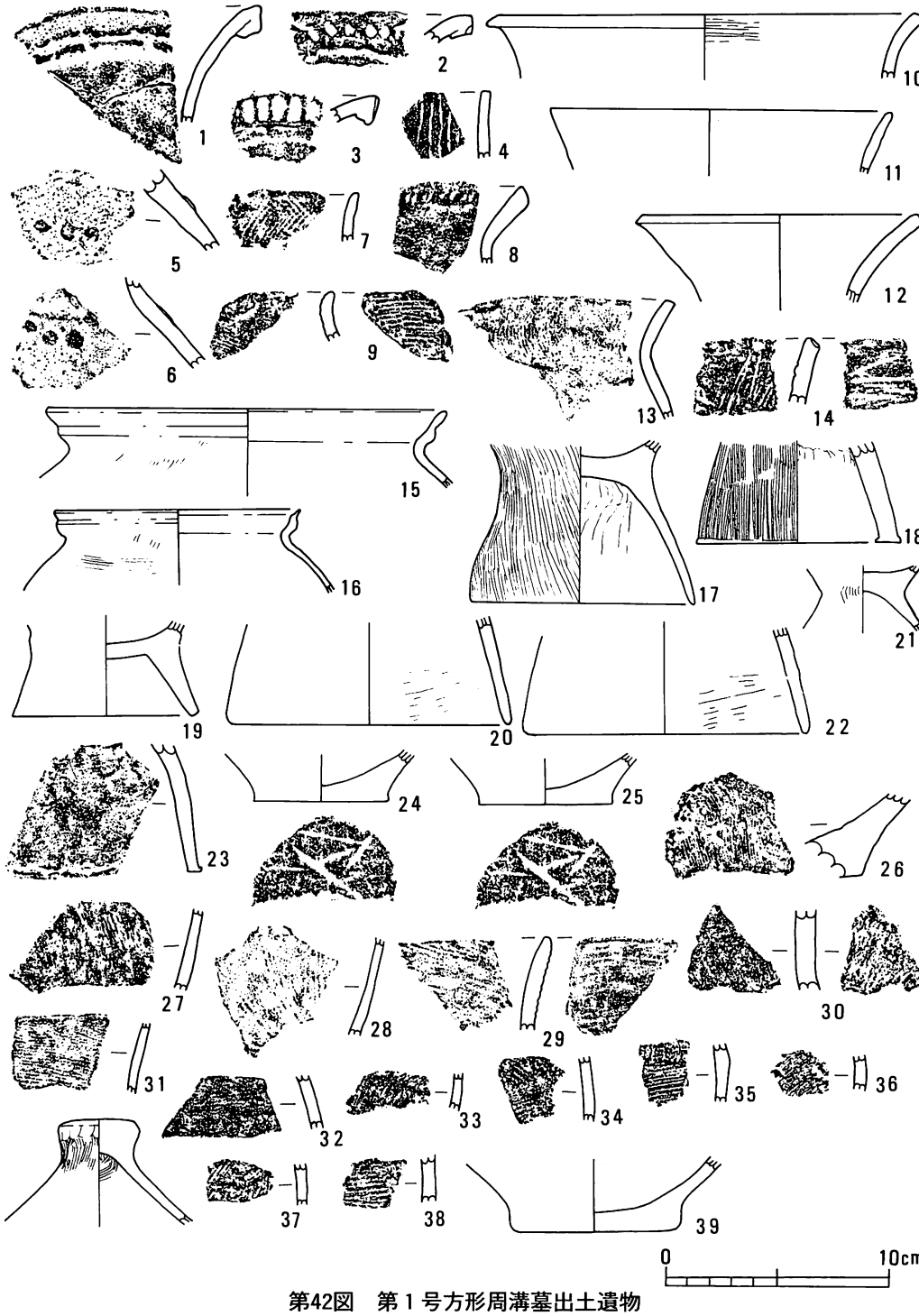
第1号方形周溝墓（第41図）

位置　T～M－9～12グリッドに位置する。周囲には南側に、軸方位が若干異なる第2号方形周溝墓が約5mの距離をおいて存在する。方台部の盛土は認められなかった。

規模・形態　形態は、二隅をブリッジ状に残すタイプであるものと想定され、方台部はほぼ方形を呈する。外周を含めたプランは、東側を現状保存する関係上、完掘成しえなかったことと、北側を第17号溝によって切られているため、はっきりしたことは言えないが、北溝と南溝は整っていない。北西－南東に長軸を示すN－60°－Wを指す。方台部の規模は、主軸方向の長径が推定で11.40m、短径は12.50mを測る。溝はブリッジを除く方台部下を巡る。溝幅は2.50m～1.10m



第41図　第1号方形周溝墓（第11号溝）



第42図　第１号方形周溝墓出土遺物

で、方台部側はやや急に立ち上がるが、北側は緩やかに立ち上がる。深さ30㎝前後である。層位的にはレンズ状堆積をなしている。ブリッジ部分の規模については他の遺構との切り合いなどで、把握することはできない。

遺構の時期に関しては、古墳時代前期初頭段階に位置づけられるものである。　　（野代）

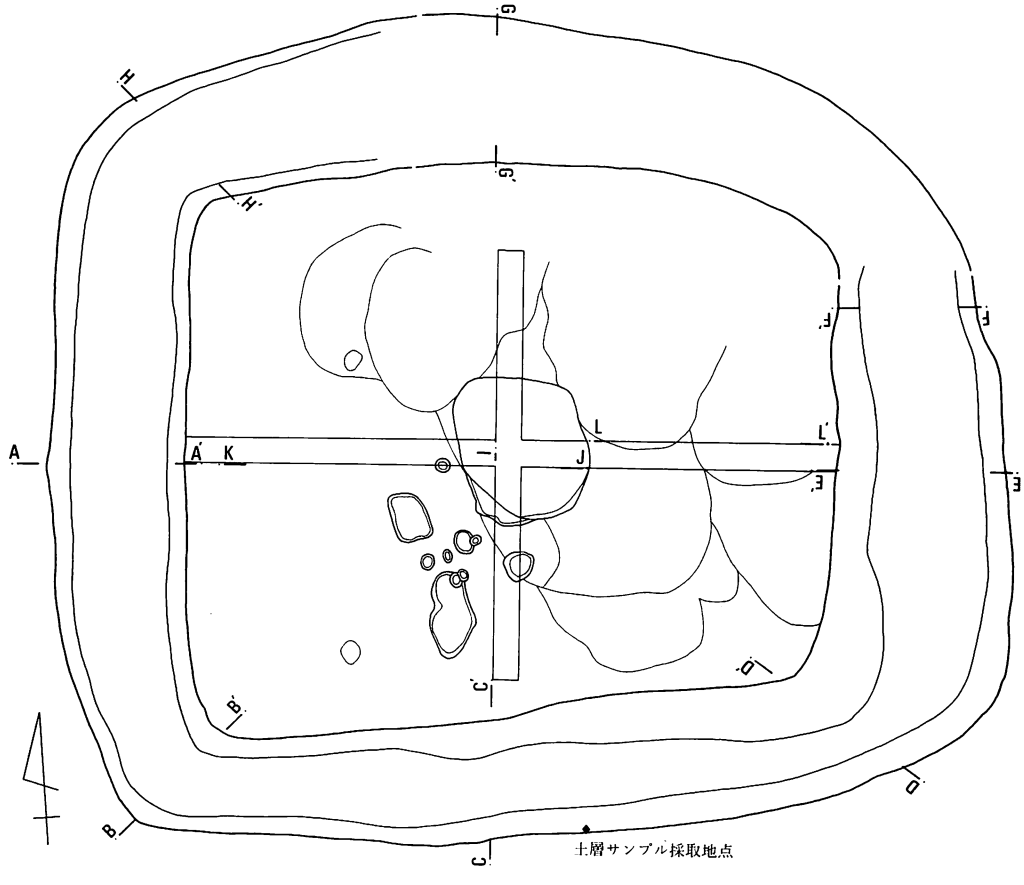
第１号方形周溝墓出土遺物（第42図）

本遺構の南溝より出土した遺物は少なく、１・11・35が主要なものである。これらは、壺形・甕形土器の破片で、弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられるものである。　　（野代）

第２号方形周溝墓（第43～49図）

位置　K～R－13～19グリッドに位置する。本遺構は極めて大きな規模を持つものであったので、より詳細な調査を行うために、センターを基準として北西部から左回りにA・B・C…Hと区画を設定して調査を行った。周囲には若干主軸を異にする第１号方形周溝墓と弥生時代後期の住居群が存在する。方台部の盛土は僅かに認められる部分が存在した。地形的には、298.40m～301.00mのコンターライン上にあり、舌状台地のほぼ中央部分に占地しており、遺跡の東寄りに存在している。形態はブリッジが存在しない溝が全周するタイプであるものと推定される。

規模・形態　方台部の形態は、東西に長軸を持つやや整った台形に近い長方形を呈するものであ



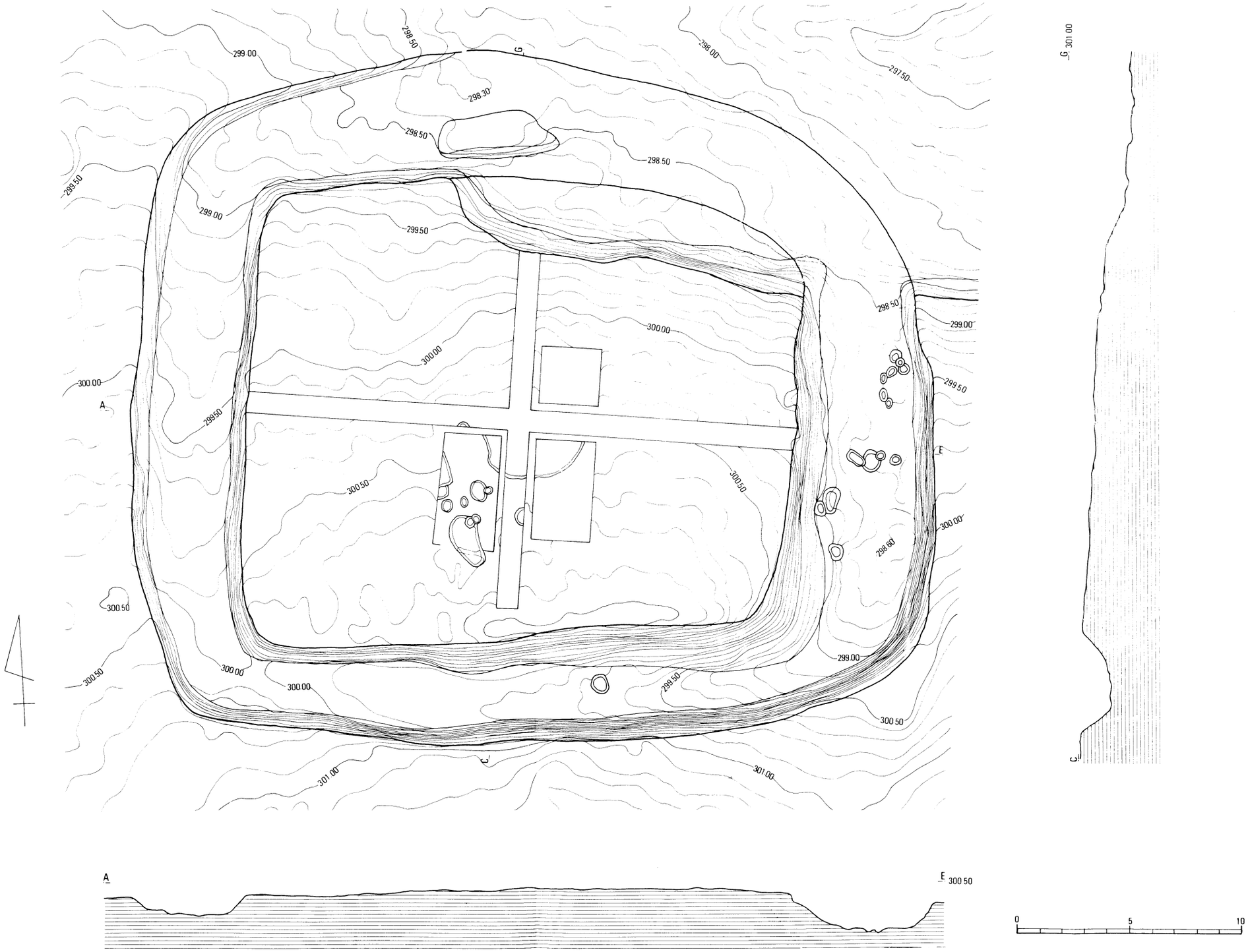
第43図　第２号方形周溝墓セクションポイント配置図

る。長軸の示す方位はN－80°－Wを指す。方台部の規模は東辺から右回りに数値を計測すると、推定17m、22m、20m、25mとなる。外周を含めた規模は、東西36.0m、南北推定31.4mを測る。

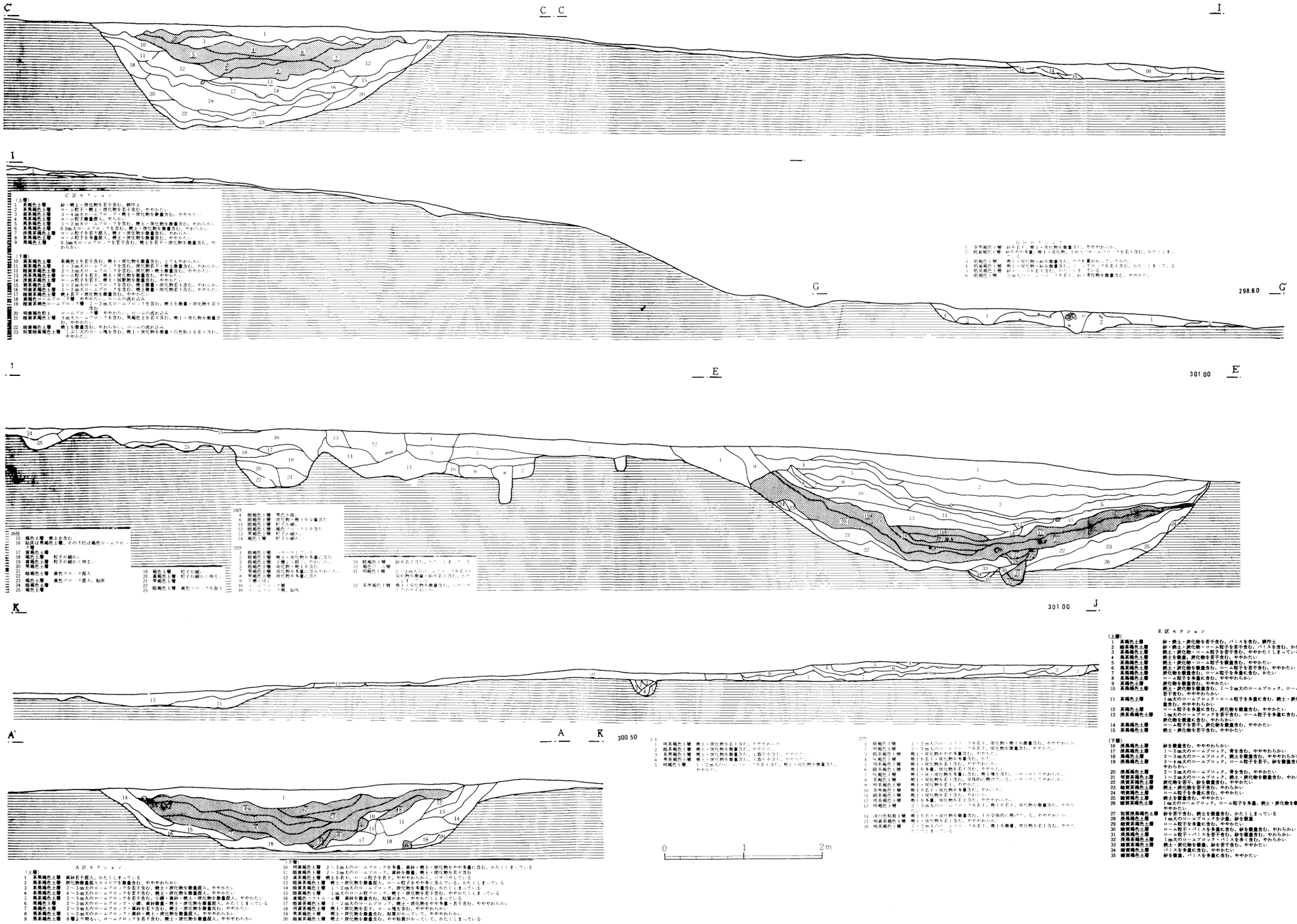
造り出し状の突出部は、存在していた可能性も示唆されるが、北側部分の開墾時の土地区画で破壊されているため不明である。

周溝は、方台部の周囲を巡る。斜面部に位置しているため、南側が深く、北側が浅い。溝の規模は、A区が幅5.14m、深さ0.84m。B区は幅4.60m、深さ0.80m。C区は幅4.58m、深さ1.34m。D区は幅6.20m、深さ1.68m、コーナー付近では幅7.20mを測り最長である。E区は幅6.20m、深さ0.30m。H区は幅4.90m、深さ0.62mを測る。溝の断面は、方台部の上端から直立ぎみに掘り込まれ、溝底へは開きが大きく緩やかな傾斜を持つ。C区の内周側で部分的ではあるが、白色粘土によって造られたと思われるテラス状とも階段状のものとも受け取れるものが確認できた。覆土はレンズ状堆積を示し、溝底部には方台部の盛土や壁面が崩れて堆積したと思われる茶褐色系統の土層があり、かなり厚く堆積している。その直上に黒褐色系統の土層が認められ、この土層中からは古墳時代中葉段階以降の遺物が流入していることが確認されている。この黒褐色系統より上の土層からは奈良・平安時代以降の遺物の流入が認められ、長期にわたって造営当初の様相をとどめていたことを伺わせるものである。

周溝内土坑は全部で19基確認されている。出土した土器破片の大部分のものは、遺構との関連性が見られないため図化しなかった。第１号土坑（第46図）は、A区コーナー付近に存在する。形態は不整形を呈している。規模は長径1.30m、短径0.70m、掘り込みは0.15mを測る。遺物は本遺構内からミニチュア（小型）土器の高坏の脚部（第60図８）が出土した。また、この北側付近から土製勾玉（第64図１・３）が２点出土している。第２号土坑（第46図）は西溝のほぼ中央に位置している。形態は不整円形を呈する。規模は長径2.00m、短径1.80m、掘り込みは浅い。遺物は土器の小破片のほか、本遺構の南西部付近から勾玉（第64図２）が１点出土している。第３号土坑（第47図）は、D区のほぼ中央に位置する。形態はほぼ円形を呈している。規模は長径0.82m、短径0.70m、掘り込みは最深部で0.60mを測る。遺構の断面形態は、柱穴状を呈している。遺物は土器の小破片が出土したのみである。第４号土坑（第49図）は、E区のコーナー付近に位置する。形態は不整楕円形を呈している。規模は長径0.63m、短径0.55m、掘り込みは0.27mを測る。遺構の断面形態は、柱穴状を呈している。遺物は土器の小破片が出土したのみである。第５号土坑（第47図）は、E区のコーナー北寄り付近に位置する。形態は不整形を呈している。規模は長径1.08m、短径0.60m、掘り込みは0.33mを測る。坑底は、西側に向かってオーバーハングする。土層断面の観察から第６号土坑に切られていることがわかる。遺物は10数点の土器破片が出土したのみである。第６号土坑（第47図）は、第５号土坑の西側に隣接して存在する。形態は不整形を呈している。規模は長径0.82m、短径0.60m、掘り込みは0.25mを測る。遺物は10数点の土器破片が出土したに過ぎないが、本遺構の周辺からは多くの金属器・石製品・土製品が出土している。これらの遺物は、本遺構などとの関連性を考える上で大変興味深いものである。第７号土坑（第47図）は、東溝のほぼ中央に位置している。形態は楕円形を呈している。規模は長径0.42m、短径0.33m、掘り込みは0.15mを測る。坑底は平坦で、急に立ち上がっている。遺

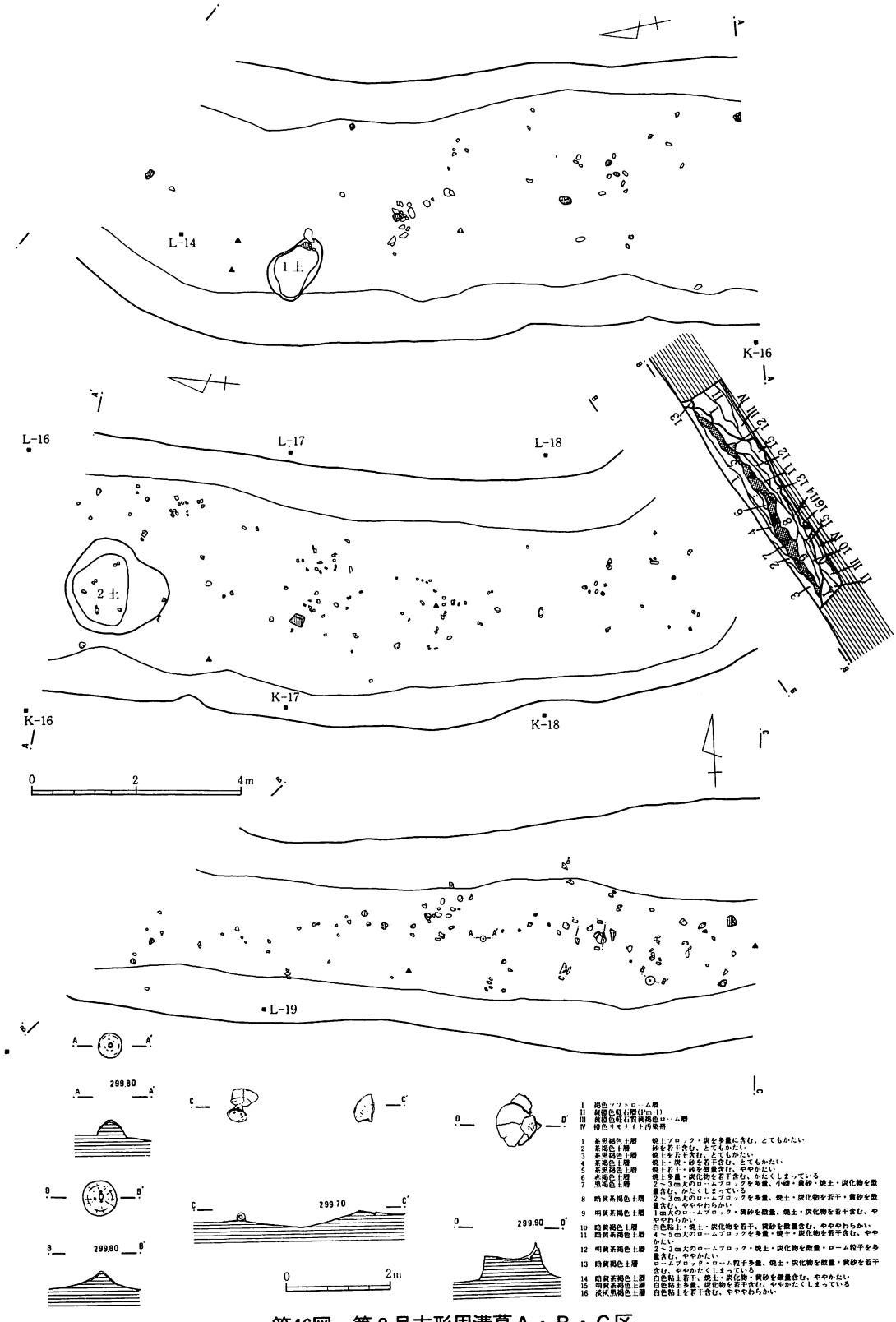


第44図　第２号方形周溝墓地形図

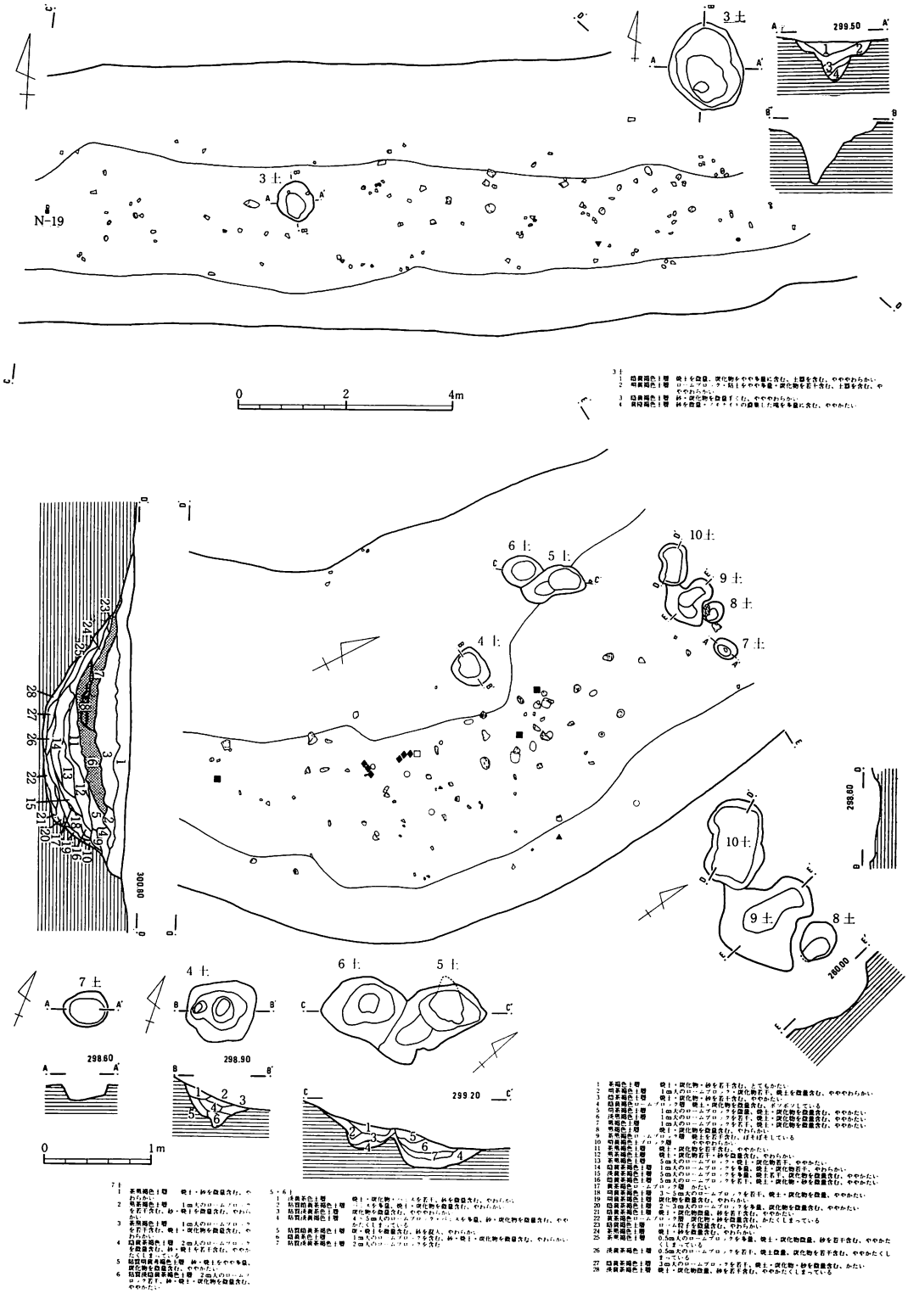


第45図　第２号方形周溝墓セクション図

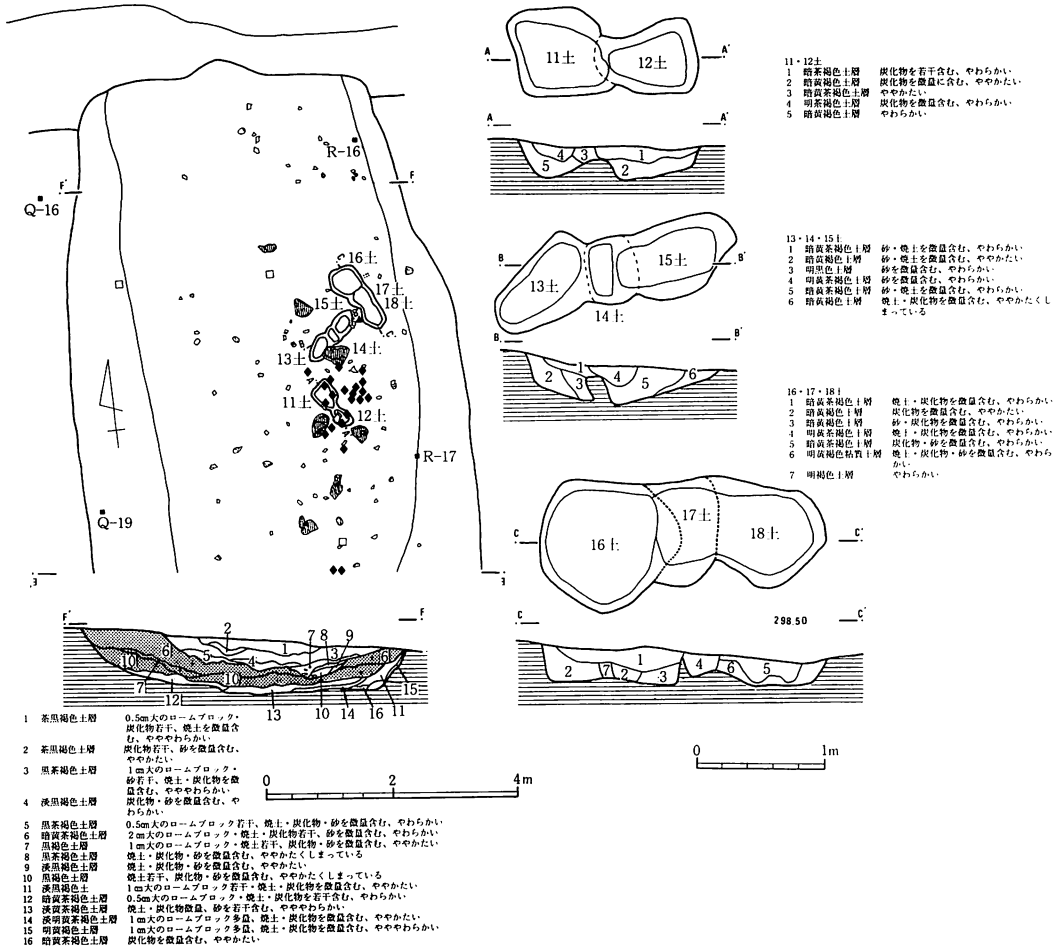
物は土器の小破片が出土したのみである。第８号土坑（第47図）は、東溝のほぼ中央に位置している。形態は不整楕円形を呈している。規模は長径0.37m、短径0.34m、掘り込みは土層断面から0.22mを測ることが確認できる。土層断面を観察してみると、盛土の極めて初期段階の崩土と思われる第一次堆積土から掘り込んでいることがわかる。また、隣接する第９号土坑を切って掘り込まれていることがわかる。壁は南側がオーバーハングする。遺物は土器の小破片が出土したのみである。第９号土坑（第47図）は、東溝の中央付近に位置している。形態は不整形である。規模は長径1.00m、短径0.95m、掘り込みは土層断面から0.32mを測ることが確認できる。本遺構の土層断面を観察してみると、やはり第一次堆積土から掘り込んでいることがわかる。また、このすぐ上層部分にも、掘り込まれた状況が認められる。本遺構では、ほぼ同一地点において、時期を前後して二回以上にわたる土坑の構築状況が確認できた。遺物は土器破片が数点と、覆土から馬の歯が断片的ではあるが出土している。第10号土坑（第47図）は、東溝のほぼ中央に位置している。形態は不整隅丸長方形である。規模は長径0.80m、短径0.50m、掘り込みは0.10mを測る。遺物は数点の土器破片が出土したが、本遺構の性格は土層断面から判断すると、造営段階の掘り方の可能性が濃厚である。第11～18号土坑（第48図）は東溝のＦ区に存在している。形態は方形に近いものが多い。規模は第11号土坑が、0.80×0.66×0.22m、第12号土坑は0.82×0.58×0.27m、第13号土坑は0.95×0.60×0.26m、第14号土坑は0.53×0.42×0.15m、第15号土坑は1.05×0.60×0.32m、第16号土坑は1.14×1.04×0.27m、第17号土坑は0.83×0.32×0.18m、第18号土坑は1.15×0.80×0.22mを測る。ただし、切り合っているものについては推定値である。遺物については、いずれの土坑も土器の小破片が出土したにすぎない。覆土には焼土・炭化物・砂などを含んでいるが、黒褐色系統の土の混入は認められないため、本周溝墓造営段階に極めて近い時期に造られたものと考えられる。第19号土坑（第49図）は、北溝のほぼ中央付近に位置している。形態はほぼ円形を呈している。規模は長径0.62m、短径0.50m、掘り込みは0.28mを測る。遺物については、礫・土器の小破片が出土したのみである。覆土にはやはり焼土・炭化物を含んでいる。これも、土層断面を観察すると、盛土と思われる崩土が溝底に堆積したところを掘り込んで造られていることがわかる。以上が周溝内で確認された土坑の概要である。現在、これらの溝中土坑の性格に関しては、埋葬施設として考えられているものがほとんどである。しかし本遺構より確認されたものについては、規模が小さく、形態も不規則で、遺物もほとんど伴っていないことから周溝内主体部とは考えにくいものである。これらの土坑の分布は、溝の中央付近に集中して造られていることがわかる。19基の土坑の分布の内訳は、西溝２基、南溝１基、北溝１基、東溝15基といった具合である。土坑の性格に関しては福田　聖氏[1)]によって研究動向がまとめられており、これらの論文を参考にして本遺構発見の土坑に関する性格を考えてみる。まず土坑の掘り込まれた状況からは三分類することができる。第一に墓の造営段階で荒掘りされもので、第10号土坑などが該当する。第二に墓の造営直後に祭祀的な意味で営まれた、墓坑として位置づけられるもので、これは本遺構に該当するものはない。第三には、ある一定期間後に祭祀的な意味で営まれたものである。本遺構の大部分のものがこれに該当するものと考えられる。顕著な例としては、第一次堆積土から掘り込んでいることが確認できた第８・９号土坑である。第９



第46図　第２号方形周溝墓Ａ・Ｂ・Ｃ区



第47図　第２号方形周溝墓Ｄ・Ｅ区



第48図　第２号方形周溝墓Ｆ・Ｇ区

号土坑では、馬の歯を伴っている点で特筆すべき事項である。これらの祭祀的な意味合いとしては、葬送儀礼・追善供養として殉葬したものとも考えられる。

これらの土坑および周溝の覆土の内容物については、共に焼土・炭化物を含んでいるおり、火を用いた儀式が行われた可能性が示唆される。Ｅ・Ｆ区（第47・48図）では第一次堆積土内とその上層付近からも馬の歯が出土しており、これらの性格についても土坑が造られた要因として、追葬された可能性が考えられる。古墳時代の馬の出土例については乙益重隆氏[2]らによって報告されているが、近年では藤崎芳樹氏[3]によって馬歯・馬骨出土土壙が集成されている。この後者の内容から古墳と土壙との位置的関係について見てみると、二系統に大別することができる。一つは周溝内（溝中土坑）である。もう一つは古墳周辺に存在していることである。本遺構の場合は、言わずとも知れたことであるが前者にあたる。また骨の遺存状態についてもほぼ馬一頭分が出土したものと、体の一部のみ出土したものがある。本遺構の例ではエナメル質の歯のみ出土した訳で、土坑の規模・形態共に不明で、伴出遺物もなかったため結果的には埋葬状態については

1　茶黒褐色土　焼土・炭化物・砂を若干含む、かたくしまっている
2　黒茶褐色土　2㎝大のロームブロックを若干、焼土・炭化物・砂を若干含む、かたくしまっている
3　粘質黒褐色土　1㎝大のロームブロックを少量、焼土・炭化物若干・砂を微量含む、かたくしまっている
4　粘質黒茶褐色土　1㎝大のロームブロック・焼土・炭化物・砂を若干含む、かたくしまっている
5　粘質黒褐色土　1㎝大のロームブロック・焼土・炭化物・砂・軽石を微量含む、かたくしまっている
6　粘質淡黒褐色土　焼土・炭化物・砂・軽石を若干含む、かたくしまっている
7　黒茶褐色土　1㎝大のロームブロック・焼土・炭化物・砂を若干含む、とてもかたくしまっている
8　暗茶褐色土　焼土・炭化物・砂を微量含む、とてもかたくしまっている
9　粘質明茶褐色土　炭化物・砂を若干含む、ややかたい

第49図　第2号方形周溝墓G・H区

よく解らないのが現実である。しかし、他の例を見てみるとやはり歯のみ出土する例が圧倒的に多く、結果的に腐食しにくい歯の部分のみが残ったものと考えられ、埋葬当初は一頭分存在していたものと想定されるが、頭部のみ埋葬された可能性も捨て切れない。本遺構では歯の集中地点が二ヵ所にわたっているため、二頭以上の埋葬が考えられる。また埋葬された時期については、周溝の1/3程度埋没後に行われており、そういった例に関しては鳥取県長瀬高浜七号墳[4]に認められるだけである。馬骨の出土例は西日本とくに畿内地方で多く認められ、4世紀末～5世紀にかけて他の地域に先駆けて出現したとされている[5]。本遺構の時期は4世紀後葉段階と考えられ、周溝の埋没段階に営まれても、遺物と層位から判断して5世紀以降に下ることはとても考えにくい。このことから従来説かれている馬の分布域を甲斐国に広げただけではなく、古墳時代の馬としては年代的にも、その随葬例としても最古級であろう。時期は異なるが、伊皿子貝塚の弥生時代後期に属する第2号方形周溝墓の溝内Pitからは、牛頭骨の動物骨随葬例が見出されており、また畿内ではシカなどの下顎骨の随葬例も認められている。これらの確認事例からも弥生時代から周溝内土坑と動物骨の随葬の関連性が認められ、当時の祭祀的儀礼行為の一端を考える上で、大変興味深い貴重な資料を提供してくれた。（野代）

註

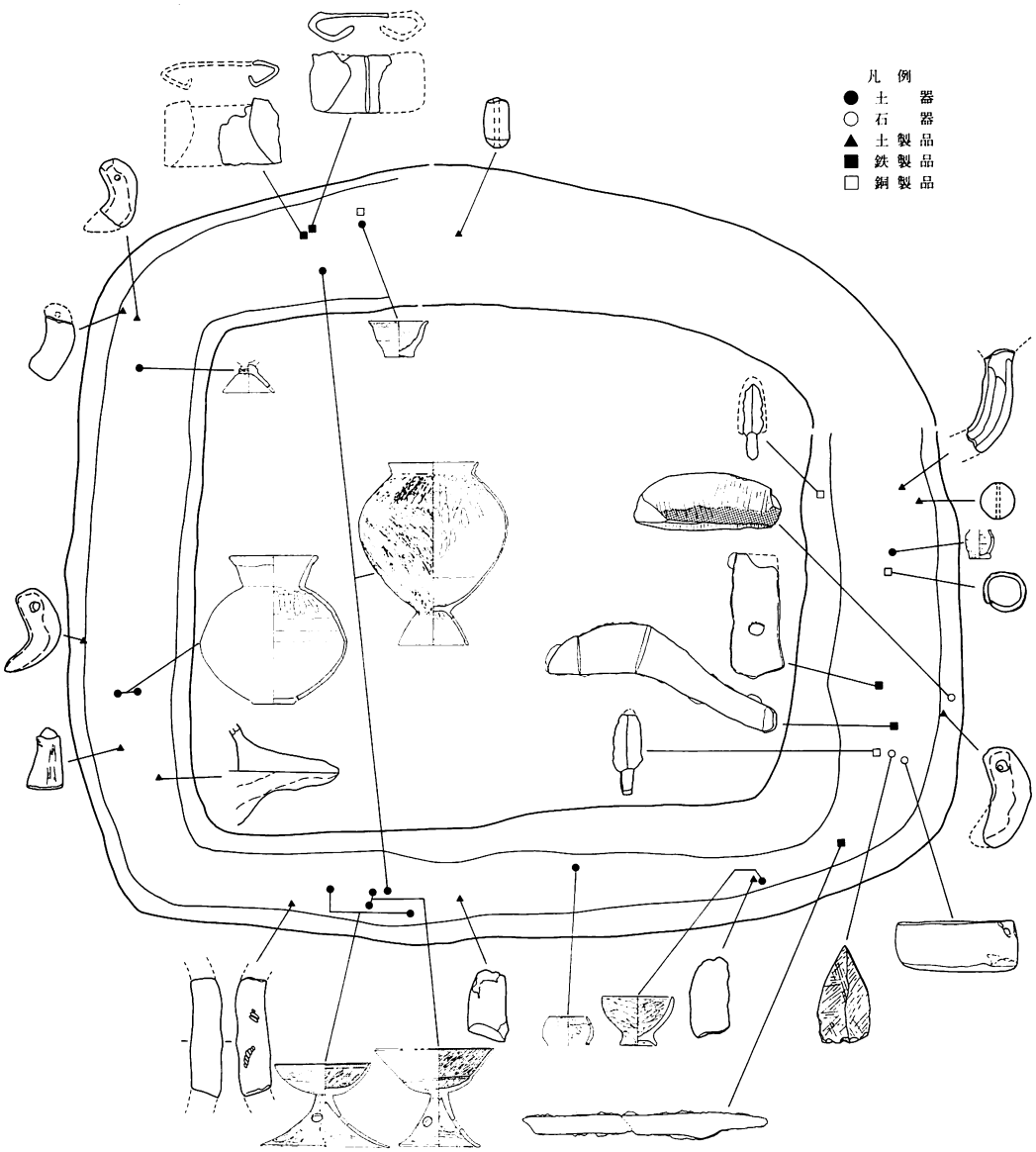
1）福田　聖　「溝中土坑小考」『研究紀要』8号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991
2）乙益重隆　「馬の殉葬について」『古城横穴群』　熊本県教育委員会　1985
3）藤崎芳樹　「31号墳出土の馬について」『佐倉市大作遺跡ー佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶー』　千葉県埋蔵文化財センター　1990
4）㈶鳥取県教育文化財団　『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ』　1983
5）松井　章　「馬の殉葬」『古墳時代の研究』第4巻　雄山閣　1991

第2号方形周溝墓出土遺物（第50～65図）

土器（第51～第60図）

第51図は壺形土器である。これらは主に弥生時代後期に位置づけられるものと考えられ、周辺に散在する住居址などから流入したものと思われる。出土地点については周溝内全域を対象としている。1～31は口縁部、32・33は底部である。大部分の口縁部破片は、緩やかに外反しながら大きく開くタイプのものである。3・6・7・9は幅の狭い折り返しを、他のものはやや幅の広い折り返し口縁を持っている。9については外面に線刻が格子状に施されている。5・11・12・15・17・22・26は口唇部に刻み目が施されている。21は口唇部に径2㎜大の貫通孔が施されている。16・34・35は3～5本の棒状貼付文が施されている。25は内面の地文にＲＬ、ＬＲ、ＲＬの羽状縄文が施され、その上にボタン状貼付文を持つ。31は幅広の複合口縁で内面に段を持つと考えられるが、頸部と口縁部の境の稜は弱い。口縁部の地文には単節ＬＲの縄文地に、ボタン状貼付文が施されている。頸部は刷毛状工具によって整形されているようであるが、保存状態はあまり良くない。32・33は底部破片であるが、32は外面のみ、33は内外面に赤彩塗布されている。

第52図は7を除いて、壺形土器を一括したものである。9～14については古墳時代前期初頭に、



第50図　第２号方形周溝墓主要遺物出土位置図

他のものについては弥生時代後期に位置づけられるものである。出土遺物で弥生時代に位置づけられるものについては、前述同様に周辺の遺構からの流入と考えられる。最初に弥生時代に属するものについて述べることにする。１～３、５については口縁部破片であるが、これらは棒状貼付文を持つものである。４・５は棒状貼付の代わりに、棒状工具によって刻まれた条線によって表現されたものである。７は器台と考えられるが、上部が欠損している。８は口径8.7㎝を測り、器面は刷毛目による調整後、指撫でによって整形されている。16～27は胴部破片である。15は刷毛目による調整後、篦削りによって整形されている。肩部にはボタン状貼付文を持つ。色調は橙色がかった白色で、焼成は良好である。16・17・19～21は櫛描き波状文を施されたものである。

18は６条の条線がヨコ方向に走り、その両サイドは縄文の代わりに、細かい刺突によって羽状に施文されている。27は先の細い棒状工具によって刻まれた細線によって羽状に施文されている。ボタン状の貼付文を持つ。22～26は羽状縄文にボタン状貼付文を持つものである。次に古墳時代に属するものであるが、９は口径12㎝。口縁部が弱く外反し、さらに外側に開いている。内面には緩い段が認められ、稜もしっかりしている。内外面ともに赤彩塗布されている。10・11は口縁部が大きく開き、口唇部で直立する。10は復元径19.4㎝。11は復元径23.6㎝である。13はＢ区から一括出土したものである。口径14.4㎝、復元した器高23.4㎝でやや粗雑な作りである。胴部の中央で潰れたようになっている。折り返し口縁。底部は残存しなかったが、意図的に穿孔されたか否かは不明である。12は口縁部が弱く外反し、さらに外側に開く。復元径は20㎝である。14はコの字状をした口唇部が直立し、ややつまみ上げられている。

第53図は壺形土器の胴上半部ならびに底部を一括したものである。１～41は羽状に施文した縄文地や細い棒状工具によって施文された地に、大小のボタン状の貼付文を施したものである。42～46は底部破片である。42～45は内外面を刷毛目によって整形している。46は底部の立ち上がり部分と内面を刷毛目によって整形している。外面は箆状工具によって削られ、磨かれている。木葉痕が残る。

第54図は甕形土器の口縁部である。これらはすべて口唇部に、刷毛状工具などによる押捺によって刻みがつけられたものである。口縁部の傾きが、大きく開くものとやや急に立ち上がるものとに分けられる。器面は刷毛目による整形が施されている。

第55図も甕形土器である。ただし33については小型壺形土器の底部と思われる。１～15は口唇部に、刷毛状工具などによる押捺によって刻みがつけられたものである。16～30は北陸系土器の模倣品と考えられるものである。出土地点としてはＥ・Ｆ区に集中して認められた。16～24はいわゆる５の字状の有段口縁を持つ甕形土器の口縁部破片である。第27号住居址で確認されたような白色系統の色調をしたものは認められなかったが、焼成は良好である。25・27・28は口縁部がやや大きく開き、口唇部で垂直気味に立ち上がっている。26・29～31は口縁部が丸く外反し、口端部は外側に面を残して、つまみ上げられている。32は緩やかに外反している。肩部は箆削りされ、胴上半部はタテ方向に刷毛目によって整形されている。34は底部。35～37はそれぞれ口縁部で、37は器面に棒状工具によって連続した条線が施されている。

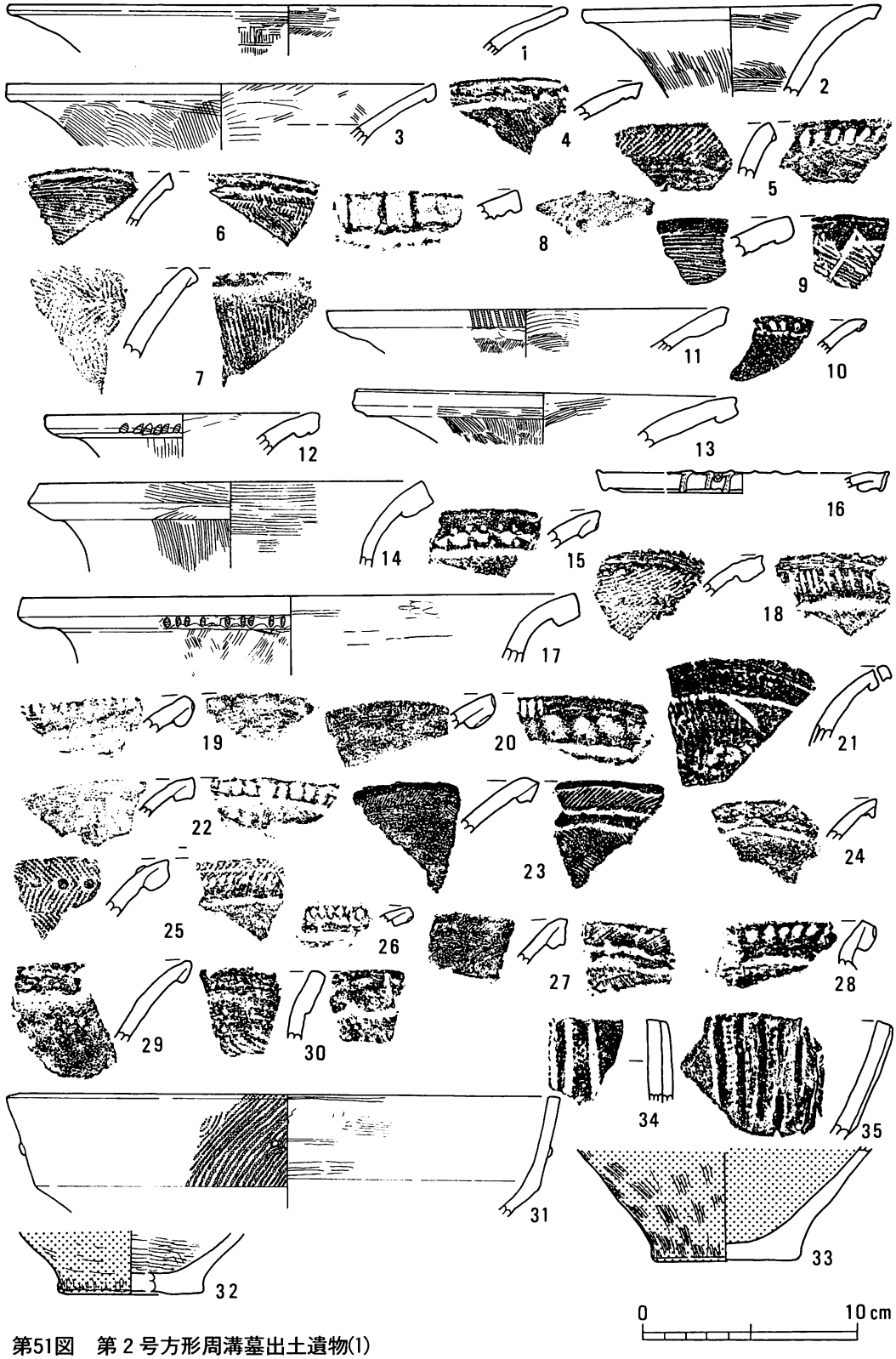
第56図は甕形土器あり、その口縁部を一括した。多くのものは、傾きが大きく開いて外反するもので、若干やや急に立ち上がるものとが混在する。器面は刷毛目による調整が施されている。１～４の復元径は22～24㎝程度である。38は径３㎜大の貫通孔を持っている。40は弱い《く》の字に内反する。

第57図は台付甕を一括したものである。１・２・４はＳ字状口縁台付甕である。詳細な点については後述の第Ⅳ章の考察編を参照して頂きたい。１は口縁部破片で、口唇部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部の中段付近には刺突文が施されている。２は口縁部から肩部にかけての破片である。口唇部は外反気味にほぼ垂直に立ち上がっている。胴部外面にはタテ方向の刷毛目が施され、

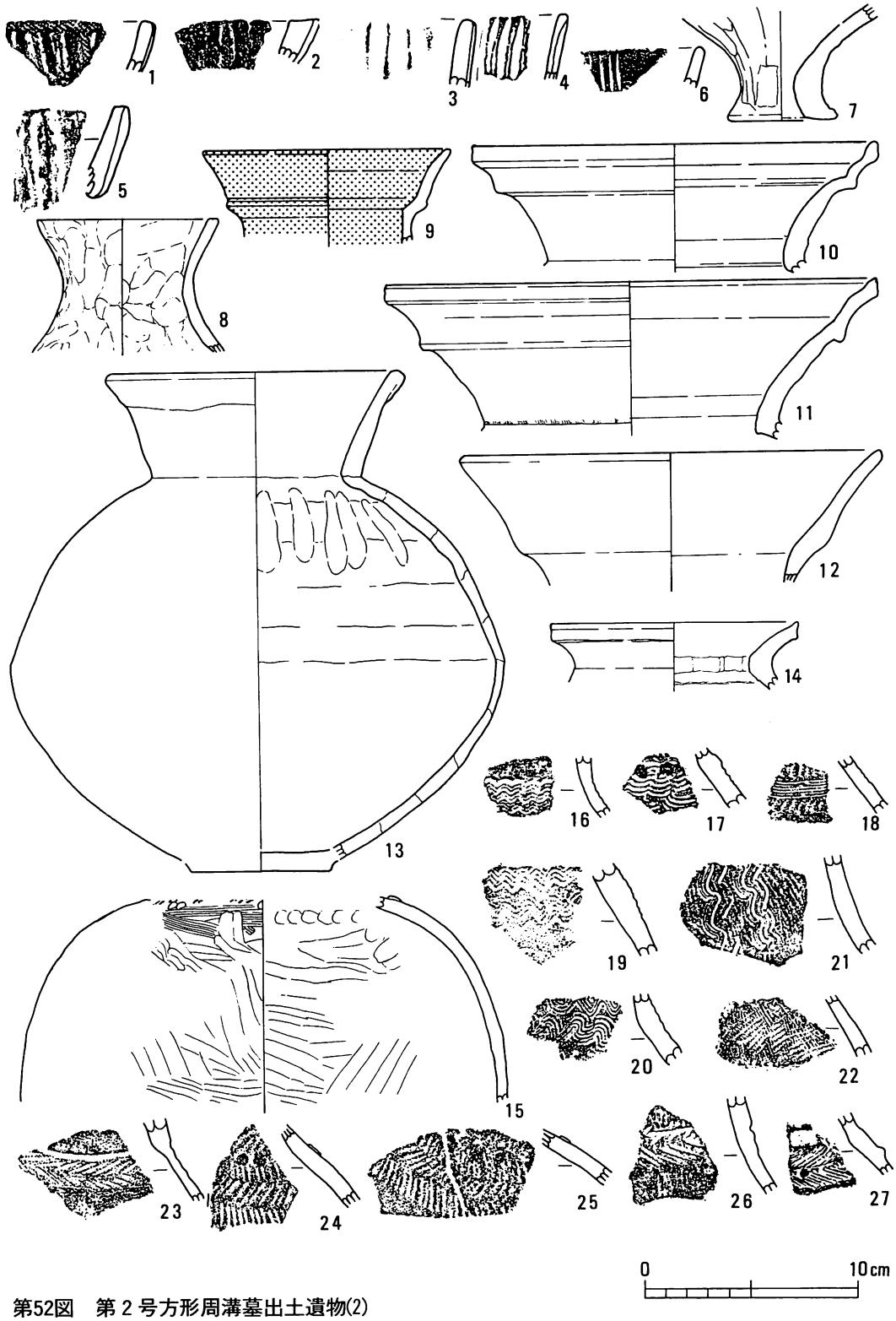
肩部には横位の平行沈線が途切れたりしているが、5段にわたって施されている。内面には微かに刷毛目が残っている。色調は灰白色で、胎土についても明らかに在地系の土器群とは異なった様相を呈している。この他同一個体と考えられる破片資料が3点出土している。4はC区から胴上半部が、D区から胴下半部がそれぞれ出土して、接合できたものである。外面は刷毛目によって整形されている。かなり薄手の土器である。脚部については発見できなかった。3は肩部。5～17、19～26は脚部である。ほとんどのものは内外面ともに刷毛目が施されている。中には刷毛調整後、撫で整形が加えられているものがある。22については内面に輪積み痕が観察できる。18は高坏の脚部と考えられるもので、内外面には指撫でによる整形が施されている。端部で刷毛目がみられる。

第58図は甕ないし壺形土器の底部を一括する。1・2・5・12・13・15・16・18については、底に木葉痕が認められる。器面については刷毛目、指撫で、篦削りなどの痕跡が認められる。

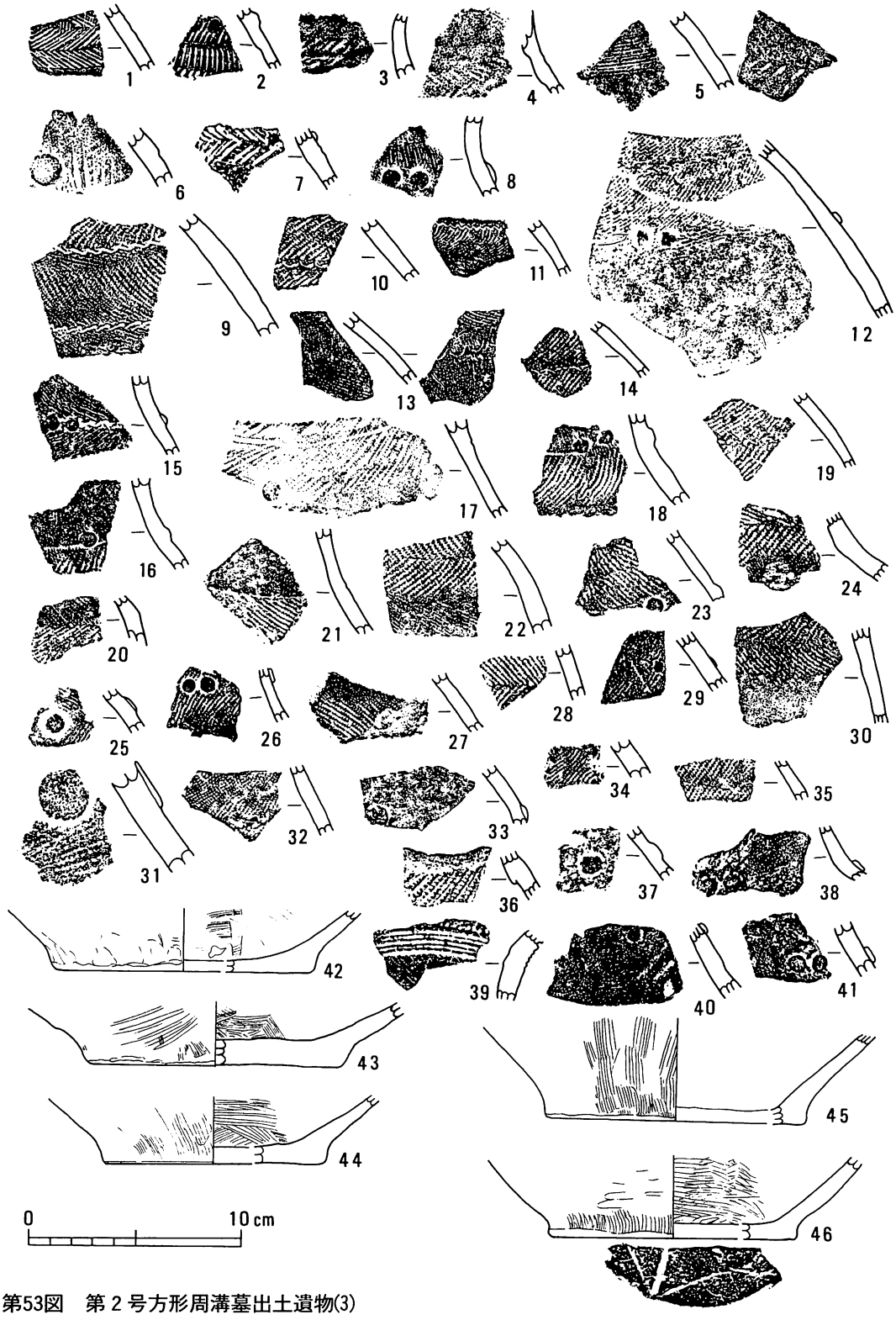
第59図は、鉢、高坏、器台、埦、蓋形土器を一括する。1～4、21は鉢形土器である。1・2は内外面に赤彩塗布されている。3・4は篦削りによってよく磨かれている。5～16、23は高坏形土器で、大部分のものは脚部である。5・6・9・11は脚部で、側面に孔が穿ってあるものである。9についてはかなり大型のものであろう。8は色調が他の赤褐色もしくは赤橙色のものとは異なり、灰白色である。よく磨かれ、焼成は良好であるが、器面に孔は認められない。12・15・16については外面が赤彩塗布されている。13は完形で、口径11.7㎝、底径15.6㎝、器高10.0㎝。脚部には孔が三つあいている。器面には丹念に篦削りと磨き、撫でとで仕上げられている。坏部の内面に若干細かな刷毛目痕がみられ、赤彩塗布されている状況も認められる。14は坏部が1/5程度欠落しているのみで、口径14.7㎝、底径10.2㎝、器高11.7㎝を測る。脚部には孔が三つあいている。器面は丹念に篦削りと磨き、撫でによって仕上げられている。脚部内面には若干細かな刷毛目痕があり、赤彩塗布されている。23はやや小型の脚部で、内外面には刷毛目が認められる。外面については赤彩塗布されている。17～20、22は器台形土器である。17は器受部である。器面は篦削りと撫でによって仕上げられ、若干細かな刷毛目痕がみとめられている。器受部底に単孔ある。18は北陸系の模倣土器と考えられるもので、色調は赤みを帯びた灰白色を呈している。脚台部の底では大きく外反し、その端部では上下ともに尖った状態で外反している。19・20は脚台部である。20は孔が4つあいている。22は底部で、外面に赤彩塗布されている。21は埦で、口唇部では垂直気味に立ち上がっている。器面には若干細かな刷毛目痕がある。24～28は蓋形土器の抓み部分である。（野代）



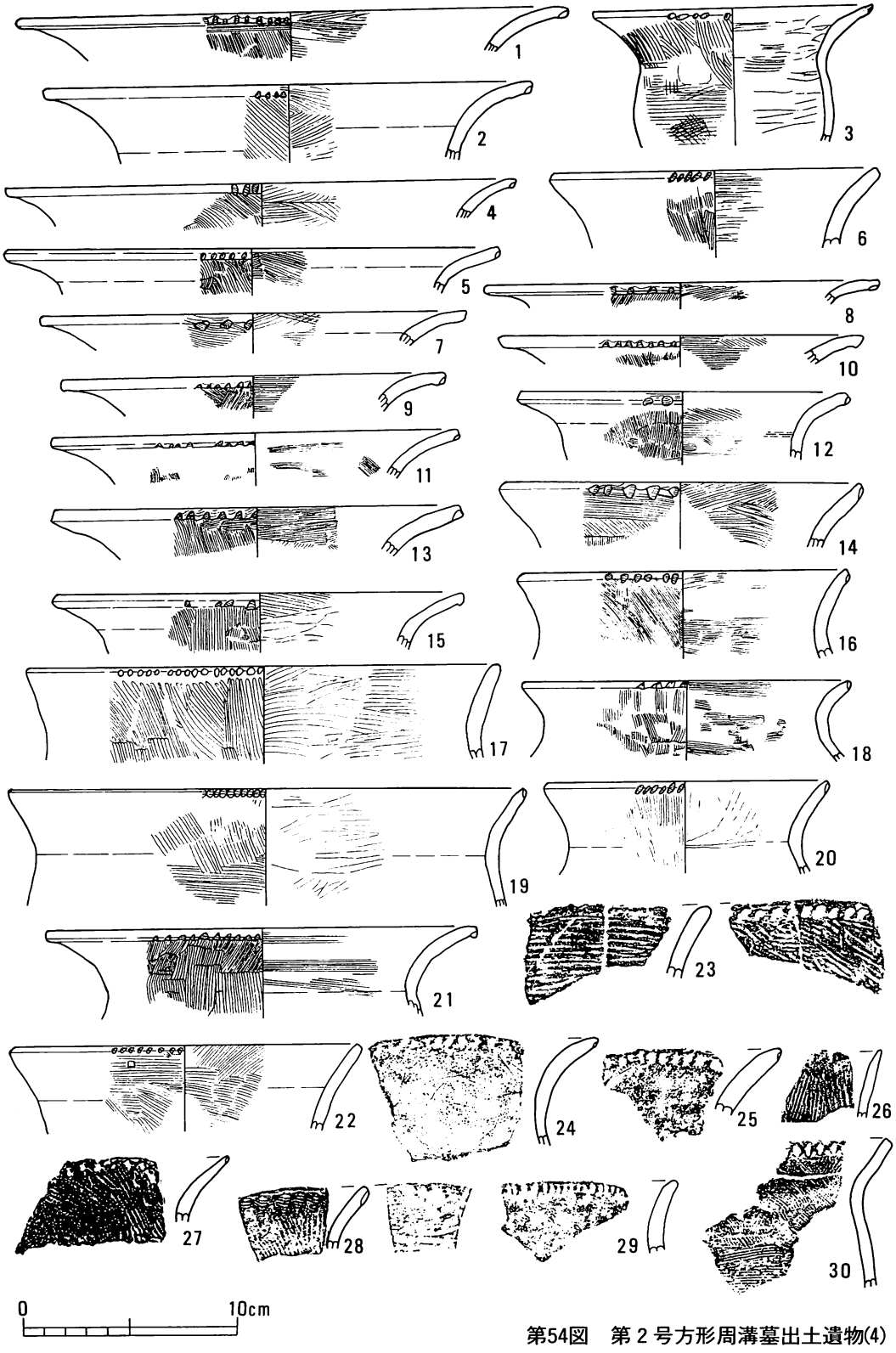
第51図　第２号方形周溝墓出土遺物(1)



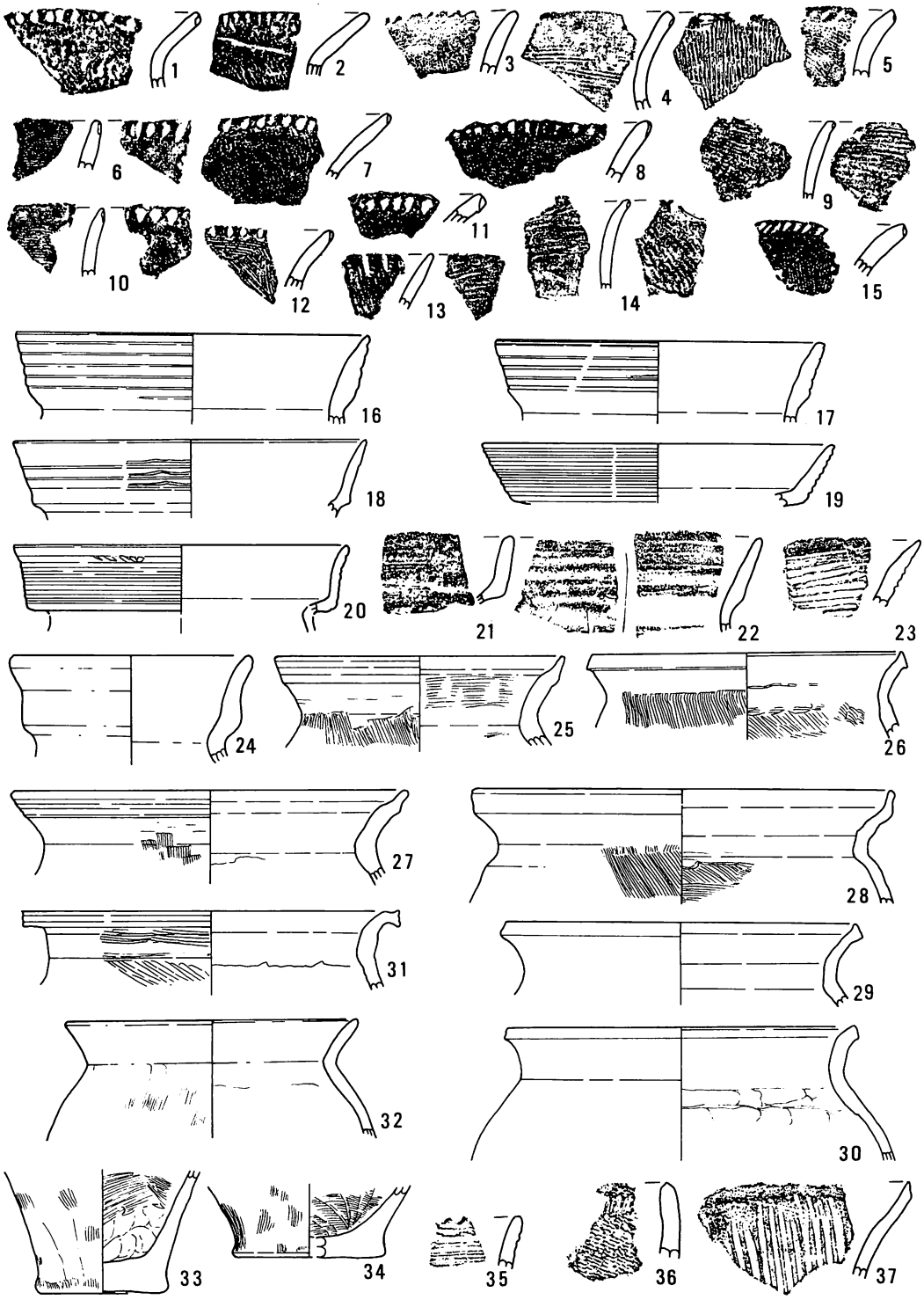
第52図　第２号方形周溝墓出土遺物(2)



第53図　第２号方形周溝墓出土遺物(3)



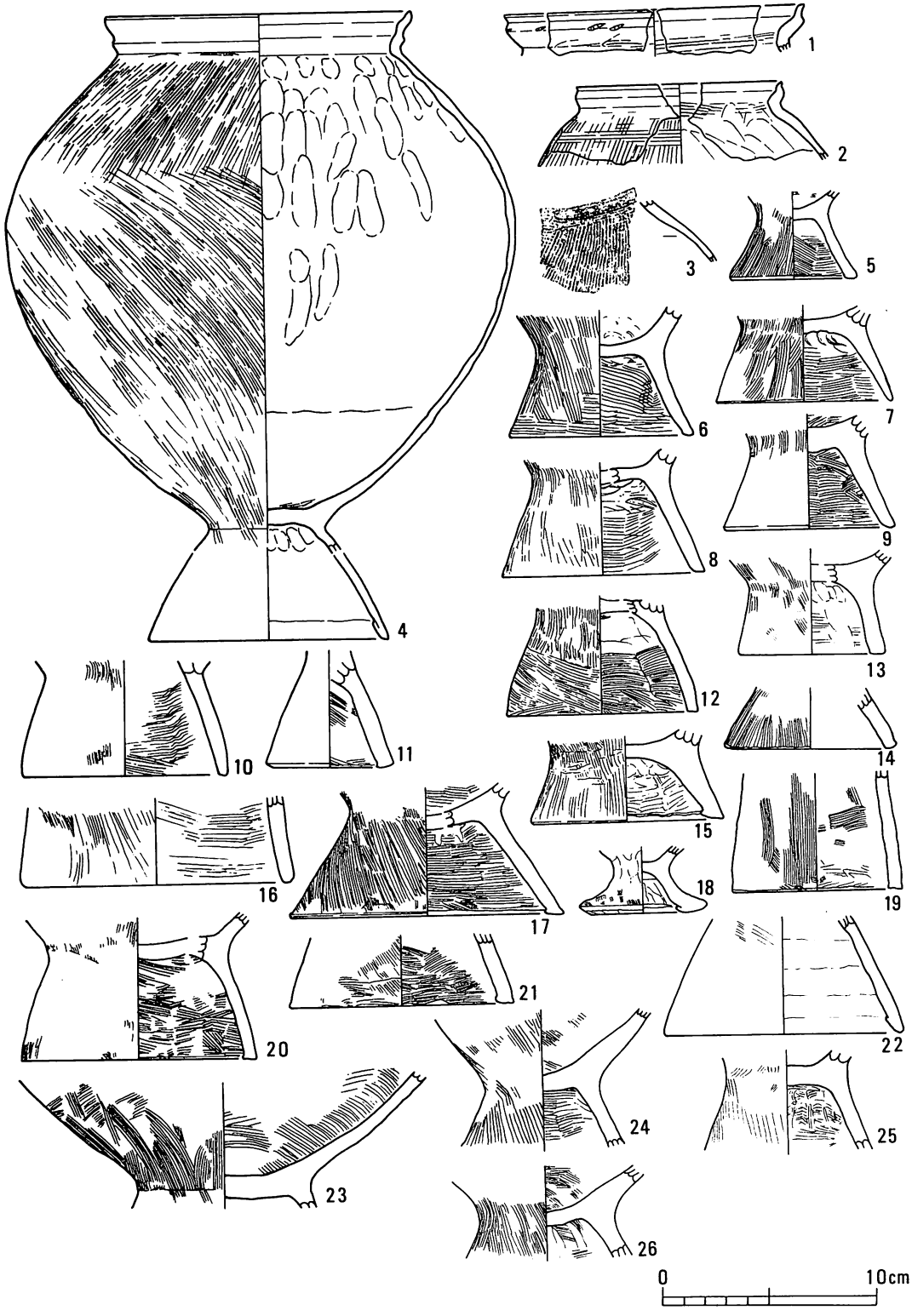
第54図　第２号方形周溝墓出土遺物(4)



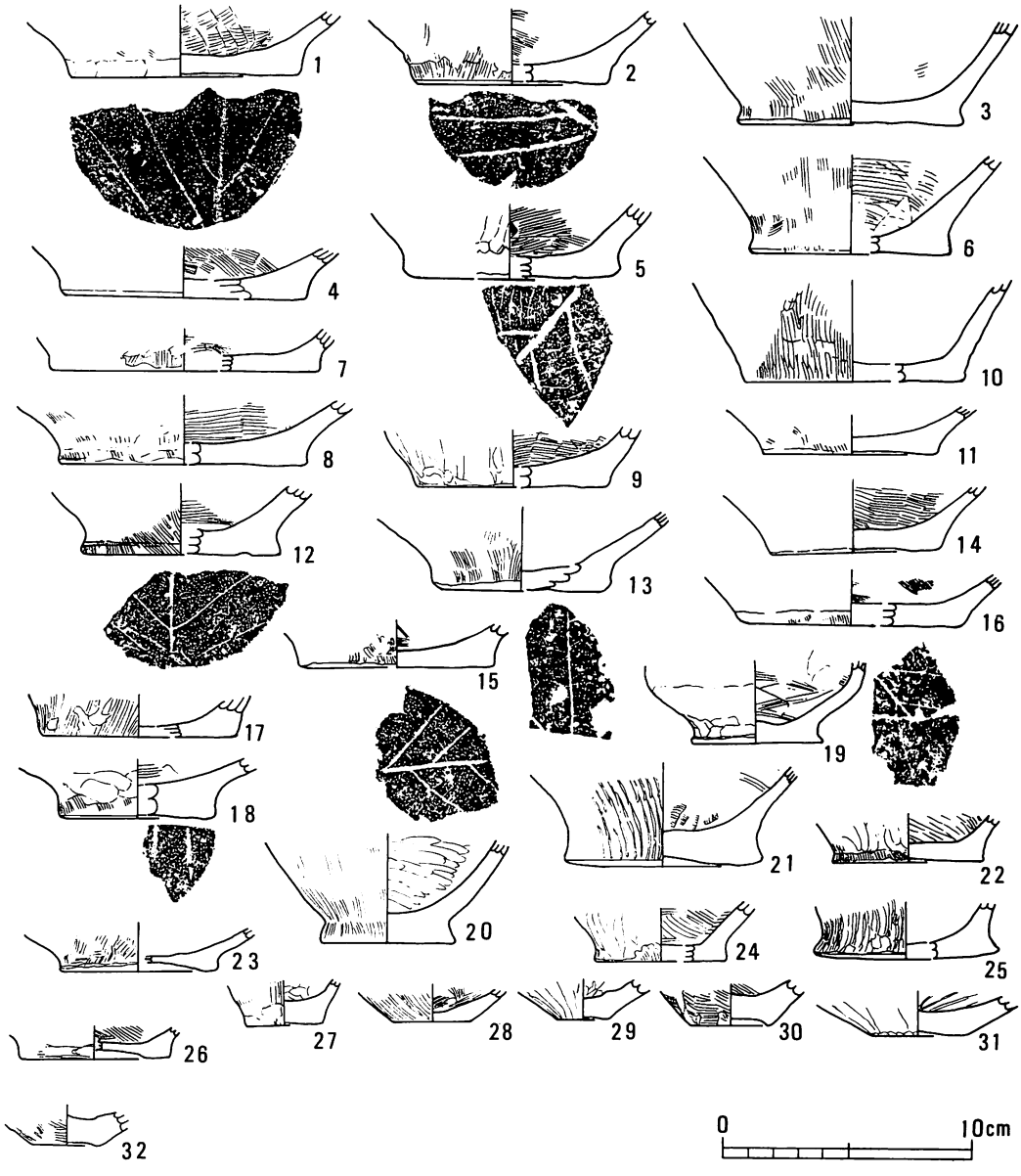
第55図　第２号方形周溝墓出土遺物(5)

0　10cm

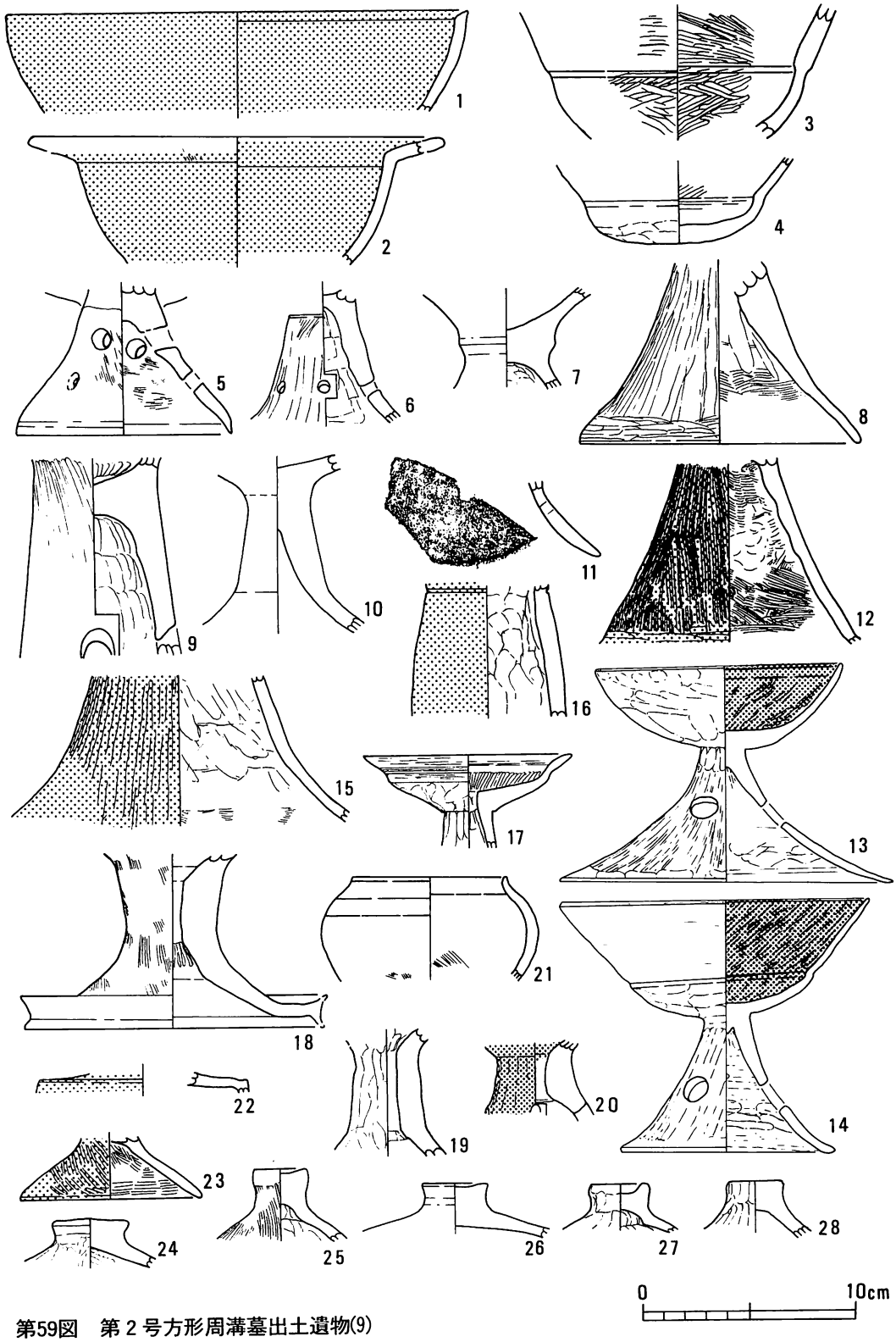
第56図　第２号方形周溝墓出土遺物(6)



第57図　第２号方形周溝墓出土遺物(7)



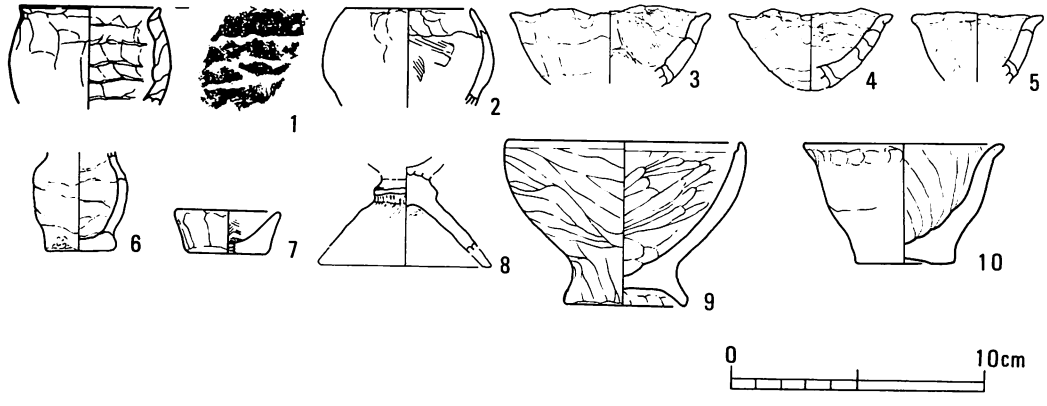
第58図　第２号方形周溝墓出土遺物(8)



第59図　第２号方形周溝墓出土遺物(9)

手捏土器・小型土器（第60図）

1～5は手捏の埦型土器である。1は口径が約5.7cmである。器面には指撫でと指頭圧痕が残り、内側には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。口唇部は指先で摘み上げて整形している。2は口径が約5.2cmである。器面には指撫でと指頭圧痕が残り、内側には指先による撫で整形が施され、指紋が残っている。口唇部には粘土を貼り付けて指先で摘み上げて整形している。3は口径が約8cmである。器面には指撫でと指頭圧痕が残り、内側には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残っている。口唇部には粘土を貼り付けて指先で摘み上げて整形している。4は口径が約6.4cmである。器面には指撫でと指頭圧痕が残り、内側には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残っている。口唇部には粘土を貼り付けて指先で摘み上げて整形している。5は口径が約5.3cmである。器面は指撫でによる整形が施され、口唇部には粘土を貼り付けて指先で摘み上げて整形している。6は小型壺で、胴径3.7cmを測る。器面は撫で整形されているが、粘土紐接合痕が残っている。7は小型鉢で、口径が約4.3cm、器高1.8cmを測る。器面は撫でと刷毛によって整形されている。8は小型高坏の脚部で底径7.0cmを測る。器面は刷毛によって整形されている。8は上げ底タイプの小型鉢で、口径が9.6cmを測る。器面は撫でと篦削りによって整形されている。10もやや上げ底がかった小型鉢で、口径が7.8cmを測る。器面は撫でによって整形されている。（野代）



第60図　手捏土器・小型土器

石製品（第61図1～4）（第1表）

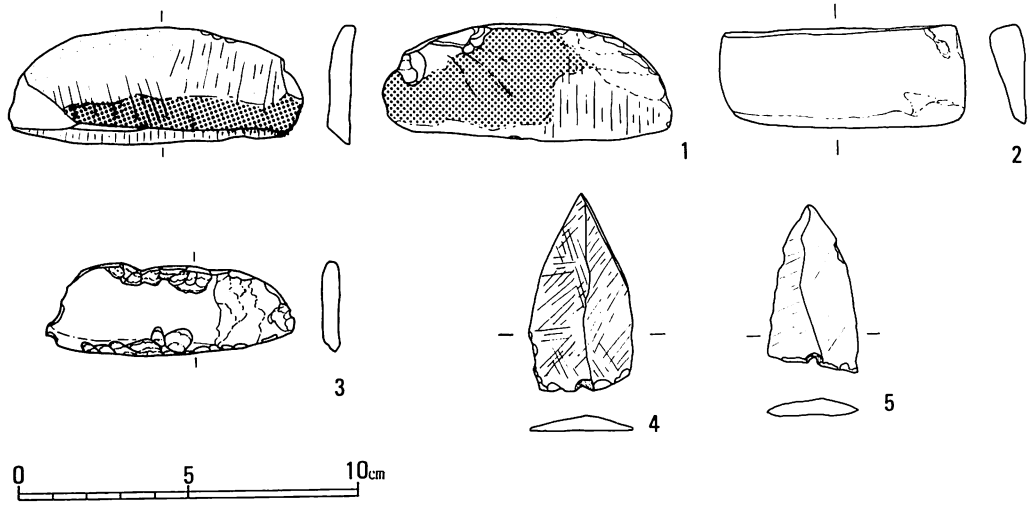
1～3は穂摘み具とおもわれる石包丁で、これらはすべて磨製である。1は左端部分が欠損している。刃部の先端は使用痕と考えられる磨耗が窺える。刃部の上端付近から中央部分にかけてと、裏面の左側半分の部分では、漆状の炭化物が付着している。ここでは確証がないため漆状という表現を用いたが、帝京大学山梨文化財研究所の鈴木稔氏の観察によると漆の可能性が高いとのことである。穂摘み具として使用されたものと考えるならば、小型である関係から柄を装着した可能性があり、これは東南アジア方面で用いられている使用方法に類似するものと想定され、この場合漆は接着剤として使用された可能性が考えられる。このことについては、現状では柄と考えられる木製品の出土が伝えられていないため、想定の域を越えることはできない。また今回の出土状況から穂摘み具以外の使用方法についても考えなければならないという問題を提議する

こととなった。2は完形で、刃部の先端は使用痕と考えられる磨耗が窺える。3は当初磨製であったものを、何かの都合で打ちかいて二次加工し、刃部を造り出しているようである。表面の右端と裏面は剝離した状態となっている。また左端部分は欠損している。

本県での出土例を上げると韮崎市の坂井南遺跡・堂の前遺跡、明野村の屋敷添遺跡、増穂町の平野遺跡の4遺跡で確認されている。東山北遺跡出土のものについては、形態的に平野遺跡出土のものに近いようである。

4は磨製石鏃である。基部には孔が施されているが、この孔より下の部分は欠落している。本県での出土例を上げると八代町の儘ノ下遺跡・身洗沢遺跡、中道町の上の平遺跡、敷島町の金の尾遺跡、韮崎市の坂井南遺跡、長坂町の柳坪遺跡の6遺跡で確認されている。

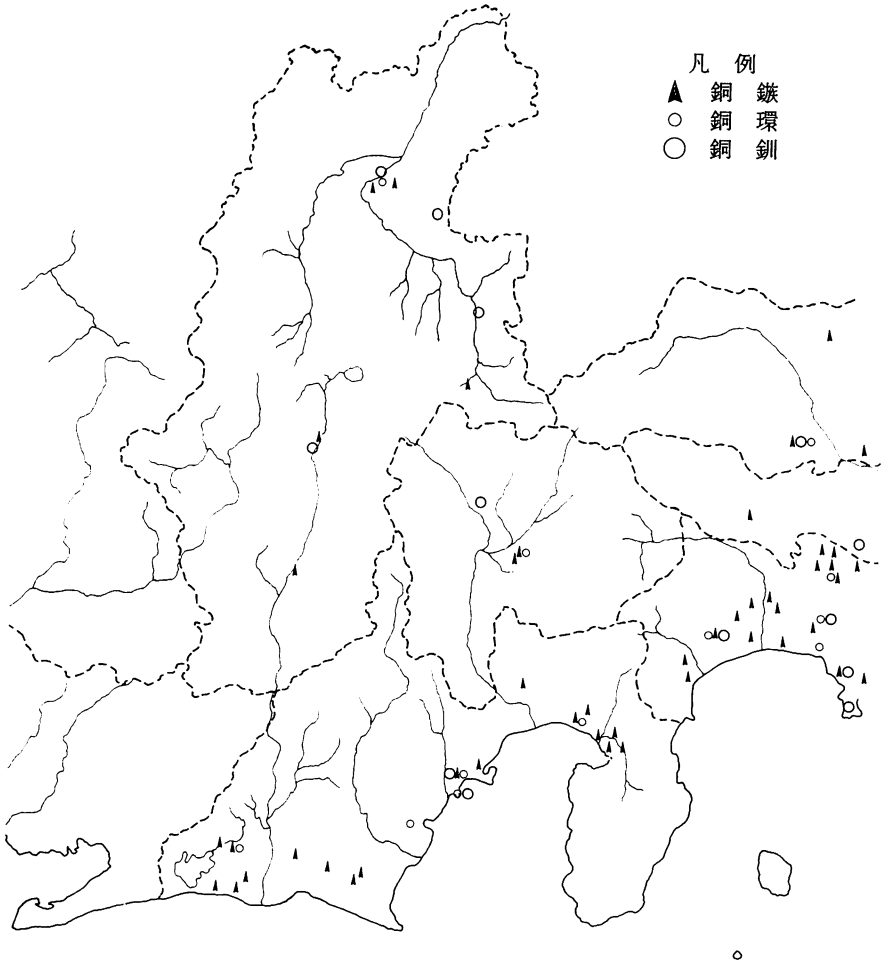
これらの遺物が遺構に伴うものか否かを説くには、根拠が乏しくはっきりしたことは言えないが、層位的には第一次埋没土の上層に位置する焼土等を混入した黒褐色系統の土層から出土したものであり、二次的な祭祀的行為によって流入した可能性も考えられる。石包丁については、他の出土例から古墳時代に属するものと考えられる。（野代）



第61図　石製品

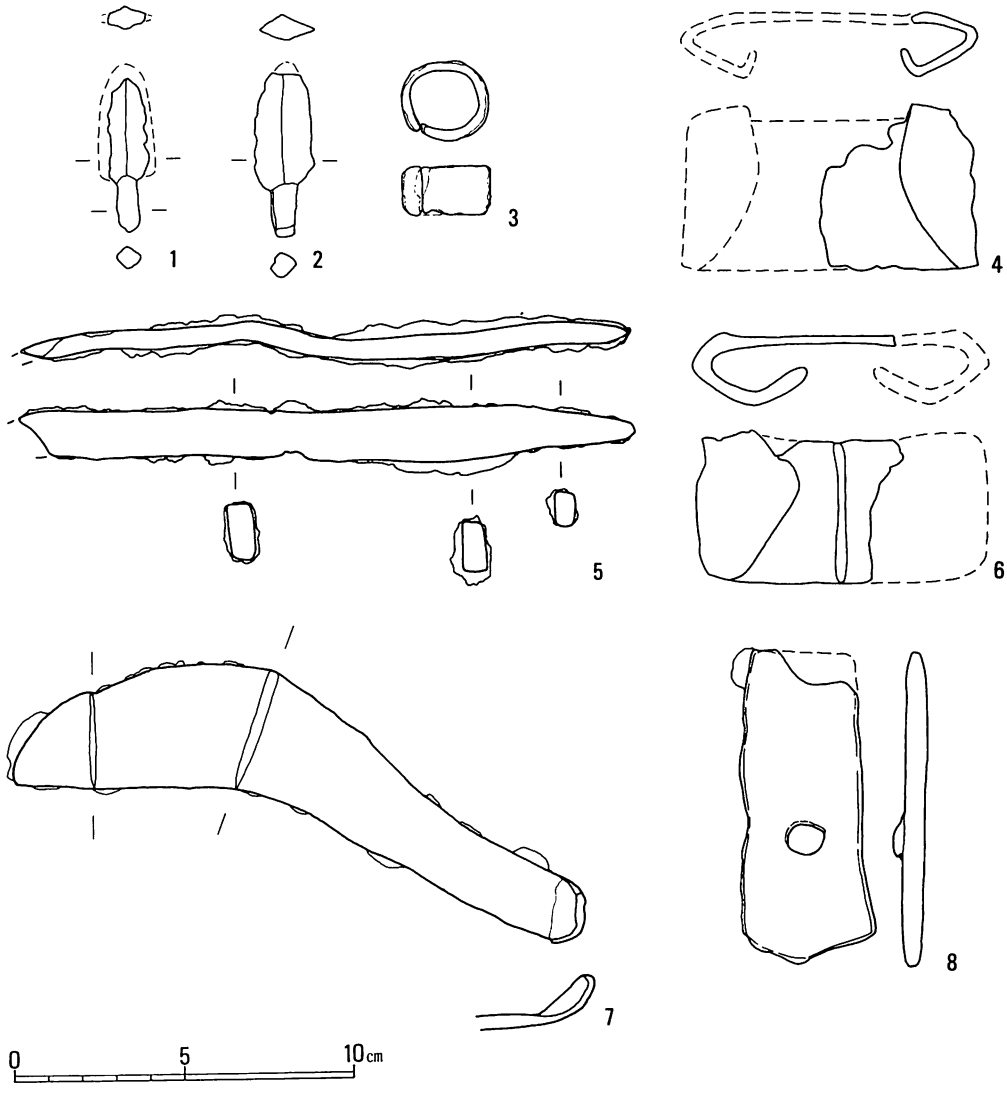
金属製品（第63図1～8）（第2表）

1～3は銅製品である。1・2は有茎の無孔タイプの鏃である。3は小型の環である。またここには載せなかったが、3の環の幅とほぼ同規模の板状の断片が1点出土している。これら銅製品の形態は、東海東部の駿河湾沿岸から相模湾沿岸を中心とする南関東で見られるものと一致する。このことは合田芳正氏[1]による遺物の集成や鈴木敏則氏[2]によって指摘されている。県内における同時期の東海系銅製品の出土例について上げるなら、銅鏃は中道町の立石遺跡で1点、銅釧は敷島町の金の尾遺跡で1点の出土が伝えられているのみである。銅環については本県初出土である。鉄製の環については、櫛形町の六科丘遺跡で出土している。第62図の銅鏃・銅環・銅釧の出土遺跡分布図からも明らかであるが、東海地方東部から関東地方南部にかけて多く分布している状況が確認できる。銅環について言えば、静岡県下においては5遺跡で確認されており、この



第62図　銅鏃・銅環・銅釧分布図

中の4遺跡については駿河湾沿岸部分に位置している。また神奈川県下においては相模湾沿岸を中心とした4遺跡で、埼玉県下で1例確認されているようである。第V章で発表した平尾良光氏他による銅製品の自然科学分析では、鉛の同位体比から弥生時代後期に位置付けられ、またこの同位体比からは東海地方における同時期の銅鏃と共通していることが明らかとなっている。これは考古学的な研究と自然科学的な研究の成果が製作地を推定するにあたって、共通の結果が見出されたことは大変興味深い。つまり、これらのことから本遺跡出土の銅製品については東海地方東部地域から搬入された可能性が示唆されるに至ったのである。しかし、東部に隣接する長野県においても数例確認されているようであり、搬入経路および生産地に隣接すると考えられる本県において、なぜ今まで発見されなかったのか非常に疑問であった。本県の場合、搬入経路として考えられるのは富士川に沿ってさかのぼってくるルートが有力であろう。また浜名湖一帯の遠江でも若干認められることから、天竜川ルートも考えられるが、土器などの遺物においては、尾張地方を主体とする文化圏に属しており、銅製品に関して言えばあまり搬入経路として考えにくい



第63図　金属製品

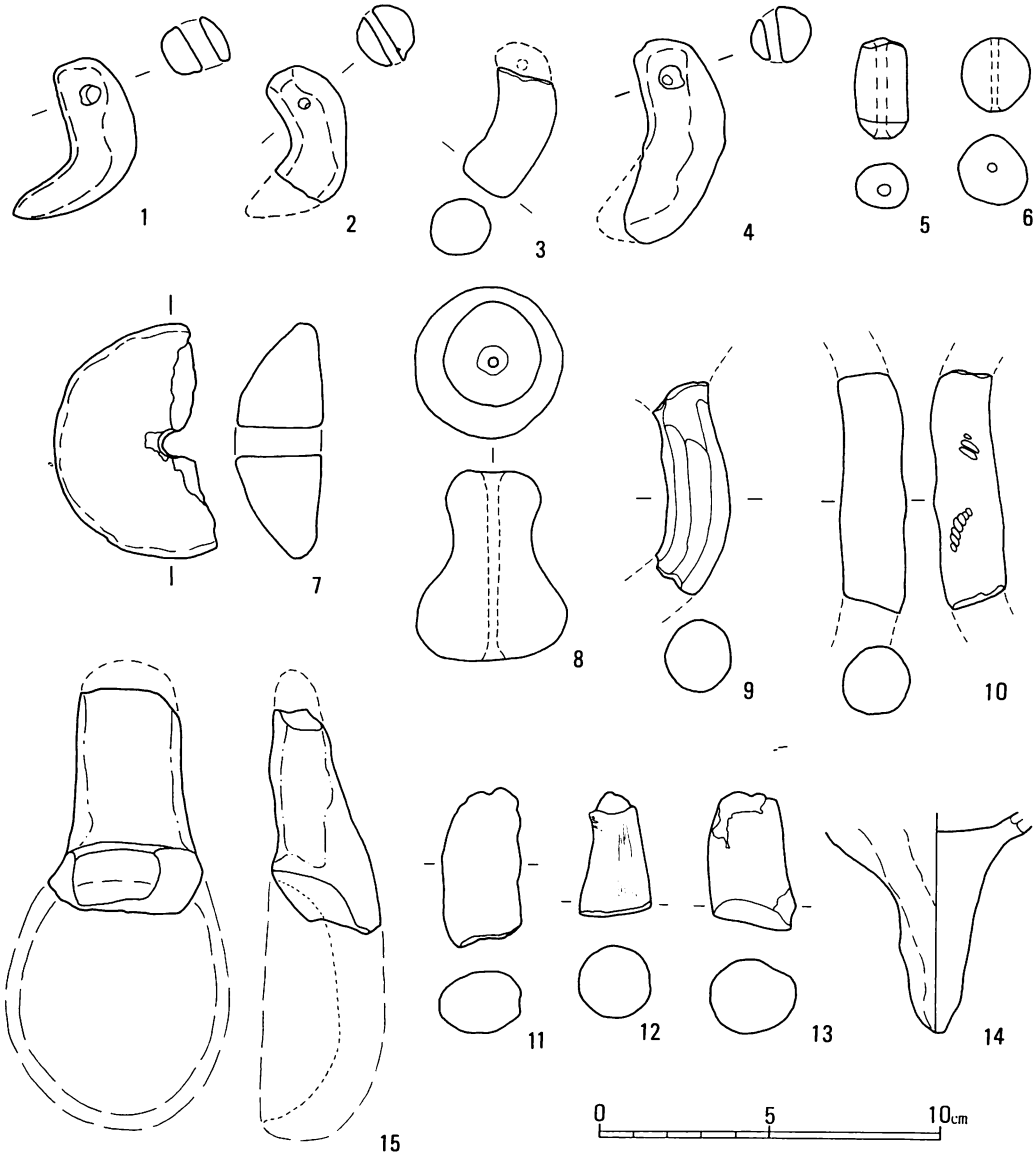
状況にある。

4～8は鉄製品である。4・6は方形の鍬もしくは鋤先である。これらは松井和幸氏[3]の形態分類によれば比較的小型のAグループに属するもので、時期的には4世紀から5世紀後半代にかけて出土例がみられるようである。着柄部分の折り返し方に着目すると、5世紀代のものに近い形態を示しているようである。県内での出土例はこの他に、本遺跡の西側に隣接する大丸山古墳から発見されており、これが時期的にも形態的にも近いことから、被葬者との関連性が窺える。

5は棒状の製品である。残存状況としては、先端部分は欠失しており、全体的な形状を摑むことはできない。また縦方向からの観察では、ほぼ中央付近で折れ曲がり、蛇行状を呈しており、意図的に曲げられたように思われる。用途に関しては、形状から金工具の“きさげ”としての機能

などが考えられる。7は鎌である。これは曲刃鎌であり、形態的にみた製作年代は5世紀中頃から6世紀代に位置づけられるものと考えられる。8は不明鉄製品である。用途は不明。

遺構との関連性については、銅製品の場合、時間差などの関係から直接伴うものと考えにくいが、前時代的なものを祭祀用などのために伝世したものとすれば、伴出しても不思議はないと思われる。鉄製品の場合、鋤・鍬先については溝の底部からの出土であり、遺構が造られた極めて近い時期に埋設されたものと考えられる。その他、鎌などの製品については、上記した黒褐色系統の土層から認められたもので、層位的・位置的に馬の歯が出土した地点に近く、関連性を考える上で興味深い。



第64図　土製品

註

1）合田芳正「関東地方の青銅製品について」『考古学雑誌』第64巻第4号　1980

2）鈴木敏則「東海地方の青銅器」『古文化談叢』第17集　1980

3）松井和幸「日本古代の鉄製鍬先、鋤先について」『考古学雑誌』第72巻第3号　1987

土製品（第64図1～6、9～15）（第3表）

1～4は勾玉である。これらはすべて周溝内から出土したものである。1を除いては欠損品である。形態的には《く》の字に彎曲が鋭いもの（1・2）と鈍いもの（3・4）に大別することができる。類例としては同時期のもので、櫛形町六科丘遺跡と塩山市西田遺跡から出土したものが知られているのみである。5は管玉、6は丸玉である。

このように玉類は全部3種類出土している。管玉については類例が認められない。丸玉については韮崎市坂井南遺跡などで発見されている。このように県内では出土例が少なく、当時の祭祀関連行為の一端を解明する上で重要な意義を持つものであろう。

9～13は用途不明の粘土紐状製品である。9の表面は箆状工具で整形されている。他のものは指撫で整形されているが、10については部分的に縄文が施されている。

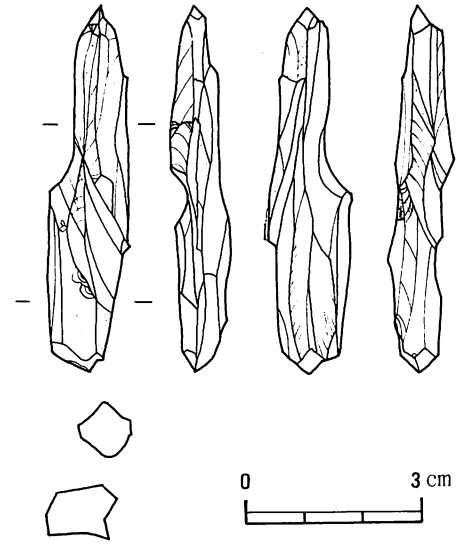
14は用途不明の角形を呈して把手状の土製品である。

15は土製匙である。これは周溝のE区から出土したものである。現存するのは抓み部分のみである。全長は復元で9㎝以上を測るものと考えられる。土製匙は縄文時代・古墳時代ともに出土例が伝えられているが、胎土から古墳時代に属するものと考えられる。（野代）

水晶製遺物（第65図）

1）水晶製遺物について

第65図は第2号方形周溝墓の周溝内A区より出土した白色水晶塊である。最長6.20㎝、最大幅1.45㎝、重さ11.2gを測り、細かく縦に剝離した跡があるが、所々に水晶の自然結晶面が見られ、六角柱の名残をとどめている。実測図ではこのような自然結晶面はドットで示した。



第65図　水晶製遺物

本水晶塊中は透明度が低く、白いもやのようなものが見られる。これは水晶の質が悪いわけではなく、インクルージョン（包含物）が水晶成長時に取り込まれたためである。一般的に水晶に取り込まれるこのようなインクルージョンは、炭酸ガスなどであることが多い。また形状は水晶の自然結晶体である六角柱の原形をとどめており、柱頭は先端にいくに従って細くなるという傾向がある。このような特徴のみから産地を特定することは非常に難しいことであるが、遺跡周辺の水晶産出地から採取される水晶の特徴と照らし合わせてみることにしたい。

本水晶塊の特徴は、①白色水晶であること、②インクルージョンに炭酸ガスを含むこと、③柱頭が先細りの傾向にあること、である。このような特徴をもつ水晶産出地は、金峰山と同じ鉱脈でつながっている水晶峠があげられる。というよりは①の特徴をもった産出地は各地でよく見られるものの、②③の特徴を持った水晶の産出地は、水晶峠以外あまり知られていない。以上から本水晶塊も水晶峠産のものである可能性がある。

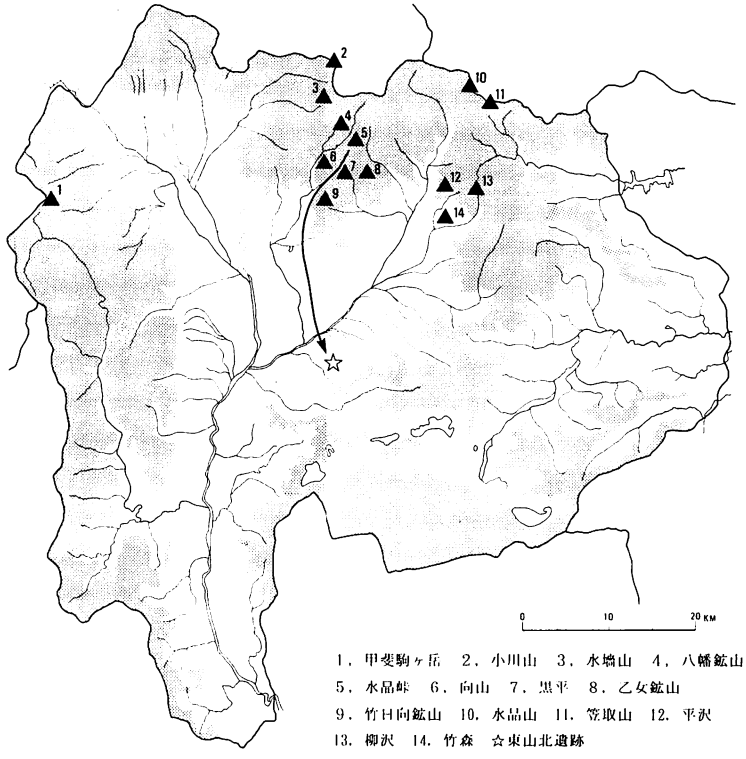
次にこの水晶塊がどのようにもたらされたかという問題について触れておく。本水晶塊は若干人工的な加工が施されているものの、ほとんど手は加わっていないと思われる。全体的に稜がはっきりとしていることから、川を通じて運ばれた転石ではなく、産出地で採取されたものが直接運ばれて来たか、交易によってもたらされたものであろう。

本水晶塊の利用については、類似例がほとんどないため詳しいことは知り得ない。しかし第2号方形周溝墓の周溝内の出土遺物に着目すると、土製勾玉や馬骨など祭祀に用いられたとみられる遺物が数多く見出される。本遺物が周溝底面より出土していることから、周溝墓築造時に何らかの形で祭祀的に用いられたと考えられる。

2）県内の水晶産地について

水晶は、県内では金峰山一帯で多く産出することが知られており、長野県でも産出が認められる。

現在、県内で知られている水晶産地は約20カ所弱あるが、その中には言い伝えなどによって産出が伝えられていながら、現在は水晶の採れない箇所もある。そのため現在産出が確認できたものを14カ所記した（第66図）。水晶は産出地によって多少特徴を持っていることは既に述べた。そこで主なものについて具体的に産地と照らし合わせた上で、その特徴についてまとめてみることにした。



第66図　水晶産出地分布図

4の八幡鉱山の水晶は白色水晶や紫水晶、無色水晶を産出するが、とくに無色水晶は透明度が高いことで定評が

あり、結晶が大きいことでも有名である。かつては562kgもある水晶を産出したこともある。

5の水晶峠は水晶産出地として非常に有名である。白色水晶のほかに無色水晶も産出するが、内部は白く濁り、先細り形である。

6の向山では小形の水晶が多い。やはり透明度が高く包含物に青草入りや枯れ草入りがある。

8の乙女鉱山のものは結晶面が平たく、先端がきり状に尖る。金峰山一帯の水晶山地の中では最も広大で産出量も多い。また良質の石英産出地としても広く知られ、かつて明治期まではさかんに発掘されていた。

14の竹森の水晶は、内部に電気石や草など黒い針状の物質を多く含んだ極めて特徴的な様相を呈している。白色水晶や茶水晶の産出も知られている。（石神）

参考文献

益富寿之助　『鉱物ーやさしい鉱物学ー』保育社　(1974)

中村龍雄・土屋忠芳・青木孝志　『矢出川 水晶考古学』(1983)

十菱　駿武　「水晶の考古学研究(II) ー乙木田遺跡第2次調査ー」『山梨学院大学一般教育論集』第14号　山梨学院大学　(1992)

山梨大学教育学部地学教室　『水晶館』(1976)

山梨師範学校　『水晶』(1934)

第1表　石製品（単位は長さ・巾・厚さが㎝、重量はｇ）

番号	出土位置	器　種	長　さ	巾	厚　さ	重　量	石　材	備　考
1	2方・E区	磨製石包丁	2.28	5.78	0.49	(9.0)	頁　岩	炭化物が付着
2	2方・E区	磨製石包丁	1.93	4.81	0.62	9.1	頁　岩	
3	2方・A区	磨製石包丁	1.78	4.89	0.39	(4.3)	頁　岩	
4	2方・E区	磨製石鏃	(3.89)	2.06	0.31	(3.0)	頁　岩	
5	27住	磨製石鏃	(3.34)	(1.80)	0.27	(2.2)	緑泥片岩	

第2表　金属製品（単位は長さ・巾・厚さが㎝、重量はｇ）

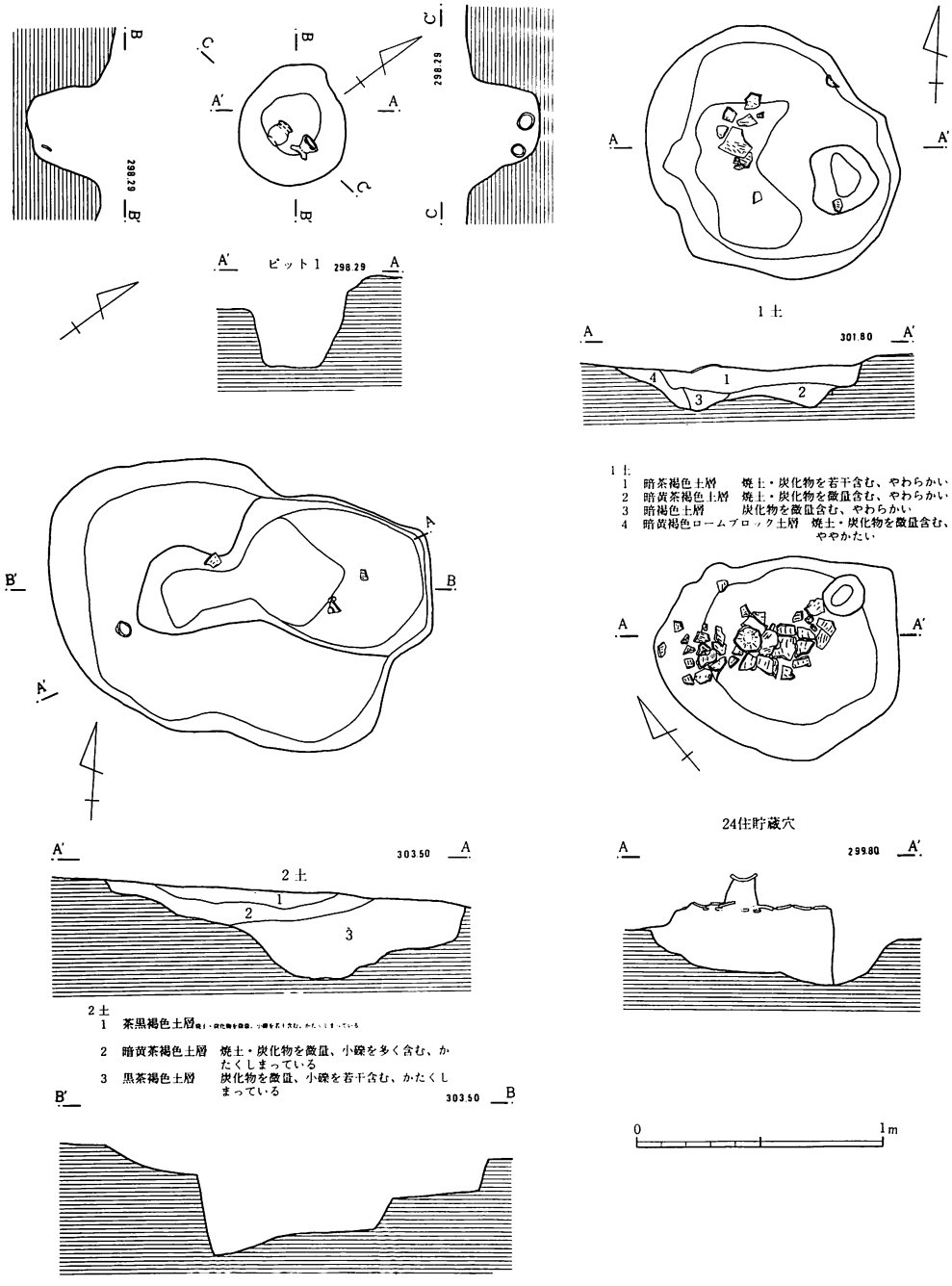
番号	出土位置	器　種	長　さ	巾	厚　さ	重　量	材　質	備　考
1	2方・F区	鏃	(2.91)	(0.91)	0.43	2.2	青　銅	
2	2方・E区	鏃	(3.01)	1.16	0.48	(2.5)	青　銅	
3	2方・F区	環	1.51	1.84	0.95	3.4	青　銅	
4	2方・I区	鋤先	3.27	(3.21)	0.27	(11.9)	鉄	
5	2方・E区	きさげ？	12.30	1.39	0.67	16.1	鉄	
6	2方・I区	鋤先	3.02	(3.98)	0.39	(15.1)	鉄	
7	2方・E区	鎌	11.41	2.45	0.22	19.6	鉄	
8	2方・E区	馬具？	6.03	2.68	0.65	23.2	鉄	
9	2方・A区	燧	5.59	2.24	0.66	12.6	鉄	火打ち金(第8節の3)

第3表　土製品（単位は長さ・巾・厚さが㎝、重量はｇ）

番号	出土位置	器　種	長　さ	巾	厚　さ	重　量	備　考
1	2方・A区	勾玉	3.46	1.34	1.14	6.4	
2	2方・B区	勾玉	(2.69)	1.25	1.28	4.6	
3	2方・A区	勾玉	(2.38)	1.16	1.27	(4.6)	
4	2方・E区	勾玉	(4.02)	(1.48)	1.53	(9.5)	
5	2方・I区	管玉	(1.87)	(1.02)	0.9	(2.0)	
6	2方・I区	丸玉	1.41	1.31	1.26	2.3	
7	27住	紡錘車	4.55	(2.79)	1.63	(18.3)	
8	15・16住	玉？	3.80	2.94	2.93	23.2	瓢箪型
9	2方・F区		(4.15)	1.24	1.42	(9.2)	粘土紐状
10	2方・C区		(4.74)	1.28	1.26	(9.4)	粘土紐状
11	2方・D区		(3.04)	1.53	1.48	(6.5)	粘土紐状
12	2方・B区		(2.38)	(1.42)	(1.41)	(3.9)	粘土紐状
13	2方・C区		(2.58)	1.66	1.42	(6.2)	粘土紐状
14	2方・E区	匙	(4.64)	(2.98)	(1.90)	(20.2)	抓みの部分のみ

第2節　土　　坑

発見された土坑は、ピット群などと区別したため、10基のみである。時期的にはすべて弥生時代後期に位置づけられるものである。



第67図　第1・2土坑他

第１号土坑（第67図）

本土坑は、調査区の南側のＰ・Ｑ－22グリッドにおいて発見された。規模は長径1.08m、短径0.87m、深さは0.20mを測る。形態は不整楕円形を呈している。底部の東側には、Pit状の落ち込みが見られる。壁は北西部分を除いて、ほぼ急に立ち上がっている。遺物は甕形土器の胴部破片が出土したのみである。

第２号土坑（第67図）

本土坑は調査区の南端の０－27グリッドにおいて発見された。規模は長径1.57m、短径1.00m、深さは0.38mを測る。形態は不整形を呈している。坑底部は中心付近で深く落ち込んでいる。壁は西壁部分を除いて、ほぼ急に立ち上がっている。覆土には炭化物が多く含まれている。遺物は甕形土器の小破片が出土したのみである。

第３号土坑（第68図）

本土坑は調査区中央東寄りの第２号方形周溝墓方台部上、Ｍ－16グリッドにおいて発見された。規模は長径0.40m、短径0.38m、深さ0.23mを測る。形態はほぼ円形を呈している。坑底部は丸底となっている。壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は土器の小破片が出土している。

第４号土坑（第68図）

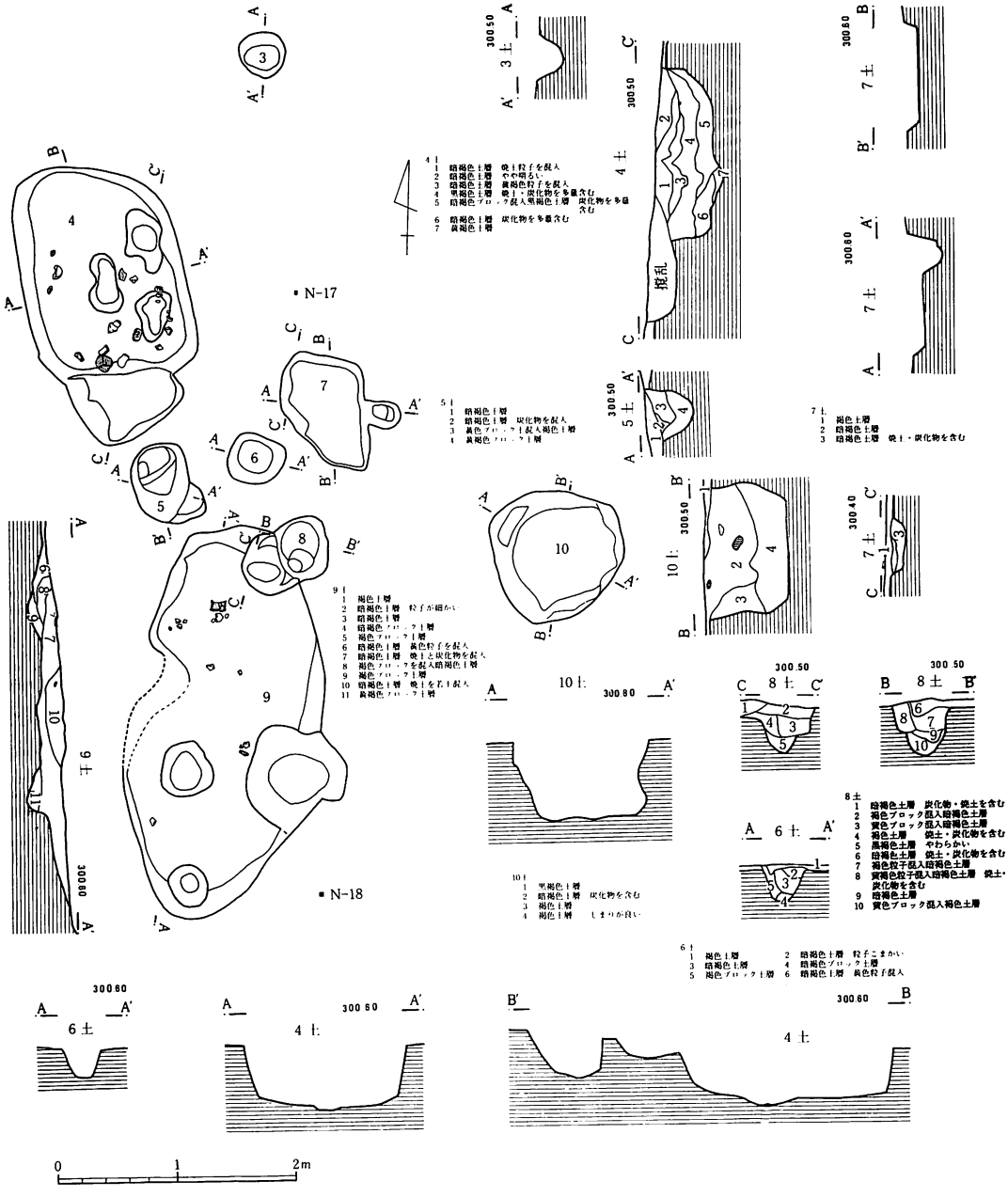
本土坑は調査区中央東寄りの第２号方形周溝墓方台部上、Ｍ－17・18グリッドにおいて発見されたものである。規模は長径1.80m、短径1.36m、深さ0.60mを測る。形態は隅丸長方形を呈している。底部には小規模な落ち込みが三カ所確認できた。壁は急に立ち上がっている。覆土には炭化物が多く含まれ、この中でも底部付近からは、灰混じりの植物繊維状炭化物が検出された。本土坑の南側には重機による攪乱が入っている。遺物は土器破片が出土している。第69図の１は甕形土器の口縁部破片である。

第５号土坑（第68図）

本土坑は調査区中央東寄り第２号方形周溝墓方台部上、Ｍ－17グリッドにおいて発見された。規模は長径0.70m、短径0.48m、深さ0.40mを測る。形態は不整形のPit状を呈している。底部は丸底である。壁は急に立ち上がっている。覆土には炭化物を含んでいる。遺物は土器の小破片が出土したのみである。

第６号土坑（第68図）

本土坑は調査区中央東寄り第２号方形周溝墓方台部上、Ｍ－17グリッドにおいて発見されたものである。規模は長径0.96m、短径0.42m、深さ0.30mを測る。形態はほぼ円形を呈している。壁は急に立ち上がっている。遺物は土器の小破片が出土した。



第68図　第3～10号土坑

第７号土坑（第68図）

本土坑は調査区中央東寄り第２号方形周溝墓方台部上、M－17グリッドにおいて発見されたものである。規模は長径0.90m、短径1.03m、深さ0.13mを測る。形態は不整形を呈している。坑底部には、東側壁部分にPit状の掘り込みが存在し、これは深さ0.30mを測る。壁はやや急に立ち上がっている。遺物はほとんど出土しなかった。

第８号土坑（第68図）

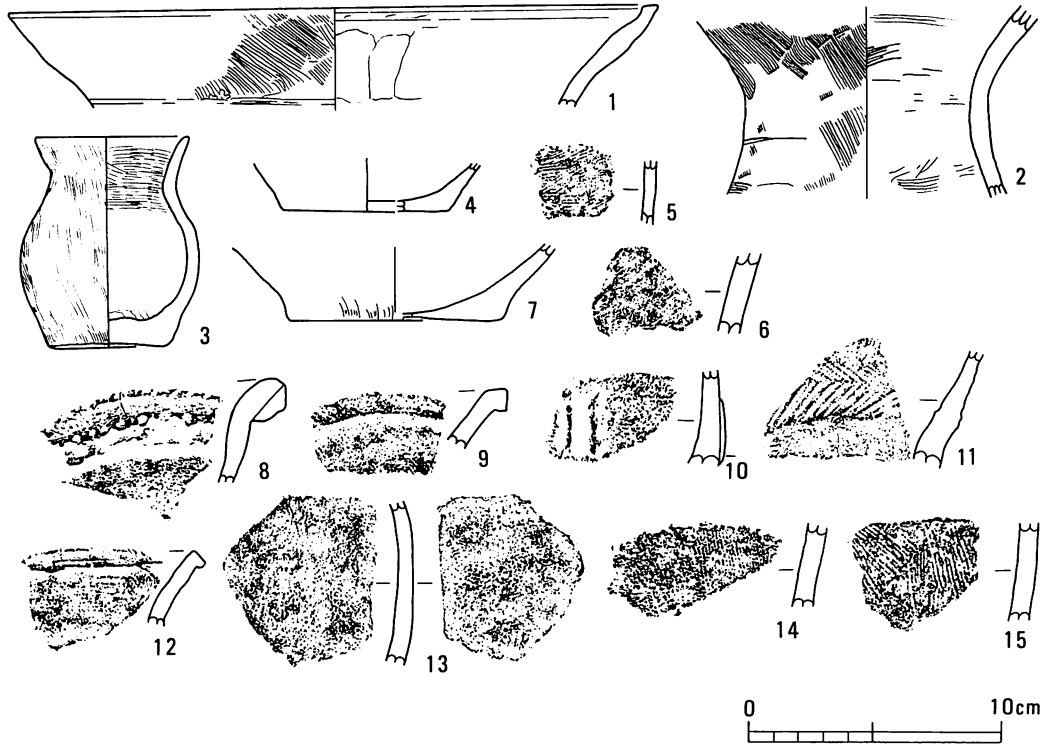
本土坑は調査区中央東寄り第２号方形周溝墓方台部上、Ｍ－17グリッドにおいて発見されたものである。規模は長径0.77ｍ、短径0.46ｍ、深さ0.50ｍを測る。形態は楕円形のPit状を呈している。また、土層断面からは隣接する第９号土坑に切られていることがわかる。遺物は土器の小破片が出土したのみである。

第９号土坑（第68図）

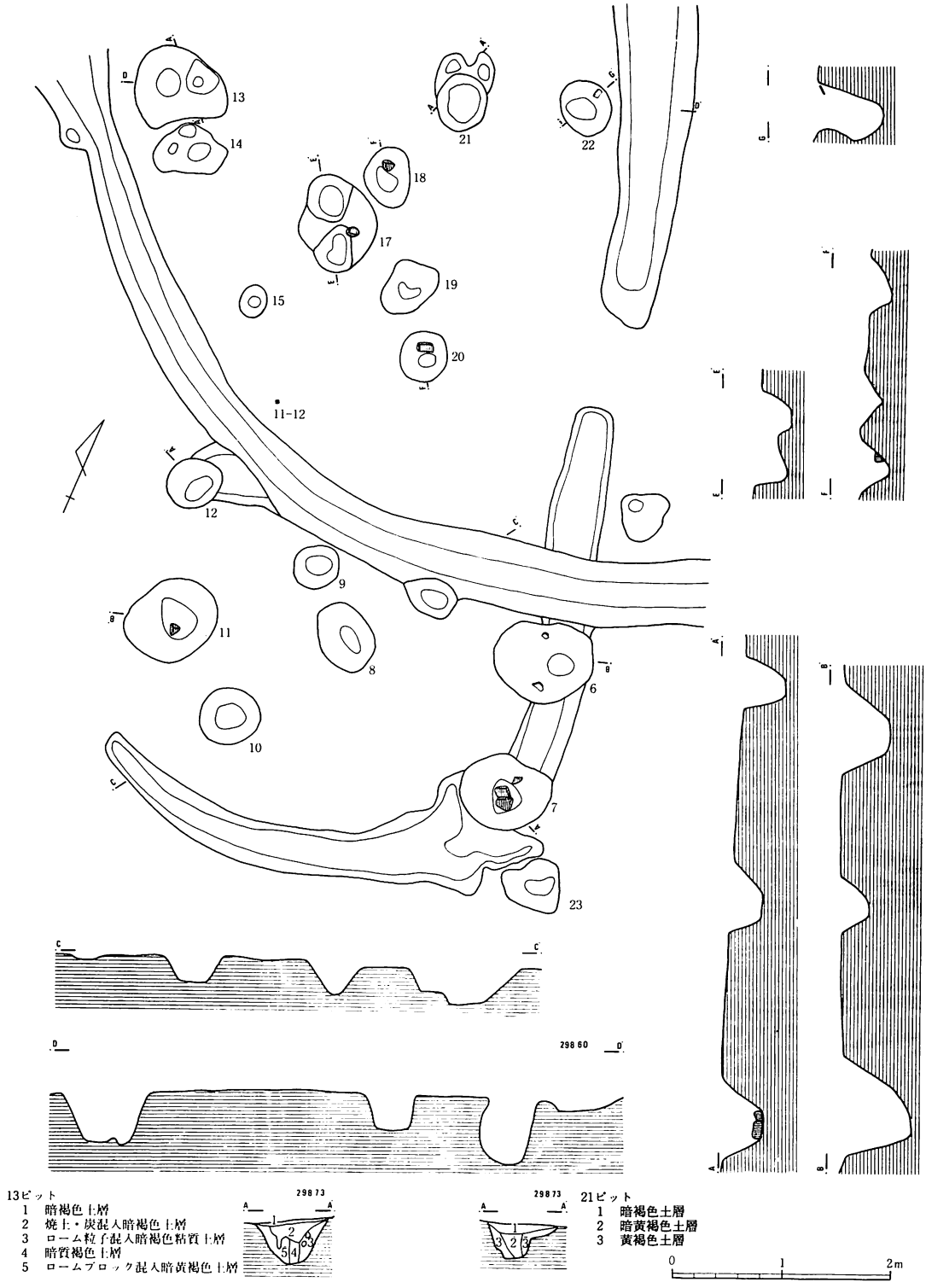
本土坑は第２号方形周溝墓方台部南側、Ｍ・Ｎ－17、Ｍ－18グリッドにおいて発見されたものである。規模は長径3.32ｍ、短径1.37ｍ、深さ0.32ｍを測る。形態は南北方向に長い不整形を呈している。底部にはPit状の掘り込みが３箇所見られる。壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は壺形土器の頸部（第69図２）などが出土したが、大部分のものは小破片である。

第10号土坑（第68図）

本土坑は第２号方形周溝墓方台部中央東寄り、Ｎ－17グリッドにおいて発見されたものである。規模は長径1.18ｍ、短径1.15ｍ、深さ0.70ｍを測る。形態はほぼ円形を呈している。底部は東側から北側にかけての部分がオーバーハングして、壁は急に立ち上がっている。このような形態から主な用途として考えられることは、貯蔵穴としての使用である。唯一用途のわかるものとして明記しておきたい。遺物は土器の小破片が出土したのみである。（野代）



第69図　土坑（１・２）・ピット群（３～７）・土器焼成遺構（８～15）出土遺物



第70図　第２号ピット群

第4節　ピット群（第70・75図）

ピット群は調査区の北部に2箇所に分かれて存在し、合計22基を数える。

この中でもJ－10・11グリッドに存在し、第8号溝を挟むようにして分布するものを第1号ピット群（第75図）とした。このピット群には、第1～5号ピットが該当する。規模は第4表に示したとおりであり、第75図からも大きなものと小さなものとが混在している状況が確認できる。また土層断面からは、柱穴状の痕跡を示していることが確認できる。このことからも集落に伴った建造物が存在していたものと考えられるが、規則性は余り認められない。出土遺物の中で特筆すべきものには、第1号ピットから出土した小型壺形土器の完全個体資料（第69図3）がある。

これと別にO・H－11・12グリッドに存在し、やはり第8号溝を挟むようにして分布しているものを第2号ピット群（第70図）とした。このピット群には、第6～23号ピットが該当する。規模は第4表に示したとおりであるが、第1号ピット群と同様に大小さまざまなものが混在している状況が確認できる。土層断面からは、柱穴状の痕跡を示していることが確認できるものもあり、集落に伴った建造物が存在していたものと考えられるが、規則性は認められない。出土遺物はほとんどなかった。

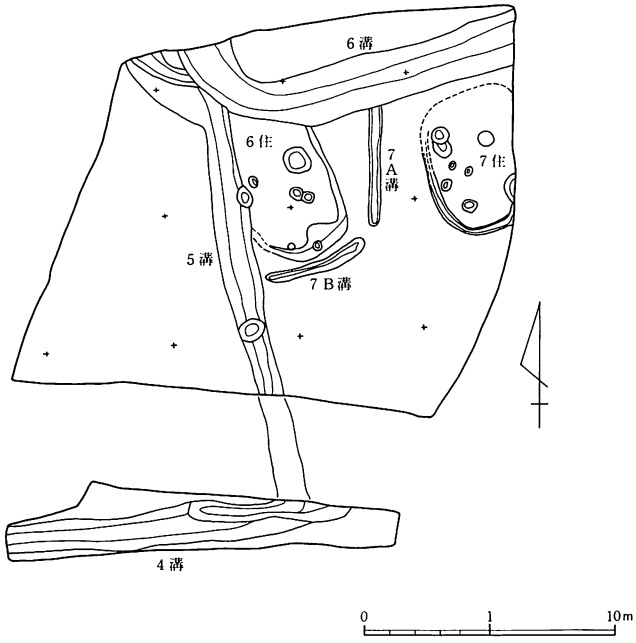
これらのピット群の時期については、出土遺物や周辺に存在する遺構との位置的な関係から考慮して、住居群と同様に弥生時代後期に位置づけられるものであろう。　（野代）

第4表　ピット群

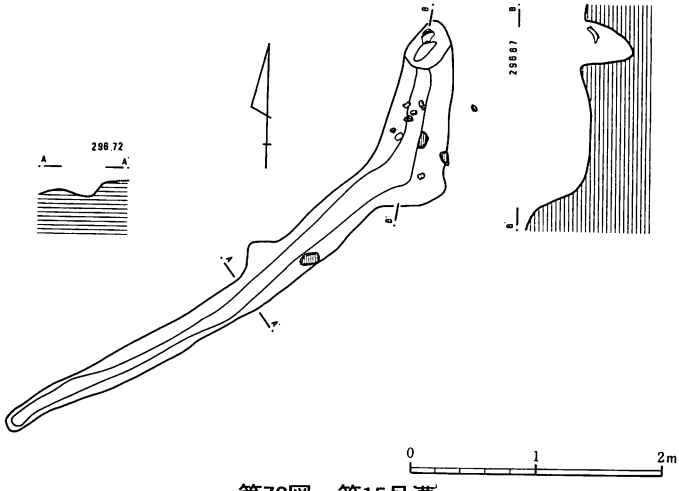
Pit番号	グリッド番号	径(cm)	深さ(cm)	備　考
1	J－11	52×45	32	小型壺形土器(第69図3)・台付甕の脚部が各1点出土。
2	J－10・11	70×50	60	甕形土器の底部(第69図4)などが出土。
3	J－10・11	40×33	20	壺形土器の底部が出土。
4	J－10・11	50×35	35	
5	J－11	45×40	30	上層部から遺物が出土。
6	H－12	96×80	65	土器の小破片が出土。
7	H－12	90×65	40	壺形土器の胴部(第69図5)などが出土。礫含む。
8	H－12	68×50	30	壺形土器の胴部（第69図6）などが出土。
9	H－12	43×40	30	
10	G－12	60×55	30	
11	G－12	90×73	47	
12	G－12	55×45	40	
13	G－11	90×70	55	
14	G－11	70×47	30	
15	G－11	33×25	25	
16	H－12	50×40	20	
17	H－11	92×75	30	2基のピットが切り合っている可能性あり。
18	H－11	60×45	20	
19	H－11	60×45	20	
20	H－11	47×45	30	
21	H－11	80×50	35	
22	H－11	55×47	63	甕形土器の底部(第69図7)などが出土。
23	H－11	65×55	12	坑底がオーバーハングする。

第5節　溝（第2・71～79図）

溝は全部で18条発見されている。その大部分のものに該当する遺構の性格については、地境もしくは根切り溝として設けられたものと考えられ、弥生時代に位置づけられる遺構を切って構築されている。これらの溝からは、流れ込んだ弥生時代の土器片に混じって陶器片の混入が認められた。これら近世以降に位置づけられるものについては、第1～6、12～14、16号溝がこれに該当する。第1～3号溝はE・F－19～22グリッドで互いに切り合いながら、ほぼ南北方向に流れている状況が確認できる。この北側では、遺構確認のグリッド設定段階において、第16号溝が確認された。この第16号溝については、部分的な確認のため図付しなかったが、第1～3号溝と合流する可能性が考えられる。第4号溝はA－8、B－7・8グリッドにかけて確認されたもので、B－8グリッドで南北方向から東西方向に向きを変えている。第5号溝は第4号溝の北側、B－5～7グリッドで確認され、ほぼ南北方向に流れている。第6号溝はB～D－4・5グリッドで確認され、第5号溝を切るようにして造られている。B－5グリッド付近で東西方向から南北方向に向きを変えている。注目すべき出土遺物の中に円筒埴輪片（第78図1）がある。第12号溝はI－10・11、J－9・10グリッドで確認されたもので、北東方向から南西方向に向かって流れている。第13号溝はE・G・H－8・9、F－9グリッドで確認された。主流を示す大きな流れについては、東西方向から南北方向に向きを変えていることがわかる。E－8グリッド付近で南北に細いバイパスが伸び、



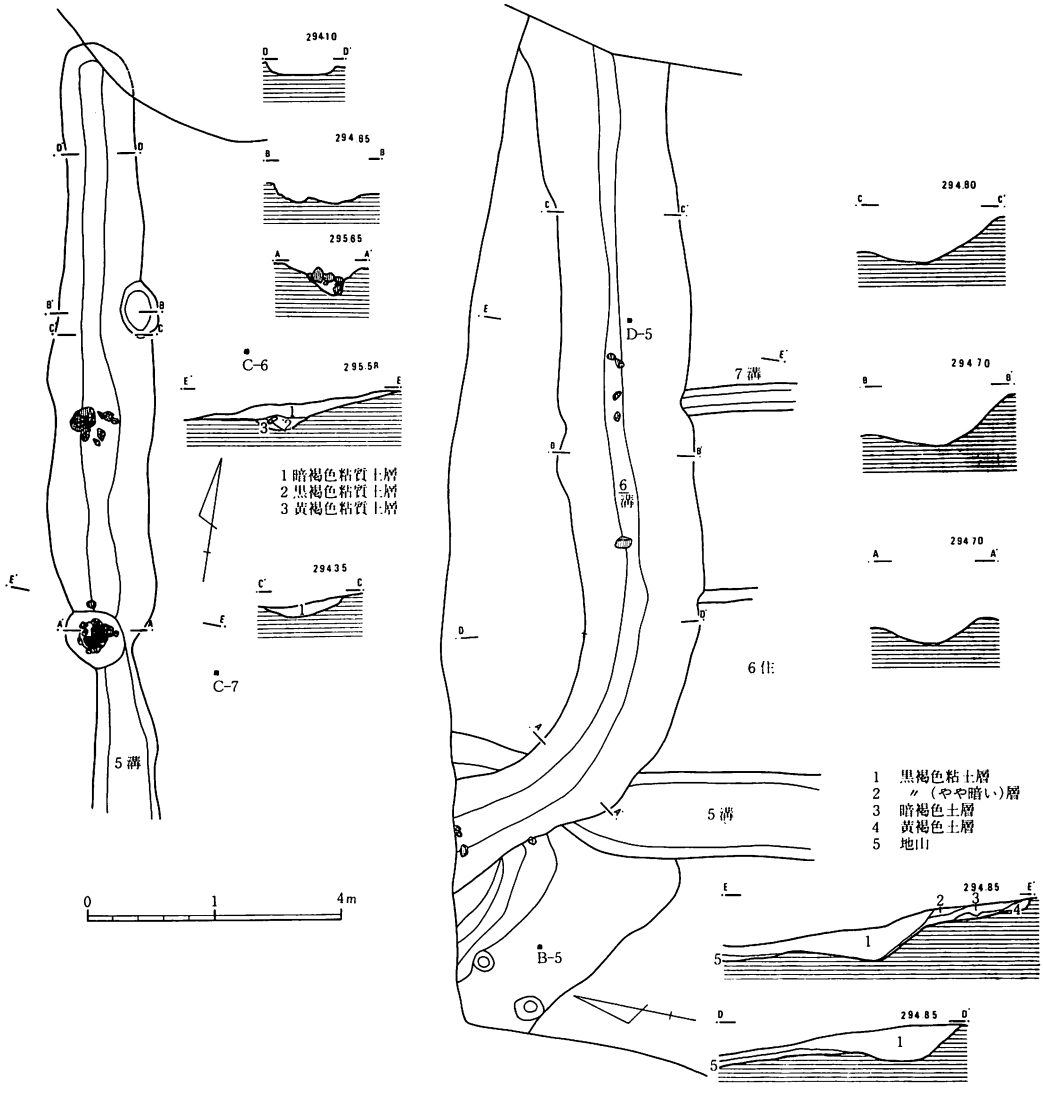
第71図　第4～7号溝



第72図　第15号溝

第14号溝に接続している。第14号溝はD～F－7・8グリッドで確認され、南北方向に流れているが、F－7グリッド付近で北西方向に向きを変えているようである。

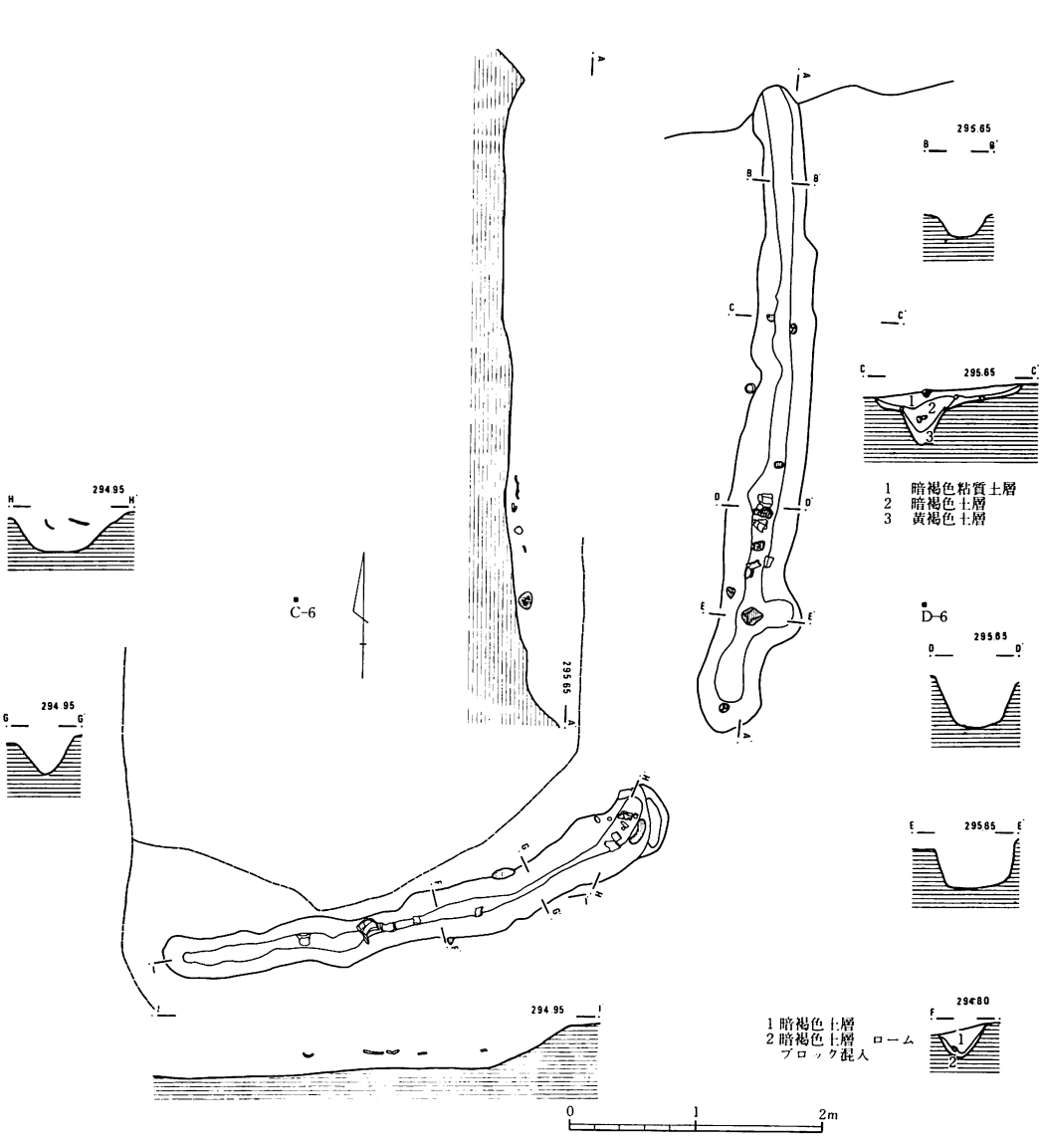
その他の溝については、集落や墓に伴うものと考えられる。第11・17号溝については方形周溝墓のところでもふれたが、第1号方形周溝墓に伴う周溝である。ただし第17号溝は、他の近世以



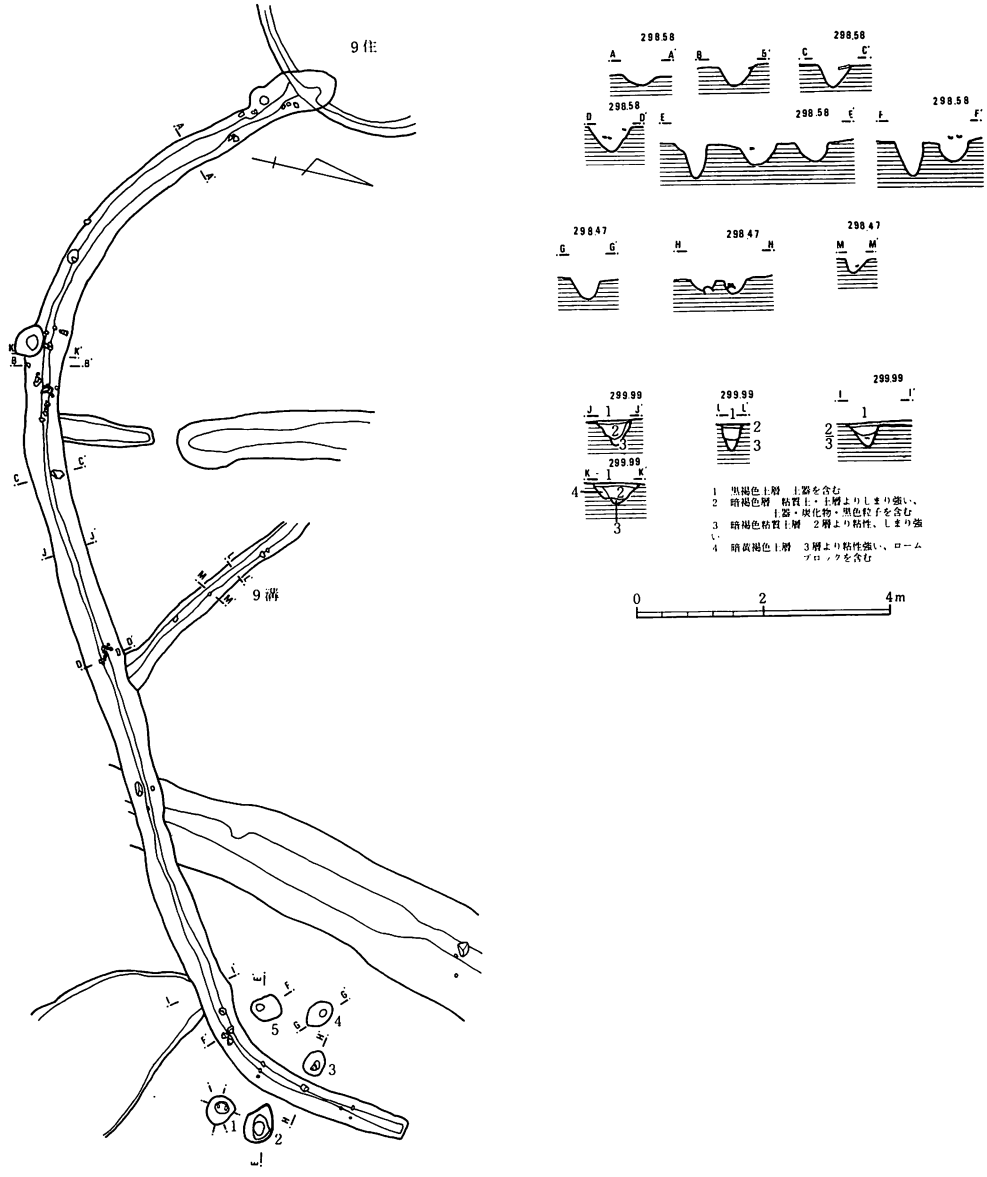
第73図　第5・6号溝

降の溝と切り合っているようであり、規模などについては不明な点が多い。第7・8・10・15号溝は、住居址やピット群に伴った集落内構築物の一つと考えられる。これらの溝は弥生時代後期に位置づけられるものと考えられる。第7号溝はD－6、C－6・7グリッドにおいて確認された。規模は幅0.30m～0.65m、深さは最深部で0.45m、長さは8.40mを測る。これは第6号住居址に伴うものと考えられる。出土遺物については第78図2～14に示したとおりであり、台付甕の脚部、折り返し口縁を持つ壺形土器の口縁部、ボタン状貼付文を持つ壺形土器の胴上半部が出土

している。第８号溝はＪ－10・11、Ｉ－11、Ｈ－11・12、Ｇ－11・12グリッドにおいて確認された。規模は幅0.40m～0.70m、深さは最深部で0.45m、長さは20.8mを測る。これは第８号住居址もしくはピット群に伴うものと考えられる。出土遺物については第78図15～34に示したとおりであり、折り返し口縁を持つ壺形土器の口縁部、甕形土器の口縁部、台付甕の脚部など多くの遺物が認められた。第10号溝はＧ－12、Ｈ－11・12グリッドで確認されたものである。規模は幅0.25m～1.15m、深さは最深部で0.65mを測る。これは第２号ピット群に伴うものと考えられる。出土遺物については第79図５～８に示したとおりであり、ボタン状貼付文を持つ壺形土器の胴上半部、甕形土器の口縁部などが認められた。第15号溝はＥ・Ｆ－８グリッドで確認された。規模は幅0.19m～0.68m、深さは最深部で0.46m、長さは5.10mを測る。この溝は単独で確認された



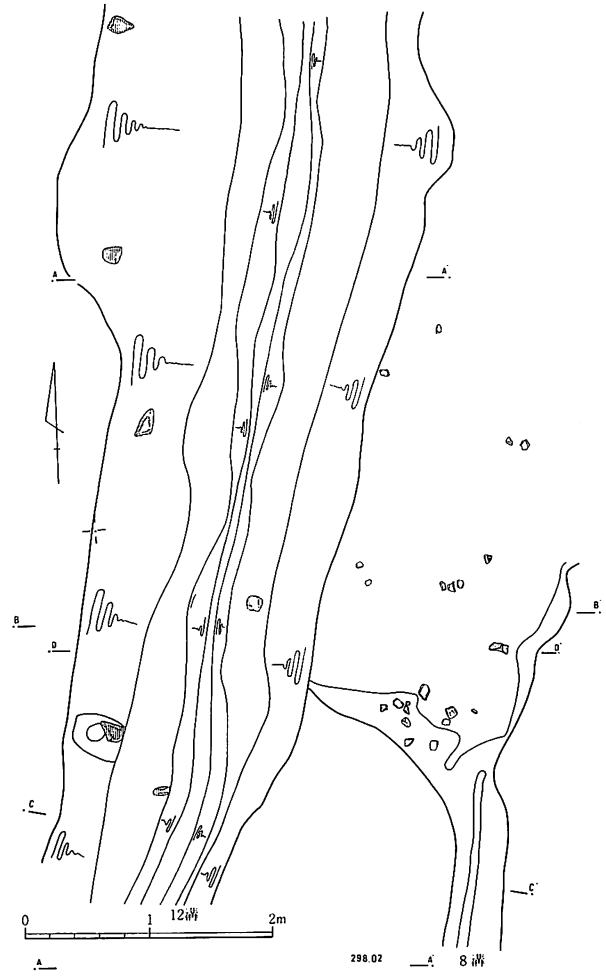
第74図　第７号溝

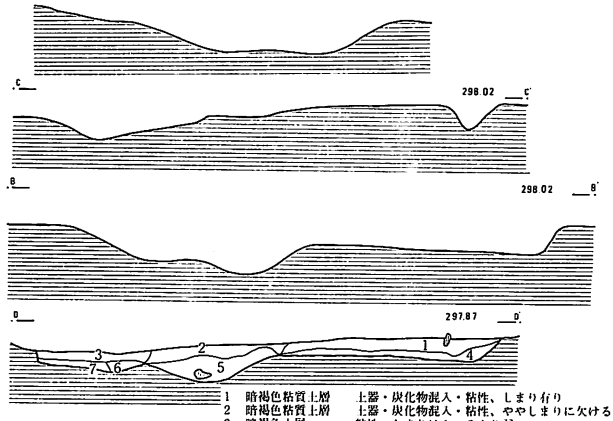


第75図　第８号溝、第１号ピット群

が、第14・15号住居址の周溝と主軸がほぼ同様であるため、これらの遺構に伴う可能性が示唆される。出土遺物については第79図19～22に示したとおりであり、壺形土器の頸部や底部などが認められる。

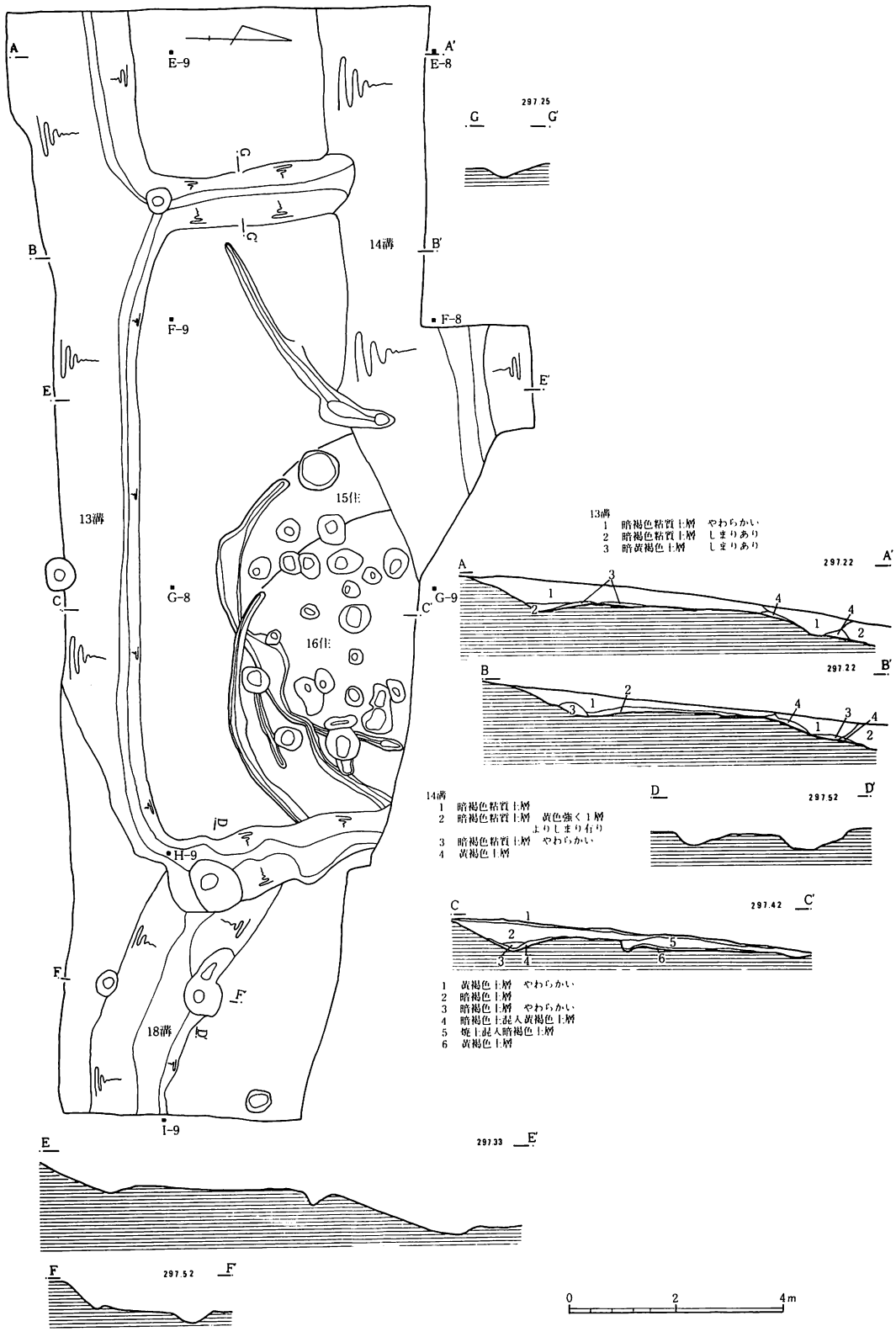
最後に第９号溝であるが、これはH・I－11グリッドに位置している。性格は不明である。時期は出土遺物から古墳時代前期前葉に位置づけられると考えられる。規模は幅0.30～0.60m、深さは最深部で0.45m、長さは3.60mを測る。出土遺物については第79図１～３に示したとおりであり、１のような北陸系模倣土器の小型甕で内外面が赤彩されたものや、埦形土器などが認められ、やや特殊性を持った遺構と考えられる。（野代）



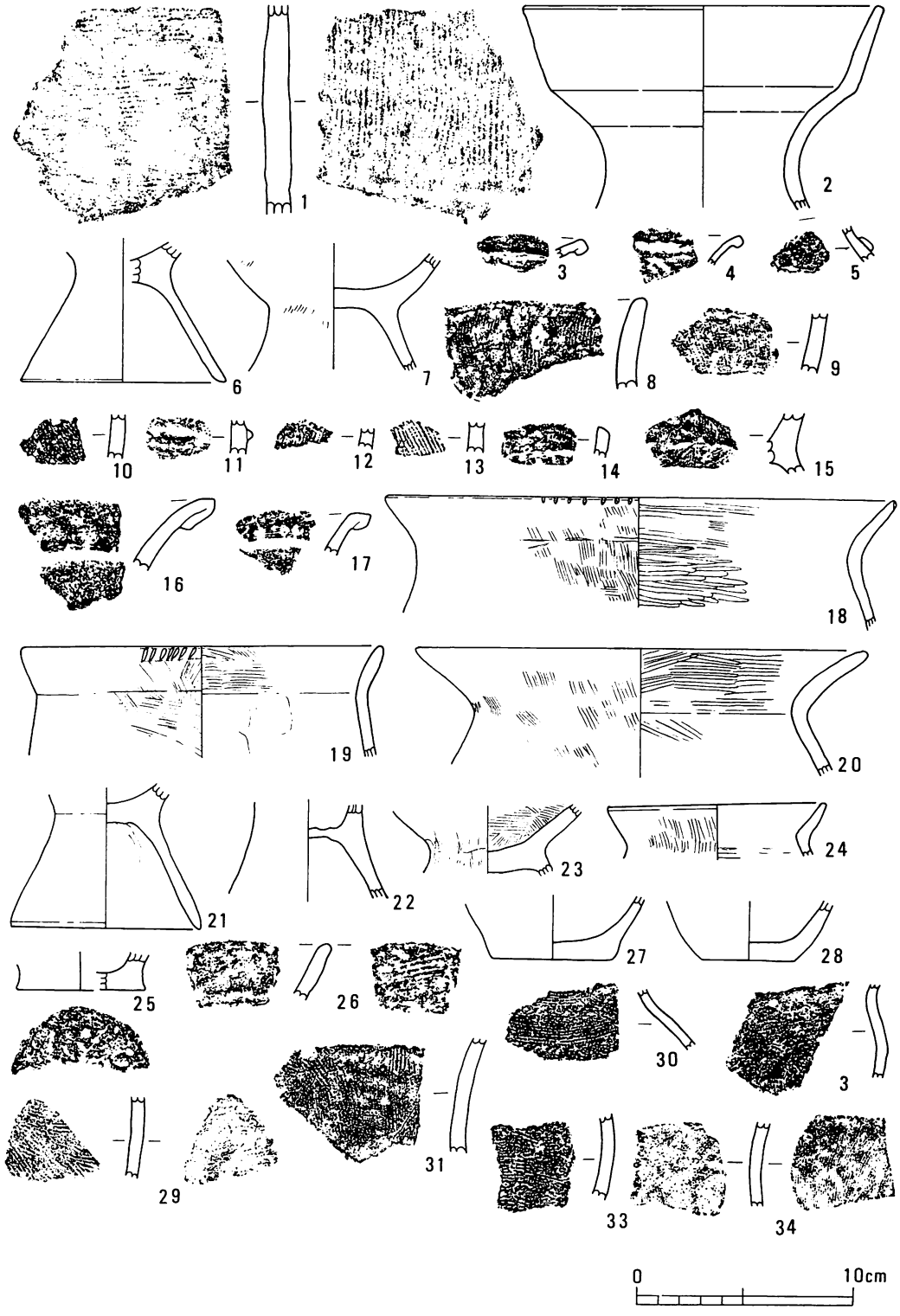


1	暗褐色粘質土層	土器・炭化物混入・粘性、しまり有り
2	暗褐色粘質土層	土器・炭化物混入・粘性、ややしまりに欠ける
3	暗褐色土層	粘性、しまりは1・2より弱い
4	暗黄褐色粘質土層	ロームブロックを含み、粘性、しまり強い
5	暗褐色土層	粘性、しまり有り
6	暗褐色土	粘性、しまりは最も弱い
7	黄褐色土層	ロームブロックを多量含む、しまりは弱い

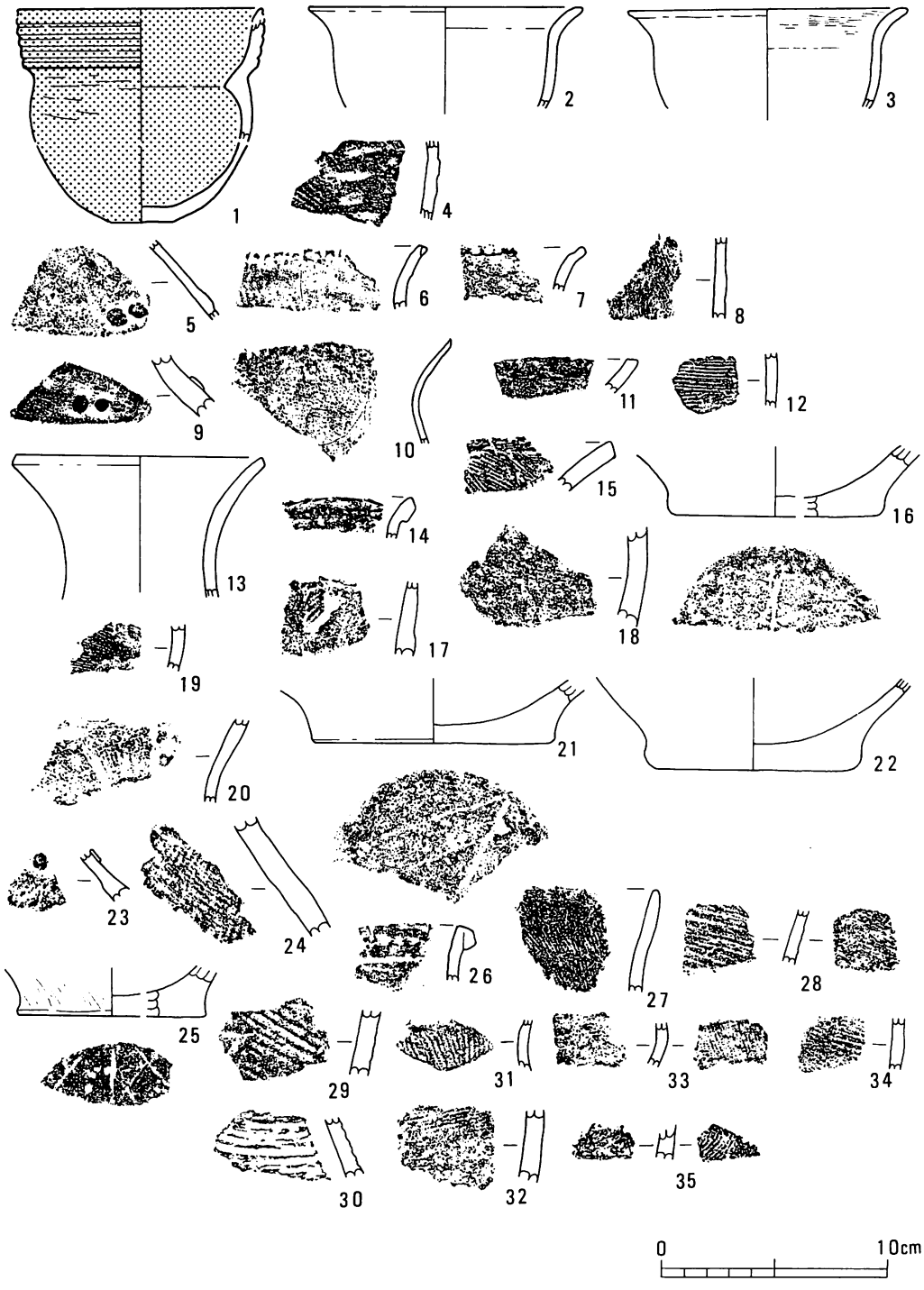
第76図　第7・12号溝



第77図　第13・14・15・18号溝


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
33
34
0
10cm

第78図　溝出土遺物(1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm

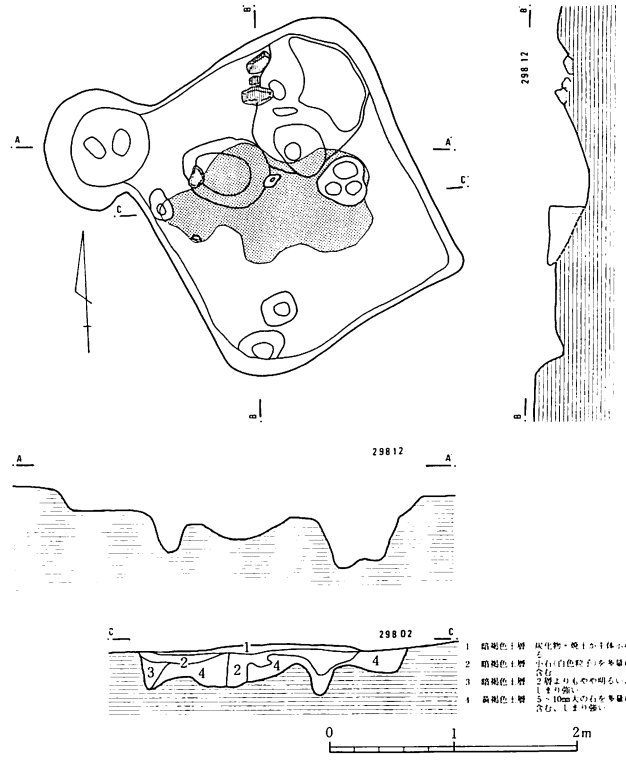
第79図　溝出土遺物(2)

第６節　竪穴遺構

竪穴遺構は、炉や柱穴などが伴わない竪穴遺構で、規模は土坑より大きく住居より小さく、覆土中に遺物や焼土があり、時代が特定できる遺構を呼称した。

第１号竪穴遺構（Ｅ・Ｆ－11グリッド）（第80図）

台地平坦部北西側の住居址群の外側に位置する遺構で、方形の竪穴遺構の北西コーナーに円形土坑の張り出しを持つ。方形竪穴は2.1×2.4mで、土坑は直径0.8mである。中央部確認面には1.7×0.9mの範囲に焼土層が広がり、その下層には暗褐色土が覆土となる。覆土中には弥生時代後期の土器片が若干含まれる。遺構底面は不定形なピットが随所に掘り込まれ、平坦ではない。



第80図　第１号竪穴遺構

第２号竪穴遺構（Ｐ－22グリッド）（第81図）

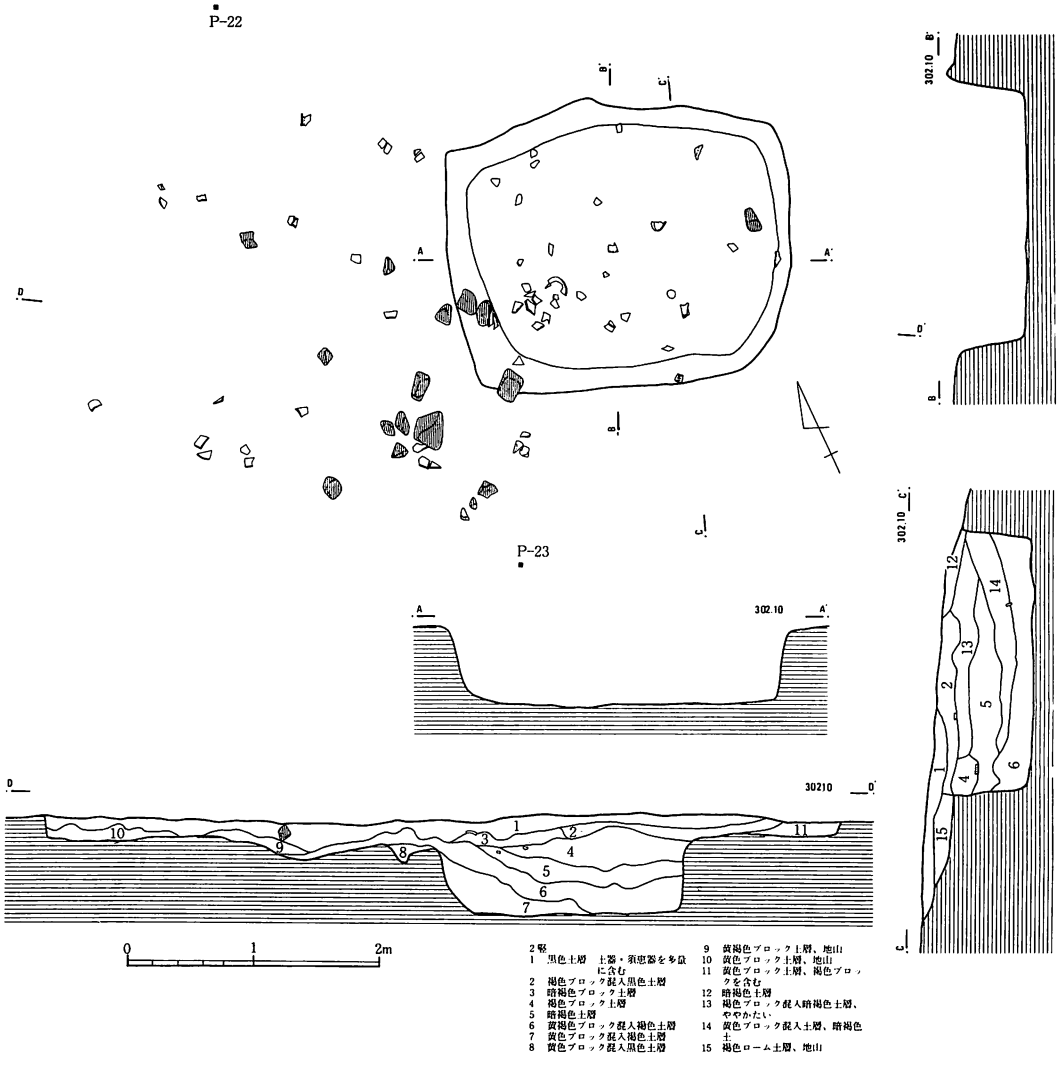
遺跡南東側の端に位置しており、周辺には住居址はなく、土坑などが若干分布する。この遺構が存在する周辺は、天地返しによって遺構が破壊されている。したがって、遺構を完全に近い状態で検出するのは困難である。本遺構も暗褐色で皿状の遺物包含層を、住居址の可能性を持って調査したところ、床面・立ち上がりなどが不明確な遺構となり、これの下に、方形の竪穴遺構が存在することが明らかになった。東西2.7m、南北2.3m、深さ0.8m、底面は平坦でピットなどは無い。この遺構がどのような遺構なのか結論は出ていないが、方形の落ち込みの上に、皿状の浅い落ち込みが掘られたもので、遺物は皿状の浅い遺構の中から出土したものが多い。方形竪穴遺構の覆土は、土があまり締まっておらず柔らかい。内部からの出土遺物は少なく、したがって、遺構の年代を特定することは困難である。方形の遺構は室状の施設と思われ、これに重複して、皿状の遺構が掘り込まれたものであろう。いずれにしてもこの遺構は新しい時期のものである。

遺物は皿状の遺構中に多く含まれ、弥生土器・古墳時代土師器・須恵器などが出土しているので、周辺から出土した遺物をまとめて廃棄したもののようである。

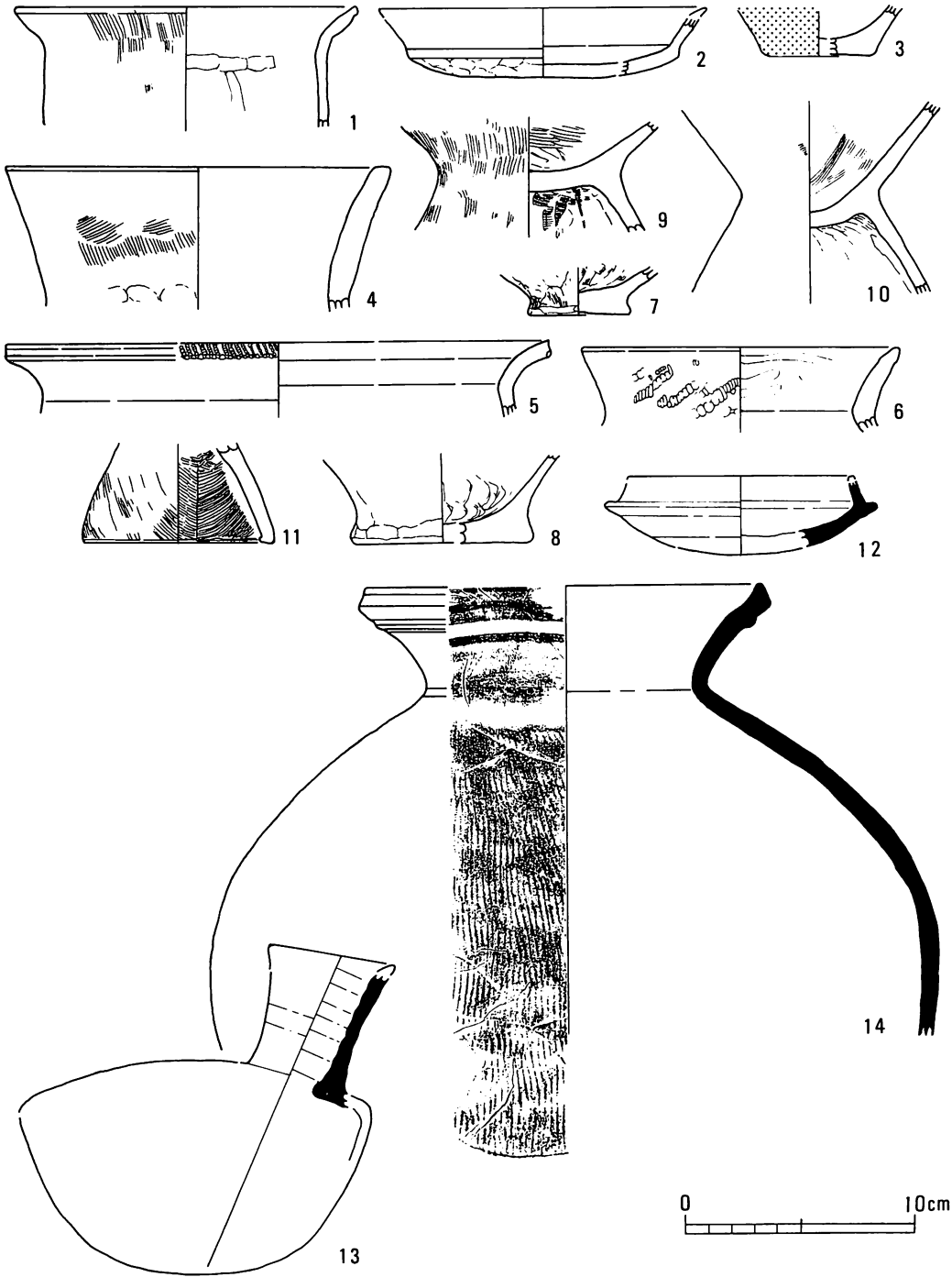
地権者や畑の植え替え作業を行った池谷建材の池谷喜久馬氏の話によれば、かつてこの地に古墳らしき盛土と石組があり、開墾の際取り壊し、重機により削平したという。出土遺物には弥生

時代の遺物の外に、須恵器の甕形土器や、平瓶・坏が出土していることからも、古墳が存在した可能性がある。さらに、第２号方形周溝墓北側の段差を形成している石垣の巨石は、古墳の側壁と見られる石材が含まれていた。

遺物　１は古墳時代土師器甕形土器である。外面には縦方向の刷毛目がみられ内面頸部には横篦削り痕がある。２は古墳時代後期の土師器坏である。３は赤彩された小型壺形土器の底部破片である。４は古墳時代土師器の壺形土器口縁部であろう。５～11は弥生時代の遺物と思われる。12～14は須恵器で、12の坏は受け部が水平に突き出し、口縁部はやや内傾している。13は平瓶頸部・口縁部、14の甕は頸部より胴部中央にかけて、平行叩目が見られる。内面は整形痕が丁寧に撫でて消されている。須恵器は中村編年（中村　浩　1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房）のII－４期であり、６世紀中葉～後半の年代が得られる。遺物の出土状態は規則性が認められない。（末木）



第81図　第２号竪穴遺構

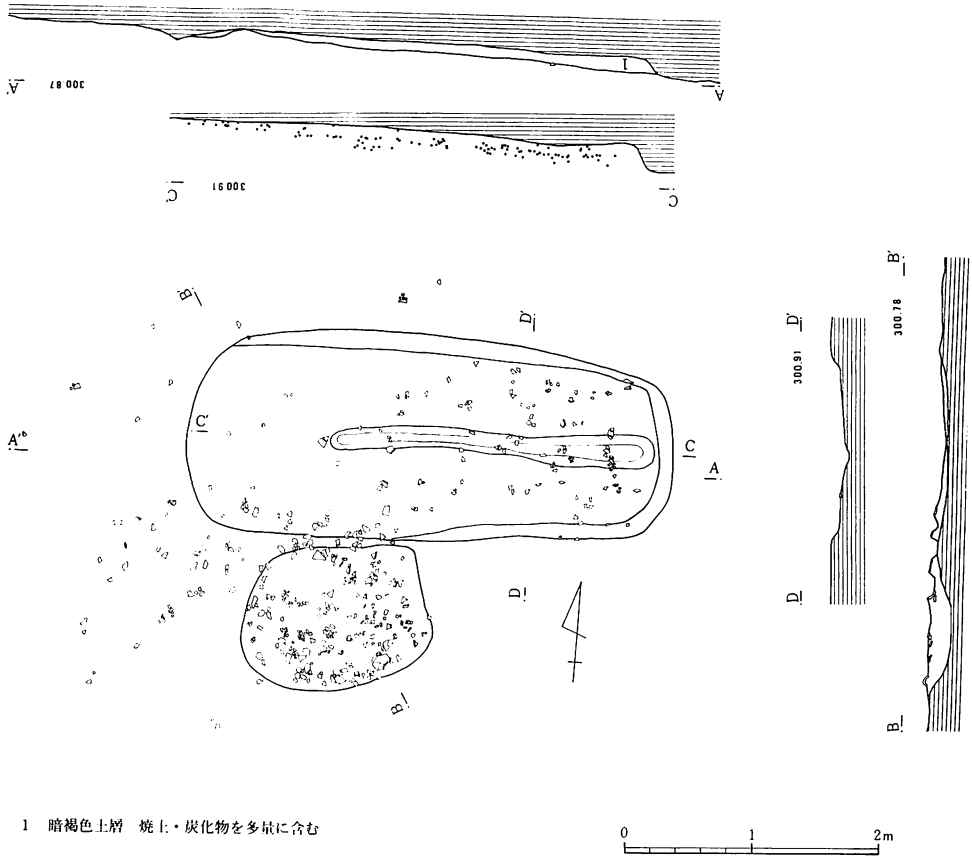


第82図　竪穴遺溝出土遺物

第７節　土器焼成遺構（Ｇ・Ｈ－22グリッド）（第69・83図）

遺跡南西側の平坦面端に位置し、緩やかな西斜面を長方形に浅く掘り込んだ遺構である。等高線と直角方向に主軸をおかれ、その長さは４ｍ、幅（東）1.3m（西）1.6mである。東側の台地平坦面方向は、掘り込みが0.20m程認められるが、床面がほぼ水平に造られているため、西側の壁は削平されて現存しない。遺構中央に、主軸に沿って幅0.20～0.25m、深さ0.05～0.10mの浅い溝が掘り込まれている。覆土には大量の土器片と、焼土・炭が含まれ、底面も焼成を受けて焼けた痕が認められる。たくさんの土器片には一括遺物が含まれてはいないが、破片を見ると、片面が橙色や赤色の生焼け状態の破片が多く、同様の遺物は隣接の第４号住居址覆土にまで含まれている。なお、本遺構の南に接して南北1.1m、東西1.5mの土坑があるが、付属施設ではないかと考えている。深さは0.20m程度の皿状断面を呈し、覆土には土器片が多量に詰まっている。

遺物　小破片で図示できるものはないが、弥生時代後期末の破片で、前述したように土器の片面が酸化して赤色であり、片面が還元され灰色を呈するものが多い。第69図８～15は土坑出土の遺物である。弥生時代後期の壺・甕形土器破片で、折り返し口縁や棒状浮文を縦に貼付した複合口縁部、羽状刺突文の口縁部の壺形土器破片や刷毛目痕の甕形土器破片が出土している。（末木）



1　暗褐色土層　焼土・炭化物を多量に含む

第83図　土器焼成遺構

第8節　包含層出土遺物

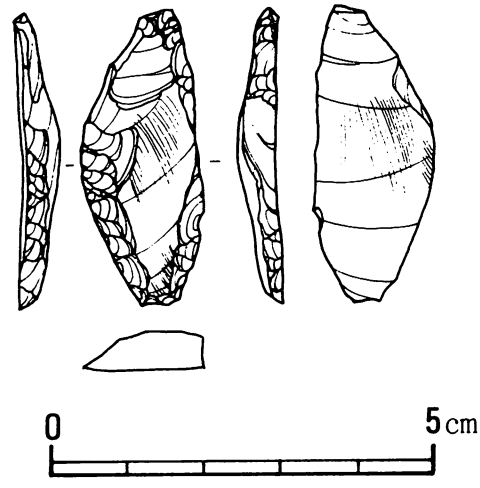
1．旧石器時代の遺物

これらの遺物は包含層から確認されたものではなく、遺構の覆土や周辺の遺構確認時に発見されたものである。ナイフ形石器は旧石器時代の産物として特徴を兼ね備えているものである。剝片類についてもほぼ同時期に属する可能性が考えられる。

ナイフ形石器（第84図）

これは第2号方形周溝墓南東部の溝の覆土内より発見されたものである。切断技法による両縁調整で整形されている。基部の左側上端部分と下部の先端付近が欠損し、右側縁辺部が欠落していることが観察できる。器長は3.8㎝、器幅1.6㎝、器厚0.4㎝を測る。石材は黒曜石である。

周辺遺跡からの出土例は、上の平遺跡でナイフ形石器などが確認されているが、本資料も上の平遺跡の資料と同様に、東京・武蔵野台地編年でいう第IIb亜文化期に相当するものと考えられるが、若干新しい時期に属するものと考えられる。（野代）



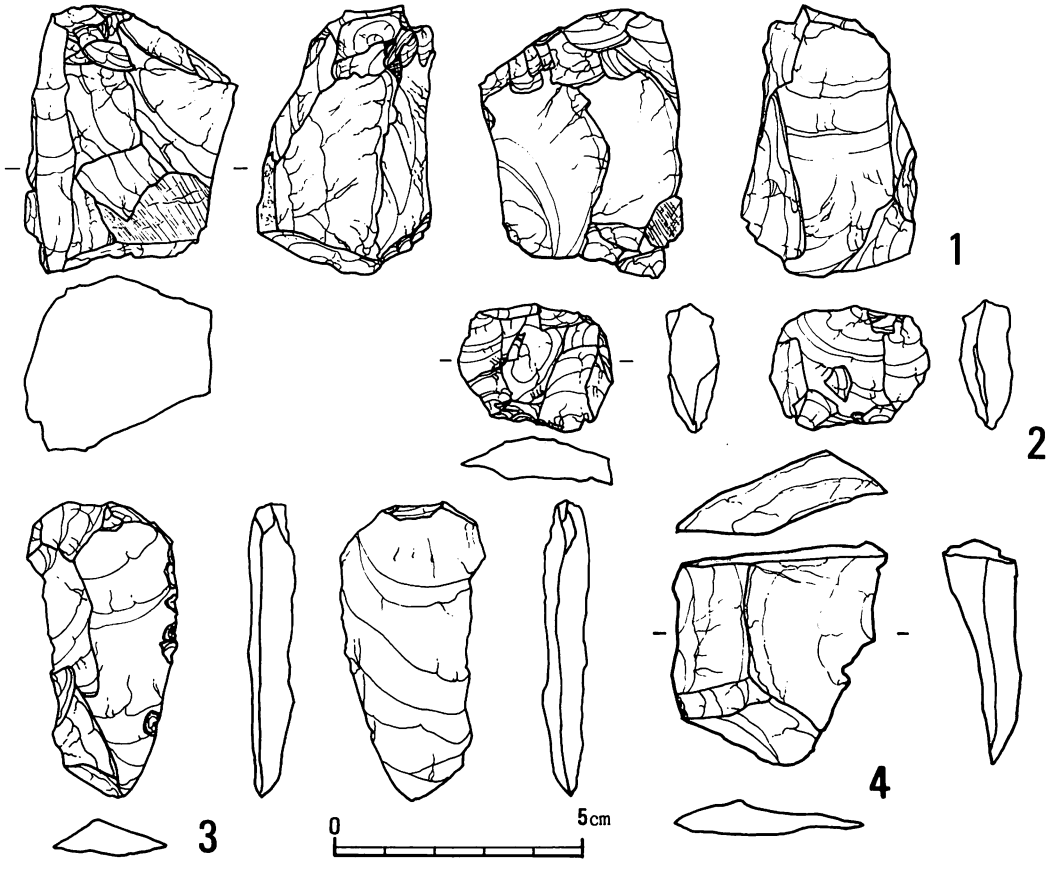
第84図　ナイフ型石器実測図

石器一括資料（第85図）（第5表）

調査区の第2号方形周溝墓より石核、使用・加工剝片を含む多量の剝片資料が検出された。本資料は第2号方形周溝墓の周溝部の覆土全体にわたり検出されたため所属する時代を特定することはできない。しかし、周溝がローム層まで抉り込んでいることや、剝片に対しての使用痕跡が窺えることから、計測表のみであるが報告するかたちをとった。

石器については砕片の割合が多く、全体的に加工痕・使用痕の観察できるものが僅かに存在するのみで石器は認められないし、石核とよべるものは3点で凝灰岩のみに見られるのが特徴である（第85図1）。石材としては粘板岩が圧倒的に多く、次いで凝灰岩・黒曜石となる。ただし黒曜石は砕片が多く計測表には現れない。

計測表作成にあたり単位は長さ・幅・厚さ㎜、重量はgとし、カッコ付きの数値は折損を意味する。また、砕片は計測の対象から省いた。（宮里）



第85図　石器一括資材

第５表　石器計測表

石材：粘（粘板岩）　泥（泥岩）　頁（頁岩）　凝（凝灰岩）

遺物No.	器種	長さ	幅	厚さ	重量	先端角	欠損部位	打面	自然面	石材	備考
1	剥片	(51.0)	56.0	11.9	37.5	—	先端部	有	無	粘	
2	剥片	(36.0)	59.5	9.2	20.5	—	先端部	有	無	粘	
3	剥片	41.0	(23.5)	11.0	12.2	—	右側縁	有	無	粘	節理破損
4	剥片	(46.0)	33.0	14.0	17.6	78.0	基部	無	無	粘	
5	剥片	(24.5)	39.1	10.5	10.2	—	先端部	有	無	粘	
6	剥片	37.5	38.0	8.5	8.3	74.0	完形	有	無	泥	
7	剥片	(30.5)	26.5	11.5	8.8	—	先端部基部	無	無	泥	
8	剥片	27.1	45.5	12.0	11.1	116.0	完形	有	無	粘	
9	剥片	(34.1)	(22.0)	13.0	9.4	—	—	無	無	粘	
10	剥片	29.0	30.0	8.3	6.5	—	完形	有	無	粘	
11	剥片	25.5	41.5	6.1	5.3	64.0	完形	有	無	粘	
12	剥片	27.3	27.9	5.5	3.7	105.0	完形	有	無	粘	
13	剥片	(25.5)	20.6	5.8	3.4	70.0	基部	有	無	粘	
14	剥片	(18.1)	18.0	3.7	1.1	57.0	基部	有	無	粘	
15	剥片	29.0	30.1	5.0	4.1	66.0	完形	有	無	粘	
16	剥片	(17.0)	31.0	7.0	3.3	—	—	有	無	粘	
17	剥片	(18.0)	24.1	5.9	2.4	—	先端部基部	無	無	粘	
18	剥片	20.0	(29.0)	3.2	2.2	—	右側縁	無	無	粘	
19	剥片	(22.0)	(18.5)	5.5	4.0	—	右側縁	無	無	粘	
20	剥片	(18.9)	25.5	3.0	1.6	68.0	基部	無	無	粘	
21	剥片	22.0	17.5	6.1	1.7	63.0	完形	有	無	粘	
22	剥片	(19.1)	34.1	10.0	5.4	104.0	基部	無	無	粘	使用痕
23	剥片	44.9	50.8	6.5	16.2	63.0	完形	有	無	粘	
24	剥片	16.5	51.6	6.9	6.9	—	完形	有	無	粘	
25	剥片	(31.9)	(27.9)	10.1	11.3	—	基部両側縁	無	有	片	二次加工痕
26	剥片	32.1	(26.5)	5.5	5.3	—	右側縁	有	無	粘	
27	剥片	(24.0)	46.8	9.2	10.3	—	先端部	有	無	粘	
28	剥片	(30.2)	(18.5)	6.9	3.4	—	—	有	無	粘	
29	剥片	28.0	45.0	5.0	7.1	—	完形	有	無	粘	
30	剥片	(43.6)	23.9	9.0	9.1	—	基部	無	有	粘	
31	剥片	(20.1)	28.0	3.9	1.8	80.0	基部	無	無	凝	
32	剥片	(19.5)	(32.0)	3.9	2.6	—	基部両側縁	無	無	凝	
33	剥片	24.1	21.9	6.5	2.3	72.0	完形	有	無	凝	
34	剥片	(17.5)	29.1	11.0	3.9	—	先端部基部	無	無	凝	
35	剥片	(14.0)	26.8	6.5	2.7	—	先端部基部	無	無	凝	
36	剥片	31.1	22.5	5.9	3.3	68.0	完形	有	有	凝	
37	剥片	13.5	20.0	1.2	0.4	—	完形	有	無	凝	
38	剥片	(19.5)	41.5	6.9	4.0	—	先端部基部	無	無	粘	
39	剥片	18.9	20.5	7.9	4.0	—	完形	有	無	凝	
40	剥片	22.0	31.0	6.0	5.5	—	完形	有	無	粘	
41	剥片	(19.0)	26.5	6.0	3.0	—	基部	有	無	粘	
42	剥片	(20.5)	35.5	6.0	5.1	—	先端部基部	有	無	凝	
43	剥片	44.0	(19.1)	11.9	7.4	—	基部	無	無	粘	二次加工
44	剥片	(43.0)	(36.5)	14.0	18.2	—	—	無	無	凝	節理破損
45	剥片	(40.1)	(27.1)	6.1	6.3	—	先端部	有	無	粘	二次加工
46	剥片	(15.0)	(33.9)	15.4	6.6	—	先端部	有	無	凝	
47	剥片	(37.7)	32.0	12.0	11.8	—	基部	無	無	凝	使用痕
48	剥片	(49.5)	(19.5)	10.8	14.8	—	両側縁	無	無	凝	タール付着
49	剥片	(41.0)	(50.0)	11.9	24.4	—	—	有	無	凝	側縁二次加工
50	剥片	(48.5)	40.0	14.5	26.9	—	基部	無	無	頁	使用痕
51	石核	33.4	54.0	16.5	23.2	—	—	無	無	凝	
52	石核	44.0	49.4	26.0	55.4	—	—	無	無	凝	
53	石核	36.6	53.7	32.1	85.2	—	—	無	無	凝	

2．縄文時代の遺物

土器（第86～88図）

当遺跡から発見された縄文時代の遺物は早期～後期にかけてのものである。

縄文時代の土器は以下のように分類した。

第Ⅰ群　早期前半　押型文系土器

第Ⅱ群　早期後半　貝殻条痕文系土器

第Ⅲ群　早期末葉　貝殻腹縁圧痕文・押圧縄文系土器

第Ⅳ群　前期後半　諸磯式土器

第Ⅴ群　前期末葉～中期初頭

第Ⅵ群　後期後半

第Ⅰ群　早期前半　押型文系土器（第86図１～３）

縄文時代早期前半の押型文系土器を一括する。これらは全て第２号方形周溝墓の溝内より出土したものであるが、同一個体ではない。色調は黄褐色で、胎土に雲母を多く含む。１・２は胴部破片で、いずれも山形文が横位に施文されている。３は口縁部破片で、楕円文が横位に施文されている。

第Ⅱ群　早期後半　貝殻条痕文系土器（第86図４）

縄文時代早期後半の貝殻条痕文系土器を一括する。これは第２号方形周溝墓の溝内より出土したものである。色調は赤褐色で、胎土に繊維と雲母を含む。４は胴下半部破片で、条痕文が横位に施文されている。茅山式期に位置づけられるものと思われる。

第Ⅲ群　早期末葉　貝殻腹縁圧痕文・押圧縄文系土器（第86図５～11）

縄文時代早期末葉の貝殻腹縁圧痕文・押圧縄文を施す土器を一括する。これらの大部分は第２号方形周溝墓の溝内より出土したものである。色調は大部分のものが赤褐色で、一部黄褐色を呈するものもある。胎土には白色鉱物を多く含む。資料は全て胴部破片である。５～８、９・11は貝殻腹縁圧痕文による連続山形文を施すものである。９は押圧縄文による連続山形文を施すものである。これらの土器群は、東海編年でいう石山・天神山式段階に比定されるもので、関東では打越式に該当するものである。

第Ⅳ群　前期後半　諸磯式土器（第86・87図12～60）

縄文時代前期後半の諸磯ａ～ｂ式土器群を一括する。これらの大部分は第２号方形周溝墓の溝内より出土したものである。割裁竹管状工具によって施文されたもの。

第１類（12～18）諸磯ａ式

細目の割裁竹管状工具によって施文された押し引き状の連続爪形文による肋骨文等を施した

もの。16には隆起線がめぐり、この隆起線上に刻みが施される。

第２類（19～44）諸磯ｂ式

第１種　爪形文（19～27、28・38）

細目の割裁竹管状工具によって施文された押し引き状の連続爪形文で、曲線や直線で文様が構成される。19～27は深鉢の胴部破片である。28・38は浅鉢の胴部破片であるが、38の方が新しい段階のものである。

第２種　集合沈線文（29～33、36・37、39～44）

縄文や無文地の上に、割裁竹管状工具や棒状工具による集合沈線で、曲線や直線で文様が構成される。29は浅鉢の胴部破片である。その他のものは深鉢の口縁部や胴部破片である。42は（新）段階のものである。

第３類（45～60）諸磯ｃ式

第１種　集合沈線文（46～56）

割裁竹管状工具によって施文された集合沈線を地文とし、ボタン状の貼付文を施したもの。

第２種　爪形文（45、58～60）

45は割裁竹管状工具によって施文された押し引き状の連続爪形文と、ボタン状の貼付文を施したもの。58～60は割裁竹管状工具によって施文された押し引き状の連続爪形文を、渦状もしくは弧状に施したもの。

第３種　結節状沈線文（57）

割裁竹管状工具によって施文された渦巻文と、ボタン状の貼付文を施したもの。

第Ⅴ群　前期末葉～中期初頭（第87図61～117）

第１類（61～82）鍋屋町式系〔山口　明1984〕を一括した。

第１種　平行集合沈線文を施したもの（61～63）

扇平Ⅱ類、日向Ⅱ式、桜沢式などに該当するものである。また鍋屋町Ⅰ式との関連性が指摘されているものである。

第２種　平行沈線文に三角印刻文を施したもの（64～66）

扇平Ⅱ類に属する。

第３種　平行沈線文に三角印刻文を施したもの（67～70）

扇平Ⅲ類、籠畑Ⅱ式に該当し、鍋屋町Ⅰ式との関連性が見られるものである。

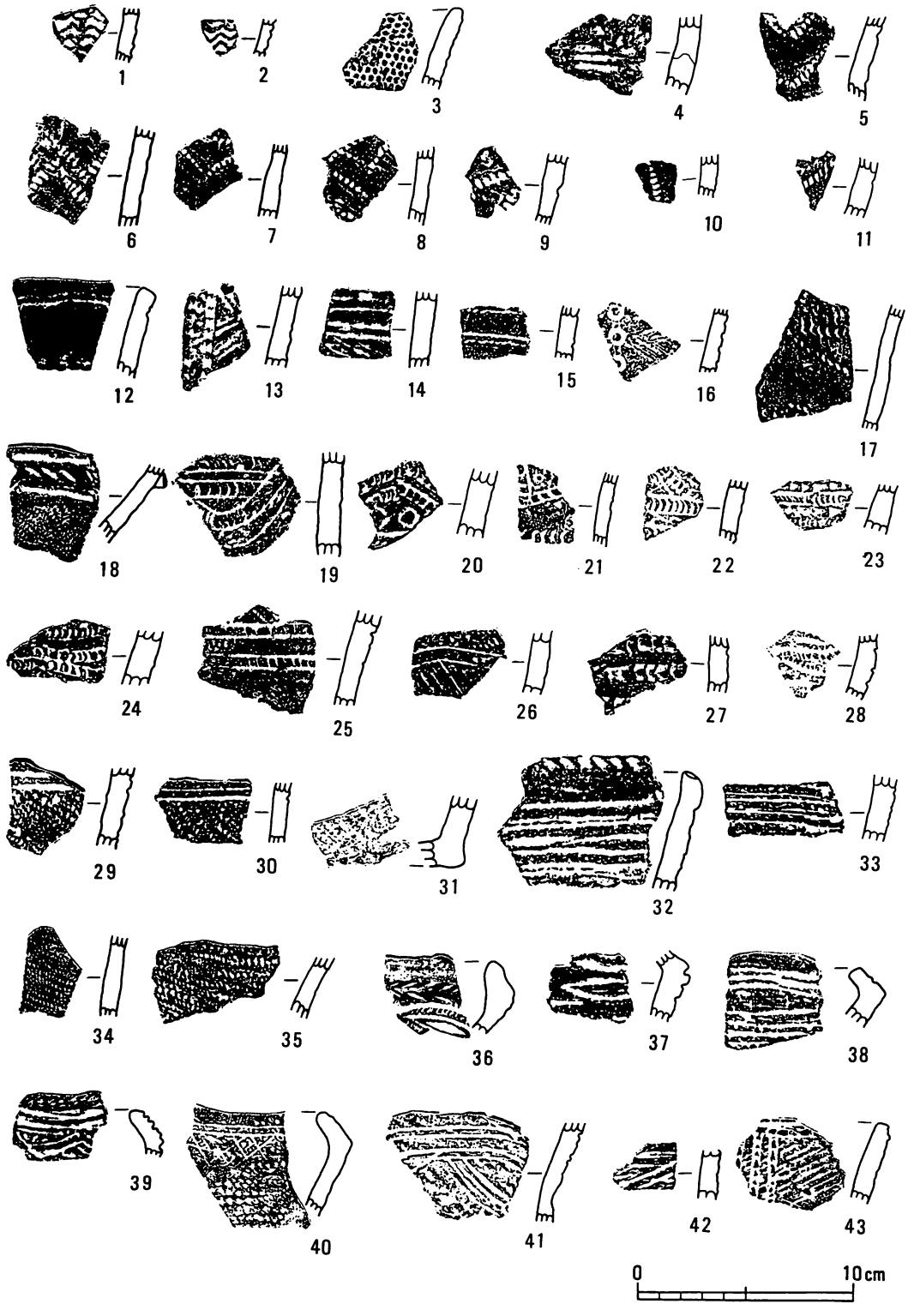
第４種　結節状沈線文に三角印刻文を施したもの（71～79）

扇平Ⅲ類に属する。第３種と同様に鍋屋町Ⅰ式との関連性が見られるものである。

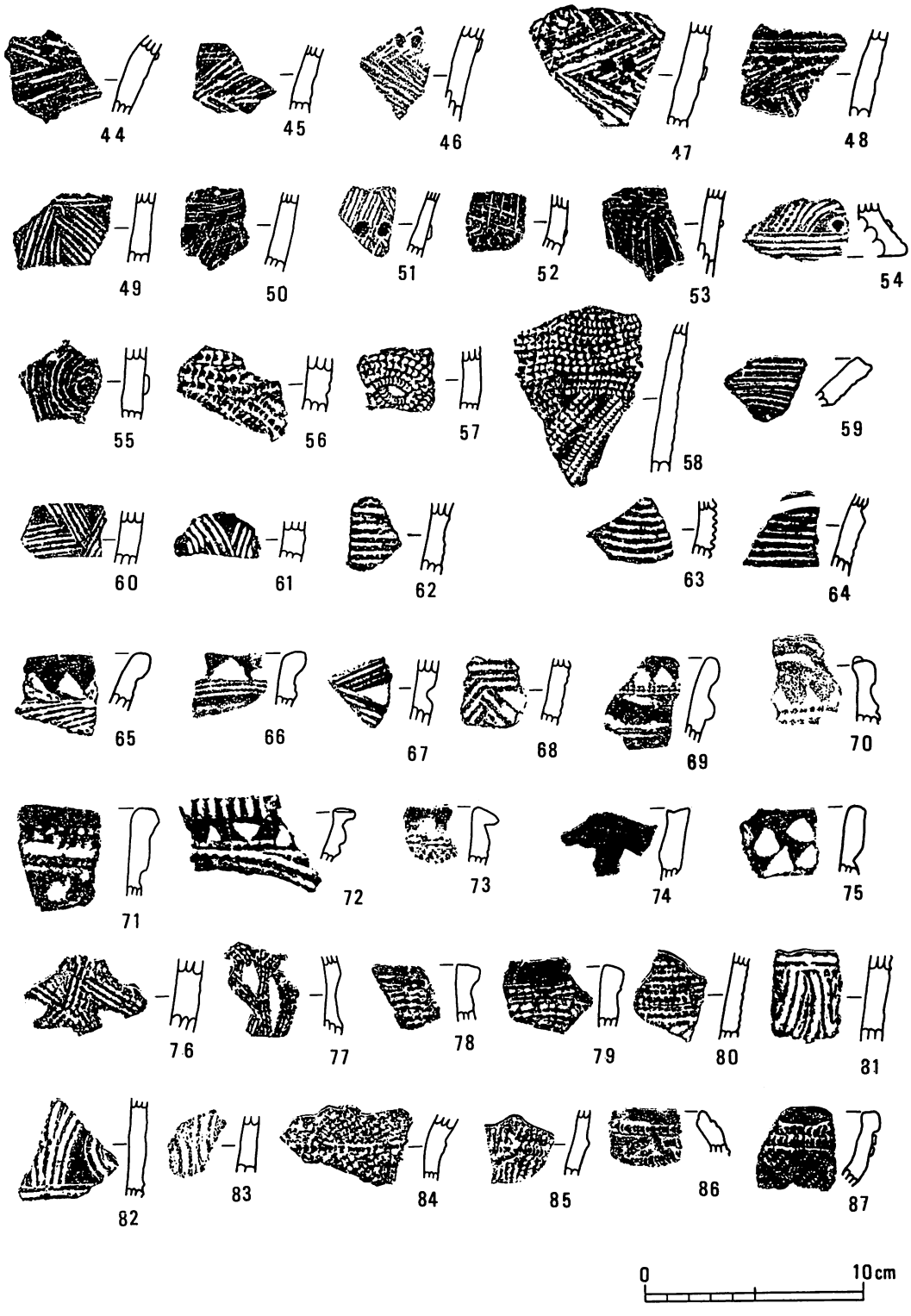
第５種　結節状沈線文を施したもの（80～82）

第６種　平行沈線によって弧状モチーフが描かれている。（83～85）

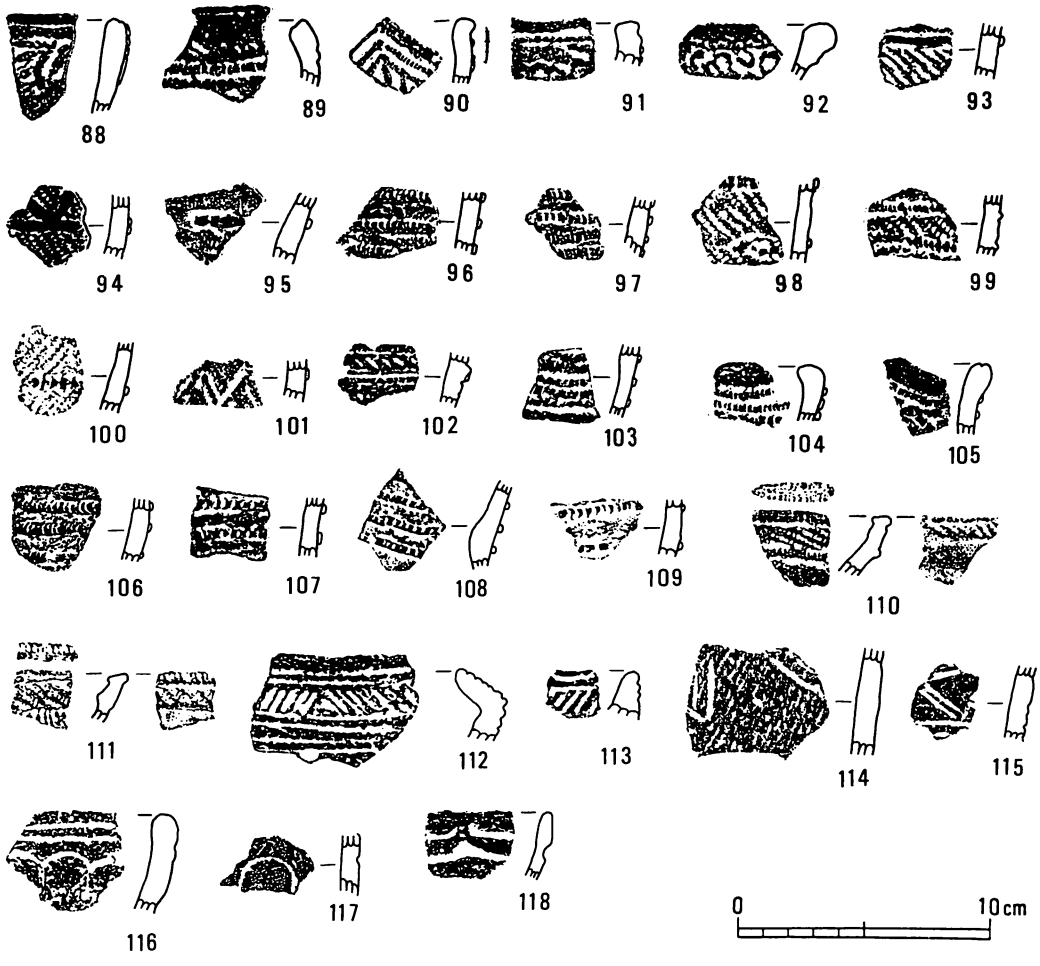
胴下半部の資料であるため、全体的な特徴については不明であるが、大洞１群３種にほぼ該当するため、口縁部分には耳状突起が付き、胴上半部には押圧隆帯文が貼


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
10cm

第86図　縄文土器(1)


44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
0
10cm

第87図　縄文土器(2)



第88図　縄文土器(3)

付されていた可能性が示唆される。

在地系のこの独自タイプのものについては、晴ヶ峰式の名称が用いられている。

第２類（86～109）十三菩提式を代表するものである。

第１種　（86～103）　縄文地に浮線文を施すもの

室ノ木２群Ｄ類がこれに属する。

ａ結節浮線文で施文するもの（34・35、86～91、95～109）

ｂ無節浮線文で施文するもの（92～94）

第２種　（104～109）無文地に浮線文を施すもの

室ノ木２群Ｃ類がこれに該当する。

ａ結節浮線文で施文するもの（104～109）

第３種　（110・111）大歳山式（畿内系）

口縁部２点であるが、同一個体ではない。これらの土器は薄手の作りで、白色粒子を多く含み、縄文地に結節浮線文を貼付する所謂大歳山式土器が示す特徴と同様である。110は内

側に折り返し口縁状の肥厚帯を設け、この肥厚帯の下部にＲＬの縄文が施されている。また外面においてもその地文にＲＬの縄文を施す。口唇部の内側に施された結節を表出する刺突は「Σ」状に加工された竹管工具によって施文されたものである。外面に施された浮線文の結節を表出する刺突は円形の「Ｃ」状に加工された竹管状工具によって施文されたものである。内面の調整はナデ付けで、断面は「く」の字状にを呈し、内湾状に立ち上がっている。111は110とほぼ同様に施文されているが、外面には浮線が貼付されず、円形の「Ｃ」状に加工された竹管状工具によって爪形文が施されている。

第４類（112～117）五領ヶ台式併行

112・113は、割裁竹管状工具によって施文された平行沈線で斜状のモチーフを施す口縁部破片。114・115は、縄文地に割裁竹管状工具によって施文された平行沈線で「Ｙ」・「Ｖ」字状の文様が施された胴部破片。116・117は、棒状工具によって施文された沈線で連続した小規模な弧線文が施された口縁部と胴部破片である。これらは狢沢式に近いものであり、中期初頭の末葉段階に位置づけられるものである。

第Ⅵ群　後期後半（第88図118）

僅かに１点認められた。棒状工具によって平行沈線が施されている。　（野代）

参考文献

会田　　進　『扇平遺跡』岡谷市教育委員会（1974）
山口　　明　「中部地方における前期末葉土器群と鍋屋町土器」（『長野県考古学会誌48』、1984）
国学院大学　『あざみ野遺跡』（1986）
中村　善則　「播磨大歳山遺跡１－縄文土器－」（『研究紀要』第３号、神戸市立博物館、1986）
㈶京都府埋蔵文化財センター　『志高遺跡』京都府遺跡調査報告書　第12集、（1989）
三上　徹也　「大洞遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１』（㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書１、1987）

石器（第89～96図）（第６・７表）

石器はすべて包含層から出土したものである。この内訳は、石鏃76点、石錐５点、石匙８点、横長剝片石器４点、石篦１点、掻器５点、両極石器２点、小剝離のある剝片５点、礫器１点、打製石斧７点、磨石20点、砥石１点、凹石６点、石皿１点、台石１点、その他石製品２点が出土している。

石鏃（第89・90図１～76）　時期は問わず石鏃に類するものを一括した。基部の形状から無茎鏃（１～62、67～70、72～76）と有茎鏃（64・65）に分類される。これらの中には凹基、平基、凸基のものが存在する。無茎鏃の凹基類（１～16、21～37、41～60、62・63）は65点、無茎鏃の平基類（19・20、67～69、72）、無茎鏃の凸基類（17・61・66・70）で、有茎鏃は２点とも凹基類に属するものである。この内、基部が欠損していて分類不可能なものが４点である。無茎鏃の中には、縄文時代早期の押型文系土器に伴うことで知られている鍬形鏃（１～５）や、先端部分の欠損に伴い再加工を施したもの（38～40）、未製品（73～76）も見られる。石材は、チャート

2点、頁岩1点、水晶1点、凝灰岩2点、石英1点、その他のものはすべて黒曜石製で、全体の9割以上を占めている。

石錐（第90図77～81） 錐として機能が見られるものを一括した。形状としては、つまみ状のものを持つもの（77～79・81）と、棒状のもの（80）とに大別できる。77と80は先端部分を欠損している。78と79は先端部分に磨耗痕がみられる。石材はチャート1点の他はすべて黒曜石である。

石匙（第90・91図82～89） 形状から縦型（82～86）、横型（87～89）に分類できる。全体的に刃部に磨耗痕が認められ、欠損したものが多い。石材はチャート2点、頁岩2点、砂岩2点、泥板岩1点、粘板岩1点とバラエティーにとんでいる。

横長剝片石器（第91・92図90～93） 横刃形石器などと呼ばれるものも含む、曲刃と直刃のものがある。石材は、泥板岩2点、頁岩1点、砂岩1点である。

石箆（第92図94） 箆状石器とされるものである。片面を主体に調整が加えられている。石材は、凝灰岩である。

掻器（第92図95～99） いわゆる二次加工のある剝片石器を一括する。小型のものが多い。石材は黒曜石3点、頁岩2点である。

楔形石器（第92図100・101） ピエスエスキーユと呼ばれているものである。両極打法により、対峙する辺につぶれたような剝離痕（両極剝離痕）を持っている。石材は、2点とも黒曜石である。

小剝離のある剝片（第92図102～106） 定形的な石器からはずれる不定形石器で、刃部と思われる小剝離が見られるものを一括した。石材はすべて黒曜石である。

礫器（第93図107） 礫の一部に打撃を加えて、簡単な加工を加えたものである。形態的には縄文時代早期にみるものとほぼ同様であることから、該期に属する遺物の可能性が考えられる。石材は頁岩である。

打製石斧（第93図108～114） 7点中4点が欠損品である。形態的にはすべて短冊形に属するものであろう。石材はホルンフェルスと砂岩である。

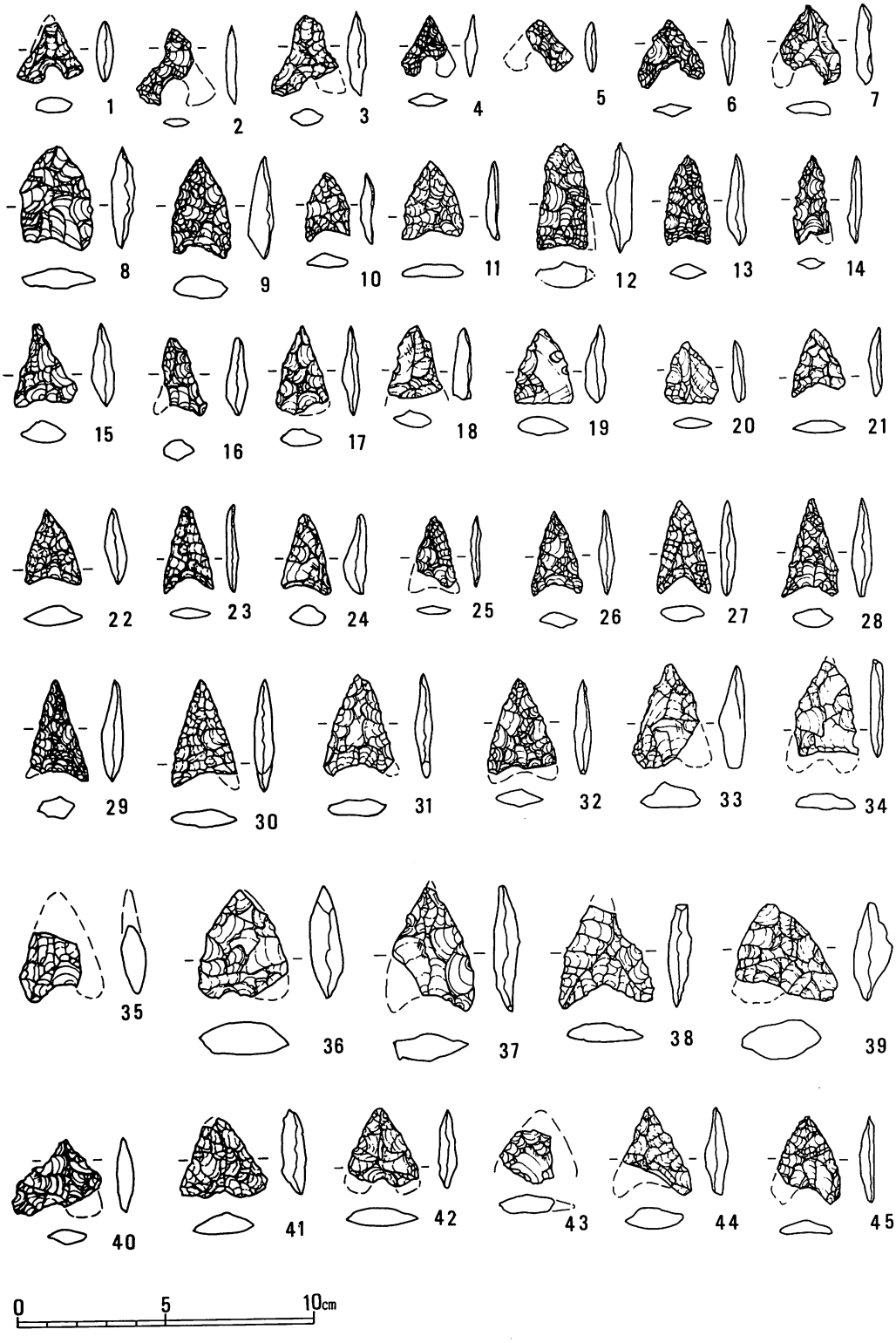
磨石（第94・95図115～134） 使用形態から7分類できる。正面及び側面（115・118・126・127・132・133）、正面のみ（118・121）、側面のみ（116）、両面（117・121・123・124）、ほぼ全面（120・128・129・130・131）、両側面（125）を使用したものと、凹を伴うもの（134）である。石材は、砂岩10点、花崗岩10点、凝灰岩1点、閃緑岩1点、石英質砂岩1点、堆積岩系1点で、砂岩と花崗岩が圧倒的に多く存在する。

砥石（第95図135） 板状のものである。表面は風化に伴う部分的な剝離が認められるが、表面及び側面には擦痕が認められる。石材は頁岩である。所属時期は不明。

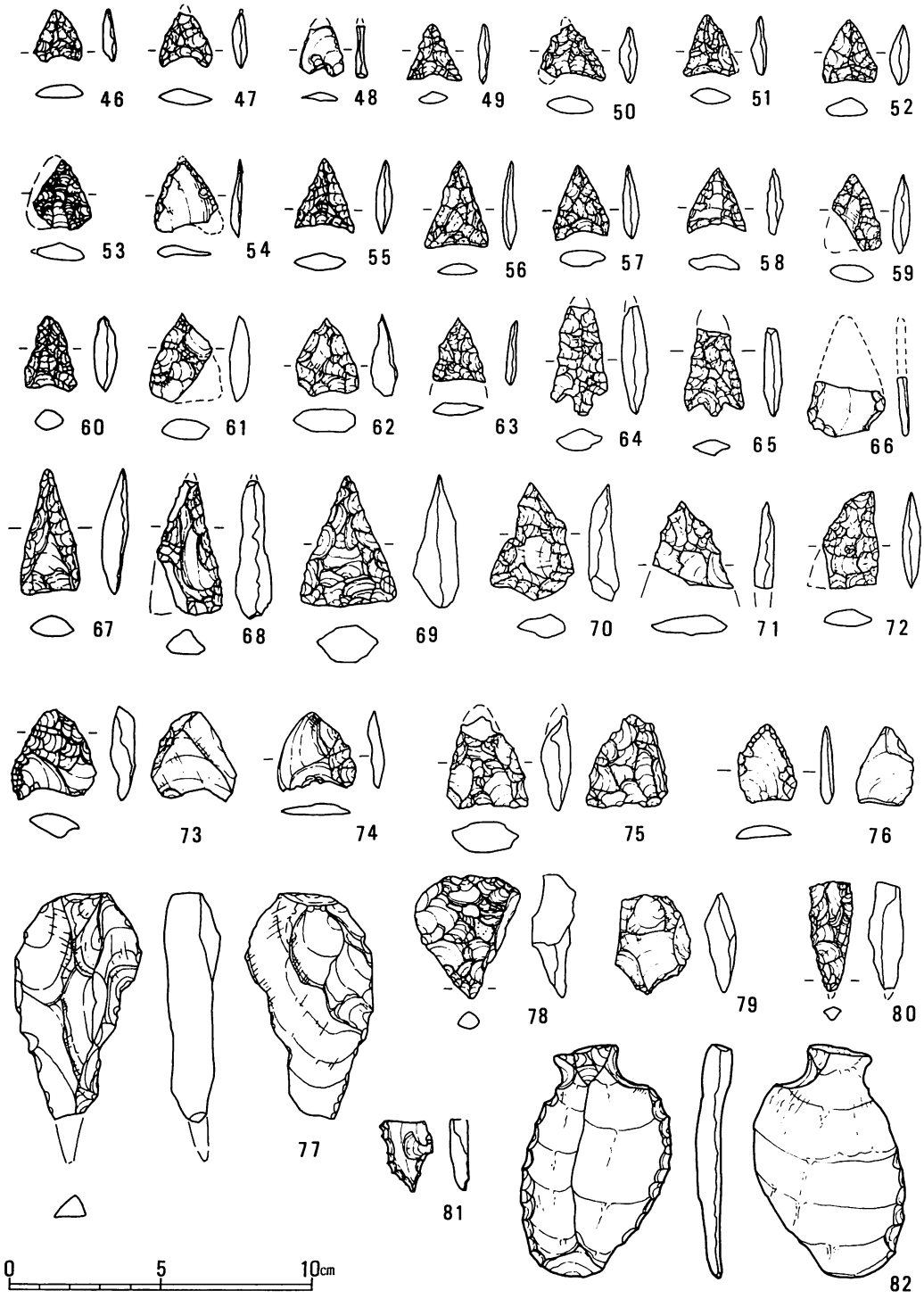
棒状石器（第95図136） 石器加工用の調整工具と思われるもので、先端部には打痕が認められ、側面には擦痕がみられる。石材は凝灰岩である。

凹石（第96図137～142） 両面に凹が存在するのは138と140である。他のものは片面のみである。石材は安山岩3点、砂岩2点、花崗岩1点である。

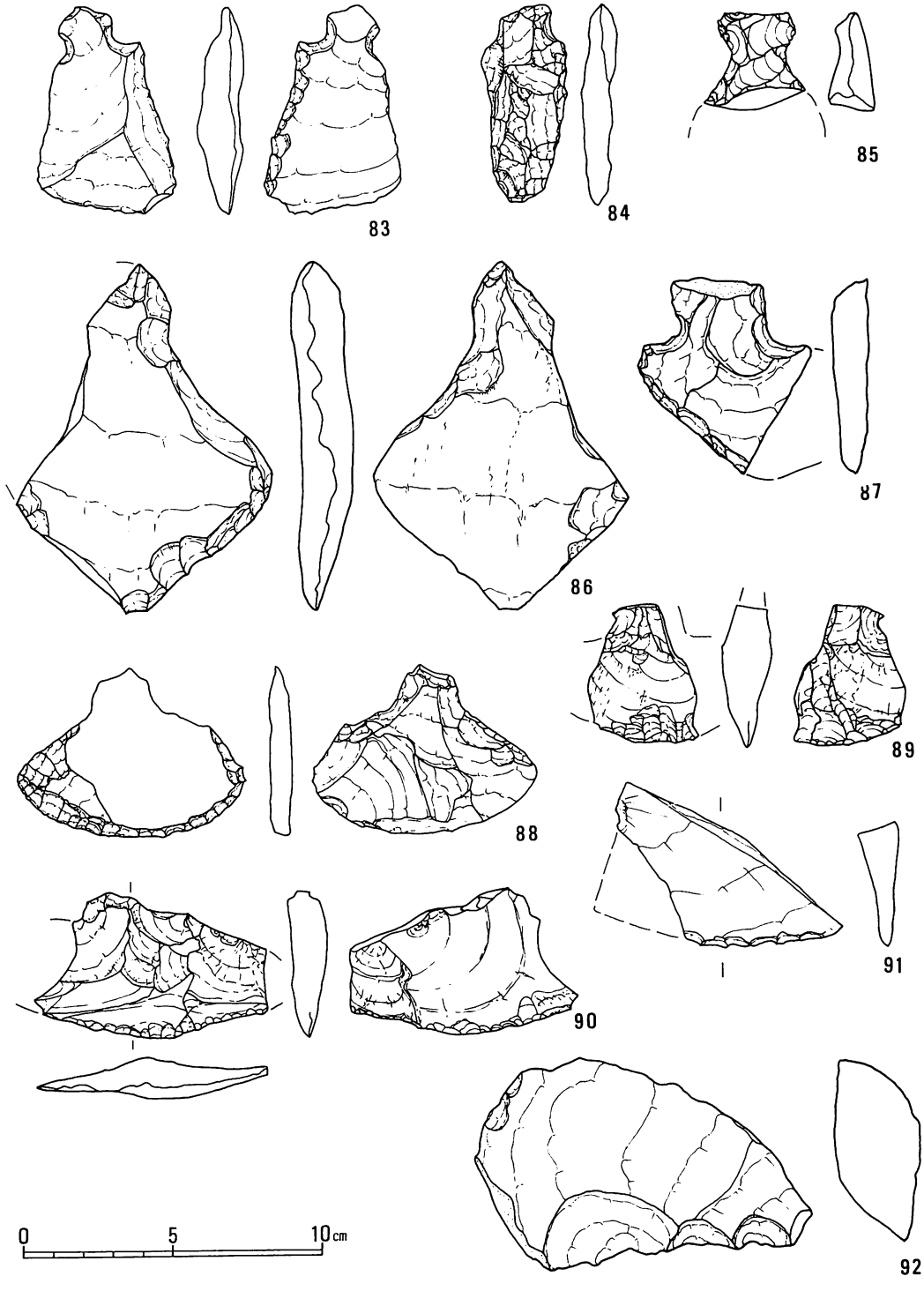
石皿（第96図143） 全体の1/3程度しか残存していない。これは有縁の石皿で表面のみが機能


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
5
10cm

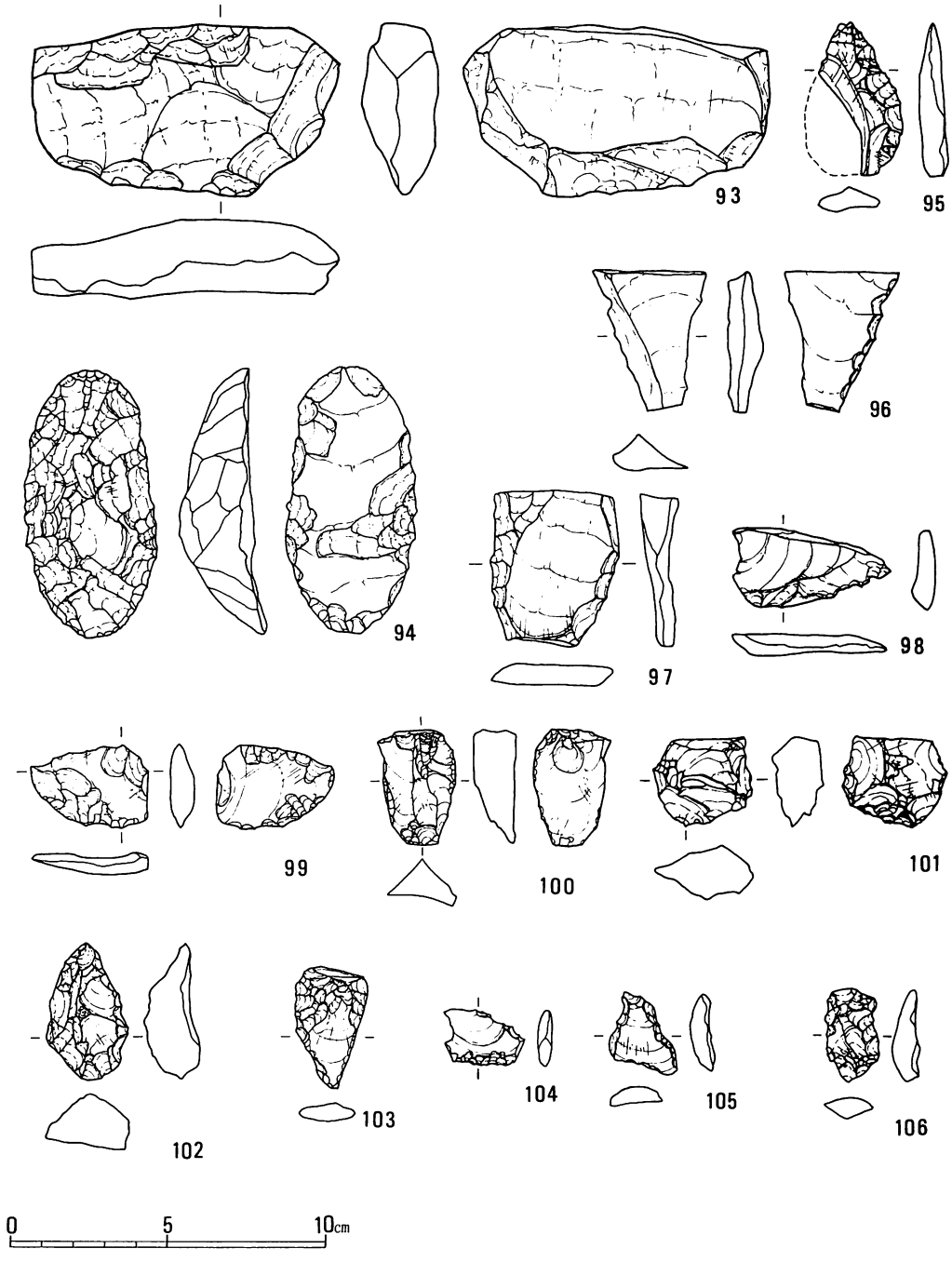
第89図　石器(1)


46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
0
5
10cm

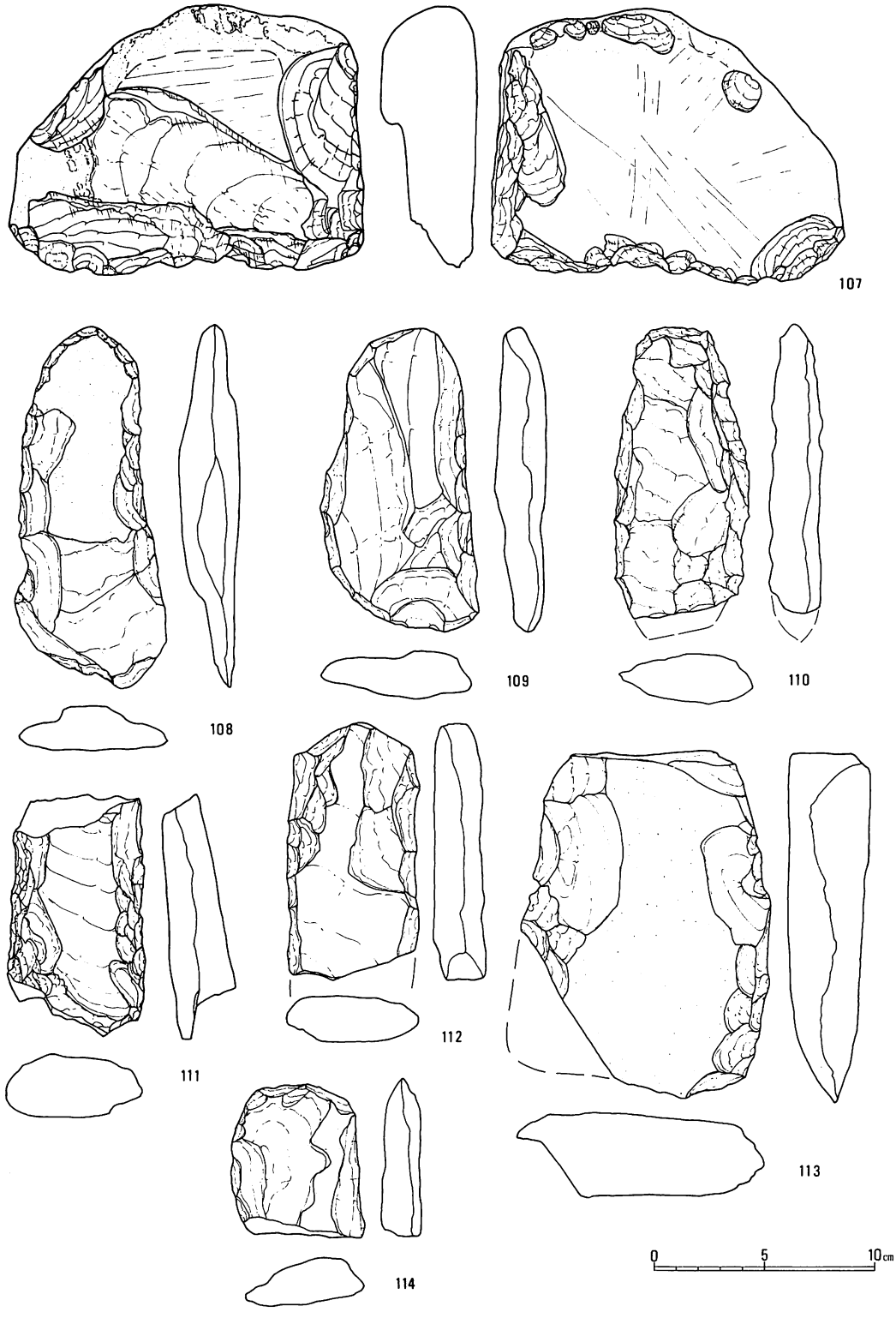
第90図　石器(2)



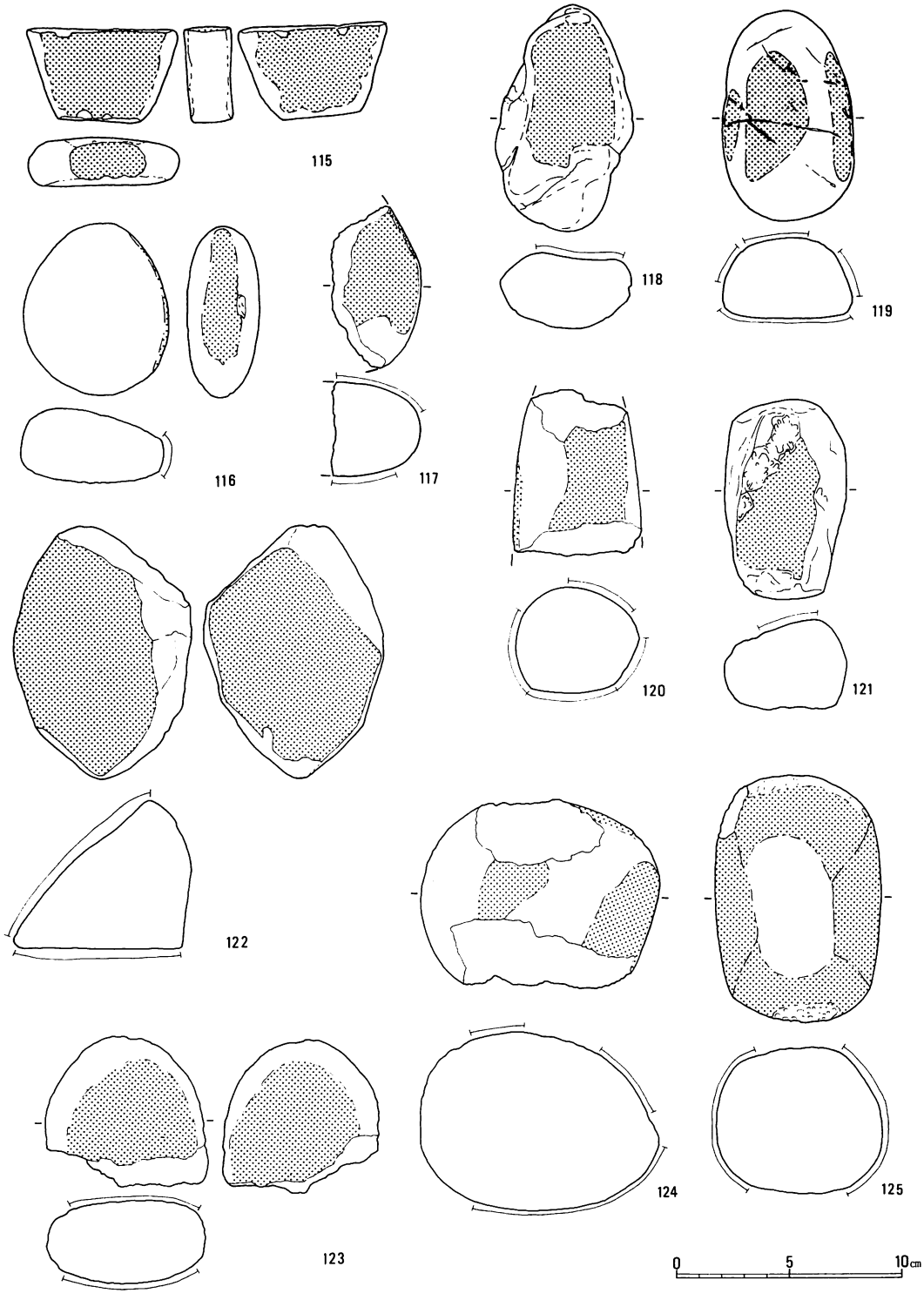
第91図　石器(3)



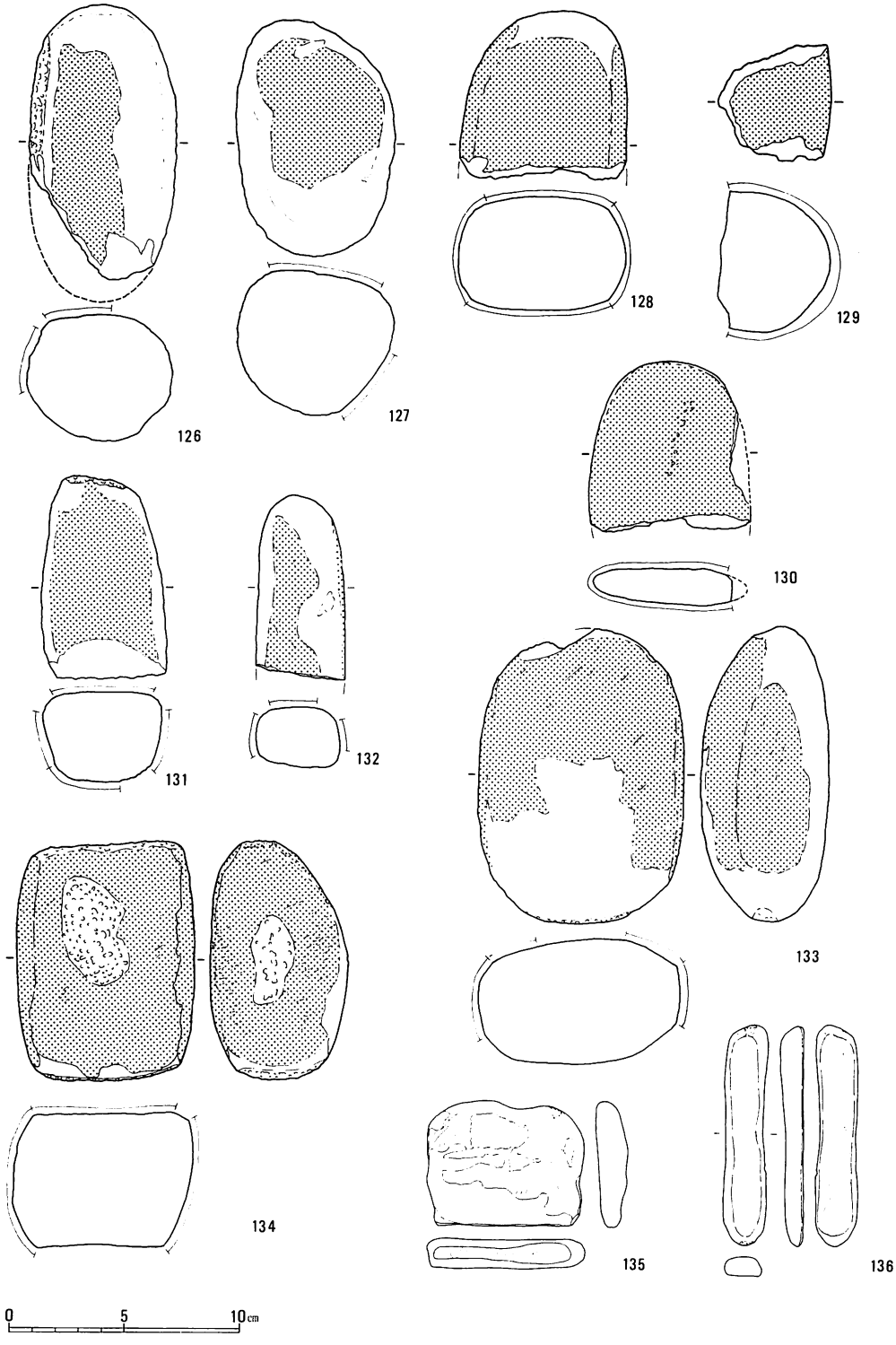
第92図　石器(4)



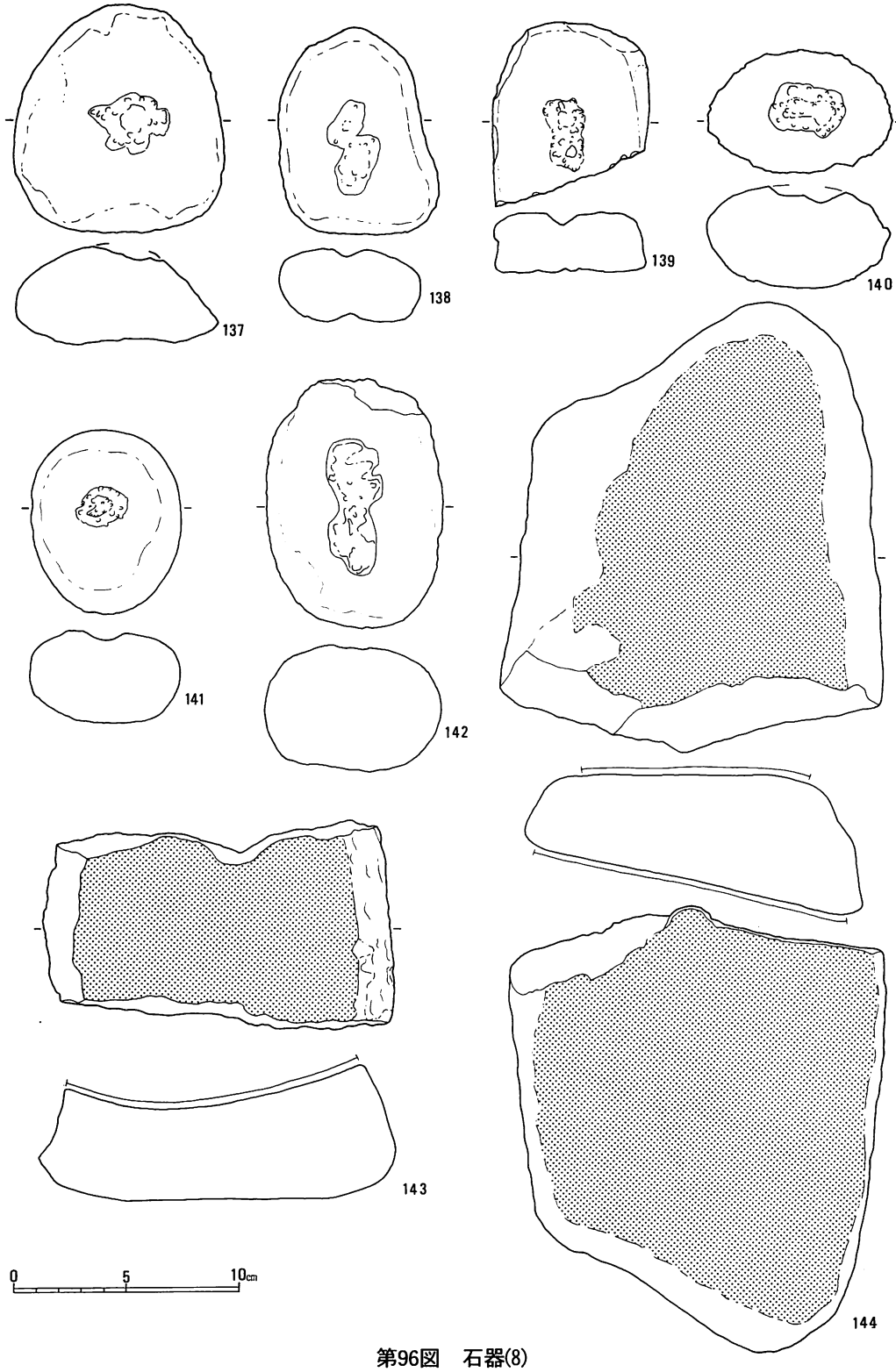
第93図　石器(5)



第94図　石器(6)



第95図　石器(7)



第96図　石器(8)

第６－１表　石器計測表（単位は長さ・巾・厚さがcm、重量はｇ）

番号	出土位置	器　種	長さ	巾	厚さ	重量	石材	備考
1	Q－16G	石　鏃	(1.29)	1.5	0.36	(0.5)	チャート	
2	K－15G	石　鏃	1.65	(1.43)	0.22	(0.3)	黒曜石	
3	J－18G	石　鏃	1.85	(1.61)	0.40	(0.6)	黒曜石	
4	K－15G	石　鏃	1.36	0.27	0.26	0.2	黒曜石	
5	Q－17G	石　鏃	1.10	(1.18)	(0.22)	(0.2)	黒曜石	
6	L－13G	石　鏃	1.44	1.51	0.28	0.4	黒曜石	
7	K－15G	石　鏃	1.80	(1.46)	0.33	(0.6)	黒曜石	
8	Q－16G	石　鏃	0.45	1.62	0.45	1.4	チャート	
9	K－16G	石　鏃	2.23	1.40	0.54	1.5	黒曜石	
10	表採	石　鏃	1.50	0.99	0.29	0.3	黒曜石	
11	Q－17G	石　鏃	1.70	1.38	0.32	0.6	黒曜石	
12	K－15G	石　鏃	2.38	(1.20)	0.57	(1.4)	黒曜石	
13	L－15G	石　鏃	2.00	(1.07)	0.39	(0.7)	黒曜石	
14	M－19G	石　鏃	2.00	0.96	0.31	0.4	黒曜石	
15	O－14G	石　鏃	1.81	1.36	0.48	0.8	黒曜石	
16	Q－16G	石　鏃	1.82	(1.07)	0.33	(0.5)	黒曜石	
17	N－19G	石　鏃	1.98	1.21	0.36	0.6	黒曜石	
18	K－15G	石　鏃	(1.61)	(1.26)	0.41	(0.6)	黒曜石	
19	表採	石　鏃	1.70	1.37	0.50	0.9	黒曜石	未製品？
20	N－16G	石　鏃	1.37	1.20	0.32	0.4	黒曜石	
21	Q－18G	石　鏃	1.59	1.26	0.27	0.4	黒曜石	
22	Q－17G	石　鏃	1.68	1.26	0.42	0.6	黒曜石	
23	N－19G	石　鏃	1.90	1.12	0.27	0.4	黒曜石	
24	L－16G	石　鏃	1.72	1.14	0.36	0.7	黒曜石	
25	0－19G	石　鏃	(1.53)	(0.90)	0.21	(1.2)	黒曜石	
26	K－17G	石　鏃	1.83	1.19	0.31	0.4	黒曜石	
27	Q－16G	石　鏃	2.10	1.22	0.35	0.6	黒曜石	
28	N－19G	石　鏃	2.18	1.31	0.43	0.8	黒曜石	
29	K－17G	石　鏃	2.30	1.30	0.46	0.9	黒曜石	
30	Q－16G	石　鏃	2.38	(1.50)	0.38	(1.0)	黒曜石	
31	Q－16G	石　鏃	2.21	(1.63)	0.38	(0.9)	黒曜石	
32	M－17G	石　鏃	(2.00)	(1.58)	0.36	(0.8)	黒曜石	
33	L－13G	石　鏃	2.34	(1.62)	0.56	(1.2)	黒曜石	
34	L－13G	石　鏃	(2.15)	(1.38)	0.33	0.9	黒曜石	
35	N－19G	石　鏃	(1.54)	(1.47)	0.52	(1.0)	黒曜石	
36	Q－17G	石　鏃	(2.45)	(2.04)	0.70	(2.8)	黒曜石	
37	Q－18G	石　鏃	(2.75)	(1.93)	0.61	(2.2)	黒曜石	
38	M－14G	石　鏃	(2.30)	0.46	0.44	(1.6)	黒曜石	
39	Q－18G	石　鏃	2.50	(2.29)	0.84	(2.6)	黒曜石	再加工品
40	K－18G	石　鏃	1.77	2.02	0.38	0.8	黒曜石	再加工品
41	Q－17G	石　鏃	1.84	2.03	0.52	1.5	黒曜石	
42	N－13G	石　鏃	(1.79)	(1.64)	0.40	(0.8)	黒曜石	
43	K－17G	石　鏃	(1.15)	(1.37)	(0.39)	(0.5)	黒曜石	
44	K－15G	石　鏃	2.12	(1.48)	0.48	(0.8)	黒曜石	
45	L－13G	石　鏃	2.04	(1.41)	0.29	(0.7)	黒曜石	
46	Q－19G	石　鏃	1.14	1.07	0.28	0.3	黒曜石	
47	Q－16G	石　鏃	(1.20)	1.17	0.30	(0.3)	黒曜石	
48	0－16G	石　鏃	(1.08)	0.96	0.17	(0.2)	黒曜石	

第６－２表　石器計測表

番号	出土位置	器　種	長さ	巾	厚さ	重量	石　材	備　考
49	N－17G	石　鏃	1.23)	1.21	0.22	0.2	黒曜石	
50	表採	石　鏃	(1.32)	(1.41)	0.39	(0.5)	黒曜石	
51	K－16G	石　鏃	1.35	1.12	0.34	0.4	黒曜石	
52	M－16G	石　鏃	1.36	1.21	0.39	0.5	黒曜石	
53	O－19G	石　鏃	(1.58)	1.32	0.38	(0.6)	黒曜石	
54	Q－18G	石　鏃	(1.63)	(1.41)	0.25	(0.4)	黒曜石	
55	Q－16G	石　鏃	(1.58)	1.30	0.36	(0.5)	黒曜石	
56	N－16G	石　鏃	1.84	1.41	0.25	0.5	頁岩	
57	P－15G	石　鏃	1.60	1.24	0.33	0.5	黒曜石	
58	P－17G	石　鏃	1.40	1.32	0.31	0.4	黒曜石	
59	O－23G	石　鏃	1.65	(1.07)	(0.34)	(0.4)	黒曜石	
60	K－16G	石　鏃	1.62	1.73	0.47	0.8	水晶	
61	O－18G	石　鏃	1.97	(1.54)	(0.48)	(0.9)	黒曜石	
62	O－18G	石　鏃	1.65	1.33	0.55	1.0	黒曜石	
63	J－11G	石　鏃	(1.41)	(1.17)	(0.29)	(0.4)	黒曜石	
64	L－13G	石　鏃	(2.40)	1.25	0.52	(1.2)	黒曜石	
65	P－19G	石　鏃	(1.93)	1.31	0.34	(0.7)	黒曜石	
66	K－17G	石　鏃	(1.29)	1.74	0.23	(0.6)	黒曜石	
67	0－16G	石　鏃	2.70	1.31	0.56	1.6	凝灰岩	
68	Q－16G	石　鏃	(2.98)	(1.59)	0.77	(2.6)	凝灰岩	
69	Q－19G	石　鏃	2.82	2.11	0.97	4.4	石英	
70	L－13G	石　鏃	2.52	1.90	0.61	2.4	黒曜石	
71	R－17G	石　鏃	(1.98)	(1.66)	(0.41)	(0.9)	黒曜石	
72	0－19G	石　鏃	2.28	(1.30)	0.36	(0.9)	黒曜石	
73	M－13G	石　鏃	1.90	1.90	0.53	1.5	黒曜石	未製品
74	Q－16G	石　鏃	1.66	1.72	0.25	0.6	黒曜石	未製品
75	L－18G	石　鏃	1.99	1.84	0.63	1.9	黒曜石	未製品
76	P－19G	石　鏃	1.68	1.24	0.28	0.5	黒曜石	未製品
77	Q－18G	石　錐	(5.07)	2.80	1.00	(13.6)	チャート	
78	P－22G	石　錐	2.72	2.32	0.83	3.9	黒曜石	
79	C－6G	石　錐	2.14	1.65	0.59	2.1	黒曜石	
80	M－14G	石　錐	(2.38)	1.02	0.74	(1.5)	黒曜石	
81	Q－18G	石　錐	1.55	1.08	0.42	0.8	黒曜石	
82	O－19G	石　匙	5.23	3.17	0.52	9.0	頁岩	
83	P－18G	石　匙	4.78	3.08	1.01	10.7	砂岩	
84	L－18G	石　匙	4.46	2.02	0.71	5.7	泥板岩	
85	O－16G	石　匙	(2.16)	(2.32)	(1.04)	46.7	チャート	
86	Q－16G	石　匙	7.77	5.73	1.21	(12.7)	粘板岩	
87	B－5G	石　匙	(4.42)	(3.89)	0.82	(12.0)	砂岩	
88	Q－16G	石　匙	3.73	5.13	0.59	10.9	頁岩	
89	Q－18G	石　匙	3.05	(2.45)	1.10	8.2	頁岩	
90	O－23G	横長剝片	3.05	(5.18)	0.84	(11.0)	頁岩	
91	Q－16G	横長剝片	(2.65)	(4.78)	0.90	(8.0)	泥板岩	
92	L－18G	横長剝片	4.95	7.72	1.96	78.5	砂岩	
93	O－16G	横長剝片	3.66	6.56	1.56	48.2	頁岩	
94	Q－16G	石　篦	5.61	2.79	1.49	23.0	凝灰岩	
95	L－18G	掻　器	3.24	(1.37)	0.38	(1.6)	黒曜石	
96	Q－16G	掻　器	2.95	2.43	0.69	3.6	頁岩	

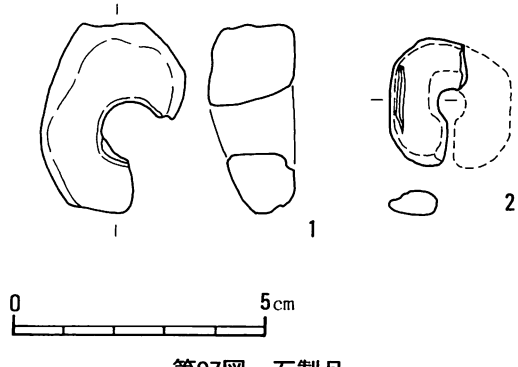
第6－3表　石器計測表

番号	出土位置	器種	長さ	巾	厚さ	重量	石材	備考
97	N－16G	掻器	3.11	2.70	0.73	6.9	頁岩	
98	P－18G	掻器	1.65	3.20	0.55	2.5	黒曜石	
99	Q－17G	掻器	1.78	2.48	0.45	1.40	黒曜石	
100	N－19G	楔形石器	2.41	(1.56)	0.81	(2.6)	黒曜石	
101	N－19G	楔形石器	1.90	(2.18)	1.08	(3.8)	黒曜石	
102	K－16G	小剝離のある剝片	2.85	(1.76)	1.05	3.8	黒曜石	
103	O－19G	小剝離のある剝片	2.55	1.63	0.79	2.2	黒曜石	
104	K－16G	小剝離のある剝片	1.20	(1.68)	0.26	(0.6)	黒曜石	
105	P－22G	小剝離のある剝片	1.65	1.53	0.34	0.7	黒曜石	
106	K－15G	小剝離のある剝片	1.95	1.14	0.70	0.7	黒曜石	
107	Q－19G	礫器	(7.79)	(10.88)	1.05	3.8	黒曜石	
108	O－24G	打製石斧	10.95	(1.76)	1.05	3.8	ホルンフェルス	
109	O－23G	打製石斧	9.15	4.62	1.48	81.8	ホルンフェルス	
110	O－19G	打製石斧	(8.78)	4.09	1.79	(78.7)	ホルンフェルス	
111	O－18G	打製石斧	(7.42)	(4.18)	(1.90)	(78.1)	砂岩	
112	Q－18G	打製石斧	(7.73)	4.00	1.33	(70.4)	ホルンフェルス	
113	O－18G	打製石斧	(4.75)	(4.02)	(1.34)	(34.5)	砂岩	
114	O－19G	打製石斧	10.50	(7.64)	(2.45)	(267.7)	ホルンフェルス	
115	G－13G	磨石	4.20	6.85	2.07	84.7	凝灰岩	
116	G－13G	磨石	10.29	6.20	3.76	303.1	砂岩	
117	G－13G	磨石	9.50	5.92	3.62	325.1	花崗岩	
118	K－16G	磨石	7.75	6.58	3.20	236.6	砂岩	
119	K－15G	磨石	(7.28)	(4.25)	(4.40)	(149.9)	砂岩	
120	G－13G	磨石	11.34	7.65	7.20	818.6	花崗岩	
121	K－15G	磨石	(7.25)	(5.92)	(5.14)	(308.1)	堆積岩系	
122	K－15G	磨石	9.07	5.55	3.80	316.5	砂岩	
123	P－18G	磨石	(6.78)	(7.07)	(4.03)	(229.3)	閃緑岩	
124	K－16G	磨石	(8.19)	10.85	8.25	(1009.1)	砂岩	
125	K－16G	磨石	11.18	7.33	7.25	952.0	砂岩	
126	L－18G	磨石	(12.08)	6.17	5.55	(563.3)	花崗岩	
127	Q－18G	磨石	10.47	6.93	6.22	563.6	花崗岩	
128	Q－18G	磨石	(6.95)	(7.54)	(5.00)	(457.9)	砂岩	
129	Q－16G	磨石	(4.40)	(4.90)	(5.95)	(195.2)	花崗岩	
130	Q－15G	磨石	(8.83)	(5.37)	(3.91)	(325.3)	砂岩	
131	L－18G	磨石	(6.93)	7.11	1.68	127.1	砂岩	
132	L－13G	磨石	(7.85)	3.98	2.55	(118.3)	砂岩	
133	M－13G	磨石	10.15	7.21	5.72	900.8	花崗岩	
134	N－13G	磨石	12.95	9.28	5.56	910.1	砂岩	
135	O－19G	磨石	5.60	6.88	1.31	925.0	頁岩	
136	K－15G	棒状工具	9.74	1.90	1.11	(33.8)	凝灰岩	
137	L－18G	凹石	10.23	9.57	4.38	422.2	安山岩	
138	O－17G	凹石	9.21	7.06	3.17	256.0	砂岩	
139	L－18G	凹石	(7.50)	(6.91)	3.21	(270.1)	砂岩	
140	Q－17G	凹石	5.19	8.42	5.02	200.9	安山岩	
141	O－13G	凹石	8.09	6.86	4.12	242.3	花崗岩	
142	O－14G	凹石	(11.19)	7.95	5.39	(607.2)	安山岩	
143	N－13G	石皿	9.30	15.80	5.84	1099.8	安山岩	
144	Q－18G	石台	(18.6)	(17.10)	(7.69)	(2400.0)	花崗岩	

面である。石材は安山岩である。

台石（第96図144） 全体の1/2程度しか残存していない。両面に機能面がある。石材は花崗岩である。

石製品（第97図１・２） １は垂飾である。全体の3/4程度が残存する。石材は頁岩である。２は玦状耳飾である。全体の1/2程度しか残存しない。石材は滑石である。二つともかなり粗い作りとなっている。 （野代）



第97図 石製品

第７表 縄文時代（石製品）（単位は長さ・巾・厚さがcm、重量はｇ）

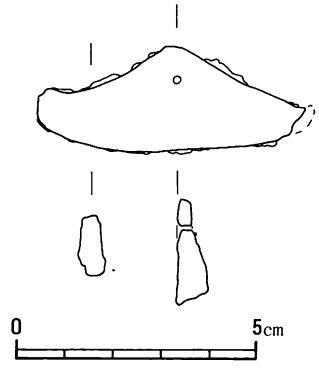
番号	出土位置	器 種	長 さ	巾	厚 さ	重 量	石 材	備 考
1	K－15G	玉	3.83	(2.55)	1.74	(18.6)	頁岩	
2	K－16G	玦状耳飾	2.52	(1.52)	0.46	(2.6)	滑石	

３．その他の遺物

本遺跡からは平安時代に位置づけられる土器の他、鉄製品が出土している。ここでは、後者の鉄製品についてのみふれることとする。

第98図（第２表）は火打ち金具である。当時の発火方法として考えられているものには、揉鑽法（人の手の力だけによるもの）・舞鑽法（日鑽杵の下方に円板状の分胴を取りつけて回転力を強めたもの）が古来から行われていたと想定される。では平安時代ではどうであったのかというと、『和名抄』によれば「鑽」「燧」の記載が見られる。「鑽」とは摩擦法のことで、古来から行われてきた前段階的な方法である。「燧」は撞撃法のことで、燧石と燧石を打ち合わせる場合と、燧石に鋼を打ち合わせる場合がある。つまりこの両方が用いられていたと考えられるのである。この火打ち具に関しては、５世紀代に韓鍛冶とともに流入し、中世以降には一般化していったようである。県内における同時期の類例としては、報文化されているものに八代町の下長崎遺跡、韮崎市の中道遺跡、塩山市の雲峰寺経塚、勝沼町の釈迦堂遺跡、山梨市の七日子遺跡、日下部遺跡の例が上げられる。時期的には10世紀後半～12世紀前半代に集中している。形態的には本遺跡出土のものと同様に、上部の狭くなった部分に孔が設けられているものが大部分を占めている。これは携帯する際に紐でも付けて持ち歩いたものと想定される。

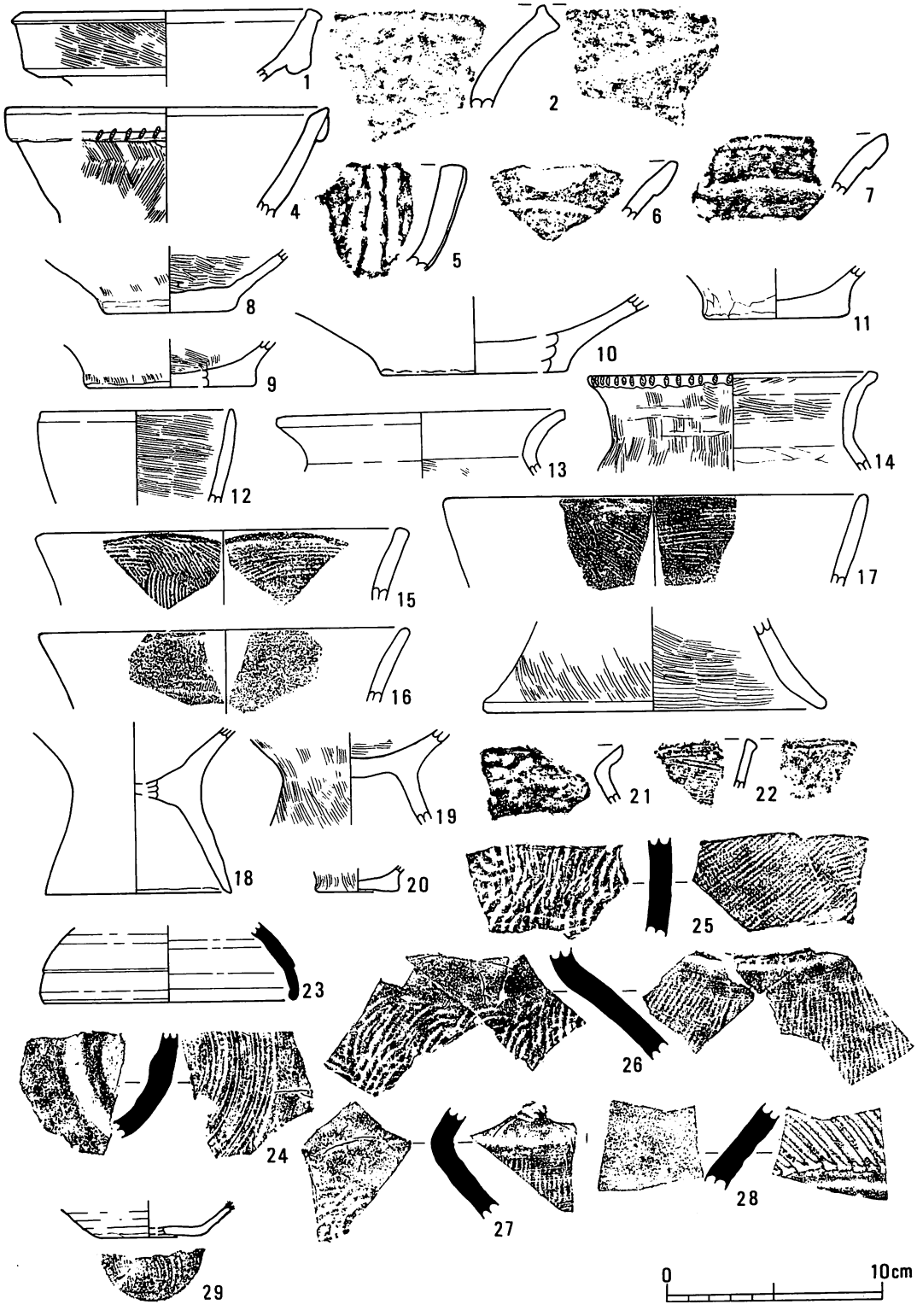
この他にも未報告であるが、北巨摩方面でも若干発見されているようである。 （野代）



第98図 火打ち金具

グリッド出土遺物（第99図）（第２表）

１～22は弥生時代後期から古墳時代前期初頭に位置づけられるものである。23～29は須恵器で、古墳時代後期以降に位置づけられるものである。 （野代）



第99図　グリッド等出土遺物

第Ⅳ章　考　　察

第１節　住居と集落

(1)　住居址配置と集落構造

本遺跡で確認した住居址は35軒以上であるが、このうちほぼ全面に発掘調査した住居址は20軒、一部トレンチ調査した住居５軒、プラン確認のみで保存のために未調査としたもの10軒である。また、台地全面に遺構確認が済んでいる訳ではなく、第２号方形周溝墓北側の一部は、排土置き場としたために、未調査地区となっている。更に、調査区東側は、公園区域外の為、調査は行っていないので、こちらの遺跡範囲は未確定である。

しかし、西側及び南側については、トレンチ調査や表土除去作業を行った結果、遺構は存在しない事が確定している。したがって、直径25mの広場を中心に、西側を開口する、やや不規則な環状形に住居址群が配置されている、と見ることができよう。第２号方形周溝墓南側では、住居址の検出が少ないが、これは重機による天地返しが行われている為で、耕作土中より多量の弥生時代の土器が出土する事からも、住居址群が破壊された事を裏付けるものであろう。また、第２号方形周溝墓の北東側も住居が少ないが、この部分の南側は、畑の造成による削平を受けており、北側は排土置き場としたために未調査となっているのが、住居検出例のない原因である。

本県での弥生時代集落遺跡の、大規模な発掘調査件数は比較的少なく、敷島町金の尾遺跡（1987『金の尾遺跡』山梨県教育委員会)、増穂町平野遺跡（1992『年報８』山梨県埋蔵文化財センター)、中道町上の平遺跡（1987 『上の平遺跡』山梨県教育委員会）などが代表的遺跡である。しかし、この中で集落全域を完掘した例はない。したがって、あくまでも一部の調査から類推するより仕方が無い。

金の尾遺跡（第100図）は、弥生時代後期前半～中葉の南北２つの住居址群があり、その中央は東西に走るＶ字溝で区切られている。南群は緩やかな半円を描いて住居群が並び、それぞれの住居は切り合っていない。単一時期に形成され、ほぼ同時に消滅した住居址群と見なすことができる。これに対し、北群は方形周溝墓群を取り囲むように南北に配置され、しかも住居が接して造られていることから、少なくとも２時期にわたって営まれた集落であることが分かる。道路幅のみの調査で、遺構全体が把握できないが、南群は半円を意識して配置されていることが、それぞれの住居入り口部方向から明らかである。

上の平遺跡（第102図）の集落は、４次・５次調査で発掘された、上の平方形周溝墓群の南～東に分布する住居址群のことである。弥生時代終末～古墳時代初頭の15軒の住居址は、上の平方形周溝墓群の南から東にかけて、取り囲むように分布している。第１・４号住居址が他の住居址と離れているが、この空閑地が広場になるのか、あるいは住居群を区切る場になるかは、確定できない。地形的には、この辺りが台地平坦面のくびれ部分に位置する。この南の平坦地は同時期の宮の上遺跡で、道路調査によって集落址と方形周溝墓が発見されている。

平野遺跡（第101図）は弥生時代末～古墳時代初頭の集落遺跡で住居址25軒が発見されている。

遺跡の中には２つの浅い谷が入り込み、この谷によって集落は３つのブロックに分けられている。北側ブロックは住居が比較的まとまっているが、谷に挟まれた中央ブロックは住居同士が離れ、散居村落形態となる。最も南の３軒はまとまっているが、中央ブロックと東側でつながる可能性もある。

以上、県内の比較的規模の大きな遺跡を概観したが、それぞれの集落には個性があり、規則性は見いだせないようである。しかし、３ヵ所の遺跡と比較して、次のような東山北遺跡の大きな特徴を上げることができる。

① 住居址の重複が多く、住居の建築位置が規制されていた可能性がある。

② このことは、長期間にわたって、多くの居住者が生活していたとも言える。

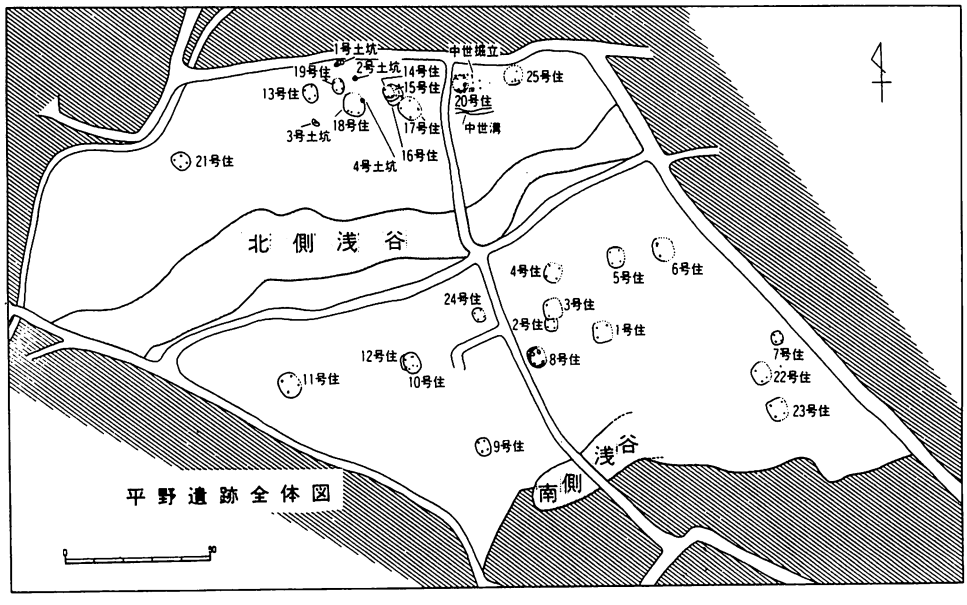
③ 住居址は、結果的に広場をもつ環状集落を形成している。

④ 土坑はあるが、方形周溝墓が少ない。（平野遺跡は方形周溝墓がない）

⑤ 大型住居（８号）を取り組むように溝がある。また、第６号住居址の東側と南側にも第７号溝が巡るが、このような遺構は県内では例がない。

⑥ 東山北遺跡の北東側に一段下がった緩斜面があり、ここにも同時期の遺物が分布する。別集落か、同一集落かは明らかではないが、時期・遺構内容など興味のある地域である。

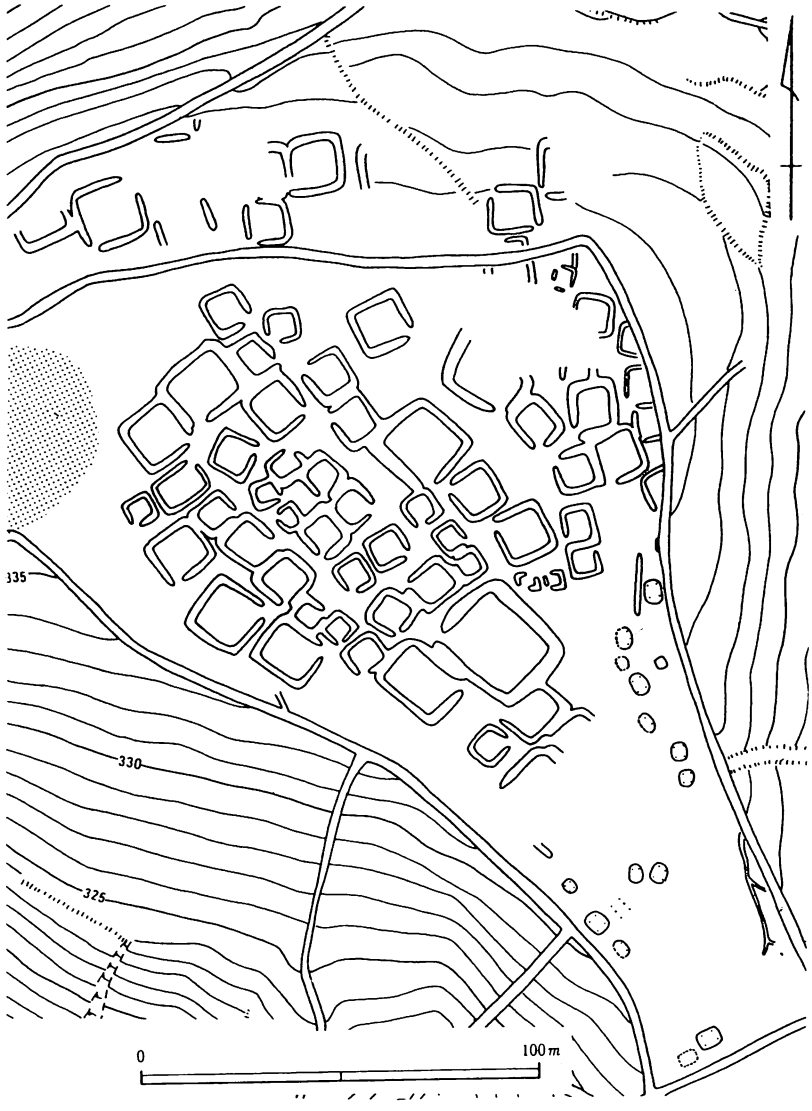
第100図　金の尾遺跡



第101図　平野遺跡

(2) 住居址の特徴

竪穴住居址群は、前述したように、大きくは逆C字型の分布を示す。このうち第9～13号住居址や第27号住居址周辺の住居址群が、特別に密集した状態で切り合っている。このうち、完全に調査した住居址は21軒で、他は未調査のまま保存してある。これらの調査済住居址は、切り合いが多いために完全に残っている部分が少なく、その特徴を数字で示すのは困難である。従ってプラン、炉、柱穴などが明確でないが、およその特徴を上げるとすれば、次のような点であろう。◎プラン―方形6軒、楕円形13軒、他不明。◎炉―地床炉7軒　他不明。◎周溝―持つもの15軒、他は無いか、極めて一部。断面が細く深く内傾して掘られたものがある。◎柱穴―4本検出されたもの10軒、他は不規則で不明。◎その他―明らかな貯蔵穴及びその周囲に周堤帯を持つものはない。◎梯受穴―10軒（？）他不明。◎焼失家屋―12軒。　（末木）



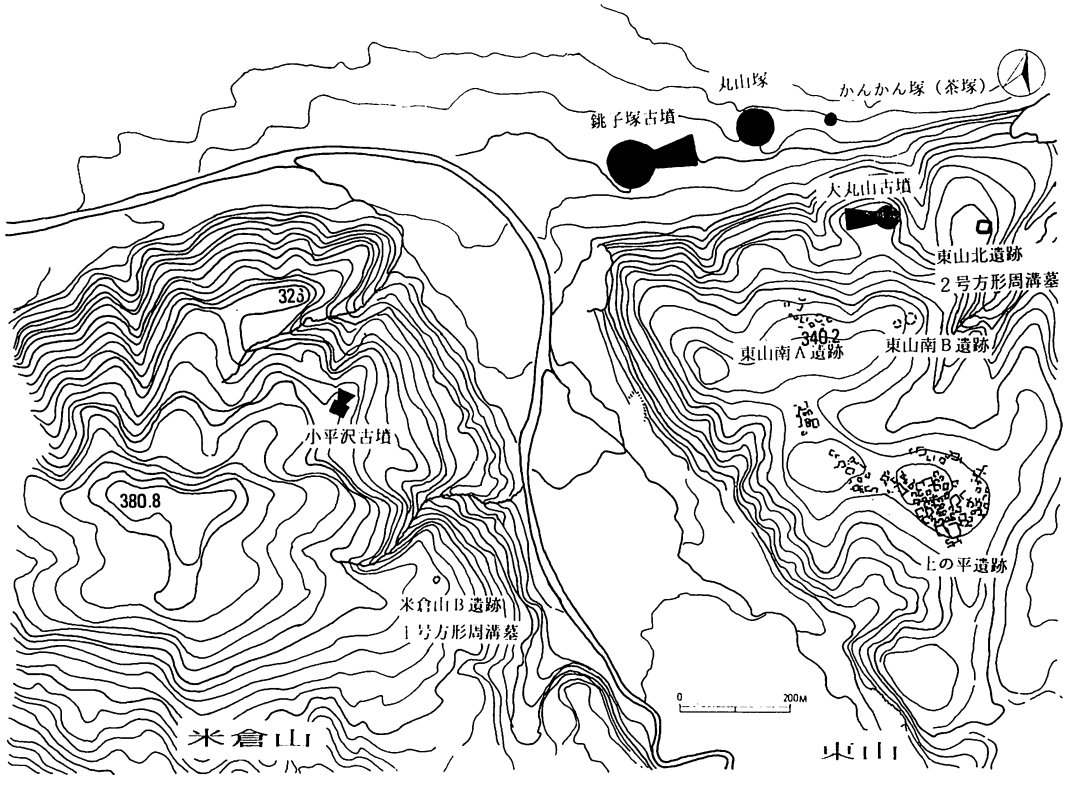
第102図　上の平遺跡

第２節　第２号方形周溝墓について

(1)　方形周溝墓と東山古墳群

山梨県に於いて方形周溝墓の本格的な研究は、1979年に発見された中道町上の平遺跡方形周溝墓群に始まるだろう。それ以前に発見された一宮町田村遺跡、敷島町金の尾遺跡、塩山市西田遺跡をはじめ、中道町東山南遺跡、同米倉山Ｂ遺跡、境川村口開遺跡、三珠町一城林遺跡、同一条氏館跡遺跡、同上野遺跡、御坂町姥塚遺跡、甲府市桜井畑遺跡、韮崎市坂井南遺跡などから続々と発見され、16ヵ所210基余りが、甲府盆地一円に分布することが明らかになった。これらの方形周溝墓は弥生時代の後期に始まり、古墳時代中頃まで継続し築造されている。

上の平遺跡[1]で注目されたことは、方形周溝墓が隙間なく密集し、かつ、当時の東日本では最大数の55基が検出された事である。現在ではその124基にも達しており、未調査地区も含めて想定すると200基は優に超えるものと思われる。また、このうち第１号方形周溝墓は、全国的にも最大クラスの一辺が30mという巨大なもので、甲斐古代首長の成立過程を知るうえで、貴重な発見であっただけでなく、何故、甲斐にこのような大規模な方形周溝墓群が出現し、なおかつ巨大な方形周溝墓が築造されたのか、このことは甲斐国のみならず、中部・関東地方の地域にとっても重要な問題であった。この問題は未だ解明されていないけれども、東山北遺跡第２号方形周溝墓の発見や、後続する甲斐銚子塚古墳の規模が４世紀代では東日本最大規模である事を見ると、４～５世紀始めにかけて、この地域が東日本にとって極めて重要な役割を果たしたのではないか



第103図　東山北遺跡位置図

という想像ができる。

即ち、弥生時代末～古墳時代初頭には、中道町東山一帯が巨大な方形周溝墓の墓域を形成する力を蓄えていたことは明らかであるが、その土壌があったればこそ、畿内からの前方後円墳という、新しい墳墓を受け入れることができた訳で、方形周溝墓の段階では甲斐一国に及ぼす力であったが、前方後円墳の被葬者の出現は、恐らく汎東日本的な影響を及ぼしたと見なすことができる。

この根拠は、前述したように、銚子塚古墳が4世紀の東日本では最大クラスということだけでなく、古事記・日本書記にあるヤマトタケルの酒折宮説話からも窺えよう。この説話について吉田孝氏[2]は甲斐国酒折宮とヤマトタケル伝説の背景について、記紀に見える甲斐の史料を取りヤマトタケルとワカタケル（雄略天皇―倭王武）との類似性を指摘し、『ヤマトタケルの歌に唱和した「御火焼之老人」が「東国造」を賜っているのは、ワカタケルと甲斐国造（日下部直）との関係をもとにして生まれてきた説話ではないか、という想定が当然おこってこよう』という。吉田氏の説は極めて示唆に富み、説話の背景を正しく把握したものであろう。更に、想像を逞しくすれば、ワカタケル大王（倭王武）が中国の皇帝に送った上表文にある『昔より祖禰躬ら甲冑を擐き、山川を跋渉し寧処に遑あらず。東は毛火とを征すること五十五国、西は衆毛を服すること六十六国、渡りて北海を平ぐること九十五国』に見られるように、説話のヤマトタケルと同一ではないかも知れないが、雄略朝より以前に東国に進出していたことは明らかであり、甲斐銚子塚古墳の存在もそれを裏付けていると言えよう。

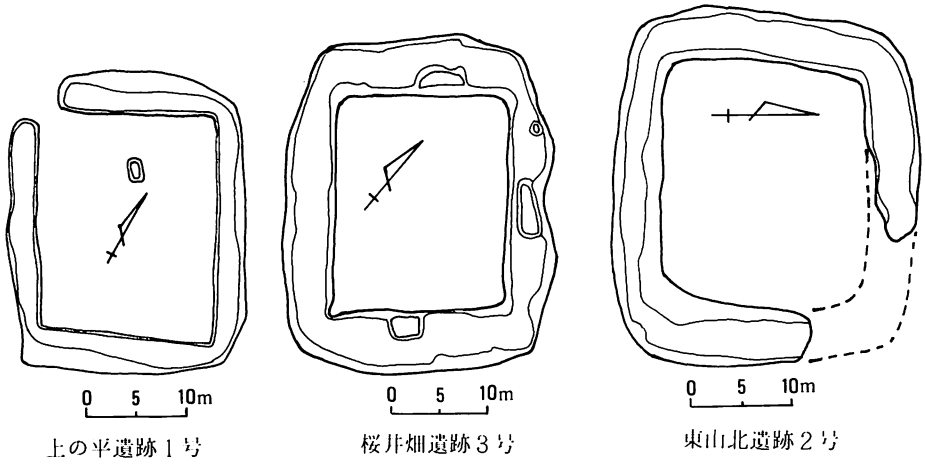
このことは、磯貝正義氏によっても指摘されており[3]、「甲斐の畿内王権への服属の時期は、前期の壮大な前方後円墳の存在から、4世紀後半を下るものではなかった」と推定している。また、原秀三郎氏[4]は銚子塚古墳が東国造を賜った御火焼老人の墳墓と考え、御火焼老人の性格について「常陸より甲斐までのほど、昼夜懈（オコタ）らずして勤（イソ）しく仕奉（ツカエマツリ）て、東方の国々を経来りたる功（イサヲ）を賞（ホメ）て、東国造と云称号を賜えるにもあらむか」（『古事記伝』二七巻 『本居宣長全集』十一）という言葉を引用し、同様な見方を示している。

ヤマトタケルの東征伝説の中で、最も平和な心安らぐ場面が酒折宮説話で描かれており、しかも御火焼の翁に対し「東国造」の位を授けたことは、ワカタケル大王以前に甲斐が大和朝廷の東征前進基地として組み込まれ、さらに、ある時期、甲斐国造が東国に対して何等かの軍事的力を持たされていた事の証であり、ヤマトタケル伝説に寄せて記紀の時代までも伝えられていたと想定することは、以上の事からも大過無い事であろう。

この地域が、甲斐国内で特に軍事的な力を持っていた証拠には、甲冑を持つ古墳が多いことでも知ることができる。現在までに甲冑の発見された古墳は中道町大丸山古墳、同かんかん塚（茶塚）、同稲荷塚古墳、博物館構内古墳、豊富村王塚古墳（伝）、同村内無名古墳などである。このように、中道町と豊富村のごく狭い地域の古墳に限定される事からも、この地域の特殊性が強調されよう。

(2) 東山北第2号方形周溝墓の被葬者

東山北遺跡第2号方形周溝墓は県内で最大規模の方形周溝墓であり、しかも単独立地という特徴をもっている。規模を改めて述べると、周溝外側で東西36m、南北31.4mを測り、周溝の幅は



第104図　方形周溝墓比較図

４～７ｍ、周溝の最も深い東側で1.7ｍ程である。現在の溝の容量と同じ土量を、方台部に積み上げると、マウンドは中心部で２～３ｍの高さになる。これまで県下最大であった甲府市桜井畑遺跡３号低墳墓が33.4ｍ×27.5ｍの規模であるから、東山北第２号方形周溝墓はこれを一回り上回る。また、中道町上の平遺跡第１号方形周溝墓は30ｍ×23.5ｍである。上の平遺跡は承知のとおり方形周溝墓群の中の１基であり、桜井畑遺跡では数基の方形周溝墓が築造されているようである。これに対して東山北遺跡ではほぼ単独に築造されている（第１号方形周溝墓は同時期の可能性もあるが、比較にならないほど規模は小さい)。出土土器の年代からも上の平遺跡第１号方形周溝墓→桜井畑遺跡第３号低墳墓→東山北遺跡第２号方形周溝墓の順に造られたことが明らかであるので、集団墓→独立墓という変化を読み取る事ができる。このことは、共同体社会から首長権が独立する過程を示したものと理解されている。

しかし、東山北遺跡の第２号方形周溝墓とほぼ同時期に、畿内から伝わった墳墓型式である前方後円墳の大丸山古墳や銚子塚古墳などが隣接して築造されている。伝統的墳墓に葬られた人物と、新しいスタイルの墓に葬られた人物は、畿内と直結した祭祀的色彩の強い人物であり、方形周溝墓に葬られた人物は、土着性の強い実務的な首長の可能性を指摘したことがある[5]。両者は畿内と地元民衆をつなぐパイプ役であり、祭祀も畿内と地元の伝統的祭祀り両面をそれぞれが司ったのではなかろうか。したがって、同一地域に二つの墓制が並立しても、何ら矛盾は生じなかったし、むしろ、二つの墓制がなければならなかったといえよう。実務的首長は、祭祀的首長の墳墓にまねて、台地先端での独立化、規模の巨大化などを推し進め、小規模な古墳と並ぶまでの規模に発達したのが、東山北第２号方形周溝墓ではなかろうか。　（末木）

註

１）小林　広和　『上の平遺跡』山梨県教育委員会　1991
２）吉田　　孝　「酒折宮の説話の背景」『甲斐の地域史的展開』雄山閣　1982
３）磯貝　正義　「畿内王権と甲斐国」『図説山梨県の歴史』河出書房新社　1990
４）原　秀三郎　「王権と東方への道」『新版古代の日本　七　中部』角川書店　1993
５）末木　　健　「古代甲斐首長権の成立について」『山梨県史研究』創刊号　1993

第３節　土器焼成遺構

本遺跡から発見された皿状の長方形落ち込み遺構を、土器焼成遺構と判断したのには、次の点がある。

(1)　土坑内部から多量の土器片と焼土・炭が出土したこと。

(2)　土器片は焼成済みの完形土器が破片となったものではなく、片面灰色、片面赤色の生焼け状態を呈しているので、焼成中に破砕したものの可能性がある。

(3)　土坑底面が良く焼けている。

(4)　土坑中央に排水溝が存在する。

(5)　西側の４号住居覆土中に、生焼け土器破片が廃棄され、あたかも窯跡に見られる灰原を呈する。

このような５点のことから、土器焼成遺構と見なしたわけだが、しかし、この遺構に類似した遺構が、須玉町塚田遺跡[1]・高根町丘の公園第５遺跡[2]で発見されている。これらはいづれも炭焼きの窯で、伏せ焼き窯と呼ばれる遺構と見なされている。土器が出土するかしないかだけの差であるが、このような構造こそが、古代からの共通した窯の構築技術ではなかったろうか。

なお、類似例として大阪府吹田市垂水遺跡ＡＧ２・ＡＧ４区の焼土壙がある。垂水遺跡焼土壙は長さ３ｍ以上、幅0.7ｍ、深さ0.2～0.3ｍで、側面が焼け、覆土には炭・黒色灰し焼土、弥生土器が包含されていた。報告者はこの遺構を土器焼成窯と見なしている[3]。

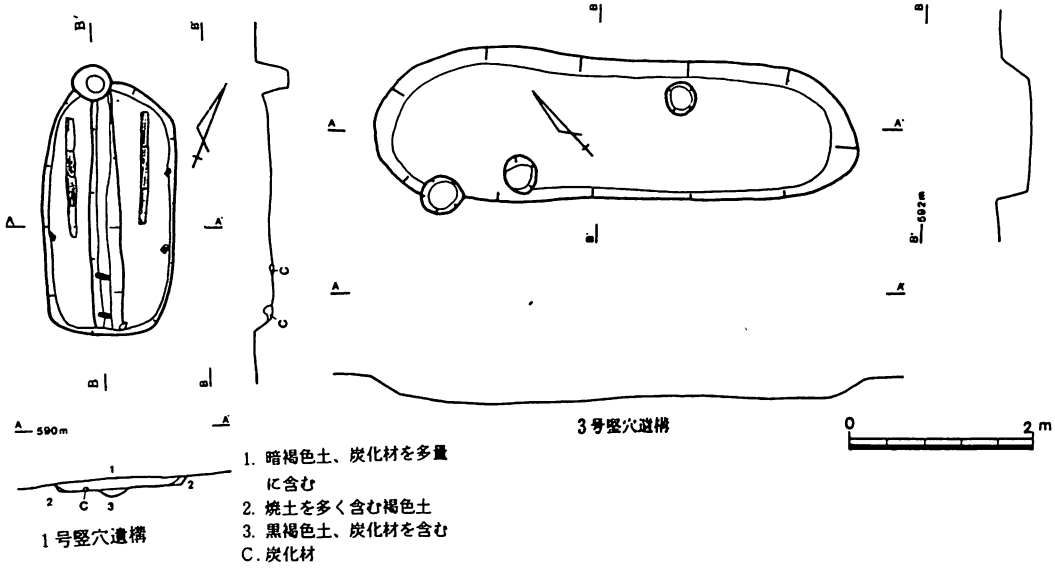
（末木）

註

1）山路恭之助　『塚田遺跡』須玉町教育委員会　1984

2）保坂　康夫　『丘の公園第２遺跡』山梨県教育委員会　1989

3）吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室　『垂水遺跡』　1976

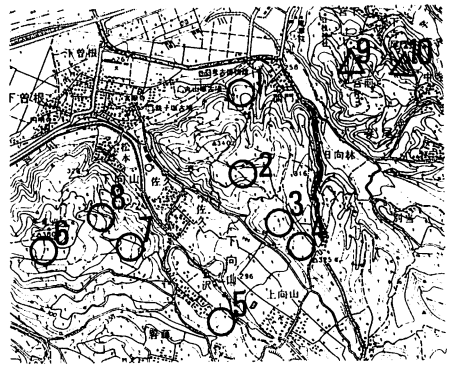


第105図　須玉町塚田遺跡

第４節　曽根丘陵周辺の旧石器文化様相

１．はじめに

旧石器文化の空白地域とされてきた山梨の様相を明らかにすることを本稿の目的としている。今回の集成は、東山北遺跡の調査に伴いナイフ形石器が出土したことに契機をもったため、対象とする地域を中道町周辺曽根丘陵と限定したが、曽根丘陵はもとより県下の旧石器文化解明と、より広い範囲と比較するための起としたい。



１東山北遺跡　２上の平遺跡　３宮の上遺跡　４立石遺跡　５下向山遺跡　６米倉山Ａ遺跡　７米倉山Ｂ遺跡　８小平沢遺跡　９物見塚表採地　１０寺尼表採地

第106図　周辺の遺跡

２．曽根丘陵周辺の旧石器研究略史

山梨の旧石器研究を振り返ると大きく２つの段階にわかれる。

第一段階として、最初に1950年頃から70年始めまでに組織的に調査をされた山本寿々夫氏のナイフ形石器・石刃・細石刃核・細石刃が出土し、現在でも調査がなされている中道町米倉山遺跡[1)]や、1962年に吉田格氏のもと実施されナイフ形石器、石刃を主体として検出された同町下向山遺跡を[2)]をはじめ、県下全体にわたり精力的に展開した山本氏ら山梨県考古学資料室の活動は極めて重要な資料提示を行ない、この段階の資料や遺跡の確認数は県下全体にわたり非常に多く、発見され、研究の基礎的部分となっている。

その反面、残念なことに時代の流れのせいか当時集められたデータが古く資料の詳述や遺物出土位置の性格な提示が十分ではない部分や、資料の所在が不明なるものもある。また、石器群の構造や編年的位置付けの整理がなされることなく、従って十分にその価値が発揮されない部分が見受けられる。しかし、確実に山梨の旧石器を理解するうえでも把握しておかなければならないものである。

第二段階は、1980年代になりナイフ形石器を主体とした中道町上の平遺跡[3),4)]、ＡＴ層下より出土は県下２例目の同町立石遺跡[5)]などに代表される保坂康夫、小林広和両氏のより細かい研究報告が目立つと同時に、かつての資料を用いての再検討も行っている点[6)]に評価される。

しかし、全体的に見て周辺一帯の旧石器資料の集成がなされた事はなく、多くの資料が今も知られていない。実際、東山北遺跡を含む曽根丘陵周辺にいくつの旧石器遺跡が分布するかは第106図を見れば理解して戴けよう。表面採集の地点を含めて10遺跡にも及ぶのである。各遺跡における資料数が少なく、分類・分析に対応できる程ではないことや、保坂氏が述べるように旧石器資料としての信憑性などが問題となってきたが、この様に資料集成を行い問題提起することも大事な課題である。以下に各遺跡の概要と石器について述べる。記述にあたっては報告文を参考としなるべく文意を変えぬよう要約に努めたが、若干手を加えた部分があることを明記しておく。

3．遺跡と遺物（遺跡の配列順は第106図の遺跡番号に対応）

1　東山北遺跡

今回の報告につき第３章８節の１項に詳述。

2　上の平遺跡[3)4)]（第108図６～13）

所在：東八代郡中道町下向山字上の平　概要：盆地に向かい舌状に伸びる曽根丘陵の東山に位置する。一帯は開析地形で標高は約300mを測る。縄文時代から平安時代での複合遺跡で、方形周溝墓は著名である。石器出土状況は大半が遺構覆土からの出土である。

3　宮の上遺跡[8)]

所在：東八代郡中道町上向山　概要：立石遺跡の北北西、標高350mに位置する。詳細は不明。

4　立石遺跡[5)]（第107図１～５）

所在：東八代郡中道町上向山字北原　概要：上の平遺跡の南南東、曽根丘陵の平坦部に位置し、標高は約320mを測る。縄文から古墳時代の複合遺跡で、周辺で唯一層位的に確認された石器群である。出土層位はII層が黄褐色ソフトローム層・III層が黒色帯となり、ＡＴがII～III層にかけて確認されている（第108図下）[9)]。遺物はIII層下より出土し、従って本石器群はＡＴ降下以前に位置付けられる。

5　下向山遺跡[2)]

所在：東八代郡中道町下向山字下向山　概要：米倉山遺跡の南南東、台地の平坦部から南緩斜面に広がる遺跡で、標高約290mを測る。1962年に吉田格氏により調査がなされ、旧石器時代から縄文時代までの遺構・遺物が検出された。吉田氏の報告[13)]によると、表採された資料はナイフ形石器・細石刃核・細石刃とあり、石材は黒曜石が主体で珪質頁岩・水晶が若干認められる。発掘調査により出土したものは細石刃・石核とあるがそれ以上の詳述はない。

6　米倉山Ａ遺跡[1)]（第108図15～19）

所在：東八代郡中道町下向山字米倉　概要：現在、米倉山山頂一帯を米倉山Ａ遺跡と呼称しており、1978年山本寿々雄氏が調査された米倉山遺跡の付近である。標高370mを測る。

米倉山遺跡の旧石器資料に関しての報告は1988年[1)]と1996年[10)]になされ、小林広和氏が1972年集成[11)]している。しかし、1985年保坂氏の再検討では旧石器と報告している中にも器種分類が異なったり、縄文時代所産と考えるのが妥当とする資料があるとの見解がなされた経緯がある[12)]。

7　米倉山Ｂ遺跡[13)]（第108図20）

所在：東八代郡中道町下向山字米倉　概要：米倉山Ａ遺跡と同じ山頂斜面の西側に位置し、標高約330mを測る。当埋蔵文化財センターが現在も調査中で、詳細は本報告によるが、資料としては図示したナイフ形石器のほかに木葉形尖頭器が２点がある[14)]。

8　小平沢遺跡[15)]（第108図21）

所在：東八代郡中道町下向山字米倉　概要：米倉山Ｂ遺跡の北側平坦部に位置し、標高約370mを測る。1989年米倉山一帯の試掘調査を行った際、坑№76の試掘坑よりナイフ形石器が１点出土。性格な出土層位は不明。

9　物見塚表採地[16)]

所在：東八代郡境川村宮前付近　概要：本調査されたことはなく、遺物包蔵地として登録されている。付近の標高は340mを測る。表採資料より旧石器遺跡の可能性を示しているのみである。

10　寺尾表採地[17]

所在：東八代郡境川村下寺尾付近　概要：本調査されたことはなく、性格な表採地も不明である。付近の標高は340mを測る。図示してないが資料としては表採品ナイフ形石器１点が認められる。

4．まとめ

丘陵周辺の旧石器遺跡の概要は以上の通りである。冒頭でも述べたが本稿は、山梨の旧石器文化の解明を第一目的としている訳だが、記録として十分ではないものもありまた、それらを確認するものも不十分であった。しかし、概ねの状況を判断するものにはなったであろう。以下に今回の集落より得られた結果と今後の課題についてまとめる。

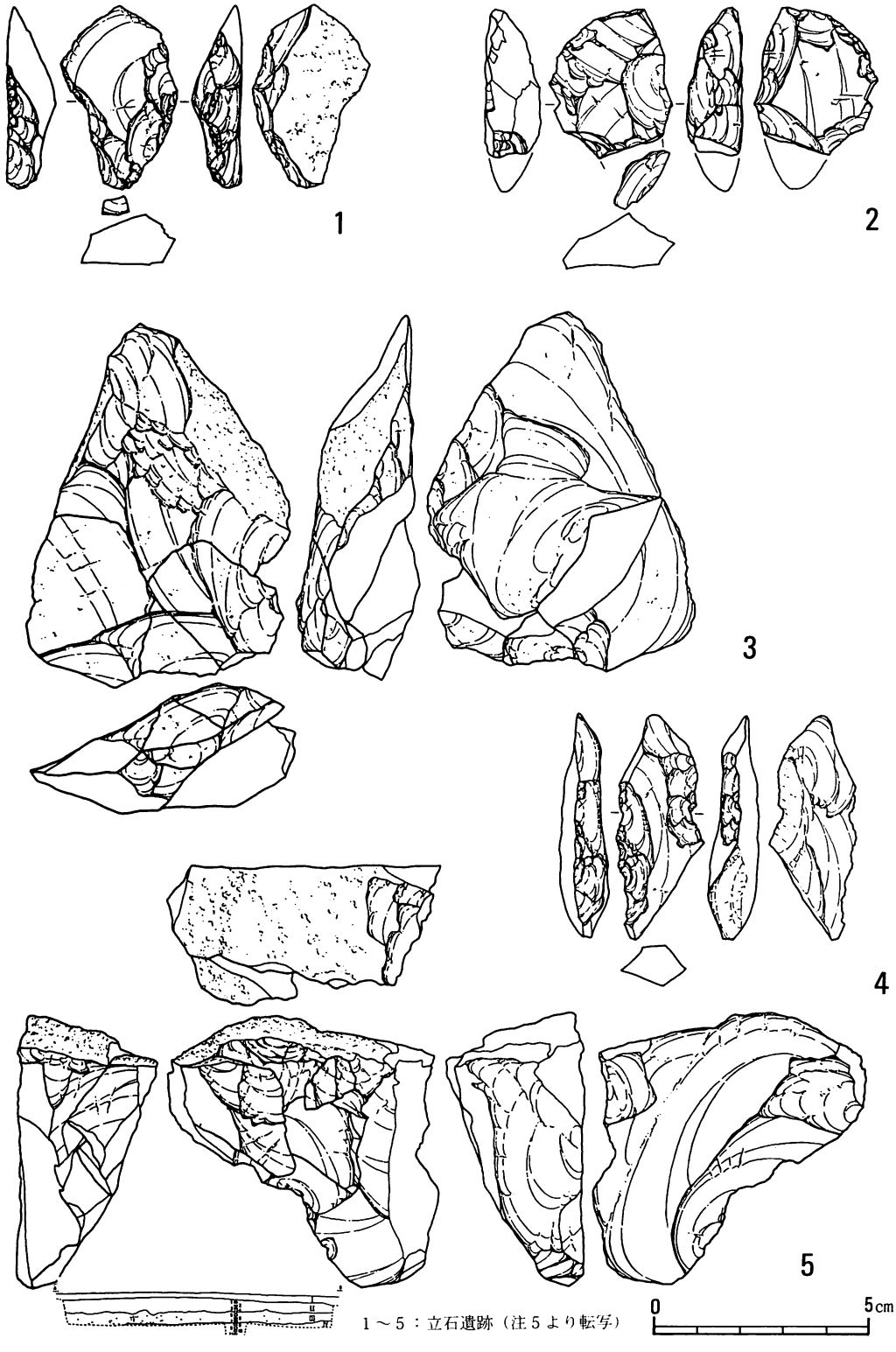
●中道町周辺の曽根丘陵には10ヶ所の旧石器遺跡が存在し、かなりの分布密度である。しかし、特徴として立石遺跡を除き出土状況には纏まりはなく、単独での出土で、しかも縄文時代以降のものと一緒に検出される場合が多い。器種はナイフ形石器が主体である。

●曽根丘陵ではＡＴ層は確実に把握されているが、その上下するローム層および黒色帯については不明な部分がある。従って、関東ロームとの対応関係を明確にし、層位学的な検討を行う必要がある。

●さらに、丘陵には旧石器の包含層まで非常に浅い所が多くあり、それ故さきに述べたよう旧石器以降の遺物と共に検出されることがあり得る。従って、今後一帯は旧石器文化の包含地帯であることを留意しての調査観察が当然とされる。　（宮里）

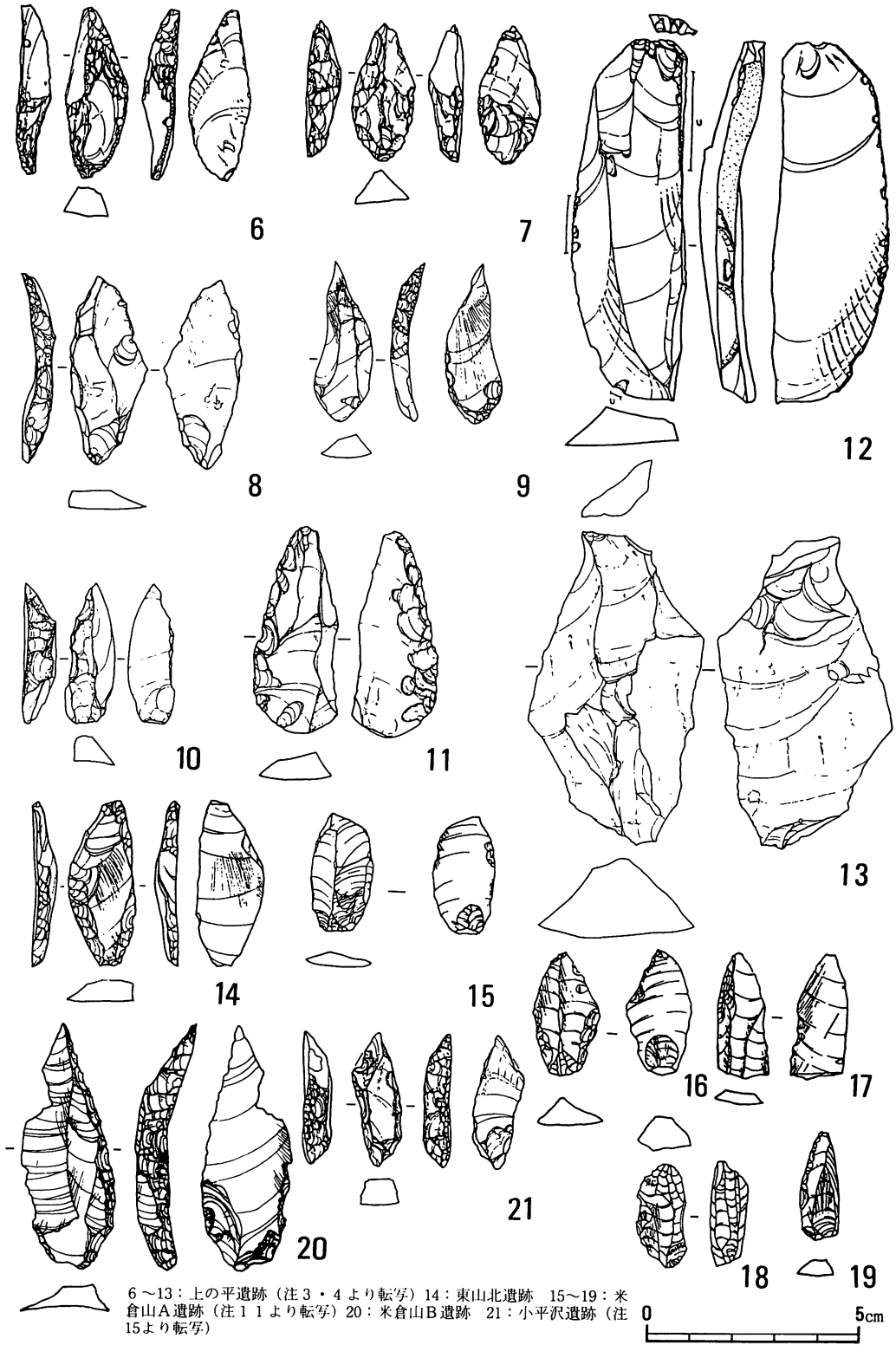
註

1）山本寿々夫 「山梨県下に於ける無土器文化の調査」『石器時代』１　1955
2）吉田　　格 『関東の石器時代』雄山閣　1984
3）山梨県教育委員会 『上の平遺跡―第４次・第５次発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第59集　1987
4）山梨県教育委員会 『上の平遺跡―第１・２・３次発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第29集　1991
5）保坂　康雄 「立石遺跡発掘調査報告書」『研究紀要』６　山梨県埋蔵文化財センター　1990
6）保坂　康雄 「山梨県下の先土器資料の検討－１－」『研究紀要』２　山梨県埋蔵文化財センター　1985
7）保坂康雄氏の御教示による
8）宮の上遺跡については未報告だが、調査を担当された小林広和氏より石器が層位的に確認されているとの御教示を頂いた
9）河西　　学 「立石遺跡での先土器威部を包含する地層」『研究紀要』６　山梨県埋蔵文化財センター　1990
10）谷口和夫・川口昌宏 「山梨県米倉山出土の細石核と細石器」『甲斐考古』１　1966
11）小林　広和 「米倉山先土器遺物考」『甲斐考古』10－１　1972
12）保坂康雄氏の御教示による
13）米倉山遺跡は現在も調査中で本報告されていないが、概要については山梨県埋蔵文化財センター『年報』８・９　1992・３に詳しい
14）実測図は未報告資料だが調査を担当された坂本美夫氏の御好意により掲載させて戴いた
15）中道町教育委員会『米倉山地域遺跡詳細分布調査報告書』1989



1～5：立石遺跡（注5より転写）

第107図　立石遺跡出土石器



6～13：上の平遺跡（注３・４より転写）14：東山北遺跡　15～19：米倉山Ａ遺跡（注１１より転写）20：米倉山Ｂ遺跡　21：小平沢遺跡（注15より転写）

第108図　上の平遺跡他出土石器

第５節　曽根丘陵周辺における縄文時代前期末～中期初頭の様相について

前期末葉から中期初頭段階については、遺跡の規模が小さく、資料的にもみても少ない。したがって、内容的には不明な点が多く、研究の遅れている分野の一つである。本県においても例外ではない。しかし発掘調査の増加に伴って、該期の遺跡数もかなり増加してきたようである。ここで報告する東山北遺跡もまたその一つである。

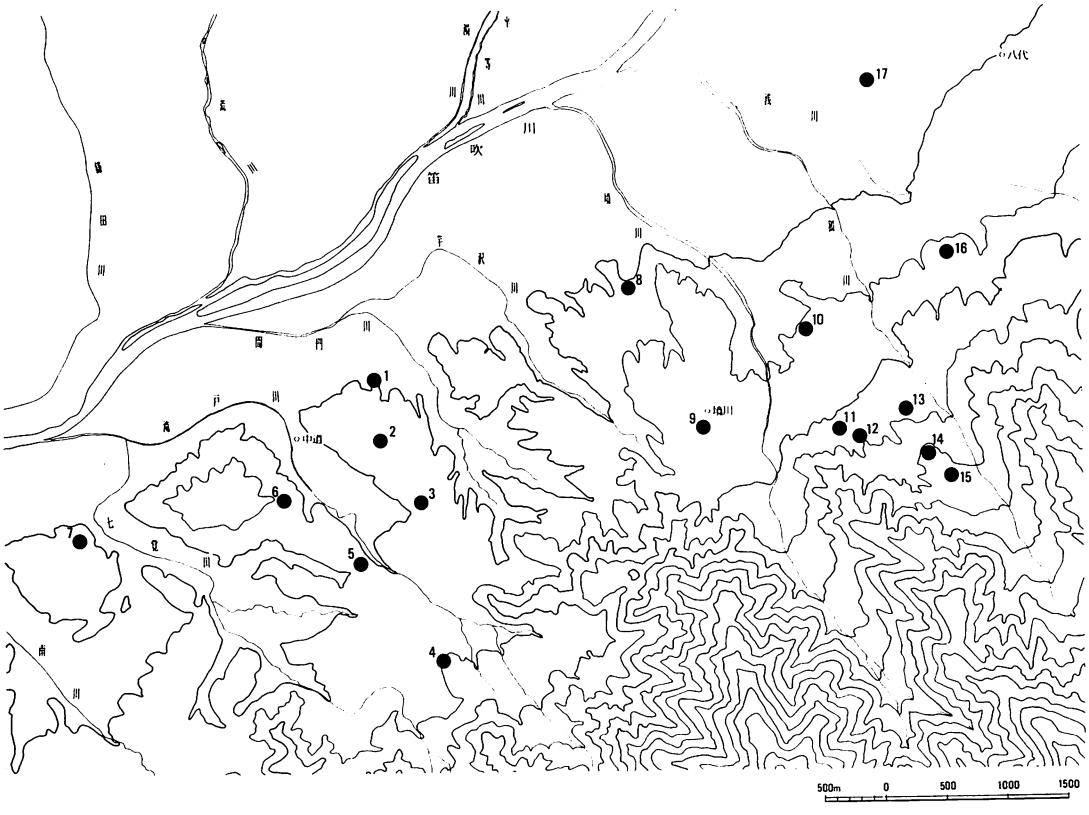
遺跡が発見される状況については、関東地方における多くの遺跡で、少量の遺物のみが出土するような在り方を示している。しかし中部地方においては、明確な遺構と充実した資料を伴った在り方を示している。山梨県の場合は後者に近い特徴を示しているようである。東山北遺跡周辺に存在する上の平遺跡や立石遺跡、上野原遺跡、米倉山Ｂ遺跡、小黒坂南遺跡群（寺平・亀の子Ａ遺跡・机・砂原山遺跡）などから出土した遺物について見てみると、北陸・中部山岳・畿内方面の土器群と関東方面の土器群がそれぞれ出土していることがわかる。これは、本地域が各文化の合流地点に位置づけられるものと考えられるものである。このように他文化の流入の痕跡が、顕著に確認できる曽根丘陵一帯は、該期の遺跡が集中する大変興味深い地点の一つである。

第109図は東山北遺跡とその周辺に存在する前期末葉から中期初頭段階に位置づけられる土器出土遺跡の分布図である。これを見ると、中道町の滝戸川流域と境川村の狐川流域の二ヵ所に遺跡の集中地点が存在する。両者の距離差は3.5㎞である。この分布域にみられる大きな違いは、前者において主体をなす土器群は、押圧隆帯文とソーメン状貼付文が施されている前期末葉段階から中期初頭段階を中心に構成されている。中期初頭段階の土器群では、沈線文系の占める比率が縄文系より高いようである。後者においては前期末葉段階が中心で、特に諸磯Ｃ式から三角印刻文が施されている一群が集中していることが指摘できる。この分布の違いは、時期差による生活空間の移動と考えられるもので、狐川流域（前期末の古段階）から滝戸川流域（前期末葉の新段階以降）の東山北遺跡周辺に移り住んできた可能性が考えられるのである。また、境川村の小黒坂遺跡群に属する寺平遺跡や砂原山遺跡から発見された集合沈線文に三角印刻文を加付した土器が、三珠町の上野遺跡や一条氏館跡遺跡から出土したものと非常に酷似している点にも注目したい。三珠町は分布図上には記載できなかったが、同じ曽根丘陵上に位置している。分布図に表記した遺跡は、標高300～500ｍ付近に集中し、どの遺跡についてもやや傾斜がかかった地点に占地している。この傾斜した地点に集中するという点については、他県における同時期の遺跡の在り方と非常に酷似している。これは文化の特性を示したものと考えられ、山梨県にも広く浸透していたことが伺える。

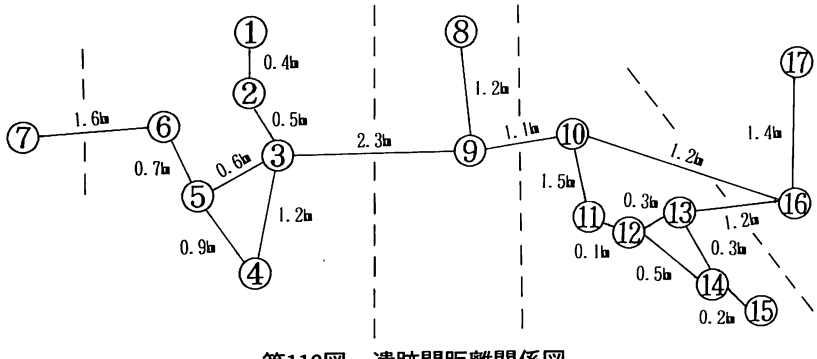
各遺跡からの出土土器に見た遺跡の継続性については、第８表に記したとおりであり、この17遺跡における時間的な継続性は、ある程度認められるようである。遺跡間の距離関係については第110図で示したとおりである。このことについては、今後の調査の進展によってさらに縮まっていくものと考えられる。

最後に東山北遺跡の性格について考えてみる。まずその特徴を上げるなら第一に、本遺跡から

は遺構が全く発見できなかったことである。第二に、時期の限定はできないが、出土遺物の中に狩猟加工具の占める割合が多いことである。第三に、隣接して存在する遺跡として、住居址を伴う比較的大規模な上の平遺跡などが存在することなどの点が上げられる。以上のことから本遺物の性格は居住地としてではなく狩猟場などとしての機能があったのではないかと考えられる。このことは、今後の発掘調査の進展によって、セトルメントDないしFパターンに該当する遺跡の増加を待てば、より一層はっきりした様相が見えてくるものと考えられる。　　（野代）



第109図　遺跡分布図



第110図　遺跡間距離関係図

第8表　曽根丘陵における縄文前期末～中期初頭段階の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	分類 一	二	三	四	五	六	七	備考（文献）
1	東山北	東八代郡中道町下向山字東山		○	○	○	○		○	本報告
2	上の平	東八代郡中道町下向山					○	○	○	山梨県教育委員会『上の平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第29集(1987)　住居址あり
3	立石	東八代郡中道町上向山字小林の上					○	○		未報告　住居址あり
4	上野原	東八代郡中道町右左口字上野原					○			金井安子他「山梨県上野原遺跡第4号住居址出土の土器について」(『青山史学』第11号、1989)　住居址あり
5	下向山	東八代郡中道町下向山						○	○	吉田格「山梨県東八代郡中道町下向山」(『考古学雑誌』第48巻、第3号、1963)　住居址あり
6	米倉山B	東八代郡中道町米倉山字下向山			○	○	○	○	○	調査中
7	宇山平	東八代郡豊富村大鳥居字字山平		○		○	○		○	山梨県教育委員会『金川曽根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報』(1973)
8	京原	東八代郡境川村小山字京原				○		○		山梨県教育委員会『京原』(1974)　境川村教育委員会『京原遺跡』境川村埋蔵文化財発掘調査報告書　第5輯(1989)
9	辻	東八代郡境川村藤垈字辻				○	○	○	○	山梨県教育委員会『辻遺跡と薊在家遺跡』(1970)
10	柳原	東八代郡境川村小黒坂字柳原		○						境川村教育委員会『柳原遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書　第1輯(1984)　住居址あり
11	亀の子A	東八代郡境川村小黒坂字手古松		○		○	○	○		境川村教育委員会『小黒坂遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書　第3輯(1986)
12	寺平	東八代郡境川村小黒坂字手古松		○		○	○			境川村教育委員会『小黒坂遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書　第3輯(1986)　住居址あり　※大歳山式、北白川系土器出土
13	一の沢西	東八代郡境川村小黒坂字一の沢					○			山梨県教育委員会『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第16集(1986)
14	机	東八代郡境川村小黒坂字手古松				○				境川村教育委員会『小黒坂遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書　第3輯(1986)
15	砂原山	東八代郡境川村小黒坂字手古松		○		○	○			境川村教育委員会『小黒坂遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書　第3輯(1986)
16	上の平	東八代郡八代町米倉字上の平		○	○	○	○	○	○	八代町教育委員会『上の平遺跡』(1985)
17	三光神（下長崎）	東八代郡八代町永井字荒神原　下長崎		○		○	○			八代町教育委員会『三光神遺跡』(1987)　※畿内系あり

1類　諸磯C(古)段階とされるもの　大型の貼付文
2類　諸磯C(新)段階とされるもの　貼付文と結節浮線文
3類　諸磯C(末)段階とされるもの　集合沈線
4類　鍋屋町系とされるもの　平行沈線文と三角印刻文
5類　十三菩提式段階　押圧隆帯文とソーメン状貼付
6類　五領ヶ台I式段階
7類　五領ヶ台II式段階

第６節　弥生土器・古式土師器について

１．これまでの研究の経過と現状

1986年に中山誠二氏が発表した「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」[1]では、本県の弥生時代末～古墳時代初頭にかけての土器編年が設定された。しかしまだ資料的には少なく、器種にも偏りがみられた。とはいえこれまで大まかにしかとらえられていなかった該期の土器の変遷が、ある程度の明確さを持って位置付けられたことは高く評価されよう。それは停滞気味だった本県の該期の土器研究を発展させる嚆矢となった。また浜田晋介氏は、中部高地系土器と東海系土器の接点を探り、前者から後者へ漸移的に変化していく段階をとらえた[2]。両氏の論考は、ともに外来系土器の波及に重点が置かれているが、浜田氏のそれは外来系土器が動く一方での、在来系土器の在り方にも注目しているところに大きな意味があった。

近年県内では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての遺跡の調査が飛躍的に増加しており、出土する土器についてもきわめて良好な資料を提供している。資料的に不足していた部分が発見され、詳細な変遷が徐々に追われつつある。ところが、資料の増加が弥生時代から古墳時代への変化と画期を明らかにしてくれるかといえば、必ずしもそうとはいえないようである。そこには外来系土器、編年と併行関係・実年代、そして古墳の編年との関係など様々な問題を含んでおり、研究者間で意見の一致をみていない。したがって根本的な見直し・再検討に迫られているのが現状である。これは本県ばかりではなく、他の地域においても同様であろう。これら最近の研究動向については、西川修一氏の論考[3]の中で述べられている。

そんな中にあって、東山北遺跡においても在来系の土器を始め、東海系、北陸系といった土器が多数出土している。またわずかではあるが中部高地系も存在する。いずれも破片資料で全体を窺えるものは少ないが、本県における該期の土器様相の一端をとらえることは可能と思われる。以下、これらの土器について若干の考察を行うのであるが、資料的制約から、器種分類といったレベルでの検討は難しいように思われる。よって本県の他の遺跡の土器と比較しながら、形態上の系譜を重視し、在来系と外来系とに分け整理していくことにする。

２．在来系土器

在来系土器は住居址からの出土が中心で、中でも最も多いのは壺と台付甕である。壺は折り返し口縁をもつものがほとんどである。該期の遺跡には、六科丘遺跡（櫛形町）[4]、長田口遺跡（櫛形町）[5]、米倉山Ｂ遺跡（中道町）[6]、平野遺跡（増穂町）[7]、などが挙げられる。これらの遺跡でみられる壺は、頸部が長く、体部は下ぶくれを呈するもので、本遺跡のものも同じ形態であろう。調整は摩滅したものが多く確認が困難であるが、外面がミガキ、内面はハケメと思われる。

台付甕はく字に外反する単純口縁のもの、端部に刺突を施したもの、折り返し口縁のものがみられる。後述するＳ字状口縁台付甕（以下Ｓ字甕とする）が出現する前後では、端部に刺突を施したものが５割近くを占める。上記の遺跡でも、いずれもほぼ同様の傾向を示している。しかしすべてがＳ字甕にとって変わるのではなく、単純口縁のものはその後も引き続き存在するようで

ある。器壁は厚く、特に脚台部はしっかりと作られている。体部形態は長胴のものと球形のものがある。内外面ハケメ調整を基本とする。

この他、高杯・小型壺・鉢・蓋などの器種が散見できるものの、依然として偏りがある。特に高杯については、上記の遺跡でもきわめて点数は少なく、その存在自体が問題となるが、現時点ではわからない。第２号方形周溝墓では手捏のミニチュア土器もみられる。壺形のもの、高杯を模倣したと思われるもの、鉢形のものがある。

３．外来系土器

外来系土器は複雑な展開をみせる。一地域からの一元的な波及ではなく、各系統ごとの波及の段階をとらえなければならない。なお、中部高地系については、破片資料が数点あるのみで詳細に触れることはできないが、徐々に減少していく段階であり、他の外来系土器と少なからず混在している状況を物語るものであろう。また第２号方形周溝墓出土の折り返し口縁をもつ壺（第52図13）のように、在来系か外来系か系譜が辿れないものもある。しかし関東地方では比較的多くみられるようである。

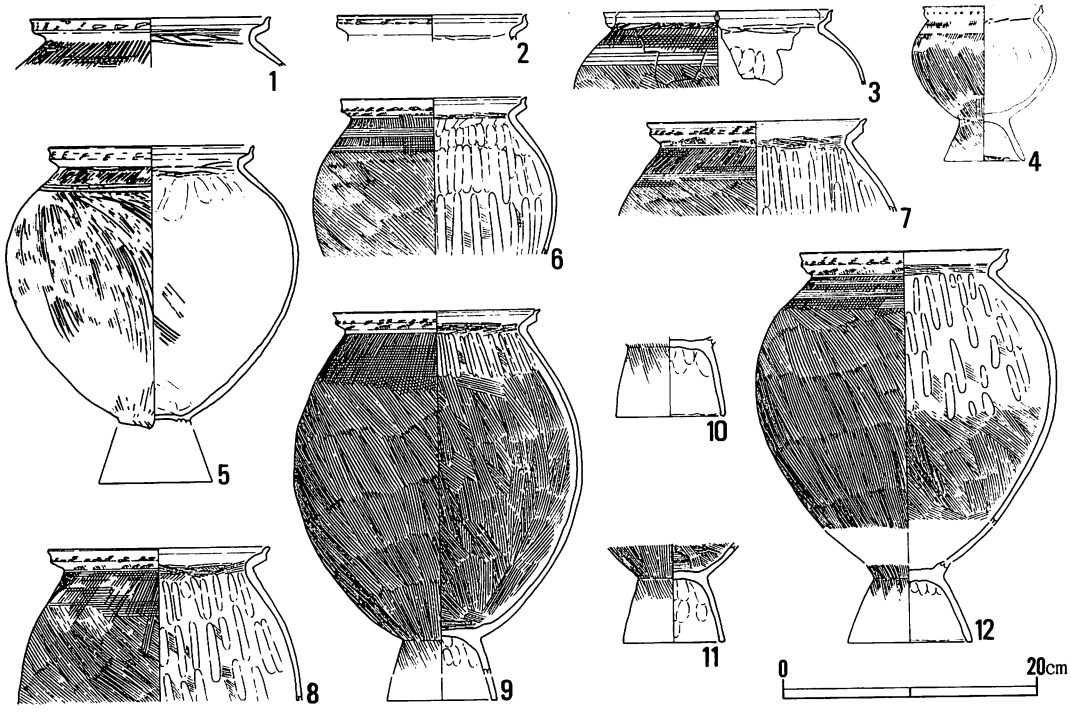
方形周溝墓出土の有段口縁壺（第52図９・10・11・12）は、口縁部の外反は小さく、有段が明瞭さを欠き形骸化したもので、型式的にも新しい。これは伊勢湾地域の流れを受けたもので、県内では桜井畑遺跡Ａ地区第２号方形周溝墓からの出土例がある。杯部に綾をもつ高杯（第59図14）は、おそらく畿内に淵源をもつものと思われ、在地のなかで変化したものであろう。

東海系は駿河系、東遠江系、濃尾平野系に分けられる。壺が多く、駿河系は複合口縁に棒状浮文を貼付したもの、東遠江系では、肩部に櫛刺突羽状文を施した菊川系の影響がみられる。またこの他、肩部に結節縄文を施したものには、西相模との関連を窺わせるものもある。

４．Ｓ字甕について

外来系土器の中で、やはり濃尾平野系はＳ字甕の重要となろう。古墳時代初頭、全国的な土器移動の中で、濃尾平野系土器は圧倒的な量と分布を占めている。その代表器種であるＳ字甕は本県においても特に顕著な存在であり、優秀な煮沸具として広く定着している[8]。それはまさに本県における「薄甕の時代」[9]の到来であった。Ｓ字甕の分類・編年に関する研究は大参義一氏、安達厚三氏が行っている[10]。しかしそれ以降、Ｓ字甕を含む東海地域の土器編年に関する研究は予想以上に立ち遅れていたが、近年赤塚次郎氏によって精力的に進められてきた。過去の研究を踏まえたＳ字甕の分類と、それを基軸に設定された廻間式土器[11]は、現在最も信頼性が高いものといえ、既に各地域では広く対比されている。

県内では、近年赤塚分類Ａ類[12]の出土が目立っている（第111図）。坂井南遺跡（韮崎市、１）[13]、後田遺跡（韮崎市、５）[14]、村前東Ａ遺跡（櫛形町、２・３）[15]、そして米倉山Ｂ遺跡（６～12）[16]と、当初県内では全く稀有な存在であったが、これまでの状況とは違った様相を呈している。Ｓ字甕がもつ独特の形態的特徴による型式の変化は、併行関係をもとにした時期決定の重要な資料として注目されてきた。だが、赤塚分類Ａ類を忠実に模倣したものが存在する一方で、赤塚分類



1坂井南　2・3村前東A　4竹の内　5後田　6～12米倉山B

第111図　山梨県のS字甕A類

に対比できない、在地化したものの存在が明らかになり、かえってわかりにくくなっていることもまた事実である。その中には村前東A遺跡出土例のように、既にA類の段階から在地化の傾向がみられるもの(3)、竹の内遺跡（八代町）出土の小型品(4)[17]など、本県におけるS字甕の定着は、予想以上に早い段階からみられるのである。またS字甕の型式の新旧の分布の状況、搬入経路から、定着するまでの時間的な差も想定される。その後さらに在地化は進み、やがて「在来系土器」として変化を遂げていく。今後はさらには独自に編年を組み立てることが可能と思われる[18]。S字甕の卓越性を再認識しつつ、本遺跡出土のS字甕について触れておく。

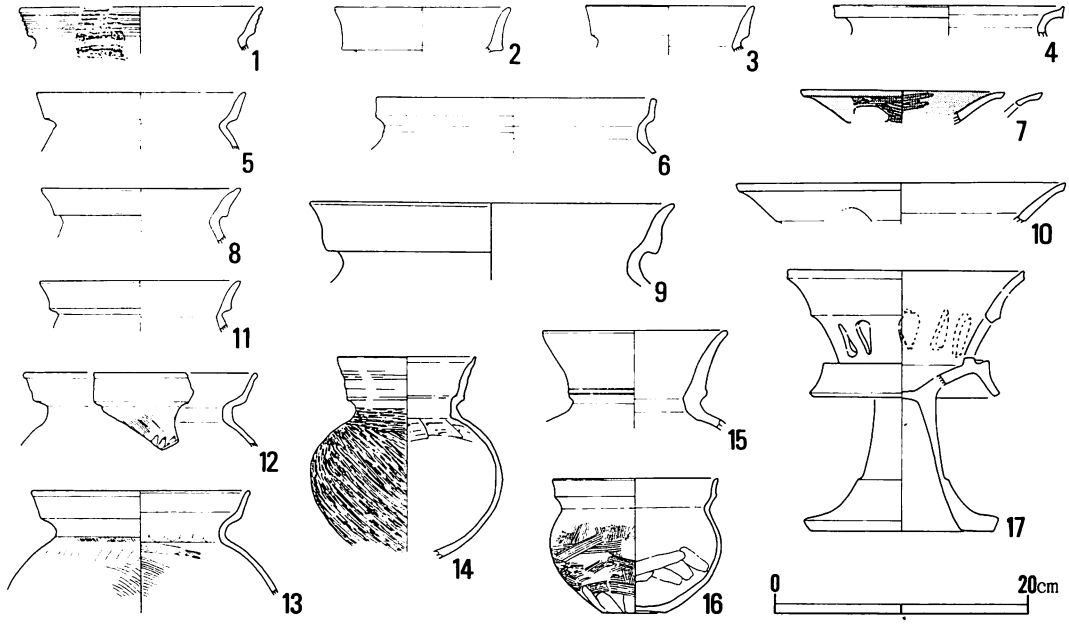
ところで、本遺跡では方形周溝墓からS字甕が出土している。方形周溝墓からの出土例は、近在する上の平遺跡をはじめ、県内での出土はほとんど確認されていない[19]、それゆえ、本遺跡の出土例は貴重な資料となろう。

第2号方形周溝墓(第57図)出土のうち、1は口縁部上段先端は尖り、中段は垂直に立ち上がり、外面に刺突文を施した赤塚分類A類であるが、刺突文が押引き状ではなく、起源地である濃尾平野のものとやや趣が異なる。2は赤塚分類B類古段階の小型品で、現時点では唯一の搬入品と思われる。色調は灰白色で、肉眼観察でも明らかに胎土が異なる。このような小型品は起源地から直接持ち込まれたものであろう。4は口縁部は立ち気味で各段の屈曲も明瞭ではない。肩部は強く張るがヨコハケは省略されており、山梨県において特徴的な形態を示している。1・2の段階まで溯る可能性もあるが、出土状況からも4が方形周溝墓の造墓時期を決定する資料となろう。

この他、脚部が大きく開く椀形高杯も濃尾平野系のものである。坂井南遺跡55住居址での出土例がある。

5．北陸系土器について

S字甕を含む東海系土器の存在が顕著な一方、北陸系土器の存在も重要になる。各地域での様相については、比田井克仁氏によりその重要性が早くから指摘されていた[20]。県内でも、二之宮遺跡（御坂町）（第112図１～３・５・８・11～13）[21]、姥塚遺跡（御塚町、17）[22]、坂井南遺跡（６・９）[23]などで出土が確認されていたものの、その来歴につすいてこれまでほとんど取り上げられることはなかった。最近になって、身洗沢遺跡（八代町、４・７・10・16）[24]、上野遺跡（三珠町、14）[25]、村前東Ａ遺跡(15)、長田口遺跡、榎田遺跡[26]、などでの出土が確認され、ようやくその存在が明らかになってきた[27]。しかし一遺跡においてこれほど多くの北陸系土器が出土したところはなく、これまで東海系・畿内系の存在に隠れいてたが、本遺跡の出土量は特筆されるべきものがある。器種別では甕がほとんどを占める。その中でも有段口縁に擬凹線文を施したもの、口縁部が外反し端部を面取りし、わずかにつまみ上げられたものが大部分である。しかし１点だけ脚部端部をつまみ上げた器台（第59図18）もみられ、他の器種より古相を呈するものと思われる。また搬入品と思われるものは１点のみ（第39図15）で、あとはすべて在地での製作によるものである。



１～３・５・８・11～13二之宮　４・７・10・16身洗沢　６・９坂井南
14上野　15村前東Ａ　17姥塚

第112図　山梨県の北陸系土器

北陸系土器は本県を始め、他地域でも増加の傾向にある。さらにこれまで東海系と思われていたものの中にも、実は北陸系である可能性があり、もう一度見直してみる必要がある。新たな展開を見せつつある北陸系土器は、今後大いに注目しなければならない土器群である。

6．小　結

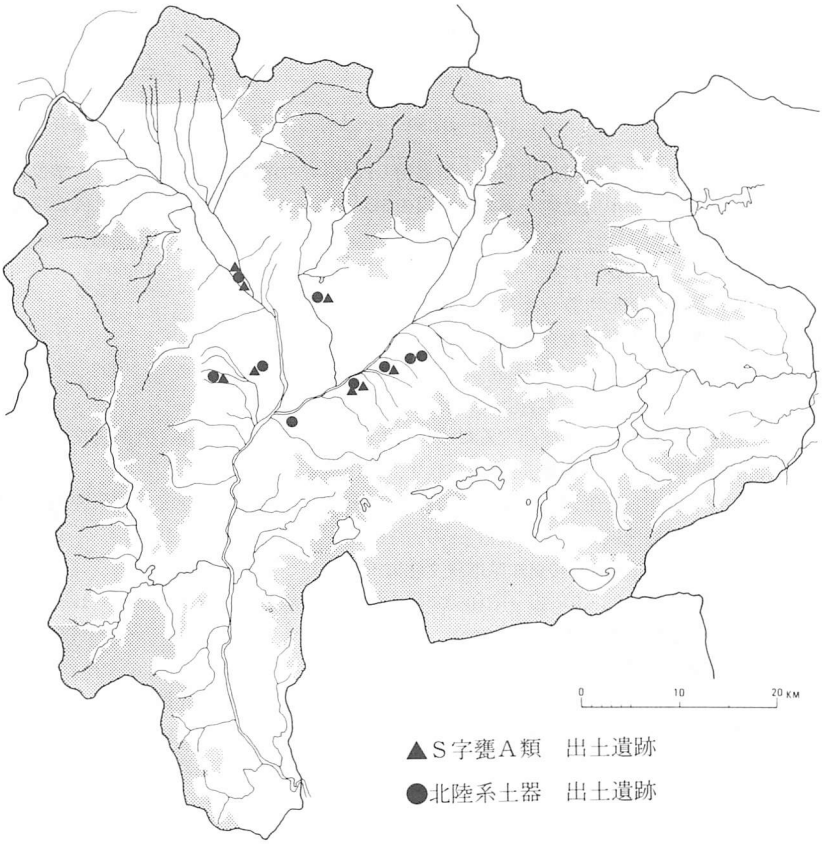
最後に畿内、東海（濃尾平野）、北陸との併行関係を確認し、さらに土器の移動に関わる問題についても若干触れておきたい。なお、併行関係については、最近の研究動向の中で検討されたものに求める。

住居址出土の土器は、在来系土器の中に駿河系、東遠江系、西相模の影響がみられる。県内では住吉遺跡（甲西町）[28]において菊川式の影響を受けた土器が出土しており、西遠江山中系の高杯もある。また六科丘遺跡・平野遺跡では在来系土器を主体としている。よって先にも述べたように、本遺跡の住居址もこれらの遺跡と同時期であると考えられる。濃尾平野では山中式後期[29]から廻間Ⅰ式に、畿内ではⅤ様式後半から庄内式古段階[30]に対比されよう。

方形周溝墓出土の有段口縁壺は畿内の布留式新相に、在地化が進んだＳ字甕は概ね廻間Ⅲ式に対比されよう。北陸系土器はほとんどが月影Ⅱ式[31]、漆町５・６群[32]の中でとらえられよう。北陸系土器が出土している第27号住居址とされる遺構は、新旧関係では第２号方形周溝墓より新しいものである。ところが第２号方形周溝墓出土のＳ字甕は、明確に対比できないが、廻間Ⅲ式以降のものと考えられ、また有段口縁壺は布留式新相段階のものである。そうすると漆町９・10群に併行することになる。土器からみた限りでは、方形周溝墓の造墓時期よりも２段階程度古くなる。この間は全国的に土器が活発に移動する時期であり、時代は新しい方向へ動き出す。

第113図は濃尾平野系土器を代表するＳ字甕Ａ類と北陸系土器の分布図である。あくまでも現状ではあるが、Ｓ字甕Ａ類が出現する遺跡では、北陸系土器も出土しているところがあり、Ｓ字甕Ａ類と北陸系土器はほぼ同じ分布を示す。また共伴関係から、時間的には北陸系土器は東海系土器が流入する時期とほぼ同調している。本遺跡にみられる土器は、六科丘遺跡・平野遺跡のような在来系のものと、Ｓ字甕・北陸系土器のような外来系のものがともにみられる時期である。濃尾平野系土器、北陸系土器が、当地域に何らかの形で介在していたことは確かである。これら土器様相の差は、別の視点から見れば、在来系土器を主体とする集団から、外来系土器をもつ集団へと変化していくということになるのであろうか。このことは濃尾平野、北陸、そして甲斐との間（集団間か）に何らかの緊張関係を想起させる要素を十分に含んではいる。それでは東海系土器と北陸系土器との間には、いったいどんな関わりがあるのか。こういった現象を巻き起こす背景にあるものは何であろうか。どこかに接点をもつのであろうか。

近年赤塚次郎氏はＳ字甕Ａ類に象徴される東海系土器の動きを、邪馬台国と狗奴国との抗争の中で生まれた難民の排出ととらえた論考を発表している[33]。確かに東海系土器の出土量は群を抜いているが、それならば北陸系土器の動きはどうとらえるのか。ほぼ同時期に移動していることを見逃すことはできないだろう。それよりもまず、台付甕か平底甕かという形態、「使い方の問題」[34]、系統や器種構成の分析といったレベルでの検討が重要ではないだろうか。そこには受け



第113図　遺跡分布図

入れる側の意思が働き、受け入れた側は「薄甕の時代」の到来を察知したのかもしれない。そこにあるのは「時代の趨勢」とでもいうべきものであり、邪馬台国、狗奴国と、S字甕A類とは別の動きのように思われる。さらにこういった背景から算出された、従来よりも50年から100年繰り上がった実年代についても慎重に臨みたい。これは本県のみならず、東日本の各地域の共通の問題である。歴史の核心に触れようとする時には、常に繰り返し土器の用途・機能・交易の面からとらえることが必要ではないだろうか。したがって土器に対する細かな観察を行うのはもちろんのこと、本県への搬入経路もきわめて大きな意味を持つであろう。また胎土分析なども有効な手段となろう。

冒頭で述べた通り、該期の本県には外来系土器が大きく関与する。このような状況の中で、本県の古式土師器は外来系土器のみによって成立しているという指摘があるが[35]、果たして本当にそうであろうか。全国的な土器移動の中で山梨もその影響を大きく受けるのであるが、外来系土器の波及によって、在来系土器が全く無くなってしまうのではない。これまでの伝統的な土器の要素の中に外来系の要素が徐々に取り入れられ、S字甕のように表面的にも質的もに変化を遂げていくものがある。そして在来系として新たな方向性をみせる。しかし一方では在来の要素は依

然として存続するのである。外来系土器ばかりに目を奪われることなく、在来系土器にも目を向ける必要があるのではないだろうか。本県の弥生時代から古墳時代への画期を説き明かす重要な視点であるが、まだまだ時間がかかりそうである。（小林）

註

1）山中　誠二　「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会　1986
2）浜田　晋介　「弥生時代後期の甲府盆地－異系統土器の相互交流とその様相－」『山梨県考古学協会誌』第2号　山梨県考古学協会　1988
3）西川　修一　「特殊壺になれなかった壺」『古代』第94号　早稲田大学考古学会　1992
4）関根孝夫他　『六科丘遺跡』櫛形町教育委員会　1985
5）保坂和博他　『長田口遺跡』山梨県教育委員会　1993
6）小野正文他　「米倉山Ｂ遺跡」『年報８　平成３年度』山梨県埋蔵文化財センター　1992
7）保坂　康夫　『平野遺跡』山梨県教育委員会　1993
8）小林　健二　「甲府盆地におけるＳ字甕の定着について」『古文化談叢』第26集　九州古文化研究会　1991
9）石野　博信　「５古墳前期の厚甕と薄甕」『古墳時代史』雄山閣　1990
10）大参　義一　「弥生式土器から土師器へ－東海地方西部の場合－」『名古屋大学文学部研究論集』XLVII　1968
安達厚三・木下正史　「飛鳥地域の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第２号　1974
11）赤塚　次郎　「Ｖ考察」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1990
12）赤塚　次郎　「『Ｓ字甕』覚書'85」『年報　昭和60年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1986
13）山下　孝司　『坂井南』韮崎市教育委員会　1988
14）山下　孝司　『後田遺跡』韮崎市教育委員会　1989
15）中山誠二・丸山哲也　「村前東Ａ遺跡」『年報７　平成２年度』山梨県埋蔵文化財センター　1991
16）小林　健二　『Ｓ字甕Ａ類について』山梨県埋蔵文化財センター研修会資料　1992
17）山中誠二・小林健二　「山梨県における弥生時代後期土器の様相」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会　1991
18）小林　健二　「外来系かせ在来系へ－甲斐のＳ字甕の変遷－」『研究紀要』９　山梨県考古学博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1993
19）昨年行われた坂井南遺跡の調査でも、方形周溝墓からＡ類を含むＳ字甕が多数出土している。山下孝司氏の御教示による。
20）比田井克仁　「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号　早稲田大学考古学会　1987
21）坂本美夫他　『二之宮遺跡』山梨県教育委員会　1987
22）末木　健他　『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会　1987
23）山　下孝司　『坂井南遺跡」韮崎市教育委員会　1984
24）中山誠二・今福利恵　「身洗沢遺跡」『身洗沢遺跡・一町五反遺跡』山梨県教育委員会　1990
25）堀ノ内　泉　『上野遺跡』三珠町教育委員会　1989
26）高野玄明・橘田重男　「榎田遺跡」『年報９　平成４年度』山梨県埋蔵文化財センター　1993
27）山中　誠二　「身洗沢遺跡における外来系土師器の諸相」『研究紀要』７　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1991
28）新津　　健　『住吉遺跡』甲西町教育委員会　1981
29）赤塚　次郎　「第３節　山中式土器について」『山中遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1992
30）米田　敏幸　「土器の編年　１近畿」『古墳時代の研究　６土師器と須恵器』雄山閣　1991
31）谷内尾晋司　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』　1983
32）田嶋　明人　「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター　1986
33）赤塚　次郎　「Ｓ字甕の移動」『歴博フォーラム　邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館　1991
「東海系のトレース　－３・４世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』vol.45　1992
34）石黒　立人　「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点－弥生後期の土器様相を中心として－」『古代』第86号　早稲田大学考古学会　1988
35）花岡　　弘　「土器の編年　６中部高地」『古墳時代の研究　６土師器と須恵器』雄山閣　1991

第７節　炭化物と籾圧痕土器

１．炭 化 米

炭化米の出土している住居址は第13号住居址（完存品8483粒で破砕されたものも数倍程度ある）と第15・16住居址（26粒）である。焼失家屋と推定される住居は12軒あるが、このうち炭化米の出土した遺構は、この２軒のみである。また、炭化の状況を観察するため、パレオ・ラボに分析委託した。

第13号住居址から出土した炭化米は、床面に撒かれたような状態で出土し、一部ブロック状態で発見されている。したがって、災害にあった時に、上屋に置かれていた袋が焼けて住居内に散らばり、焼けたものと考えられる。

第13住居址の炭化米は計測は、出土炭化米のうち455粒を任意に選別し、第９表に表した。粒長（H）4.0～4.6㎜、粒幅（W）2.4～3.0㎜に集中しており、金の尾遺跡[1]の炭化米の計測値とも類似している。最小粒はH3.2㎜×W2.2㎜で、最大粒はH6.0㎜×W3.5㎜であるが、これらの量は極めて少ない。粒形は粒長／粒幅の数値で表され、円粒（R）1.0～1.4、短粒小（Ss）1.4～1.6、短粒中（Sm）1.6～1.8、短粒大（Sl）1.8～2.0、長粒（Ls）2.0～2.3という区切りで分けられている[2]ので、それに則して第13号住居址の炭化米を分類すると、R77・Ss191・Sm152・Sl31・Ls４となる。円粒77、短粒474、長粒４であるから、短粒が主体を占めている。　（末木）

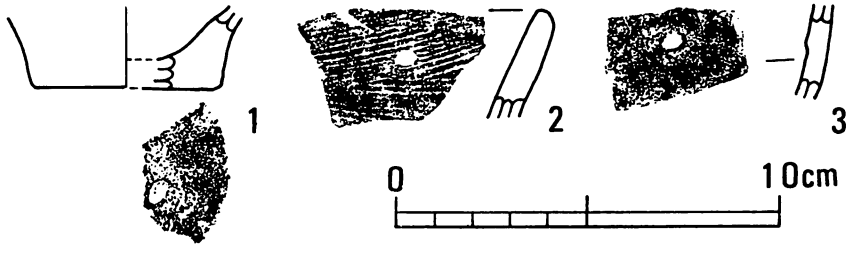
註

１）末木　健　『金の尾遺跡』山梨県教育委員会　1987

２）佐藤敏也・粉川昭平　「食用植物」『弥生文化の研究』雄山閣　1988

２．籾圧痕土器について（第114図）

１．甕底部に付けられた圧痕で、粒長７㎜、幅４㎜である。２は甕口縁部内側にあり、粒長６㎜、幅４㎜。３は赤彩色された小形壺の内面に見られる圧痕で、粒長5.5㎜、幅3.5㎜である。炭化米より大きいが、このサイズより実物は更に大きい可能性がある。というのは、土器の成型時より乾燥時期は１割程度縮小することが知られており、焼成によって更に若干縮小するからである。３片はいずれも第２号方形周溝墓の溝から出土している。　（末木）



第114図　籾圧痕土器

第９表　第13号住居址出土炭化米計測表

縦長mm	幅 mm	数		粒形	H／W
3．2	2．2	1	◎	Ｓｓ	1.45
3．4	2．2	1	◎	Ｓｓ	1.54
	2．8	1	◎	Ｒ	1.20
3．6	2．0	2	◎◎	Ｓｌ	1.80
	2．4	3	◎◎◎	Ｓｓ	1.50
	2．6	5	◎◎◎◎◎	Ｒ	1.38
3．8	1．8	3	◎◎◎	Ｌｓ	2.11
	2．2	8	◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1,72
	2．4	3	◎◎◎	Ｓｓ	1.58
	2．6	13	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.46
	2．8	6	◎◎◎◎◎◎	Ｒ	1.35
	3．0	4	◎◎◎◎	Ｒ	1.26
	3．2	1	◎	Ｒ	1.18
4．0	2．0	3	◎◎◎	Ｓｌ	2.00
	2．2	2	◎◎	Ｓｌ	1.81
	2．4	12	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1.66
	2．6	27	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.53
	2．8	20	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.42
	3．0	11	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｒ	1.33
	3．2	2	◎◎	Ｒ	1.25
	3．4	1	◎	Ｒ	1.17
4．2	2．0	1	◎	Ｌｓ	2.10
	2．2	1	◎	Ｓｌ	1.90
	2．4	13	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1.75
	2．6	30	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1.61
	2．8	28	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.50
	3．0	23	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｒ	1.40
	3．2	5	◎◎◎◎◎	Ｒ	1.31
	3．4	2	◎◎	Ｒ	1.23
4．4	2．2	2	◎◎	Ｓｌ	2.00
	2．4	13	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｌ	1.83
	2．6	32	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1.69
	2．8	34	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.57
	3．0	26	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.46
	3．2	9	◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｒ	1.37
	3．4	5	◎◎◎◎◎	Ｒ	1.29
4．6	2．4	1	◎	Ｓｌ	1.91
	2．6	18	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1.76
	2．8	25	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1.64
	3．0	17	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.53
	3．2	5	◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.43
	3．6	2	◎◎	Ｒ	1.27
4．8	2．4	2	◎◎	Ｓｌ	2.00
	2．6	3	◎◎◎	Ｓｌ	1.84
	2．8	7	◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｍ	1.71
	3．0	7	◎◎◎◎◎◎◎	Ｓｓ	1.60
	3．2	4	◎◎◎◎	Ｓｓ	1.50
	3．4	1	◎	Ｓｓ	1.41
5．0	2．6	1	◎	Ｓｌ	1.92
	2．8	3	◎◎◎	Ｓｍ	1.78
	3．0	2	◎◎	Ｓｍ	1.66
	3．2	1	◎	Ｓｓ	1.56
5．2	2．8	1	◎	Ｓｌ	1.85
	3．2	1	◎	Ｓｍ	1.62
6．0	3．5	1	◎	Ｓｍ	1.71
		455			

第8節　馬骨・歯について

第2号方形周溝墓東側の溝底面に近い所から、馬骨・歯が出土している。総数は34点で、3つのブロックに分かれて出土している。Aブロックは23点、Bブロック5点、Cブロック6点である。集中しているのは北側のA・Cブロックで、Bブロックはその中間に位置する。BブロックはAブロックから分離したものか、あるいはCブロックより低い北側にあるので、Bブロックから流出した可能性もある。骨・歯は腐食が進み、そのままでは取り上げが困難であったので、パラロイドB72の3％溶液を含浸させて取り上げたが、大部分は部位の判別がつかないほど崩壊している。

出土層位は、黒色土層（E－E′セクション図で網目スクリントーンの貼られた部分）の下部に集中している。黒色土は腐食土であることから、周溝墓が築造された後に、すぐに始まる崩壊が安定してから形成される土質と見なす事ができる。従って、この黒色土の下層から出土した馬骨・歯は、周溝墓築造後の比較的近い時期投げ入れられたもので、1頭分か、あるいは2頭分である。歯出土部の周囲や下部に掘り込みなどの遺構が検出されなかったので、馬は土坑などの特別な施設に埋納されたものではない。しかし、Aブロックの下には小ピットが幾つも存在するので、馬の遺体を覆うような施設を想定出来ないことはない。

このような解釈にたつと、この馬は方形周溝墓の築造時期と近接した年代、即ち4世紀から5世紀初頭の年代に周溝内に置かれたということになる。馬骨・歯は、古くは縄文時代遺跡より出土すると見られていたが、近年の研究では弥生時代以降に朝鮮半島を経由して渡米した[1)]と考えられているのが一般的であるから、第2号方形周溝墓出土の馬骨・歯は、県内で最古の馬であることは間違いない。同じ公園の敷地内にあるかんかん塚（茶塚）は5世紀後半の古墳であるが、この竪穴石室からは、やはり県内最古の馬具（鐙など）が出土しているのも偶然ではなく、この地域の特殊性を示したものである。

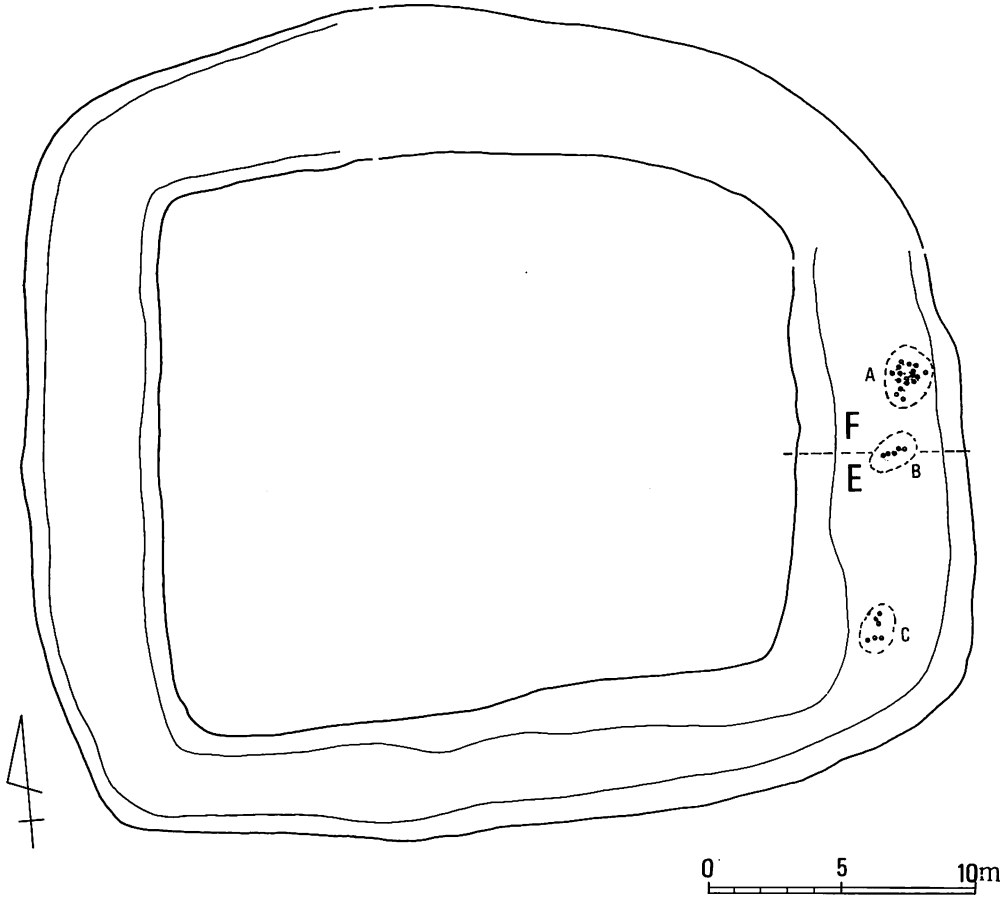
下記の表のうち、歯・骨の同定は国立歴史民俗博物館西本豊弘氏に御教示いただいた。ここに記して謝意を表したい。

（末木）

第10表　馬骨・歯一覧表

区	No.	ブロック	部　位	区	No.	ブロック	部　位	区	No.	ブロック	部　位	区	No.	ブロック	部　位
E	1	C	不　明	F	1	A	不　明	F	10	B	不　明	F	19	A	上顎臼歯
E	2	C	不　明	F	2	A	不　明	F	11	A	不　明	F	20	A	上顎歯
E	3	C	不　明	F	3	A	不　明	F	12	A	下顎M3	F	21	A	不　明
E	4	C	不　明	F	4	A	不　明	F	13	A	臼　歯	F	22	A	上顎歯
E	5	C	不　明	F	5	A	不　明	F	14	A	不　明	F	23	A	不　明
E	6	C	不　明	F	6	A	不　明	F	15	A	不　明	F	24	A	不　明
E	7	B	不　明	F	7	A	不　明	F	16	A	上顎右M3	F	25	A	不　明
E	8	B	不　明	F	8	A	不　明	F	17	A	肋　骨				
E	9	B	不　明	F	9	B	不　明	F	18	A	上左M3				

註　1）西中川　峻『古代遺跡出土骨からみちわが国の牛、馬の渡米時期とその経路に関する研究』1991



第115図　馬骨、歯出土位置

第Ⅴ章　自然科学編

第１節　山梨県東山北遺跡から出土した銅製品の自然科学的調査

東京国立文化財研究所
保　存　科　学　部
平　尾　良　光
榎　本　涼　子
瀬　川　富美子

１．はじめに

山梨県埋蔵文化財センターの依頼により、山梨県東山北遺跡出土の銅製品４点について科学的調査を行なう機会を得た。そこで化学組成と鉛同位体比を測定し、この資料に関する自然科学的な考察の一助とした。

２．資　　料

まず出土した資料について説明をする。なお、これらＣ－１、Ｃ－２～という資料番号は便宜的につけたものである。

Ｃ－１、Ｃ－３は銅鏃である。いずれも表面の錆は茶～黒色であり、内側の錆は緑色である。考古学的な観察より、弥生時代後期の製作と推定されている。

Ｃ－２は銅環（責金具？）である。これもまた表面は茶～黒色であり、はがれた部分からは緑色の錆がのぞいている。

Ｃ－４は錆片であり、用途不明であったため不明銅器とした。表面は明るい茶色で内部はエメラルドがかった緑色である。Ｃ－１、２、３、と同時期と推定される。

３．分析方法

本資料の化学組成を蛍光Ｘ線分析法で測定した。これは資料を破壊することなく、迅速に分析できるからである。また銅材料の特徴を明らかにするため鉛同位体比も測定した。

４．蛍光Ｘ線分析

４－１　測定条件

蛍光Ｘ線分析法は試料にＸ線を照射するだけで、非破壊的に分析できるので文化財の調査には好都合である。測定にはフィリップス社製　波長分散型蛍光Ｘ線分析装置PW1404LSを用いた。機器にはスカンジウム管球を用い、60kV・50mAの出力で一次Ｘ線を発生させた。この一次Ｘ線を試料に照射し、試料を構成する元素から二次Ｘ線を放出させた。二次Ｘ線のエネルギーとその強度は元素の種類と含有量によって異なるので、フッ化リチウムの結晶でこれを回折させ、Ｘ線強度のスペクトルを得た。分散角度から元素の種類、Ｘ線強度から元素量に関する知見を得た[1)]。

4－2　結　　晶

蛍光X線分析法で測定されるのは表面の化学組成であり、表面の状態（形、錆の状態）などによって同じ化学組成でも放出されるX線の強度に違いが出ることがある。また金属の表面と内部とで化学組成が異なる場合があるという条件を考慮しながら分析結果を以下にまとめた。

測定された蛍光X線スペクトル図を図1～4で示した。これらは全体像のa図と、縦軸を拡大したb図で表した。これらのスペクトル強度を表1としてまとめた。いずれも元素から放出されるX線強度を銅を100とした相対強度で表した。

4－3　所　　見

東山北遺跡の資料について

これら資料の主成分は銅、スズ、、鉛であり、いわゆる鉛入り青銅であることが分かった。不純物元素としてアンチモン、銀、ヒ素、亜鉛、鉄などが微量ではあるが含まれている。これらの元素は古代の青銅によく含まれることが今までの測定から分かっている。鉄は不純物元素としてはかなり多く含まれているように見えるが、外部の岩石もしくは土壌から流れこむ可能性も高く、量比に関しては強く言えない。それ以外の微量元素は古代の精錬技術の水準を考えれば不純物として混入していたも矛盾はない。

5．鉛同位体比分析

5－1　鉛同位体比の測定法

測定に必要な試料は約1mg程度で充分である。この試料を石英製のビーカーに入れ硝酸で溶接し、蒸留水で希釈した。この溶液を白金極電を用いて2ボルトで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた、これを硝酸と過酸化水素水で溶解し、希釈した。0.2μgの鉛をリン酸―シリカゲル法で、レニウムフィラメントに載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同体位比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした[1)]。

5－2　結　　果

得られた結果を表2で示した。これらの鉛同位体比の値を図5（横軸を^{207}Pb／^{206}Pb、縦軸^{208}Pb/^{206}PbとしたA式図）と図6（横軸を^{206}Pb／^{204}Pb、縦軸を^{207}Pb／^{204}PbとしたB式図）で示した。図5では今までの測定から東アジアにおける鉛同位体比の値は地域ごとにそれぞれ特徴的な値を示し、A、B、C、Dのように区分できる。すなわちAは中国華北産、Bは華南産、Cは日本産、Dは朝鮮半島産の鉛の領域である。ただし、朝鮮半島産の鉛の領域は一本の直線上に全ての測定地がくるわけではなく、上下にばらつく。またaは古代の遺物のなかでも弥生時代後期の銅鐸が集中する領域である（おおまかな時代とすれば、A領域には日本の弥生時代の、B領域には古墳時代の遺物が含まれることが分かっている）。図6ではA′ B′ C′ D′ 領域がそれぞれ華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛である[2)]。

5－3　所　　見

東山北遺跡の資料について

測定値は図5と6の中で（●C－1、C－2、C－3、C－4）で示した。まず図5において試料はすべて類似した値を示し、aの領域に含まれた。これは原料となった銅が同一品であった

ことを示唆している。このことは図6によっても裏付けされる。

6．考　察

東山北遺跡の資料について

本資料は出土状況や鏃の形態などの考古学的な考察から弥生時代のものであろうと推察されていた。今回の調査はこの推察を裏付けることとなった。これらは銅、スズ、鉛を主成分とする鉛入り青銅製品であり、鉛同位体比は弥生時代後期銅鐸と同じ値であった。それ故に、これら資料は弥生時代後期の製品であると推定される。このことは同位体比的には東海地方における弥生時代後期の銅鏃と共通していることが分かった[3]。

いずれにせよ、今回の資料は弥生時代の遺跡の少ない山梨県にあって弥生時代の銅製遺物が自然科学的な方法によって確認された点で重要であるといえよう。

引用文献

1）平尾良光・榎本淳子（1993）、文化庁への報告、第27号

2）馬淵久夫・平尾良光（1982）、鉛同位体比からみた銅鐸の原料；考古学雑誌、68、42～62

3）平尾良光・馬淵久夫（1990）、東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査；都田地区発掘調査報告書　下巻、（発行）浜松市・浜松市教育委員会・㈶浜松市文化教会、590～620

表1　山梨県東山北遺跡出土製品の蛍光X線相対スペクトル強度

資料名(分析番号)	元素								
	銅	亜鉛	アンチモン	銀	スズ	鉄	鉛	ビスマス	ヒ素
C－1　銅鏃 (FL 128)	100	＋	1.2	1.5	8.8	4.4	3.8	－	0.8
C－2　銅環 (FL 129)	100	－	2.2	2.8	30	11	3.3	－	0.5
C－3　銅鏃 (FL 130)	100	－	0.9	2.2	23	6.9	3.4	－	0.5
C－4　不明銅製品 (FL 131)	100	－	3.6	5.0	67	12	6.5	－	0.9

1）FLは東京国立文化財研究所の分析番号
2）銅Kα（角度で45°）のX線郷土を100とする
3）「＋」はわずかではあるが元素の存在が確認されたピーク
4）「－」は検出限界以下のピーク

表2　山梨県東山北遺跡出土の銅製品の鉛同位体比

	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
C－1　銅　鏃 (SG－09)	17.743	15.549	38.405	0.8763	2.1645
C－2　銅　環 (SG－10)	17.727	15.532	38.377	0.8762	2.1649
C－3　銅　鏃 (SG－11)	17.741	15.548	38.407	0.8764	2.1649
C－4　不明銅器 (SG－12)	17.752	15.554	38.424	0.8762	2.1645
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

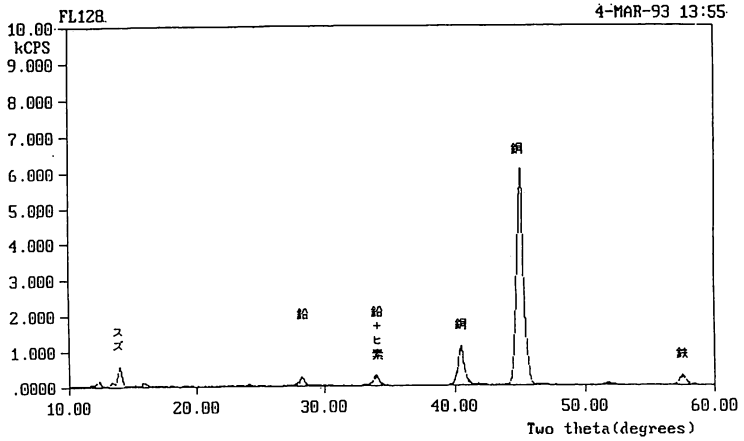


図１ａ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図

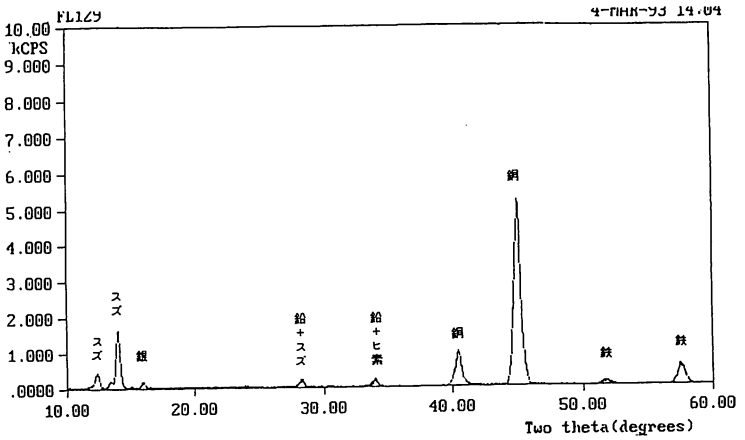


図２ａ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図

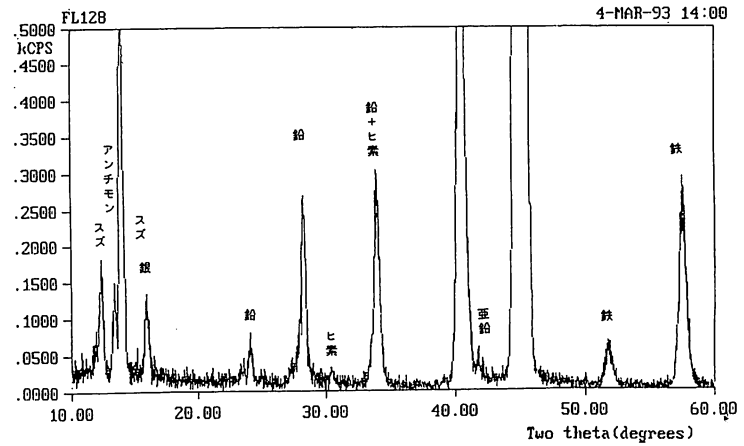


図１ｂ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図拡大図

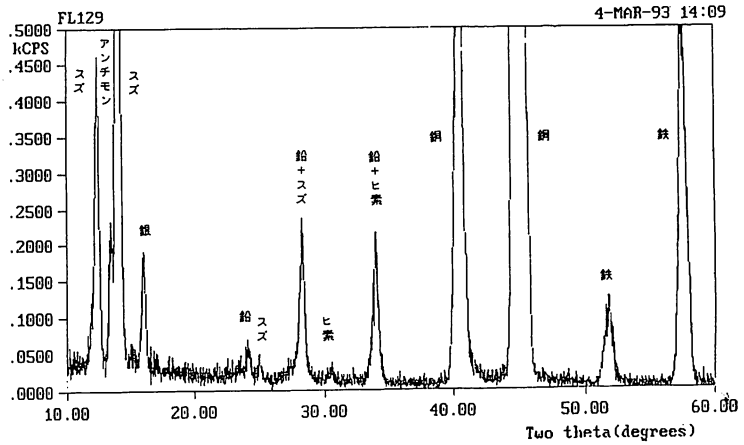


図２ｂ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図拡大図

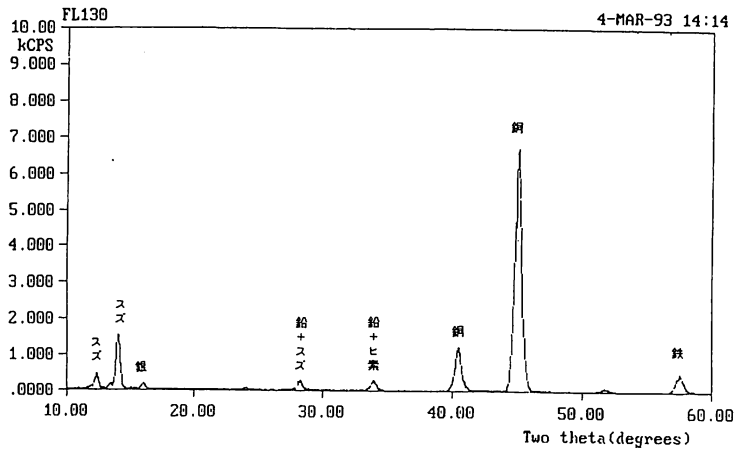


図３ａ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図

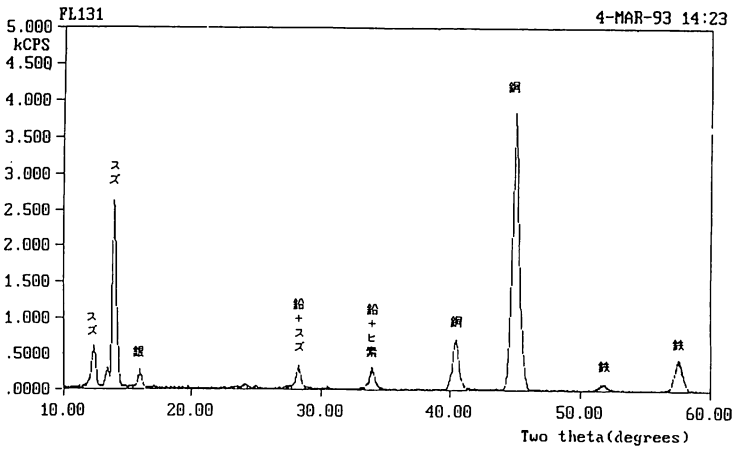


図４ａ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図

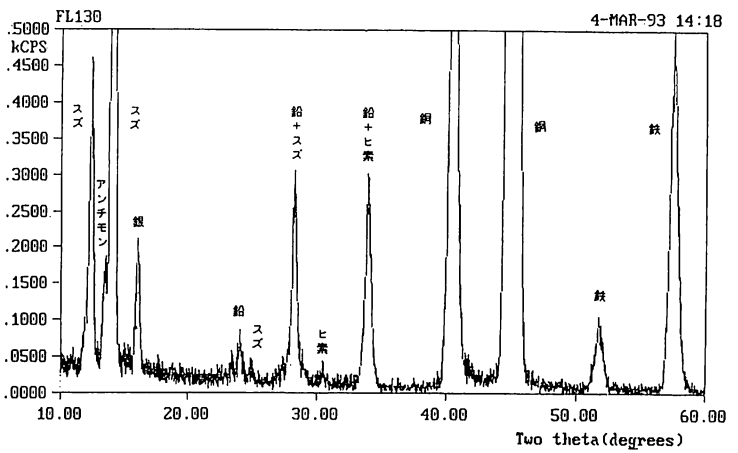


図３ｂ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図拡大図

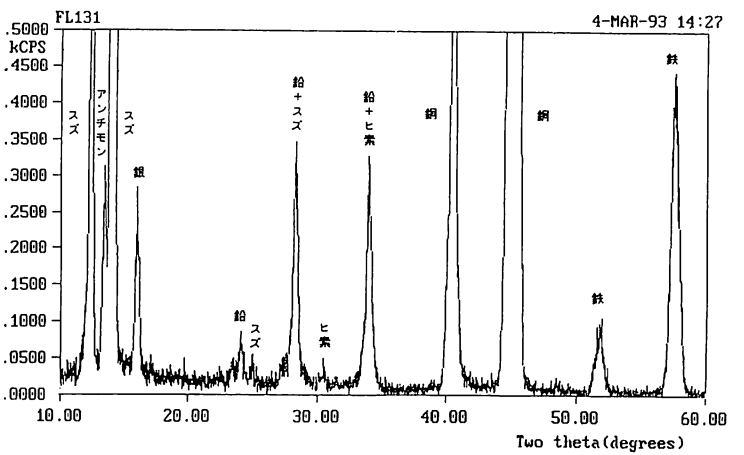


図４ｂ　東山北遺跡Ｃ－１試料の蛍光Ｘ線スペクトル図拡大図

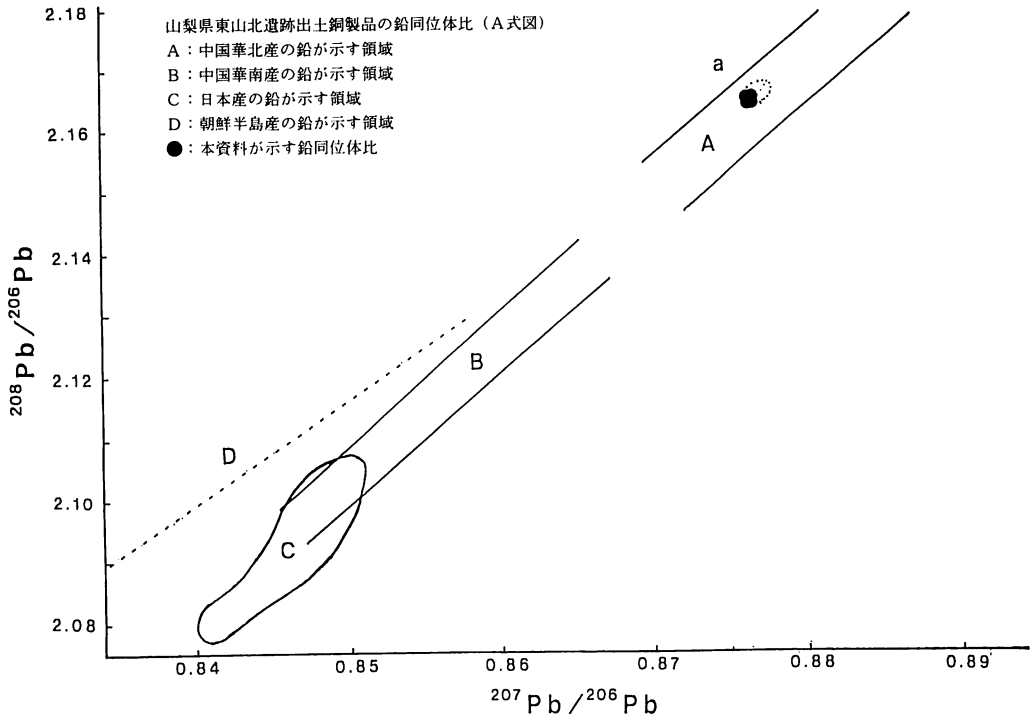


図5　山梨県東山北遺跡出土銅製品の鉛同位体比（A式図）

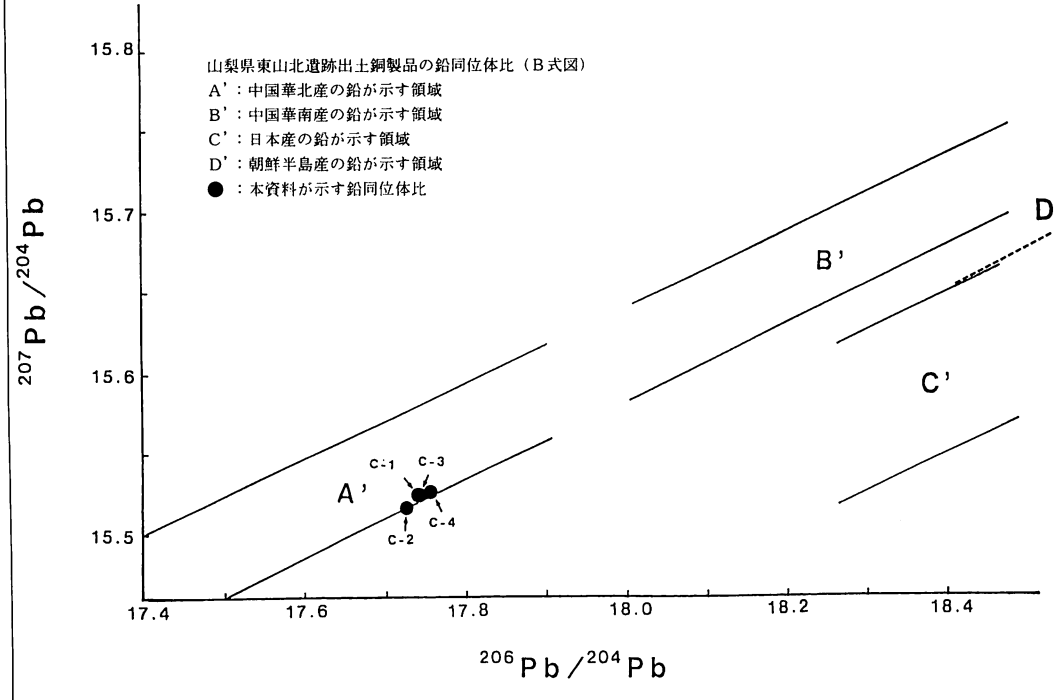


図6　山梨県東山北遺跡出土銅製品の鉛同位体比（B式図）

第２節　東山北遺跡より出土した炭化米

吉川純子（パレオ・ラボ）

東山北遺跡13号住居址より出土した炭化種実は、採取された試料のうち、１個は菌核または虫嬰と思われる球形の炭化物であったが、材破片を除く残りはすべてイネの炭化したものであった。

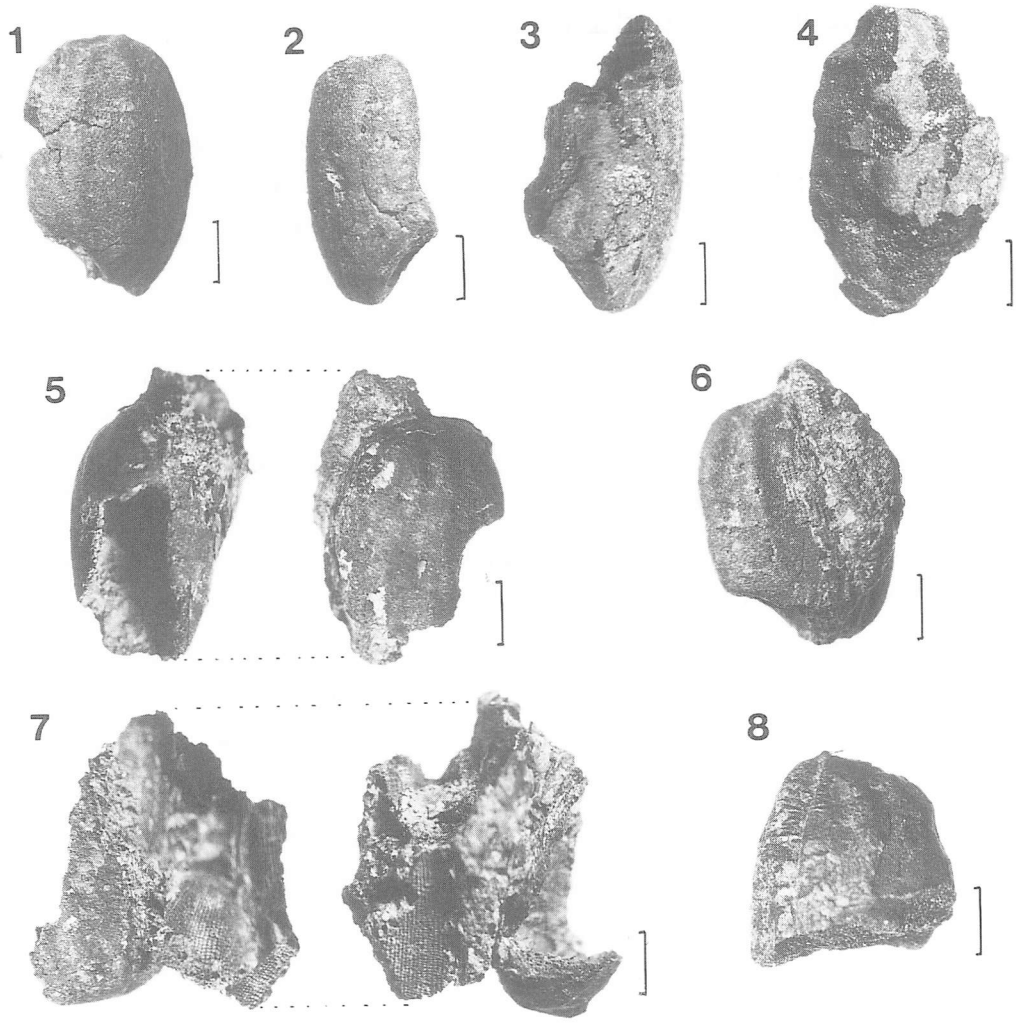
この中にはイネの籾同士が接触したまま炭化したり、胚乳に籾（すなわち外穎）が付着したまま炭化したものが見られるため、籾の状態で多量に炭化したと思われる。

炭化状態は比較的良好なものが多く、採取された炭化物のうち、同定不可能な炭化物は見られなかった。また、やけのびたり、発泡したりしているイネは少ない。一般に酸素の供給が少なく、蒸焼き状態でないと燃焼が進んでしまい、良好な炭化は起こらない。また、多量に積まれたイネが開放された状態で加熱されると、周辺は燃焼が起こり、内部が炭化するので、発泡したイネや、半分溶けたような形状の炭化物が多量に出土することが多い。ここでは良好に炭化されたイネばかりであるため、はじめから密閉されて加熱された可能性が高い。

また、本遺跡での出土が籾の状態であったことから、直良（1956）でも論じられているように、13号は住居用ではなく、倉庫跡の可能性が考えられる。直良によると、「住居跡発掘に際して、倉庫址と目される遺址の発見は早くより注意されておりながら、現実にその実証を示した例は、ひとり本遺跡に於いてのみ、認証することが許された状態となり」と、多量の炭化籾による山梨県江曽原遺跡における倉庫跡の実証と、他遺跡での確認例が希少であることについて言及している。もし、日常の食用として住居内に保管されていたとすれば、籾の状態ではなく、玄米の状態で炭化されるのではないだろうか。また、住居内で使用されていたとすれば、籾のまま住居内に持ち込むのは、祭礼などの儀式に限られるとも考えられる。

引用文献

直良　信夫　1956「日本古代農業発達史」、317pp、さえら書房



図版　東山北遺跡13号住居跡出土炭化米（スケールは１㎜）

１．ほぼ完形、胚芽が少し残っている。２．しいな（未熟）米。３．やや焼けぶくれ壊れている。４．やや焼けぶくれて表面がはがれている。５．他の籾が付着して割れている。６．部分的に籾が残っている。７．籾同士が付着して胚乳が脱落している。８．籾は取れているが、内穎が部分的に残った玄米の状態の破片。

第３節　東山北遺跡灰試料の植物珪酸体分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

東山北遺跡の27号住居跡において白色～灰色の灰が検出された。一般にイネ科植物は珪酸を吸収して細胞壁に沈積させること（植物珪酸体）が知られている。そのうち、葉に形成される機動細胞珪酸体についてはイネを中心とした形態分類が藤原（藤原　1978など）によって研究が進められている。これをもとにここでは得られた灰試料の植物珪酸体（機動細胞珪酸体）の形態を観察し、その給源母体となるイネ科植物についての検討を試みた。

２．方　　法

上記のことから採取された灰試料について、通常行われるプラント・オパール分析と同様の方法を用いて植物珪酸体（ここでは機動細胞珪酸体）の検出を行った。すなわち、砂などが付着していないできるだけ純粋な灰試料（直径１㎝ほどの灰白色の塊試料）をトール・ビーカーに採り、30％の過酸化水素水を20～30cc加え、脱有機物処理を行う。これに水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により20μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。

３．結果および考察

観察の結果、多数の機動細胞珪酸体や顆粒状紋（こぶ状）様の珪酸体が認められ、以下にそれらの記載を示す。なお各名称は図１を、また長さの平均は40個体の平均である。

機動細胞珪酸体：断面形態（図版の１、２）はイチョウの葉形をしており、側面部分に突起が、表面部分にくぼみが、また裏面部分には亀甲状紋様が一部認められる。縦長は平均52.21μm（最大71.40μm、最小38.25μm）、横長の平均が42.14μm（最大66.30μm、最小25.50μm）である。側面形態（図版の３－ａ）は縦に長い、あるいは横に長い長方形を呈し、側長は平均34.68μm（最大51.00μm、最小20.40μm）で、側面部には１ないし数本の稜線がみられ、断面方向からは突起として観察される。表面形態（図版の３－ｂ）は細長い長方形あるいは台形状を呈し、側面にみられる稜線部分でくさび形に突出している。裏面形態（図版の４）は横あるいは縦に長い長方形をしており、一面に小さな亀甲状紋様が認められる。

以上のような形態を有する機動細胞珪酸体については藤原（1976）や杉山（1989）に示されているイネの形態と同様と考える。

単細胞珪酸体（図版の５、６）：胴の中央部分が大きくくぼみ、上下の先端部分の中央もくぼんで、口をとがらせたような形状をしばしばみせる（図版の６）。

こうした形態からこの単細胞珪酸体はイネ属と判断されるが、

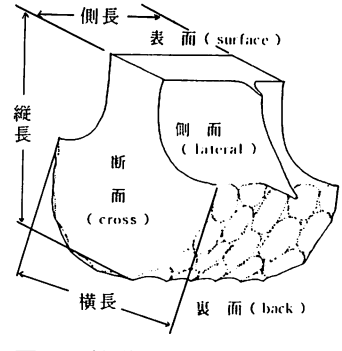


図１　機動細胞珪酸体の各名称（藤原（1976）に加筆）

イネとするにはさらに単細胞珪酸体の形態についての研究が待たれる状況にある。

顆粒状紋様珪酸体（図版の７）：顆粒状紋には鳥のくちばし状の突起が認められ（図版の８、９）、上記の機動細胞珪酸体よりもさらに多く観察される。この珪酸体についての観察報告例などはまだないようである。機動細胞珪酸体がイネと判断されていることから、現生のイネモミを灰化し観察したところこれと同様の珪酸体が認められた。したがってこの顆粒状紋様珪酸体はイネモミである可能性が高いが、これについてはまだ観察例が少なく、現時点では可能性の段階にと止めたい。

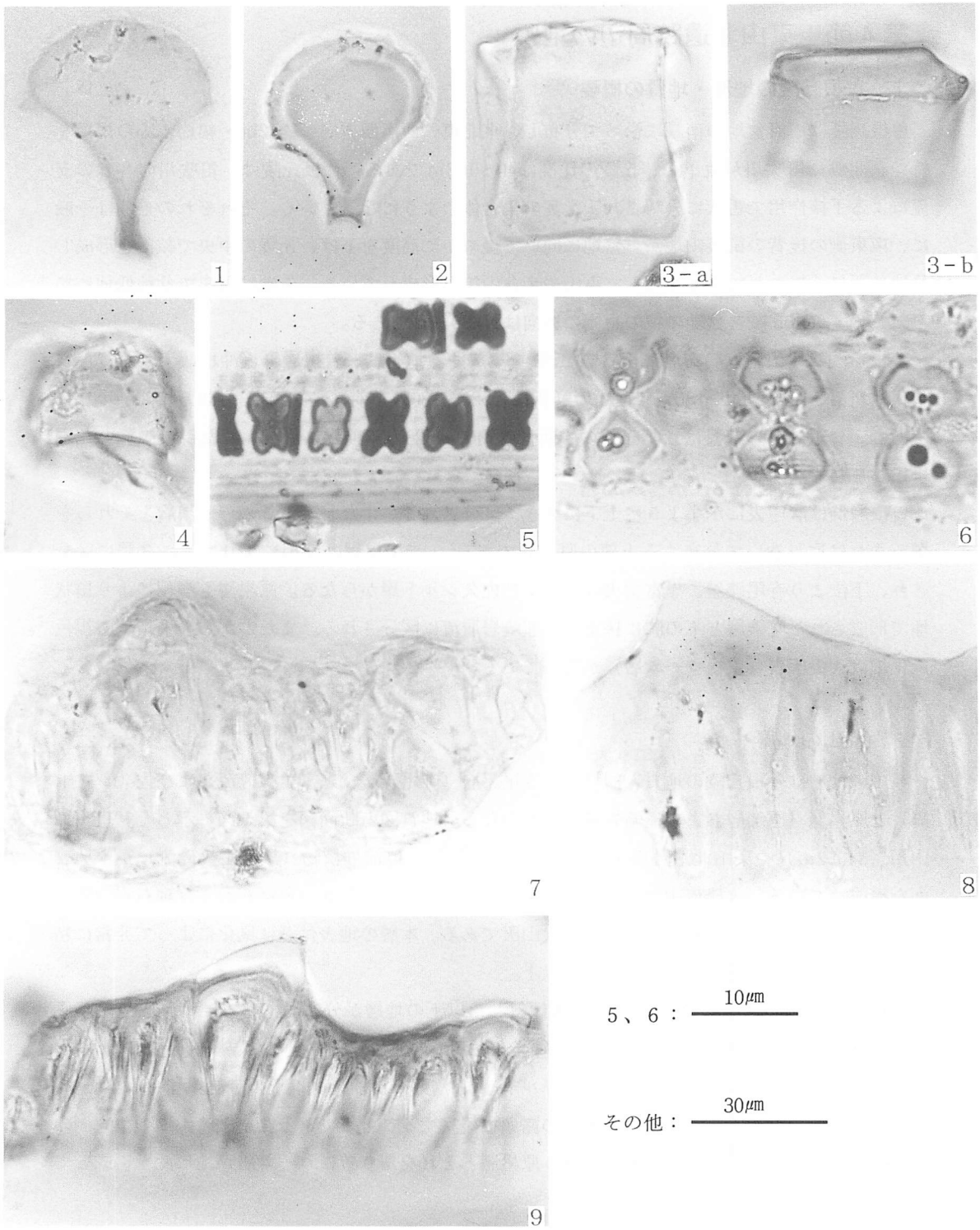
以上のように、単細胞珪酸体はイネ属と同定され、機動細胞珪酸体はイネであり、顆粒状紋珪酸体もイネモミである可能性が高い結果が得られた。またイネ以外の珪酸体は認められず、灰白色灰試料の母植物はイネと判断され、葉の部分を含むものの主体はイネモミの部分である可能性が高い。

引用文献

藤原　宏志　(1976)　プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)　―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―、考古学と自然科学、９、p.15－29

藤原　宏志　(1978)　プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)　―イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状―、考古学と自然科学、11、p.９－20

杉山　真二　(1989)　植物珪酸体群集、松が丘遺跡発掘調査報告書、中野区教育委員会・中野区松が丘遺跡調査会、p.218－226



図版　東山北遺跡出土灰の植物珪酸体（27号住居）
1～4：イネ機動細胞珪酸体（1、2：断面　3－a：断面　3－b：表面　4：裏面）
5、6：イネ属単細胞珪酸体
7～9：イネ籾部？珪酸体

第４節　東山北遺跡周辺の地質

１．曽根丘陵の地形・地質の概要

曽根丘陵は甲府盆地の南縁に沿って分布し、東北東―西南西方向に約12km・幅約４kmの規模を持つ。北側に笛吹川が流下し、丘陵の比高は40～160mである。曽根丘陵は、笛吹川の８本の支流による下核作用で舌状に分断され、半島の集合体のようになっている。それぞれの丘陵は一般に、南東側の後背の御坂山地から盆地に向いて緩やかに高度を下げ、丘陵の中央で鞍部を形成し盆地に近付くにつれて高度を増して東山や米倉山等を形成している。先端は急崖で盆地低地に接している。曽根丘陵と盆地の境の急崖の方向はN-60°-Eである。

曽根丘陵は片田正人の命名による[1]。丘陵を構成する地層は、曽根層群と沖積層よりなり地質時代は新第三紀（2400～180万年前）の鮮新世（520～180万年前）～第四紀（180万年前～現在）である。曽根層群の基盤は新第三紀の中新世（2400～520万年前）に形成された御坂層群と花崗岩類からなる。

曽根層群は層序表に示すように上下に大きく区分される。すなわち下部の寺尾累層とそれらを覆いまたは取り巻いて分布する上部の原累層である[2]。寺尾累層は層相によりさらに３層に区分され、下位より寺尾礫層、黒富士火砕流および佐久シルト層からなる。原累層も層相により扇状地で形成された原礫層とその間に挟まれる韮崎岩屑流に区分される。またこれらの堆積層を褐色風化細流火山灰層（曽根ローム層）が覆っている。

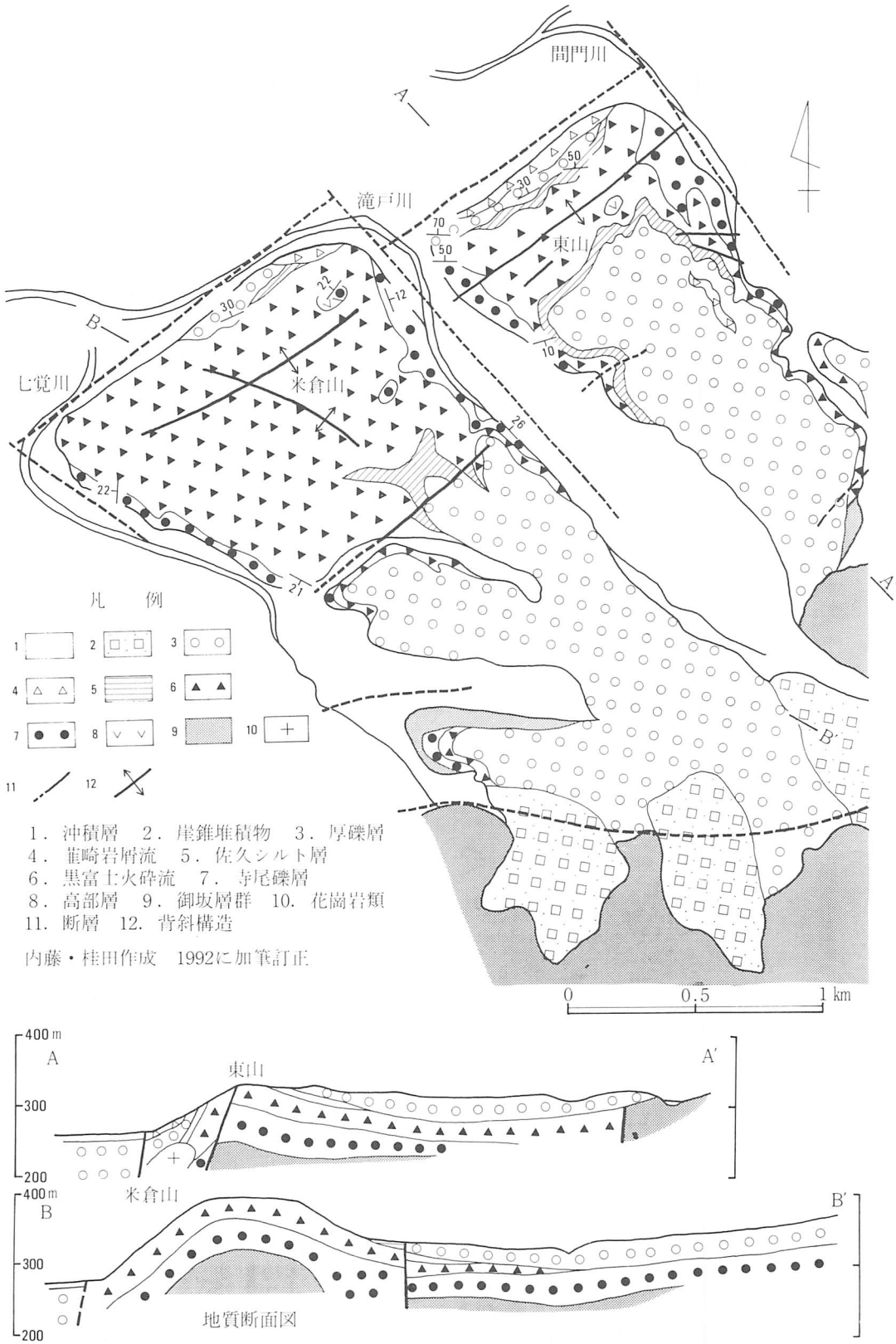
２．東山の地層

東山の地層は曽根丘陵の地質と同様に、寺尾累層（寺尾礫層、黒富士火砕流および佐久シルト層）と原累層（原礫層および韮崎岩屑流）からなる。地質図と断面図を第１図に示した。東山の山頂（340.2m）や東山北遺跡周辺には暗灰色～紫灰色火砕流堆積物（黒富士火砕流）が、地表面を構成している。火砕流中には角閃石石英安山岩、灰白色石英安山質軽石および輝石安山岩を含み、基質は淡灰色～暗灰色粗粒～細粒火山灰である。本層の地表付近は風化によって非常に粘土化していて灰褐色を呈する。層厚25m以上。

東山の北西側の急崖には、30～70°NW傾斜した以下の地層が分布している。暗紫灰色～暗灰色泥流堆積物（韮崎岩屑流）、層厚15m。礫径２～40cmの亜角礫を主とした礫層（原礫層）、層厚15m。シルト層～泥炭質シルト層（佐久シルト層）、層厚５m前後。以上の寺尾累層や原累層は、本遺跡の西側の沢の下流や中道町役場前の露頭で観察することができる。東山の山頂の南東側の上の平や立石では寺尾累層を不整合に覆う原累層とそれを覆う曽根ローム層が地形面を構成している。

３．東山北遺跡の地質と試料採集地の土層

東山北遺跡は、東山の北東部にあり東山の台地より40m下がった緩斜面上に位置している。第



第１図　東山・米倉山の地質図及び断面図

２号方形周溝墓南側の外縁における土層柱状図を第２図に示した。この地点では、非常に粘土化した黒富士火砕流が100万年前[3]に流下し厚く分布し、直上のローム層には地下水により鉄分が濃集している。曽根ローム層の下部には黄褐色軽石層が挟まれる。軽石層中の試料６の鉱物は斜長石》黒雲母》石英＝角閃石〉磁鉄鉱を含むほか紫蘇輝石を含む。ほとんどの黒雲母は風化・脱色し蛭石化している。この軽石層は、曽根丘陵の風成火山灰層中で最も特徴的な鍵層で“豊富パミス”と呼ばれていたが、鉱物組成と層相から御岳第Ｉ軽石層“pm－I”[4]（フィッショントラック年代　７～９万年前[5]）に同定されている。“pm－I”の上位はスコリアを微量含むローム層が覆い、その中部はややかたくブロック状またはクラック（亀裂）状になっている。上部の試料15～20にはバブルウォール型ガラス質火山灰を含み、AT火山灰層のタイプに類似しているが、量が少なく周囲からの流れ込みの可能性がある。試料採取地ではAT火山灰層が削剝されていると考えられる。ローム層の上位には層厚21㎝の褐色・暗褐色土層（試料21～24）が覆い、磨耗した砂粒・風化粒子が多量含まれ、炭化物・焼土を微量含む。　（大村）

引用文献

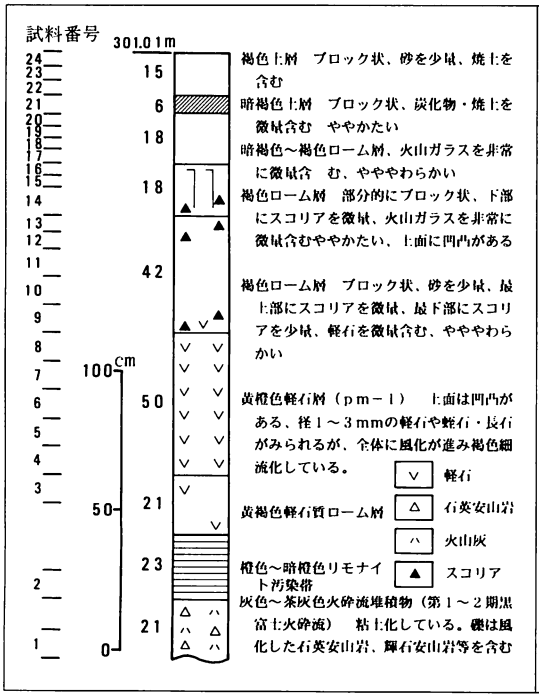
１）片田正人『５万分の１地質図幅「甲府」及び同説明書』（地質調査所、1956）

２）内藤範治・桂田保「甲府盆地南縁曽根丘陵の第四系」（『第四紀』、第25号、1992）

３）三村弘二・加藤祐三・片田正人『御岳昇峡地域の地質』５万分の１図幅（地質調査所、1984）

４）小林国男・清水英樹・北沢和男・小林武彦「御岳火山第Ｉ浮石層」（『地質学雑誌』、第73巻、1967）

５）町田洋・鈴木正男「火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年」（『科学』、第41号、1971）



層序表

時代			年代	水成堆積層			火山灰層	鍵層
			0					
第四紀	現世		万 1	沖積層				
	更新世	後期		曽根層群	前間田礫層		曽根ローム層	AT pm-1
		中期	13		原累層	原礫層		
						韮崎岩屑流	大黒坂ローム層	
						原礫層		
		前期	70		寺尾累層	佐久シルト層		sc 2
						黒富士火砕流		
						寺尾礫層		
新第三紀	鮮新世		180					
	中新世		520	基盤岩類（御坂層群・花崗岩類）				

第２図　第２号方形周溝墓南側外縁の土層柱状図　第１表　層序表　内藤・桂田作成1992に加筆訂正

ま と め

本遺跡は曽根丘陵の東山台地北側の平坦面に位置しており、甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園の歴史植物園が計画されたため、1990年度より3ヵ年にわたって発掘調査を実施した。この結果、弥生時代後期～古墳時代前期の集落と古墳時代前期の方形周溝墓が発見された。遺跡は保存のため一部を残し。工事が遺構に影響を与える可能性のある部分については調査したため、集落の全貌は把握していない。しかし、平坦面を取り巻く弥生時代集落の様相や巨大な方形周溝墓の存在が確認された意義は大きい。

住居址や方形周溝墓からは、弥生時代～古墳時代の土器がまとまって出土し、この土器から当時の文化の流入様相が把握できる。小林健二は在来系土器と外来系土器を比較し、外来系土器のS字甕や北陸系土器について、本県への影響並びに、本遺跡への影響について注目している。また、第2号方形周溝墓から出土した土器・銅鏃・磨製鏃・鉄製鋤頭・石包丁・土製勾玉などの玉類・馬の歯と骨・鉄製鎌・水晶原石などが溝底や覆土中から出土しており、これらの意味について野代幸和が報告している。特に銅鏃の分析については、東京国立文化財研究所保存科学部平尾良光先生にお願いし、弥生時代後期の東海地方の銅鏃と類似した事が明らかにされた。また、馬の歯については国立歴史民俗学博物館の西本豊弘先生に同定をお願いし、国内でも最も古い時期の馬である可能性が高いことが明らかとなった。このほか、旧石器時代の遺物や石材について宮里学氏、水晶について石神孝子氏、東山丘陵の地質について大村昭三氏の論考や分析をいただいた。

第2号方形周溝墓の規模は、県内最大であるというだけでなく、全国的にも突出している。なぜ、このような巨大方形周溝墓が出現したのかという事が、今回の調査での特筆すべき点であろう。東山周辺は古代甲斐国の首長権が成立した場所であり、しかも、畿内的な前方後円墳と在来系の方形周溝墓が並存している意味について、末木健はその位置付けを示した。

最後に、本報告書が該当の時代の研究に役立つよう願って止みません。なお、本書の作成にあたっては次の方々の協力・助言を得たことを記して、謝意に代えさせていただきます。

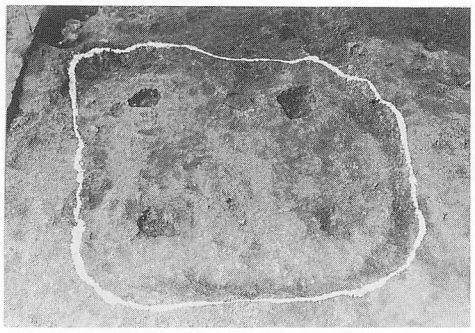
東京国立文化財研究所　三輪嘉六・平尾良光、国立歴史民俗学博物館　西本豊弘、帝京大学山梨文化財研究所　鈴木　稔、石和土木事務所　輿石　一、勝又直人（1990～1993年度）

（敬称略　順不同）（末木）

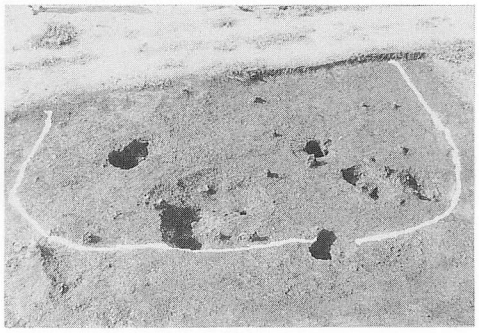
図　　版

第 1 号住居址調査状況

第 1 号住居址完掘状況

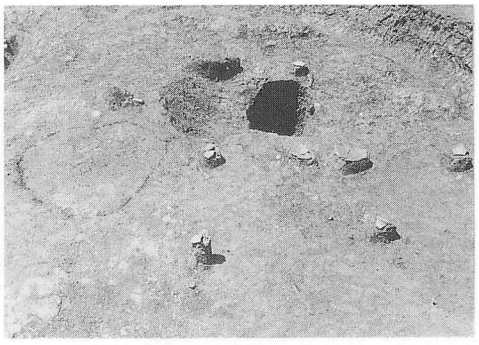


第 2 号住居址完掘状況



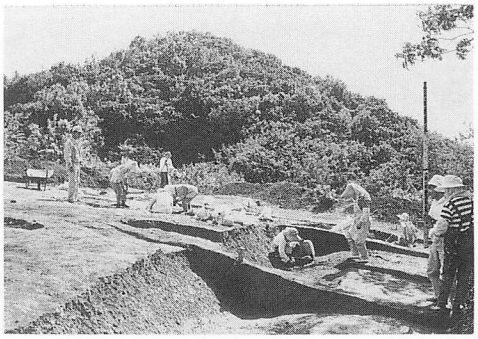
第 3 号住居址完掘状況

第 4 号住居址完掘状況



第 4 号住居址遺物出土状況

調　査　状　況



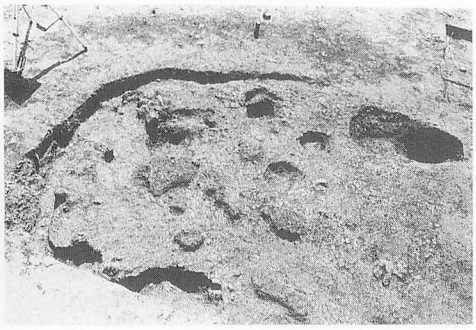
調　査　状　況

図版 2

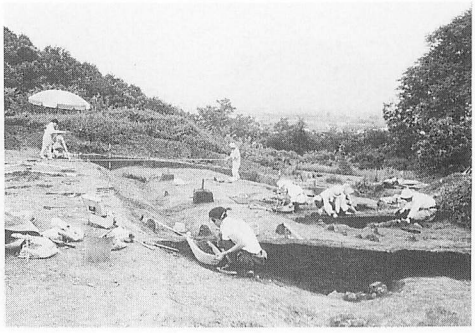
第 5 ・14号住居址完掘状況

第 6 号住居址完掘状況

第 6 号住居址遺物出土状況



第 7 号住居址完掘状況



調　査　状　況

調査状況（'91子供学習会）

第 6 ・ 7 号住居址完掘状況

図版 4

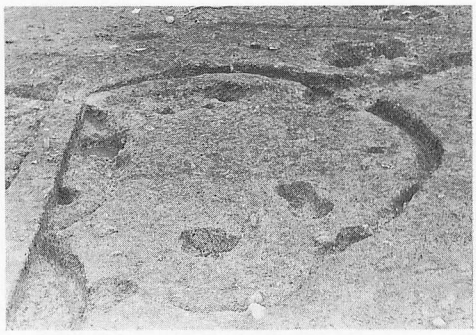
第 8 号住居址完掘状況

第 8 号住居址遺物出土状況

第10～13号住居址完掘状況

調　査　状　況

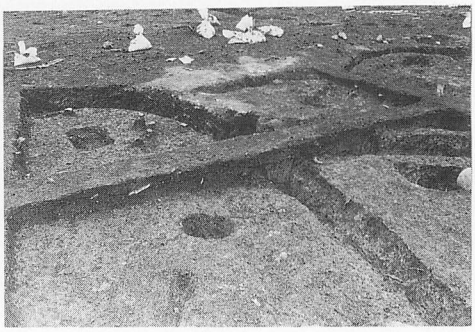
図版 6



第 9 号住居址完掘状況

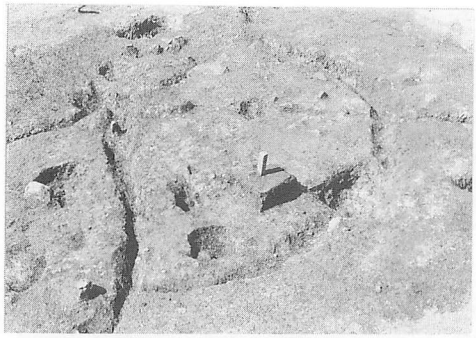
第10号住居址完掘状況

第11・13号住居址遺物出土状況

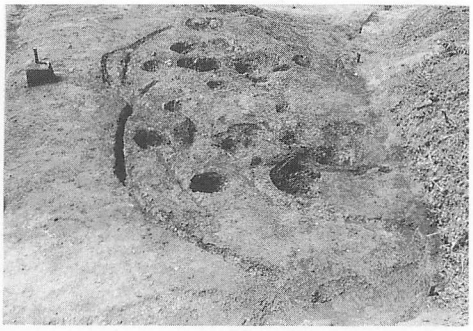


第11・13号住居址切り合い関係

第11・13号住居址完掘状況

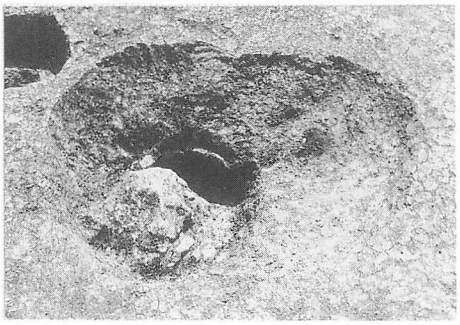


第12号住居址完掘状況

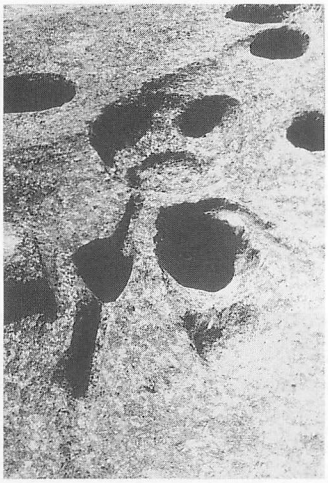


第15・16号住居址完掘状況

第17・18号住居址完掘状況

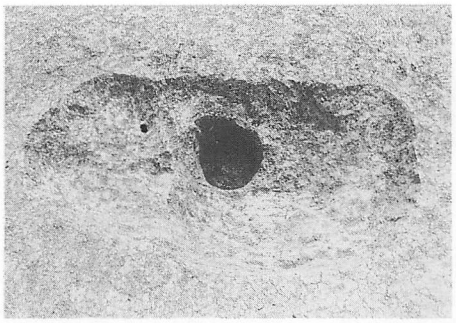


第18号住居址（ピット７）



第18号住居址周溝

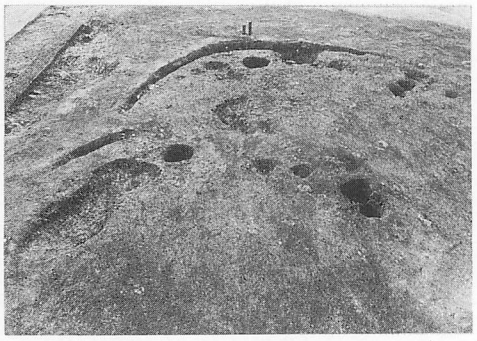
第18号住居址（ピット14）



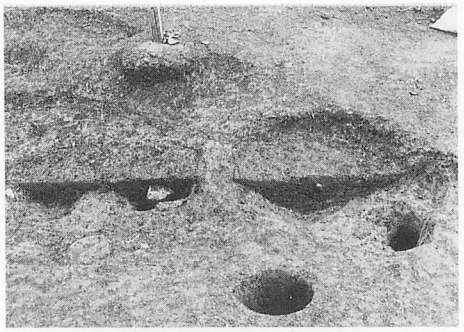
第17号住居址（ピット19）

図版 8

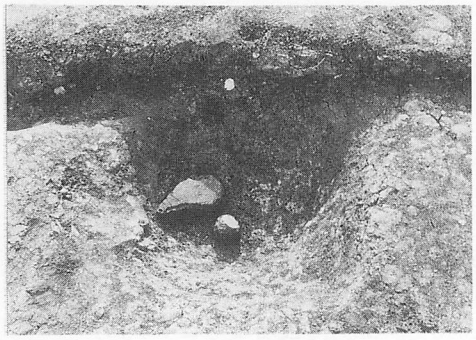
第17・18号住居址完掘状況



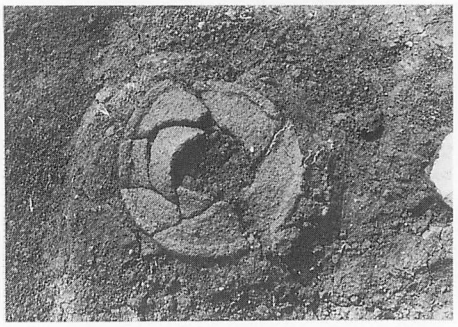
第19・20号住居址完掘状況



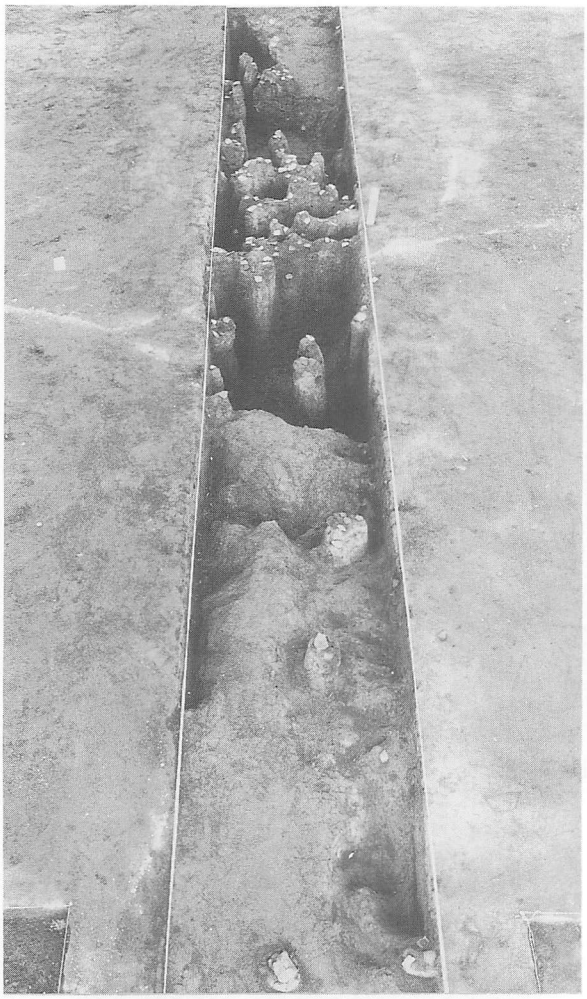
第19号住居址（ピット 4 ほか）



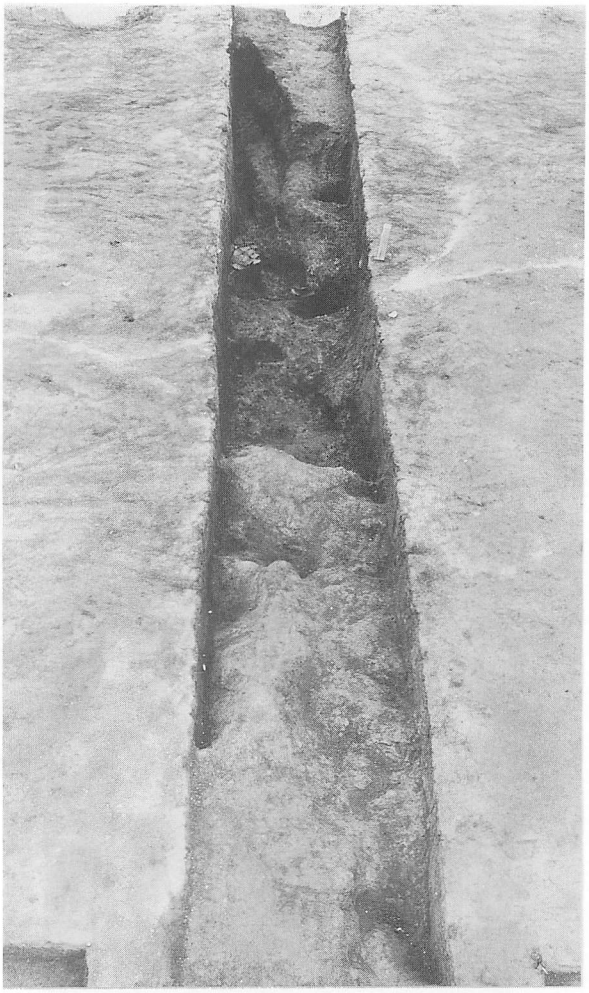
第19号住居址（貯蔵穴）



第19号住居址遺物出土状況



第21～26号住居址遺物出土状況

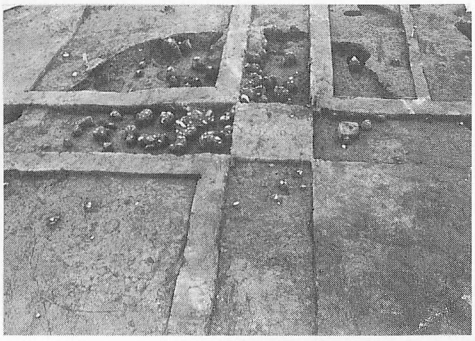


第21～26号住居址完掘状況

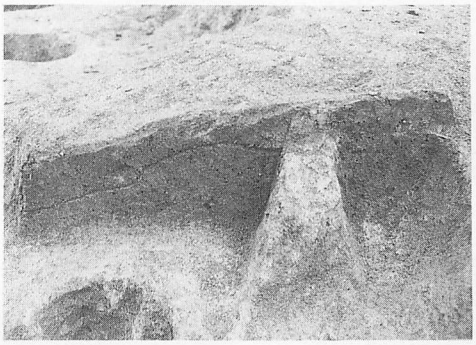
第24号住居址（貯蔵穴）遺物出土状況

図版10

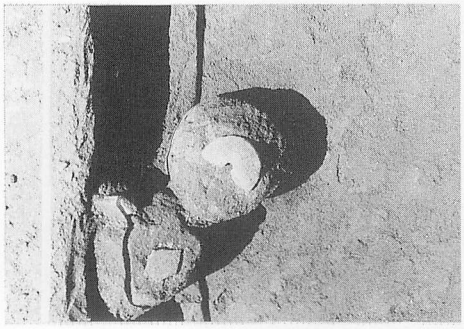
第27号住居址完掘状況



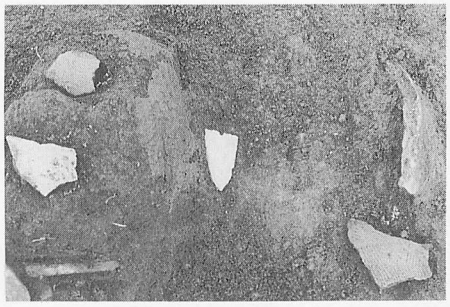
第27号住居址遺物出土状況



第27号住居址南側（焼土堆積状況）



第27号住居址遺物出土状況



第27号住居址遺物出土状況

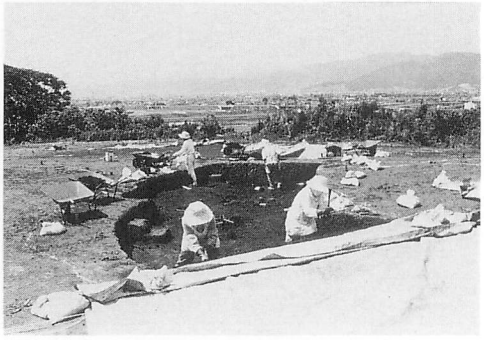
第２号方形周溝墓の調査

南側から甲府盆地を望む

図版12

A区遺物出土状況

A区遺物出土状況

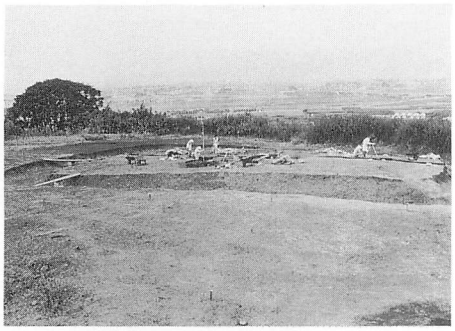


B区調査状況

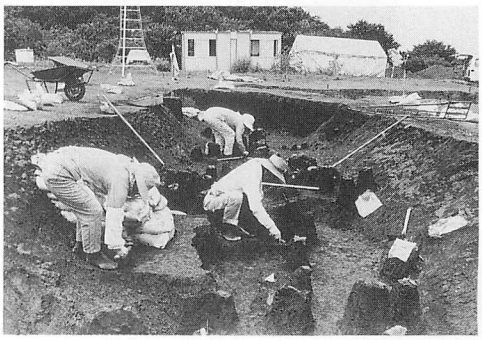
B区遺物出土状況

←A・B区調査状況

A・B区完掘状況→



A区遺物出土状況調査状況全景



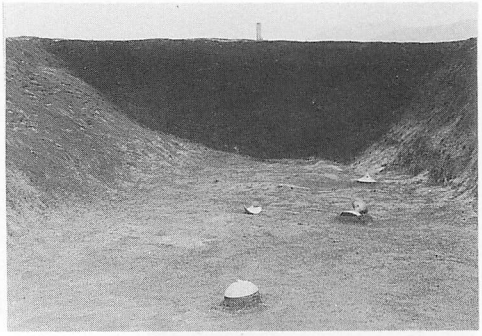
C区調査状況

図版14

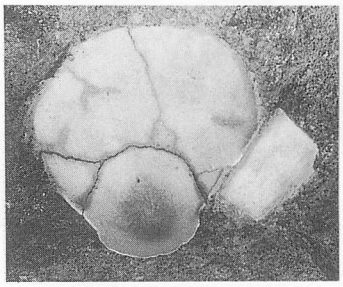
C区遺物出土状況

C区遺物出土状況

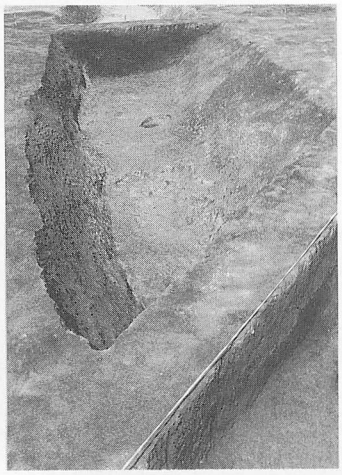
C区遺物出土状況



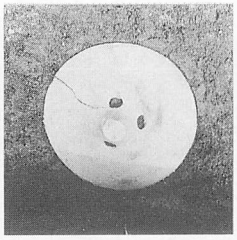
C区溝底部遺物出土状況



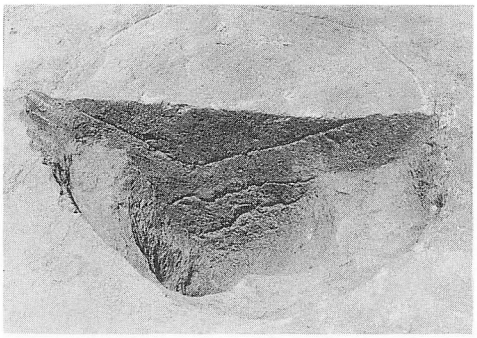
C区台付甕出土状況



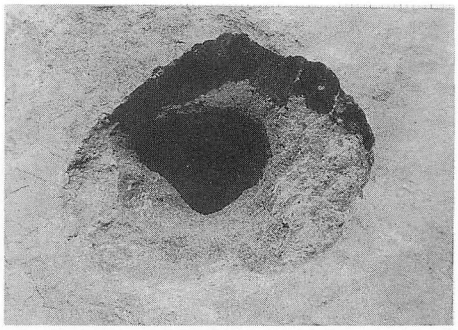
C区完掘状況



C区高坏脚部出土状況

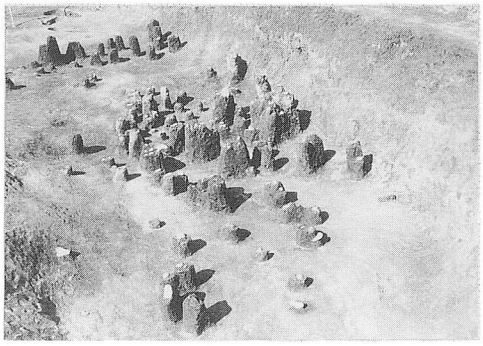


C区溝中土坑セクション

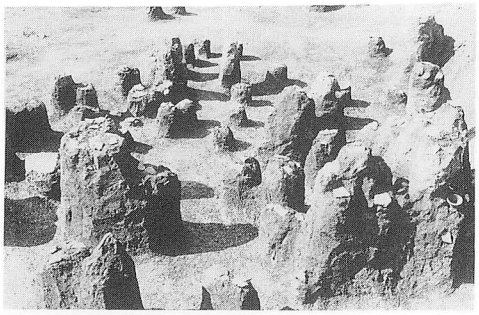


C区溝中土坑完掘状況

D区遺物出土状況

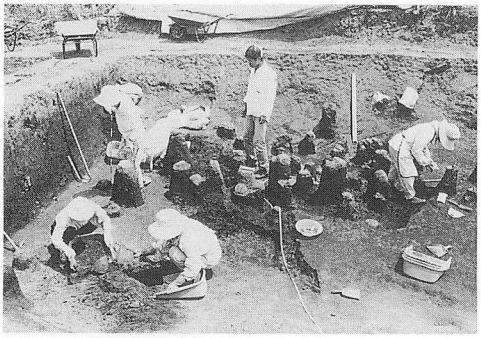


D区遺物出土状況

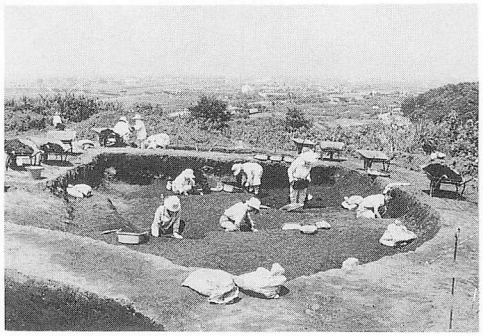


D区遺物出土状況

D区遺物出土状況



D区調査状況

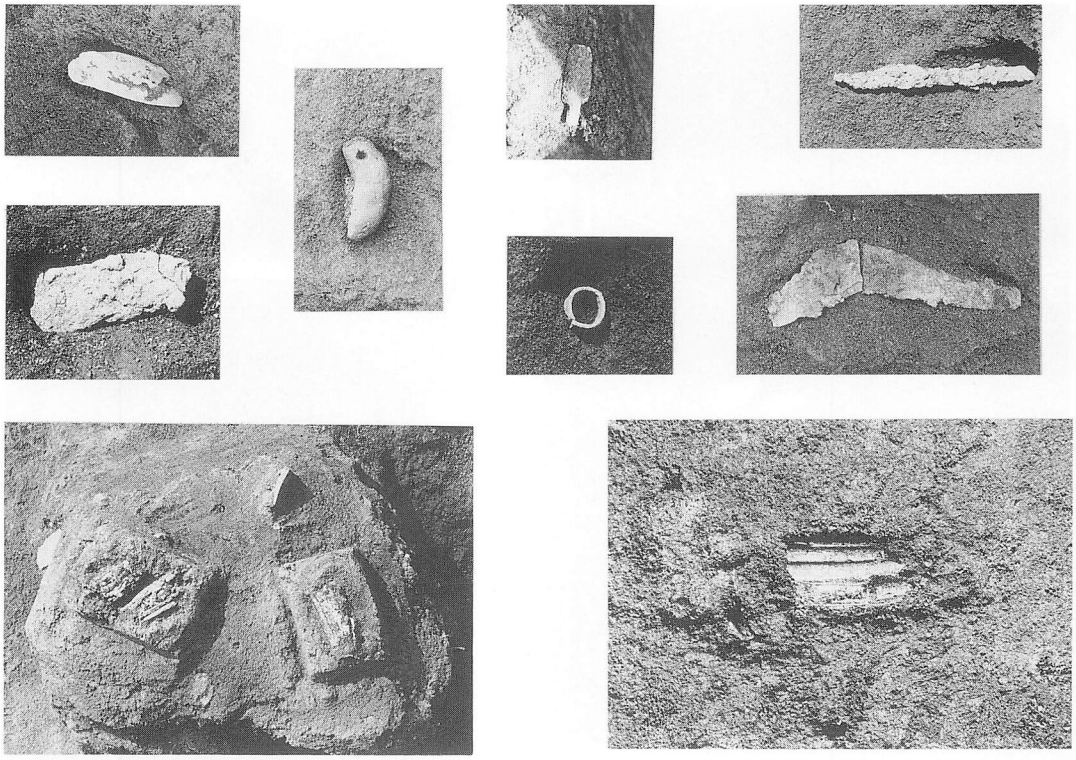


D区調査状況

図版16

E区調査状況

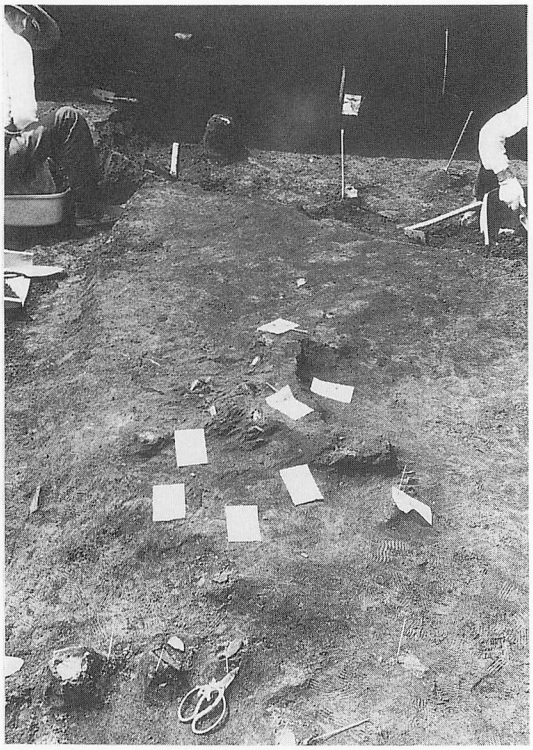
E区遺物出土状況



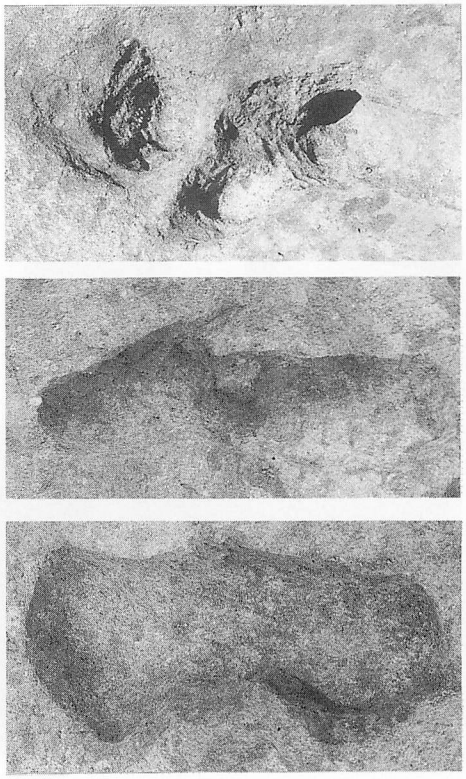
E・F区遺物出土状況

F区遺物出土状況

図版18

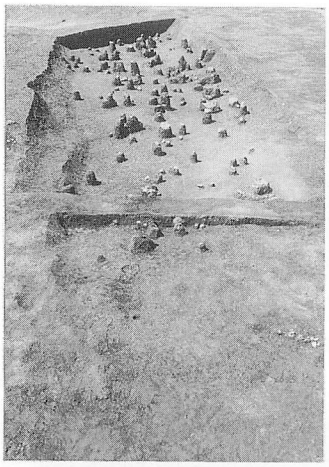


F区馬骨出土状況



F区溝中坑(11～18土)

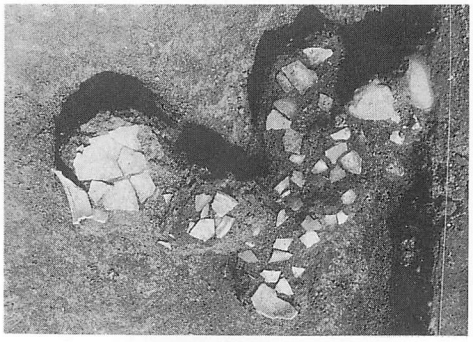
F区溝中坑(8～10土、13～15土、16～18土)



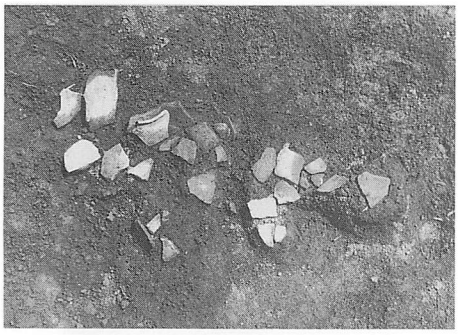
←G・H区遺物出土状況

G・H完掘状況→

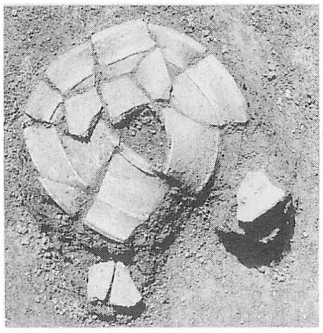
H区遺物出土状況



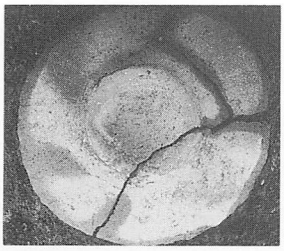
H区遺物出土状況



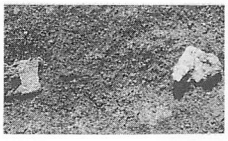
G・H区遺物出土状況



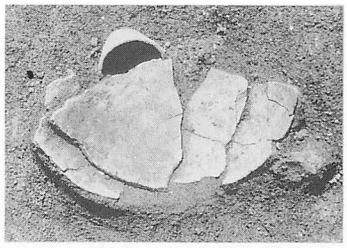
H区有段口縁壺出土状況



H区壺底部出土状況



H区鉄製品出土状況

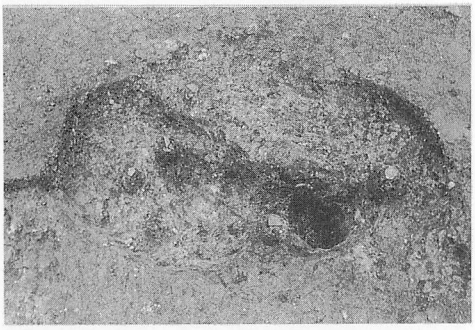


H区S字状口縁台付甕出土状況

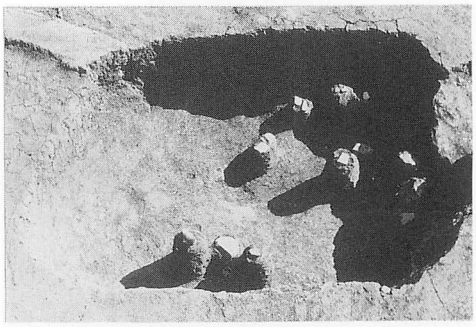
図版20

ピット群（ピット１）遺物出土状況

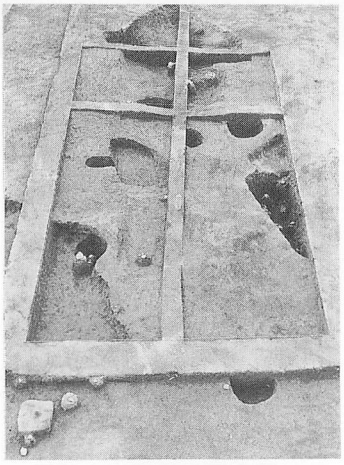
第１号土坑完掘状況



第２号土坑完掘状況



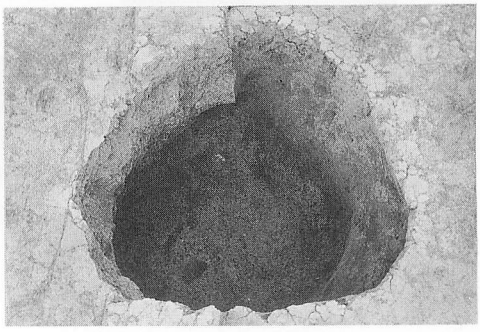
第９号土坑遺物出土状況



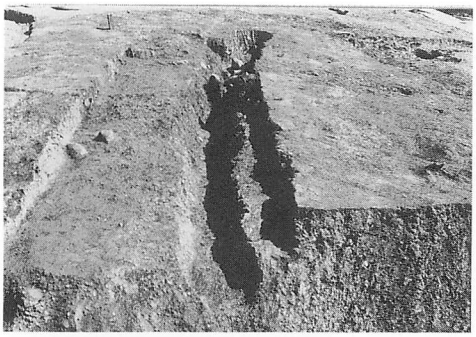
第３～９号土坑

第９号土坑遺物出土状況

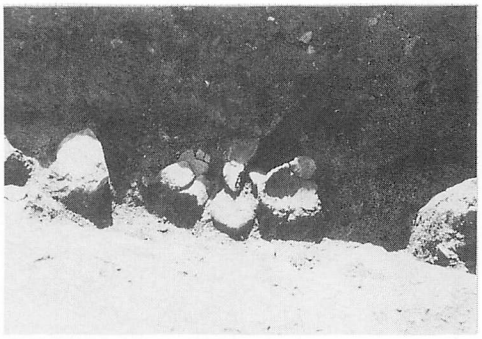
第８号土坑完掘状況



第10号土坑完掘状況



第７号溝完掘状況

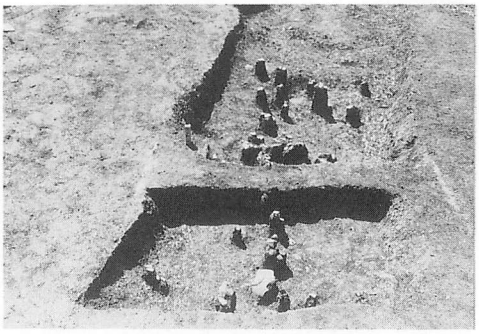


第７号溝遺物出土状況

第11号溝（第１号方形周溝墓）完掘状況

第13号溝完掘状況

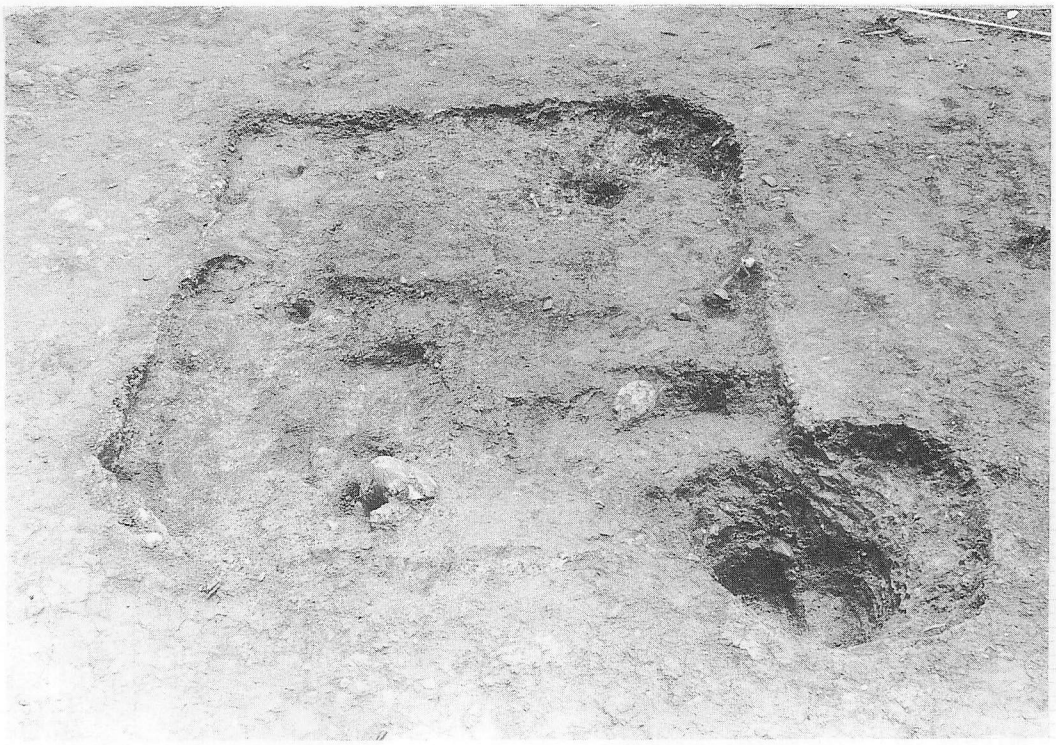
第15号溝完掘状況



第17号溝遺物出土状況

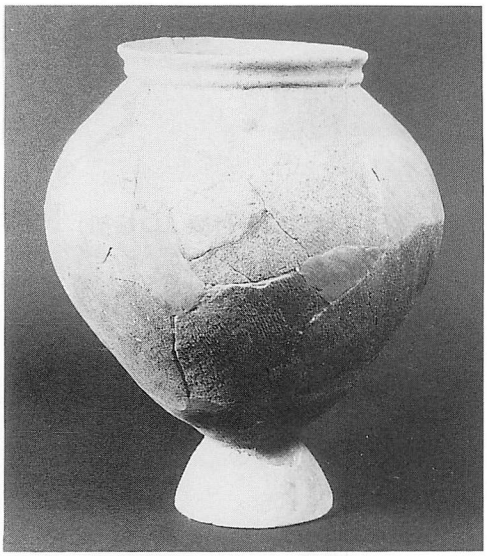
土器焼成遺構

調査状況（'92子供学習会）

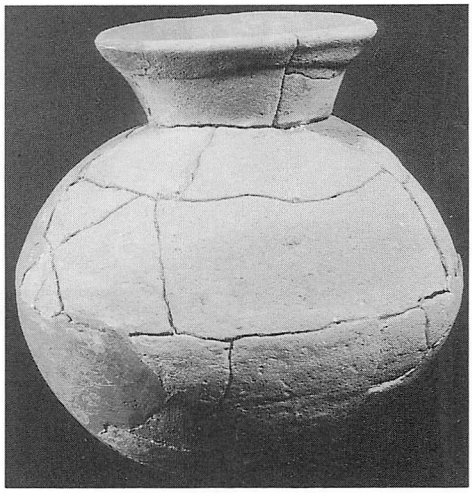


第１号竪穴状遺構完掘状況

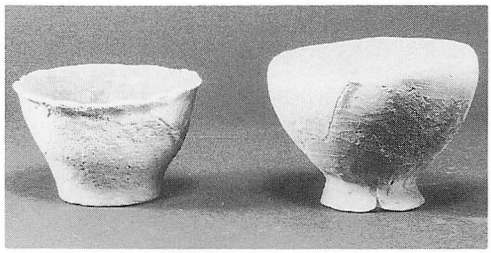
第２号竪穴状遺構完掘状況



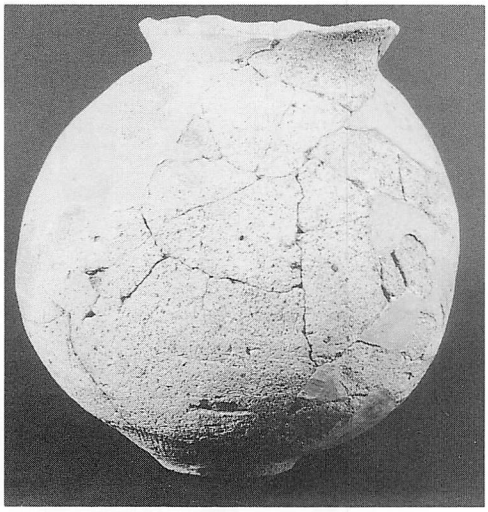
S字状口縁台付甕



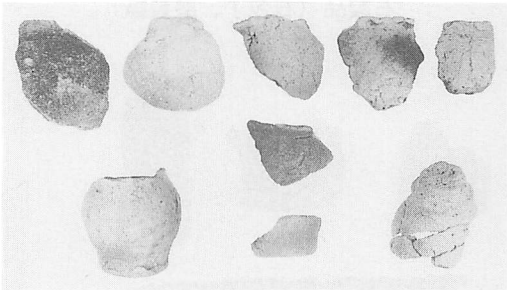
折り返し口縁壺



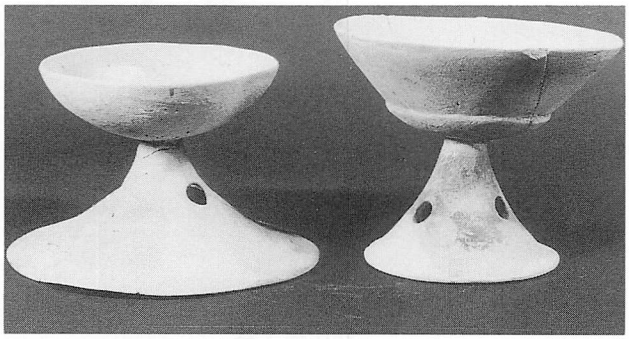
小　型　土　器



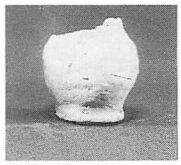
甕



手　捏　土　器



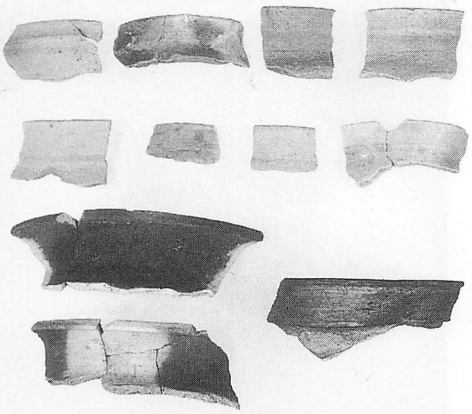
高　　坏



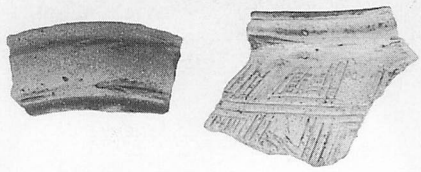
小型土器

第２号方形周溝墓出土土器

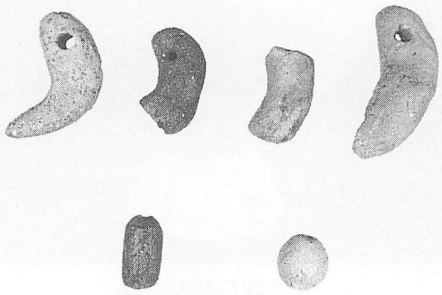
図版24



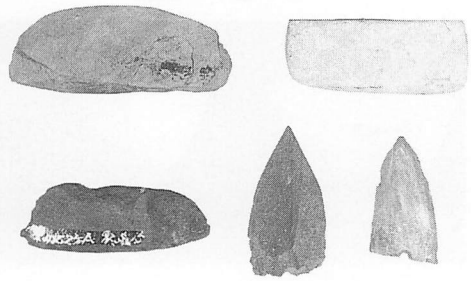
北陸系模倣土器（口縁部）



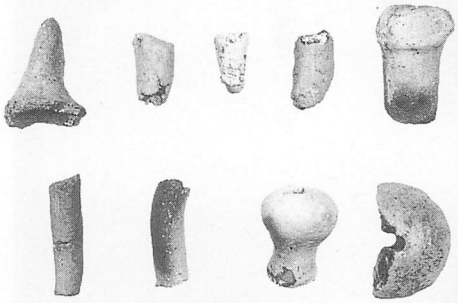
S字状口縁台付甕（口縁部）



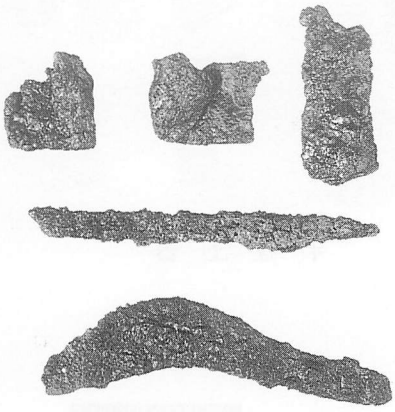
土製品（勾玉、管玉、丸玉）



石製品（石包丁、磨製鏃）



土　製　品



鉄製品（鍬、鋤先ほか）

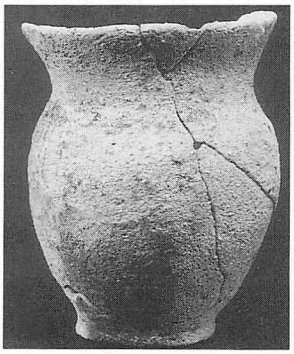
青銅製品（鏃、環）

火打ち金具

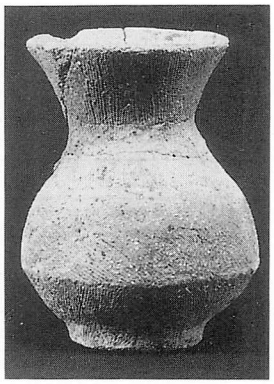
籾圧痕土器

第２号方形周溝墓出土特殊遺物ほか

第24号住居址出土土器



第８号住居址出土土器



グリッド出土土器

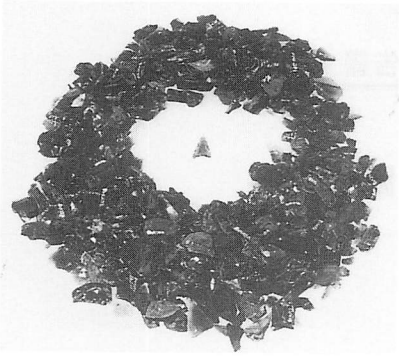
第２号竪穴状遺構出土須恵器

ナイフ形石器

石箆

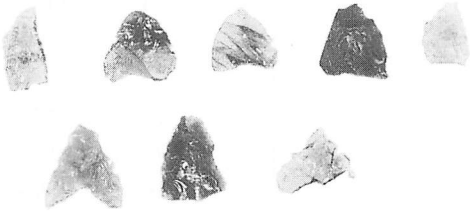
玉　玦状耳飾

ピエス・エスキーユ



出土した剝片

鏃　形　鏃



未製品・再加工された石鏃

東山北遺跡報告書概要

フリガナ		ヒガシヤマキタイセキ
書名		東山北遺跡
副題		第1次～第3次調査
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第79集
編著者名		末木　健・野代幸和他
発行者		山梨県教育委員会
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話番号		山梨県東八代郡中道町下曽根923・☎0552－66－3881
印刷所		株式会社　少国民社
印刷日・発行所		1993年3月19日・1993年3月31日
遺跡概要	遺跡所在地	山梨県東八代郡中道町下向山字東山
	1/25000地図名・位置	甲府・北緯35°35′15″　東経138°39′46″
	主要な時代	弥生・古墳時代
	主要な遺構	方形周溝墓2基、住居址28軒、竪穴遺構2基、溝14条、土坑他
	主要な遺物	弥生土器（壺、甕、台付甕）、土師器（坏、高坏、甕）他
	特殊遺構	方形周溝墓（一辺が30m以上を測る県内最大クラスの規模）
	特殊遺構	鉄器（鋤・鍬先など）、青銅器（環、鏃）、石器（石包丁、磨製鏃）、土製品（丸玉、管玉、勾玉）、ミニチュア土器他
	調査期間	1990年5月7日～8月24日、1991年5月7日～8月19日、1992年5月11日～10月2日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第79集

甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園

東　山　北　遺　跡

―第1次～第3次調査―

印刷日　1993年3月19日
発行日　1993年3月31日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発　行　山梨県教育委員会
印　刷　株式会社　少国民社